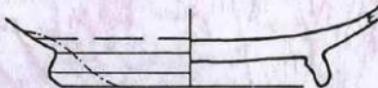


長野県木曽郡三岳村

おじま 小島遺跡

—中山間総合整備事業<木曽中部地区>に伴う発掘調査報告書—



2003.9

長野県木曽地方事務所
三岳村教育委員会

長野県木曾郡三岳村

小島遺跡

—中山間総合整備事業<木曾中部地区>に伴う発掘調査報告書—

2003.9

長野県木曾地方事務所
三岳村教育委員会



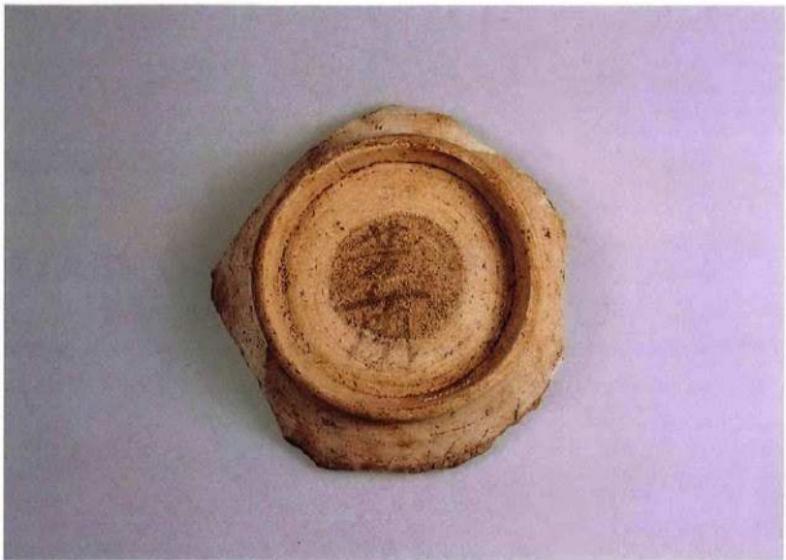
小島遺跡遠景－王瀧川を挟んだ対岸より



小島遺跡遠景－遺跡が広がる中・上位段丘



SK527打製石斧出土狀態



SB15出土墨書土器

序

御嶽山への登山客で賑わった夏も過ぎ、御嶽の里三岳村もいよいよ実りの秋を迎えようとしております。

この度三岳村では県営中山間総合整備事業(木曽中部地区)により、水田及び畠の土地改良を目的とした小島地区のほ場整備を実施することとなり、関係機関と協議の上、同地区の小島遺跡に眠る埋蔵文化財を記録保存するための発掘調査を行うこととなりました。

教育委員会では発掘調査及び整理作業の技術指導を木曽広域連合に委託し、その作業にあたっては(社)木曽シルバー人材センター、又、地元の皆さんとの多大なるご協力を得ることができました。

その結果、縄文時代から平安時代までの集落跡が発掘され、その中から多くの土器や石器、特徴あるカマド跡や墨書き器などが出土しました。これらは当時の集落の変遷を今日に伝える貴重な資料であり、記録として後世に残すため、この調査報告書を刊行しましたので、是非ご高覧いただきたいと思います。

本調査にご協力いただきました木曽広域連合、(社)シルバー人材センターをはじめ、多くの皆様方に心より感謝を申し上げ、はじめの言葉と致します。

平成15年9月

三岳村教育委員会

教育長 梶原 隆彦

例　　言

- 1 本書は中山間総合整備事業（木曾中部地区）の実施に伴う長野県木曾郡三岳村小島遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、三岳村教育委員会が木曾地方事務所の委託を受けて実施した。三岳村教育委員会では「木曾郡埋蔵文化財調査委託実施要綱」に基づき、木曾広域連合に調査指導を委託した。これを受けた木曾広域連合では、長野県教育委員会の指導のもと発掘調査に係る技術指導を(株)長野県埋蔵文化財センターに、整理作業の一部を(株)東京航業研究所に委託して業務を遂行した。
- 3 調査は平成13年度に試掘調査を、翌14年度より本發掘および基本的な整理作業を実施し、平成15年度に発掘調査報告書の作成ならびに刊行を行った。
- 4 調査にあたっては、以下の諸作業をそれぞれの事業者に委託して行った。
試掘・表土除去：白澤建設・大林工業㈱ 各種測量業務：(株)奥原測量設計事務所 復原土器実測：(株)シン技術コンサル 石器実測・属性評価：(株)アルカ 自然科学分析：パリノ・サーヴェイ(株)
- 5 発掘調査および整理に際し、以下の諸氏、諸機関より御指導と御協力を賜った。(順不同、敬称略)
出口一治 南村敏夫 西村千早 大島聰 木下宏 下平利夫 下畠重一 巾兼義 武居一三 小島勝彦 田上金松 下田弘美 佐倉厚志 安賀正人 神村透 桐原健 佐々木藤雄 鳩本慶子 周東一也 横口昇一 百瀬長秀 山村貴輝 山本典幸 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター 岐阜県文化財保護センター 塩尻市教育委員会 (株)木曾シルバー人材センター (株)東京航業研究所
- 6 発掘調査および整理作業の参加者は、以下のとおりである。
安江さつえ 石山知恵子 石山元久 上田みどり 上ノ原順一 大島文雄 大屋美代子 大洞和子 萩村クマ 小野美江子 外戸悦子 栢木大和 梶原由美 上出サダ子 上村たけ子 上村由美子 奥寛夫 小林佳奈子 齋藤圭永子 下出芳夫 下出秀夫 下野信弘 下野戸邦子 下畠清志 下本巖 下本和代 正沢尊春 鈴木壮六 田上斎 高桑俊雄 田代みね 出口一治 中田兼男 中田利子 中谷賢一 中村すぎ 野村辰雄 橋渡喜代子 畑口正一 原敏雄 半場けさ 藤原芳子 古野信夫 松本み江 丸山博次 南村美千代 村田静江 村田良雄 森口てる子 保田かつ子 山崎定雄 和田智幸 和出よ志子
- 7 本書の執筆は第Ⅰ章第1・2節を畠中弥寿之が、それ以外を三原良文と今井千恵が共同で行い百瀬忠幸が加筆した。第Ⅲ章に(株)アルカ、第Ⅴ章にパリノ・サーヴェイ(株)の原稿をそれぞれ掲載した。
- 8 本遺跡出土資料および図面類等は三岳村教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
遺構全体図 1:500 竪穴住居跡 1:60 炉址等 1:30 掘立柱建物跡 1:60 土坑 1:20、1:40
焼土址 1:40 横列状遺構 1:80 遺物集中区 1:80 性格不明遺構 1:400 繩文土器 1:4、1:
6 拓本 1:3 灰釉陶器等 1:3 鉄器等 1:3 石器類 1:2、1:4 (砥石)、1:8 (台石等)
- 2 遺構実測図中のレベル値は海拔高を、方位は真北を示す。
- 3 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。
- 4 遺構実測図中のスクリーントーンは焼土化範囲または焼土の堆積・炭化物範囲を、遺物実測図中のスクリーントーンは黒色処理または付着物・摩滅範囲を、同断面図の墨塗りは須恵器であることを示す。

目 次

序

例 言

凡 例

第Ⅰ章 調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査体制と経過.....	1
第3節 調査と記録の方法.....	3
第4節 基本層序.....	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境.....	7
第1節 遺跡の立地と自然環境.....	7
第2節 遺跡を取巻く歴史環境.....	7
第Ⅲ章 原始時代の遺構と遺物.....	10
第1節 遺構.....	10
1) 壑穴住居跡.....	10
2) 掘立柱建物跡.....	22
3) 土坑.....	27
4) 焼土跡.....	48
5) 遺物集中区.....	50
6) 性格不明遺構.....	52
第2節 遺物.....	54
1) 土器.....	54
2) 土製品.....	59
3) 石器.....	76
第Ⅳ章 古代～中・近世の遺構と遺物.....	121
第1節 遺構.....	121
1) 壑穴住居跡.....	121
2) 掘立柱建物跡.....	139
3) 横列状遺構.....	139
4) 土坑.....	143
第2節 遺物.....	148
1) 遺構内出土遺物.....	148
2) 遺構外出土遺物、鉄製品等.....	156
第Ⅴ章 自然科学分析.....	158
第1節 土器の胎土分析・X線回折分析.....	158
第2節 黒曜石の産地同定分析.....	166
第Ⅵ章 成果と課題.....	170
写真図版	
あとがき	
報告書抄録	

擇 図 目 次

第1図 基本土層断面図	4	第49図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器	98
第2図 調査区とグリッドの設定	5・6	第50図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器	99
第3図 小島遺跡の位置と周辺の遺跡	8	第51図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器	100
第4図 原始時代の遺構分布図	11	第52図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器	101
第5図 SB 6 実測図	12	第53図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器	102
第6図 SB 8 実測図	13	第54図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器	103
第7図 SB 9・12実測図	15	第55図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器	104
第8図 SB10・11・13実測図	17	第56図 SK・ST (縄文中期中葉) 出土石器	105
第9図 SB14実測図	19	第57図 SQ 1 (縄文中期中葉) 出土石器	106
第10図 SB22・23実測図	21	第58図 SK出土石器 (縄文後期)	106
第11図 SB23出土磨痕、台石	23	第59図 遺構外出土石器 (縄文晩期-弥生)	107
第12図 SB25実測図	23	第60図 SB 9 (縄文前期末葉) 出土石器実測図	108
第13図 ST 2 実測図	24	第61図 SB 9～12 (縄文前期末葉) 出土石器実測図	109
第14図 ST 3・5 実測図	25	第62図 SK153 (縄文前期末葉) 出土石器実測図	109
第15図 ST 4 実測図、出土遺物	26	第63図 SQ 2 (縄文前期末葉) 出土石器実測図	109
第16図 土坑の時期別・形態別分布図	28	第64図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器実測図	110
第17図 SK実測図(1)	31	第65図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器実測図	111
第18図 SK実測図(2)	32	第66図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器実測図	112
第19図 SK実測図(3)	34	第67図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器実測図	113
第20図 SK実測図(4)	37	第68図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器実測図	114
第21図 SK実測図(5)	38	第69図 SB22・23 (縄文中期中葉) 出土石器実測図	115
第22図 SK実測図(6)	40	第70図 SK (縄文中期中葉) 出土石器実測図	115
第23図 SK出土磨痕	40	第71図 SK・遺構外出土石器実測図	116
第24図 SF実測図、出土磨痕	49	第72図 石器の使用痕写真	119
第25図 SQ 1 実測図	50	第73図 古代・中世の遺構分布図	122
第26図 SQ 2 実測図	51	第74図 SB 1・2 実測図	123
第27図 SX 1 分布範囲及び微細図	53	第75図 SB 3・5 実測図	125
第28図 時期別遺物垂直分布図	53	第76図 SB 4・7 実測図	127
第29図 出土土器(1)	60	第77図 SB15実測図	129
第30図 出土土器(2)	61	第78図 SB16実測図	130
第31図 出土土器(3)	62	第79図 SB17実測図	131
第32図 出土土器(4)	63	第80図 SB18遺物・様出土状況	133
第33図 出土土器(5)	64	第81図 SB18実測図	134
第34図 出土土器(6)	65	第82図 SB19実測図	136
第35図 出土土器(7)	66	第83図 SB20・24実測図	137
第36図 出土土器(8)	67	第84図 ST 1・SA 1～4 実測図	140
第37図 出土土器(9)	68	第85図 SA 5～8 実測図	142
第38図 出土土器(10)	69	第86図 SK実測図(1)	144
第39図 出土土器(11)	70	第87図 SK実測図(2)	145
第40図 出土土器(12)	71	第88図 SK実測図(3)	147
第41図 出土土器(13)	72	第89図 出土遺物(1)	149
第42図 出土土器(14)	73	第90図 出土遺物(2)	150
第43図 出土土器(15)	74	第91図 出土遺物(3)	151
第44図 出土土器(16)、土製品	75	第92図 出土遺物(4)	152
第45図 SB 9 (縄文前期末葉) 出土石器	94	第93図 出土遺物(5)	154
第46図 SB 9 (縄文前期末葉) 出土石器	95	第94図 出土遺物(6)	155
第47図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器	96	第95図 出土遺物(7) - 中・近世の焼物	156
第48図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器	97	第96図 出土遺物(8) - 銭貨	156

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

本書に所収する小島遺跡の発掘調査は、長野県木曽郡三岳村小島地区において、水田ならびに畑の土地改良を目的とした県営中山間総合整備事業（木曽中部地区）が計画され、平成14年度から実施されることになったため関連して行われた。

事業対象の小島地区内には小島遺跡が周知の遺跡として登録されていたことから、長野県教育委員会・木曽地方事務所土地改良課・三岳村教育委員会の3者で協議を行い、事前の調査を行うこととなった。平成13年度に試掘による分布調査を行った結果、事業地内に埋蔵文化財の分布が確認されたため、事業実施前に発掘調査による記録保存が必要と判断した。

事業予定地内の試掘調査および包蔵地の発掘調査にあたっては、木曽地方事務所と三岳村のあいだで埋蔵文化財発掘（試掘）調査業務に関する委託および受託契約を結び、三岳村教育委員会が実施した。

三岳村は、「木曾郡埋蔵文化財調査委託実施要綱」に基づいて、木曽広域連合と発掘調査指導委託契約を締結した。一方、木曽広域連合では長野県教育委員会の指導に準拠しつつ、発掘調査の技術指導業務を翻長野県埋蔵文化財センターに、報告書作成業務の技術支援を㈱東京航業研究所にそれぞれ委託した。

以上の経緯のもと、小島遺跡に対する試掘から本発掘、整理と報告書刊行に至る一連の調査が行われた。

第2節 調査体制と経過

試掘調査および本発掘調査、整理作業から発掘調査報告書の発刊に至る経過は、以下に掲げるとおりである。年度を追って概略を記す。

平成13（2001）年度 試掘調査（試掘調査対象面積：46,000m²）

調査期間 平成13年8月20日～平成13年11月30日（現場・整理作業）

調査体制 事務局 三岳村教育委員会

梶原隆彦（教育長）

豊道和巳（教育次長）

畠中弥寿之（社会教育係）

小島宗徳（社会教育指導委員）

学術担当者 百瀬忠幸（木曽広域連合）

調査経過 7月12日 県教育委員会へ記録保存の意見書提出

7月30日 木曽広域連合と発掘調査指導委託協議

8月6日 木曽地方事務所へ埋蔵文化財試掘調査業務受託経費の提示

8月10日 試掘調査について地権者を含めた関連機関による保護協議

8月10日 木曽広域連合と埋蔵文化財発掘調査指導委託契約を締結

8月20日 木曽地方事務所と埋蔵文化財試掘調査業務委託契約を締結

8月28日 第1次試掘調査（～30日）

- 10月22日 第2次試掘調査（～23日）
10月26日 木曾広域連合から結果報告書の提出
11月16日 試掘調査の結果と事業計画についての関係者協議

平成14（2002）年度 発掘調査（調査面積：13,335m²）

調査期間 平成14年6月11日～平成15年3月31日（現場・整理作業）

調査体制 事務局 三岳村教育委員会

梶原隆彦（教育長）
豊道和巳（教育次長）
畠中弥寿之（社会教育係）
小島宗徳（社会教育指導委員）

学術担当者 百瀬忠幸（木曾広域連合）

技術指導者 岐阜県埋蔵文化財センター（指導担当：廣田和穂、調査員：賀田明）

調査経過 3月28日 木曾地方事務所へ埋蔵文化財発掘調査業務受託経費の提示

4月10日 文化庁、県教委へ国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請

4月15日 木曾地方事務所と埋蔵文化財試掘調査業務委託契約を締結

6月1日 木曾広域連合と調査指導委託協議

6月4日 発掘調査の事業計画について関係者協議

6月11日 木曾広域連合と埋蔵文化財発掘調査指導委託契約を締結

～ 発掘調査（～12月6日）

～ 整理作業（～3月31日）

11月20日 木曾地方事務所と埋蔵文化財発掘調査業務委託変更契約の締結

1月14日 文化庁へ国宝重要文化財等保存整備費補助金変更申請

2月3日 木曾広域連合と埋蔵文化財発掘調査指導委託変更契約を締結

平成15（2003）年度 報告書作成

作成期間 平成15年4月30日～平成15年9月30日

作成体制 事務局 三岳村教育委員会

梶原隆彦（教育長）
田口俊久（教育係長）
畠中弥寿之（社会教育係）

学術担当者 百瀬忠幸（木曾広域連合）

技術支援者 岐東京航業研究所（支援担当：三原良文、今井千恵）

作成経過 4月24日 木曾広域連合と報告書作成指導委託協議

4月24日 木曾地方事務所へ発掘調査報告書作成業務受託経費の提示

4月30日 木曾地方事務所と発掘調査報告書作成指導業務委託契約の締結

4月30日 木曾広域連合と報告書作成指導委託契約締結

5月6日 木曾地方事務所と発掘調査報告書作成業務委託契約の締結

9月30日 調査報告書発刊

第3節 調査と記録の方法

調査の開始あたり、地元教育委員会に事業者および長野県教育委員会を交えた3者による保護協議において、面的な本調査の実施を必要とする旨が確認された範囲、すなわち試掘調査の結果から遺構と遺物の遺存が認められ、かつ工事を施工するうえで遺跡の保護が困難と判断された区域を調査区と定めた。同区域における調査範囲のまとまりごとにI～IV区という調査区名称を付与し、IV区からI区へと順を追つて、記録保存を目的とした今回の緊急発掘調査を進めた（第2図）。

発掘に際しては、国土地理院の平面直角座標に準拠した基準点（第VII系原点、X=0.0000・Y=0.0000の第3象限内にある区切りのいい任意のX・Y座標）をもとに、調査区全体を網羅する8×8mグリッドを設定した。各グリッドには、北西隅を起点として東西方向にアルファベットのA～Xを、南北方向に算用数字の1～27の文字をそれぞれ与え、測量および遺物取上げ等の基準として用いた。よって、本文中に記載の座標値およびグリッド名はすべてこの表記に準拠している。

発掘作業は重機による表土層の除去から開始し、以降、人力により遺構検出と掘削、遺構精査と記録等の調査を行った。表土層および遺構の掘削に際しては、技術指導担当者の不手際により検出面や遺構の把握、遺物包含層等の調査に充分な配慮が払われなかった可能性があり、報告書の作成時において検証不可能な混乱を残した点は否めない。出土遺物については、全点記録および層位別取上げを原則とした。

測量図等の作成は上述のグリッドを基準として手実測および航空測量を併用して行った。記録にあたっては遺跡記号として「MO J」を、遺構記号として次の略称を用い、記号ごと検出順に番号を付した。

遺構記号 S B：約3m以上の方形、円形、楕円形等を呈する定型的な掘り込み。

S T：ピット状の土坑が一定間隔で並び、その配置が方形、長方形等となるもの。

S K：S Bより規模が小さな掘り込み。土坑。

S F：熱により焼土化した範囲が単独で面的に広がるもの。

S A：ピット状の土坑が直線的に並び、一連の構造物またはその一部と認められるもの。

S Q：遺物が一定の縫まりをもって集中的に出土し、その範囲が周囲と鑑別できるもの。

S X：性格が明らかでない不特定な遺構。本遺跡では不整形な掘り込み群を総称した。

第4節 基本層序

本遺跡は次章で述べるとおり、木曾川の支流である王滝川に面する河岸段丘上に立地している。岩盤の上に厚く堆積した砂礫層が永年の侵食作用を受けて段丘地形を形成し、その上部を二次的な堆積を含めたローム層（黄褐色土層）が覆って基盤土となる。段丘は現状3段が確認でき、それぞれを上位段丘・中位段丘・下位段丘として認識した。中位段丘はさらに比高約1mの小段差によって、上段と下段とした2つの地形面に分けられる。調査により確認された基本的な層序の在り方は、以下に示すとおりである。

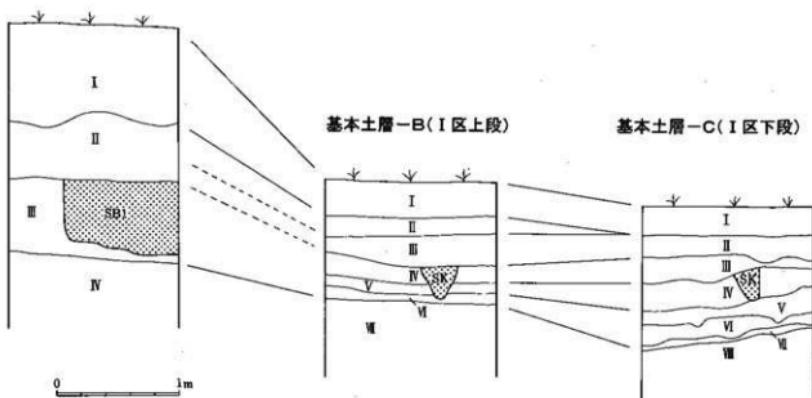
基本土層 A (IV区北壁部)

I層 現耕作土

II層 暗褐色土 (10YR 3/3) 粘性・しまりなし。約10mmの大の中疊を多く含む。下部に平安時代遺物を包含する。

III層 黒褐色土 (10YR 2/2) 粘性・しまりなし。約10mmの大の中疊を多く含む。

基本土層-A(IV区北壁)



第1図 基本土層断面図

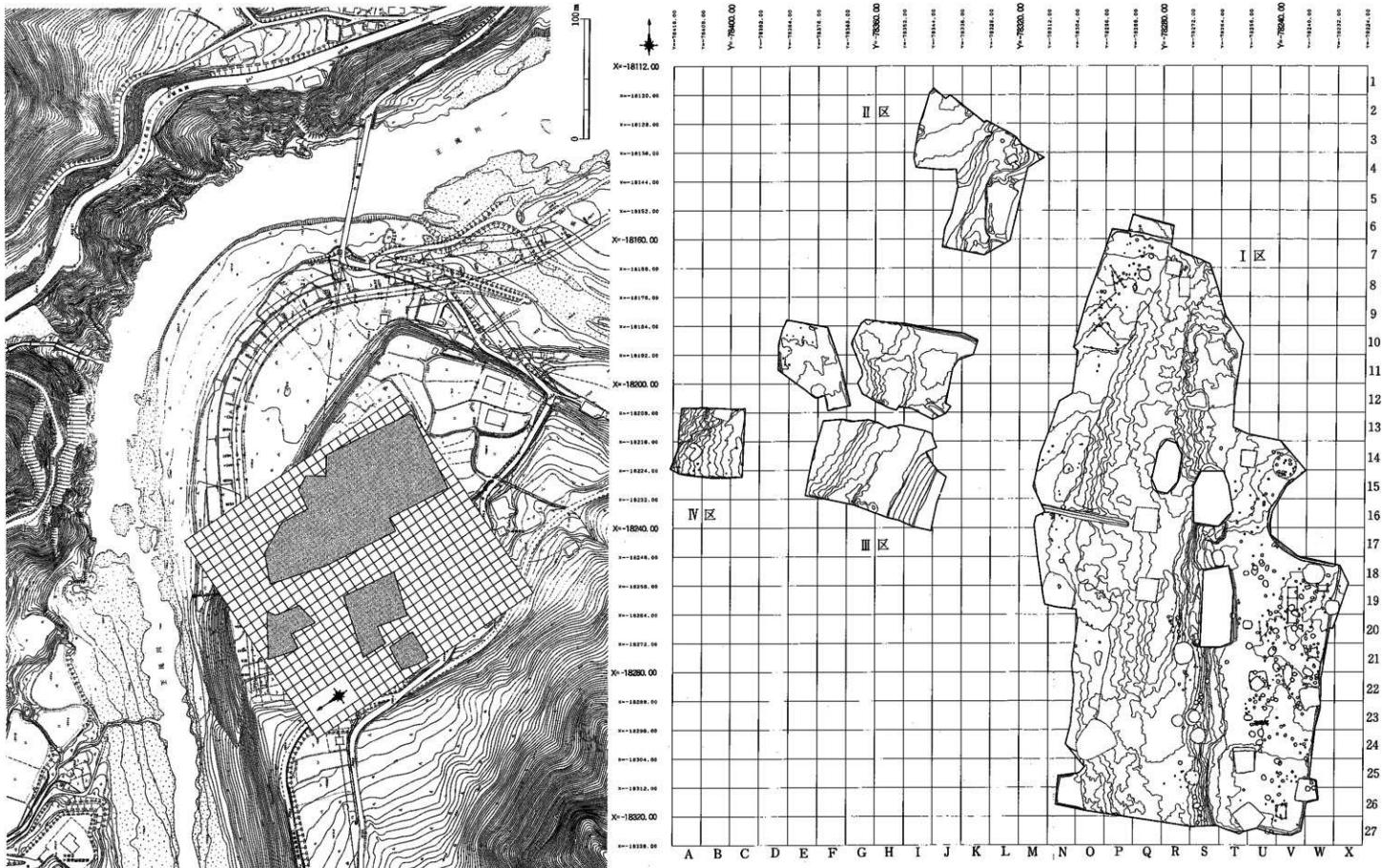
IV層 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性あり、しまりなし。約10mm大の小礫と10~50cm大の角礫を多く含む。混疊ローム層。

基本土層 B (I区上段)

- I層 現耕作土
- II層 灰褐色土 (10YR 4/1) 粘性・しまりあり。約5mm大の小礫含む。旧水田土壤。
- III層 黒褐色土 (7.5YR 3/1) 粘性・しまりあり。IV層に比べやや赤みを帯びる。粗粒砂を少量含む。
- IV層 黒色土 (10YR 2/1) しまり弱く、粗い白色砂粒を約10%含む。縄文時代中期の遺物を含む。
- V層 黒色土 (10YR 2/1) 粘性なし。IV層に比べしまりがあり、粗い白色砂粒を約30%含む。
- VI層 黒色土 (10YR 2/3) 粘性なし。しまりあり、粗い白色砂粒を約30%含む。
- VII層 褐色土 (10YR 4/4) 粘性なし。しまりあり、約1~5mm大の砂礫を多く含む。
- VIII層 砂礫層。黄褐色土 (10YR 5/6) を混じえる。

基本土層 C (I区下段)

- I層 現耕作土
- II層 黑褐色土 (10YR 3/2)
- III層 黑褐色土 (10YR 2/2) 粘性・しまりあり。やや赤みを帯び、白色砂粒・炭化物を一定量含む。縄文時代中期の遺物を含む。
- IV層 黑色土 (10YR 2/1) 粗い白色砂粒を約20%含む。中~下部に縄文時代前期の遺物を含む。
- V層 黑色土 (10YR 1.7/1) 白色砂粒少なく、IV層に比べしまりが強い。
- VI層 暗褐色土 (10YR 3/3) 粗い白色砂粒を約5%含む。1~5cm大の黒褐色土および黄褐色土ブロックが各30%程度混ざる。
- VII層 銀い黄褐色土 (10YR 4/3) 粘性・しまりあり。粗い白色砂粒を含む。漸移層。
- VIII層 黄褐色土 (10YR 5/6) 部分的に拳大~人頭大の礫を含む。



第2図 調査区とグリッドの設定

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地と自然環境

小島遺跡が所在する三岳村は、長野県の南西部を占める木曽郡のほぼ中央西寄りに位置する。長野・岐阜両県にまたがる笠ヶ峰御嶽山の山麓に擁された山村であり、木曽川によって開析された木曽谷を挟んで東に中央アルプスを望む。御嶽山麓には同山に源を発し、南北約100kmにわたって細長くのびる木曽谷の中央付近で木曽川に合流する王滝川やその支流群による侵食作用で幾筋もの谷が形成され、複雑に入り組んだ複状の地形が発達している。

三岳村は当にそうした御嶽山の山頂からその東側山麓にかけて広がる一帯を占めており、地形的には険しい岩場が連続する急峻な山岳部（標高1600m付近から上部）、森林と原野が続くなだらかな傾斜地形を見せる山地部（標高1200～1600m付近）、中・古生層の岩石を主とする基盤が氷い年月の風化作用や浸食作用によって谷状の起伏を発達させた山麓部（標高1200m以下）に大別されている。

村内に残された遺跡の殆どは山麓部にあって、王滝川やその支流の流域に発達した河岸段丘上に主な占地の場を求めている。『三岳村誌 下巻』歴史編の記述によれば、「狭い段丘ではあるが、生活・生産の場として、まさにしがみつくようにして利用されていたことをその分布状況から知ることができる」と言えよう。また、このような生活適地は、平坦地の限られる山間部においてしばしば見られる在り方と同様に、現在に生きる人々にとっても格好の居住地区ともなっている。

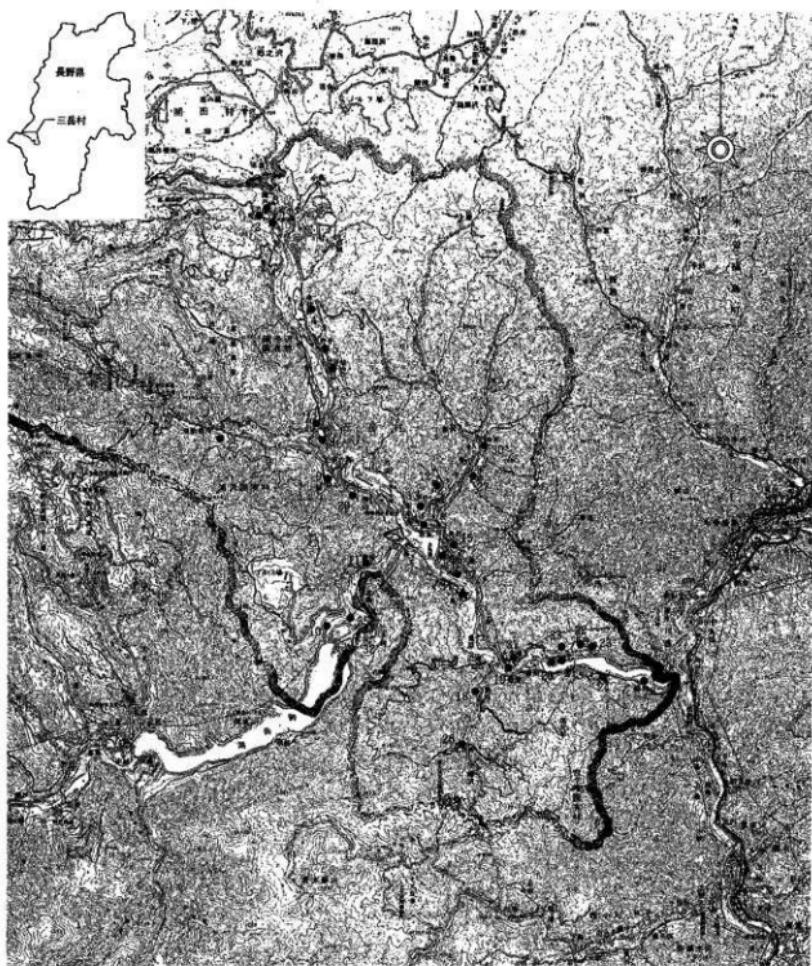
今回、埋蔵文化財発掘調査の対象となった小島遺跡もまた、王滝川流域に形成された河岸段丘上に立地する。王滝川が蛇行して急に向きを変える地点の右岸、東に向かって突き出すように形成された舌状の段丘地形を呈する部分に遺跡は形成されている。同地点の地形は大きく上位・中位・下位と3段の段丘面を有し、遺跡の広がりは中位段丘から上位段丘にかけて認められる。とりわけ、小規模な比高差を伴う2枚の平坦面によって構成される中位の段丘面が遺跡の主要な分布域となっており、20,000m²を越える平坦部のほぼ全面にわたって縄文時代および平安時代を主とする遺跡が展開している。各段丘および平坦面は、東側を向く縁辺部が微高地状に高まる一方、段丘崖下が谷状にやや低まる形状をみせる。竪穴住居跡や土坑などによって構成される各期の集落は前者に居住の場を求める傾向を示し、その結果として、段丘縁辺部に竪穴住居跡など主要な遺構群が集中する様相を呈する。

両段丘の標高は上位段丘面が790～793m、中位段丘面が779～780mであり、現在の王滝川からの比高差は概ね28mならびに17mを測る。

第2節 遺跡を取巻く歴史環境

三岳村内には、縄文時代～平安時代、中・近世にかけての遺跡が多数確認されており、その数は現在までのところ35遺跡を数える。発掘調査がなされた事例が少なく、詳細を知れる遺跡は限られるものの、縄文時代と平安時代の遺跡が主体を占めている。この傾向は木曽郡下全体に共通した在り方であり、とりわけ縄文時代中期の遺跡がべ21遺跡と多数を数える点も、大小の水系に沿った狭小な段丘上に分布する立地性向とともに、周辺地域の様相と一致する。

村内では旧石器時代に遡る遺跡は今のところ発見されていないが、縄文時代では少数ながらも中学校附



1 瀬戸原 1 遺跡	2 瀬戸原 2 遺跡	3 瀬戸原開拓地遺跡	4 水井野遺跡	5 野中遺跡
6 井原遺跡	7 白川 1 遺跡	8 白川 2 遺跡	9 羽入遺跡	10 和田遺跡
11 萩原遺跡	12 野口遺跡	13 三ッ屋遺跡	14 若宮遺跡	15 合戸遺跡
16 中学校附近遺跡	17 下殿遺跡	18 殿屋敷遺跡	19 大半場遺跡	20 日陰潮遺跡
21 下村遺跡	22 日向遺跡	23 田口遺跡	24 下条遺跡	25 大沢遺跡
26 尾羽林遺跡	27 中切遺跡	28 越立遺跡	29 楠山遺跡	30 枠本遺跡
31 学校附近遺跡	32 黒瀬遺跡	33 田屋遺跡	34 小島遺跡	35 和田トリエ遺跡

第3図 小島遺跡の位置と周辺の遺跡

近遺跡や瀬戸ノ原2遺跡・野中遺跡など、さらに今回の発掘調査で明らかとなった本遺跡を含めて、草創期～早・前期遺跡の存在が確認されており、古くから人々の営みが繰り広げられていたことが分かる。

続く縄文時代中期になると遺跡数が飛躍的に増加する。三岳村における埋蔵文化財調査の歴史上、大きな成果をもたらした若宮遺跡や村内ではかつて無い規模の発掘調査となった本遺跡など、郡下全体のなかでも比較的大きな遺跡も残される。若宮遺跡第2号住居址から出土した釣手土器は、底部に小孔が穿たれるなど類例に乏しい特徴をもっており、村の指定文化財に登録されている。

後・晩期では、木曾郡下はもとより長野県下においても遺跡数が激減することが知られている。しかし、三岳村内では本遺跡も含めて10遺跡以上が確認されているなど全遺跡数に占める比率は高く、比較的高密度に当該期の遺跡が分布していると言えるかもしれない。

縄文時代に次ぐ弥生時代に残された遺跡は、前期に属する野中遺跡と日陰測遺跡などを除いてごく限られたものとなり、現在の三岳村内に人々が暮らした痕跡は希薄となる。ただし、今回的小島遺跡の調査で表面採集資料1点のみではあるものの弥生時代後期の土器が確認され、今後の調査の進展によっては人々の継続的な生活の痕跡を示す遺跡が発見される可能性も低くはないと思われる。古墳時代および奈良時代の遺跡は、小島遺跡に近い山腹から出土した鐵鎌に古墳時代の遺物である可能性が指摘されている以外、現在のところ断片的な資料すらも欠いている。

村内に遺跡が数多く遺され、人々の営みが再び活発になるのは平安時代の一時期からであり、これまでに小島遺跡や平成9・10年度の発掘調査により20軒近い竪穴住居跡が確認された日向遺跡を含めて12遺跡以上の存在が知られている。9世紀中頃以降と推定される突如とした遺跡の増加は、木曾郡下さらには長野県下にも共通して見られる事象であり、「三岳村誌」に述べられているように「これは新たな開拓が進められ、それまで荒地だった地域を開拓し、生産域を拡大させていったため」と考えられている。このような人々の営みは、当時の政治的・社会的な状況を背景とした出来事であったと言え、本遺跡の該期集落もまた、そうした時代背景のもとに成立し消長した可能性が高い。上述の日向遺跡に程近い三尾阿弥陀堂には、平安時代の作といわれる「木造阿弥陀如来座像」(県有形文化財指定)が安置され、今も厚い信仰を集めている。

鎌倉時代以降、中・近世の遺跡は野口遺跡や下村遺跡など少数にとどまっているが、村内には木曾氏に関する伝承や遺址が少なからず認められる。小島遺跡もそのひとつであり、同地籍には木曾氏の臣庶であった小島氏が居館を構えていたとされる。また、「木曾旧記録」などによれば、天正10年(1582年)に織田信長方について武田勝頼の軍勢と戦った木曾家19代義昌の達子、仙十郎義一(義通)が小島氏の庇護を受けて潜居した地とされ、遺跡が所在する地区内には木曾義昌の夫人であり武田信玄の三女、真理姫にゆかりのある石地蔵や五輪塔、長禄4年(1460年)の銘が刻まれた鰐口を所蔵する八幡社が残る。

小島の地名が文献上に初出するのは、天文23年(1554年)の御嶽神社本社棟札にある「三尾村之尾島」の記載とされる。これは「尾」のように突出した半島状の地形に由来したものなのか定かではないが、遺跡地の立地を見事に言い当てており、同地籍が「こじま」ではなく「おじま」と言い習わされている点からも興味深い。

<引用・参考文献>

- 青沼博之他 1988 「三岳村誌」下巻 三岳村誌編さん委員会
松原和也他 1999 「日向遺跡」 三岳村教育委員会

第三章 原始時代の遺構と遺物

第1節 遺構

今回の発掘調査で出土した当該期の所産と考えられる遺構は、縄文時代の竪穴住居跡11軒（前期末葉5軒・中期中葉5軒・不明1軒）、掘立柱建物跡4棟（中期中葉～後・晚期）、焼土址6基、土坑270基以上、遺物集中区2箇所（前期末葉・中期中葉各1箇所）、性格不明遺構1箇所を数える。土坑については実数および時期比定に不明確な点を多く残すが、縄文時代前期末葉ならびに同中期中葉を主として、中期後葉～後・晚期にかけて断続的に営まれた集落遺跡としての様相が明らかとなった。しかし、これら遺構群は今回の調査範囲を越え、南東寄りの段丘縁辺部に向かってさらに展開していると推定され、遺跡の全体規模や集落形態、時期別の変遷過程などの実態解明については、今後の調査に委ねざるを得ない（第4図）。

以下、検出された遺構についての個別的な調査結果を記す。

1) 竪穴住居跡

SB 6（第5図、図版2）

位置 中位段丘面の上部平坦面山側のI区、R-8グリッドに位置する。近接してSK57が分布する。

形状 平面形は不整な楕円形を呈しており、長径357cm、短径290cm、床面積は8.08m²を測る。長軸方向はN-50°-Wを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、残存部の最大壁高は14cmを測る。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物・赤色土粒を含む。）

第2層 暗褐色土層（粘性・しまりに欠ける）

床面 地山の黄褐色土層中に作られていた。比較的平坦であるが、硬化面は認められなかった。

柱穴 住居跡内より3個のピットが検出された。南壁から東壁寄りに位置しており、口径は20~25cm、深さ11~12cmを測る。

炉址 長軸線に沿った住居中央部から地床炉が検出された。長径44cm、短径30cmの不整楕円形を呈する。

床面の一部が火熱により赤化しているが、掘り込みは認められない。

内部施設 認められなかった。

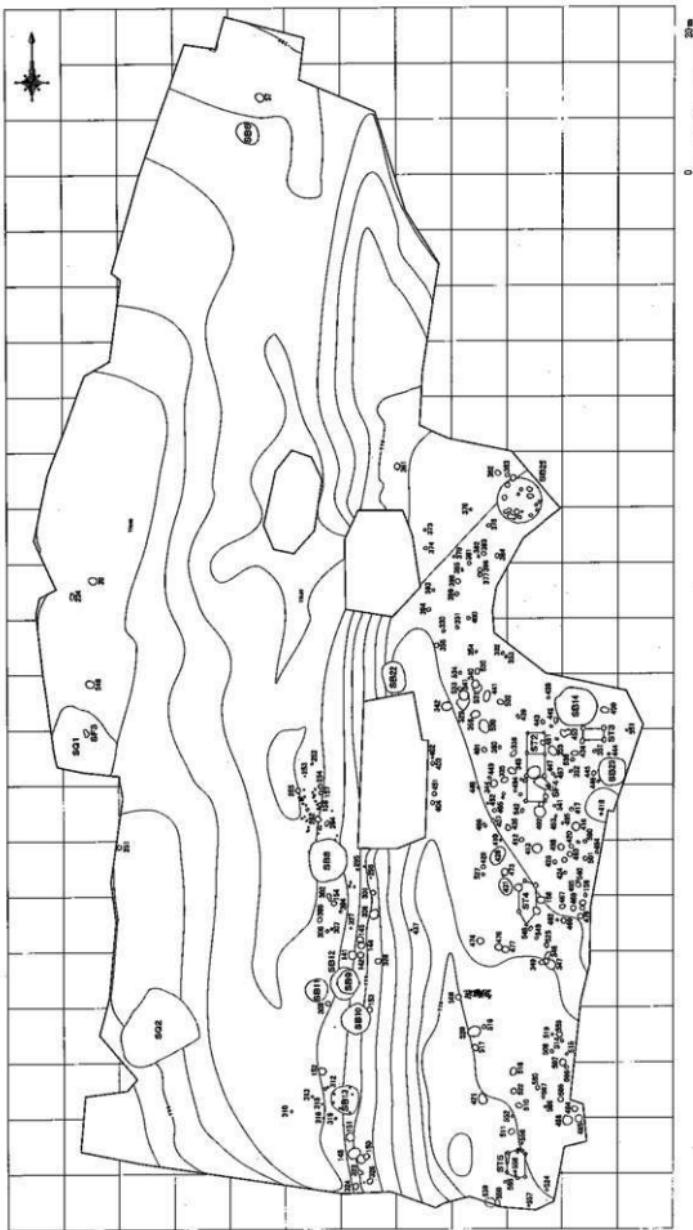
出土遺物 覆土中より凹石1点、磨石1点、剥片3点が出土した。

時期 覆土や住居の形状などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

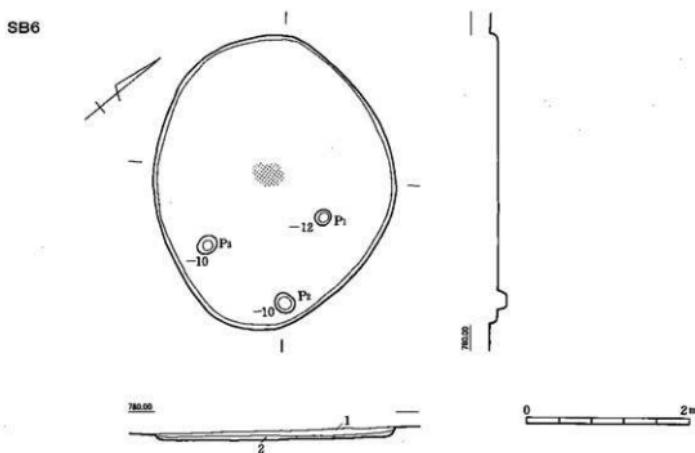
SB 8（第6図、図版2・3）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端部のI区、S-21グリッドに位置する。南側にSB 9~12がやや離れて分布する。

形状 いわゆる改築（拡張）住居例であり、新旧2軒の住居から構成される。平面形はいずれも不整な楕円形を呈する。新住居は長径600cm、短径540cm、床面積27.45m²、旧住居は長径420cm、短径330cm、床面積11.51m²を測り、長軸方向は新住居がN-9°-W、旧住居がN-7°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は新住居で30cm、旧住居で11cmを測る。



第4図 原始時代の道構分布図（1：400）



第5図 SB 6 実測図

覆土 5層に分けられる。

- 第1層 黒褐色土層（堅くしまる。新住居覆土である。）
- 第2層 黒褐色土層（新住居炉内覆土であるが、焼土をほとんど含まない。）
- 第3層 黑褐色土層（黄褐色土ブロック含む。新住居の柱穴内覆土である。）
- 第4層 暗褐色土層（非常に堅くしまる。新住居の貼床内埋土である。）
- 第5層 暗褐色土層（旧住居の柱穴内覆土である。）

床面 旧住居の床面は地山の黄褐色土層中に作られており、やや起伏をもつ。新住居の床面も拡張部は地山の黄褐色土層中に作られているが、中央部～南側は旧住居を暗褐色土で埋め、貼床としている。周溝は新旧両住居で確認された。新住居の周溝は南側と西側および北側の一部で確認されており、幅10cm、深さ5cmほどを測る。旧住居の周溝は南側と北東側の一部で確認されており、幅15cm、深さ5cmほどを測る。

柱穴 住居内より合計32個のピットが検出された。このうち新住居では、壁面に沿って配列されたP1～3・5～10・12などが口径40～70cm、深さ14～42cmと比較的大形であることから、本址に伴う主柱穴と推測される。また旧住居では、西壁に沿って配列されたP14～16は口径35～50cm、深さ20～34cmと大形であることから、本址に伴う主柱穴と推測される。

炉址 長軸線に沿った中央部やや南寄りから大小6個の礫を用いた石圓炉が検出された。長径55cm、短径50cmの橢円形を呈するが、明確な掘り込みは認められず、焼土の堆積も不明瞭であった。旧住居の炉址と重なり合うような位置にあるが、両者の関係は不明である。

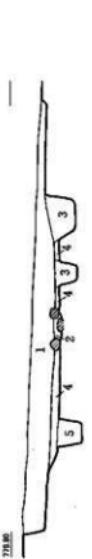
内部施設 認められなかった。ただし、出土遺物の在り方から、規模・形状等は不明ながらも中期中葉末段階の遺構が覆土中に穿たれていた可能性が考えられる。

出土遺物 覆土上層より床面近くにかけて、中期中葉を主体として中葉末例を含む縄文土器80点余りと石器類が検出されている（第29図1～4、第33図25～34、第47～49・64・65図）。石器の内訳は打製石斧1点、磨製石斧1点、石鏃2点、石匙1点、台石1点、剥片・チップ類105点、磨痕繰1点である。

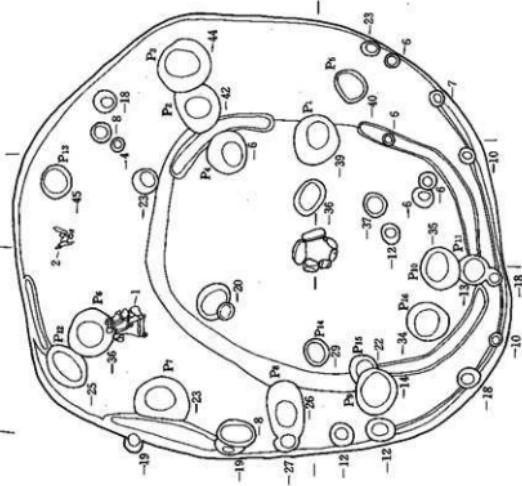
2 mm

第6図 SB8 実測図

1 mm



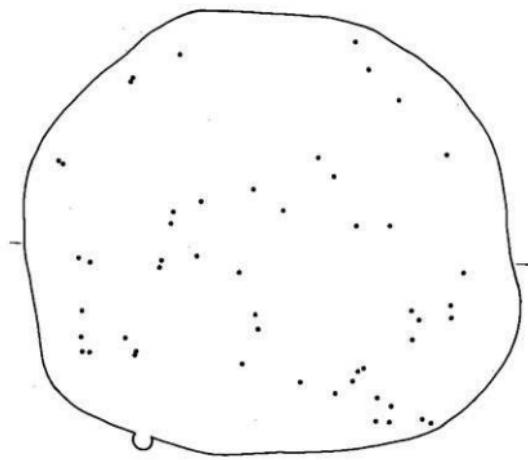
7782



7783



7784



時期 伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、新道式～藤内式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB9（第7図、図版3）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端部のI区、T-23グリッドに位置する。南側に近接してSB10、西側に近接してSB11が分布する。西側でSB12を切る。

形状 調査時に壁面と床面の一部を壊してしまったが、平面形は不整な楕円形を呈するものと思われる。長径360cm、推定短径330cm、確認部の床面積は8.66m²を測る。長軸方向はN-7°-Eを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は11cmを測る。

覆土 5層に分けられる。第5層は掘り方内埋土にあたる。

第1層 黒色土層（粘性・しまりに欠け、柔らかい。径1cmほどの白色砂粒を含む。）

第2層 黒褐色土層（粘性に欠けるが、しまる。炭化物・白色砂粒を含む。）

第3層 黒色土層

第4層 暗褐色土層（黒褐色土と黄褐色土が混合する。）

第5層 黄褐色土層（堅くしまる。黄褐色土ブロックと褐色土ブロックを主体とする。）

床面 黄褐色土ブロックと褐色土ブロックを用いて貼床面が形成されていた。非常に堅くしまる。

柱穴 住居内より合計11個のビットが検出された。全体の配列は不明瞭であるが、北壁際のP1・2と南壁際のP3・4は口径35~40cm、深さ24~51cmを測り、本址に伴う主柱穴と推測される。

炉址 長軸線に沿った中央部から2基の埋甕炉が検出された。深さ20~35cmの掘り込み内にいずれも深鉢形土器の下半部が正位で埋設されている。焼土の堆積が認められる東寄りの炉址2に対し、西側の炉址1では炭化物の分布のみが認められた。

内部施設 住居中央部やや北寄りの床面上に磨痕跡1点が遺存していたことを除けば、明瞭な内部施設は認められなかった。

出土遺物 覆土第1層を中心に縄文土器190点余りと石器類が出土した（第29図5・6、第33・34図35~93、第45・46・60・61図）。土器は前期末葉、下島式～晴ヶ峰式土器を主体とするが、埋甕炉には北白川下層式土器などが使用されていた。石器の内訳は打製石斧4点、凹石2点、台石1点、石礫6点、石匙1点、石錐3点、剥片・チップ類343点である。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代前期末葉、下島式～晴ヶ峰式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB12に後続する。

SB10（第8図）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端部のI区、T-24グリッドに位置する。北側に隣接してSB9・12が分布し、北東側にはSK153が一部重複するように近接する。

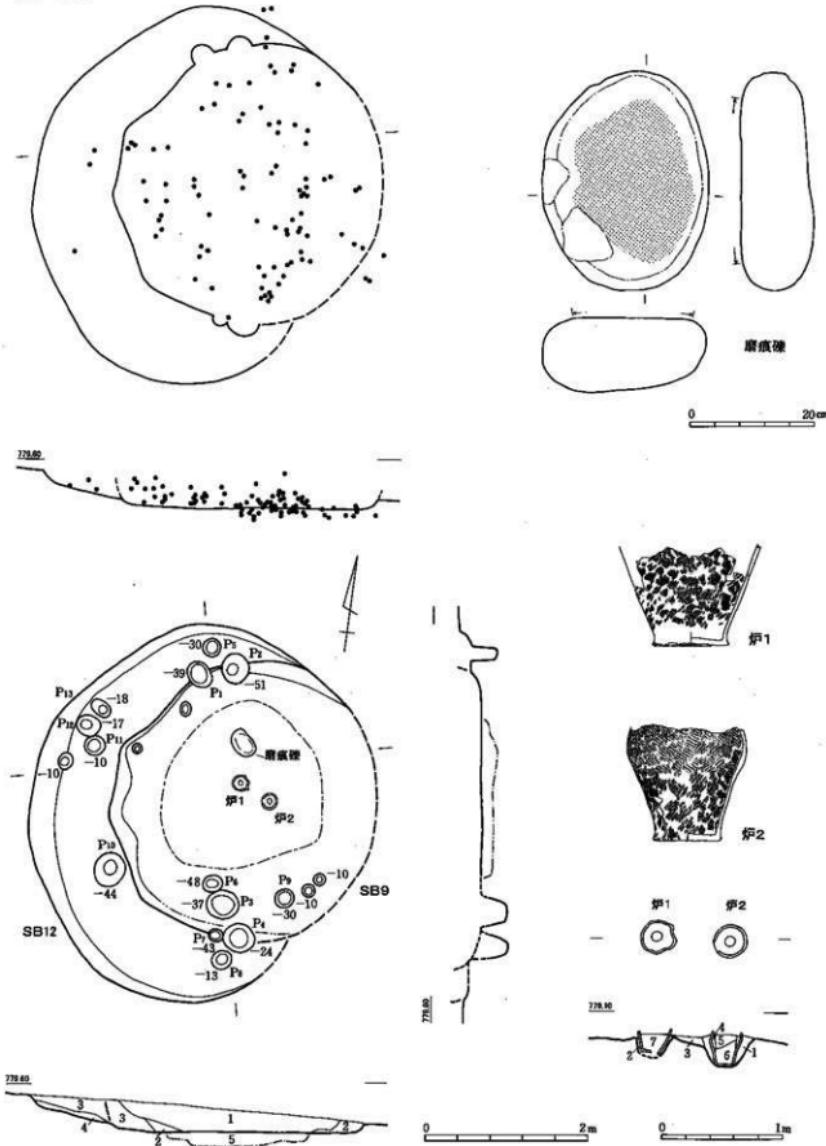
形状 東側四分の一ほどが削平されていたが、平面形は不整な円形ないし楕円形を呈すると思われる。推定長径440cm、推定短径420cm、確認部の床面積は14.09m²を測る。長軸方向はN-45°-Wを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、確認部の最大壁高は6cmを測る。

覆土 多量の白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。

床面 調査時に床面を壊してしまったため、東西ベルトで床面を確認した。やや起伏をもち、硬化面は確認されなかった。

柱穴 住居内より4個のビットが検出された。小形で配列も不明瞭なものが大部分であり、口径25~50cm、

SB9-SB12



第7図 SB9・12 実測図

深さ11~16cmを測る。

炉址 長軸線に沿った中央部西寄りから地床炉が検出された。長径70cm、短径60cmの梢円形を呈する。焼土の堆積は薄く、掘り込みは確認できなかった。

内部施設 認められなかった。北東側に一部が重複して分布するSK153(第17図)は、本址に伴う貯蔵穴であった可能性が考えられるが、詳細は不明である。

出土遺物 覆土中より土器30点余り、石器3点が出土した(第34図94~103、第61図)。土器は前期末葉、下島式土器を主体とする。石器の内訳は石核1点、剥片2点である。

時期 繩文時代前期末葉、下島式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB11(第8図、図版3)

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、S-23グリッドに位置する。東側から南東側にかけてSB9・10・12が近接分布する。

形状 北側を除いて大きく削平されているが、平面形はほぼ円形を呈すると思われる。推定長径320cm、推定床面積8.34m²を測る。残存部の最大壁高は6cmを測る。長軸方向はN-20°-Wほどを示す。

覆土 粘性・しまりに欠ける黒褐色土が堆積していた。多量の白色砂粒を含む。

床面 調査時に床面を掘り抜いてしまったため、詳細は不明であるが、地山を床面にしていたものと思われる。

柱穴 住居内より2個のピットが検出された。口径16~32cm、深さ7~19cmを測る。

炉址 確認できなかった。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 覆土中と床面近くから土器30点余りと石器3点が出土した(第35図104~119、第61図)。土器は前期末葉下島式~晴ヶ峰式土器を主体とする。石器の内訳は打製石斧1点、剥片2点である。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して繩文時代前期末葉、下島式~晴ヶ峰式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB12(第7図、図版3)

位置 中位段丘面の上部平坦面先端部のI区、S-23グリッドに位置する。東側をSB9に切られる。

形状 平面形は梢円形を呈すると思われる。長径460cm、推定短径360cm、確認部の床面積13.87m²を測る。

長軸方向はN-3°-Eを示す。壁は緩やかに掘り込まれており、確認部の最大壁高は20cmを測る。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒色土層

第2層 暗褐色土層(黄褐色土を含む。)

床面 硬化面は認められないが、地山を床面にしており、東側に向かってやや傾斜する。

柱穴 住居内より7個のピットが検出された。全体の配列は不明であるが、南西部のP10は口径40cm、深さ44cmを測り、主柱穴の可能性が考えられる。

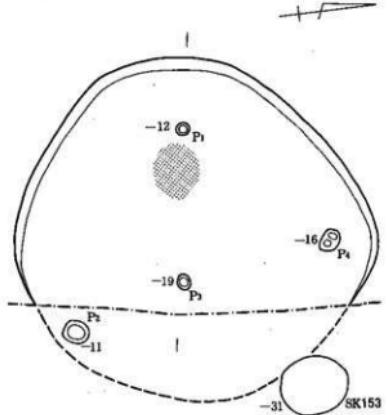
炉址 認められなかった。

内部施設 認められなかった。

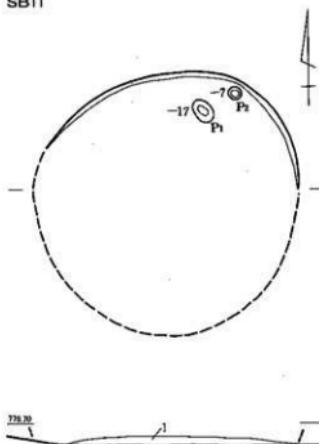
出土遺物 覆土中より土器7点、石器20点が出土した(第35図120~123、第61図)。石器の内訳は石錐1点、剥片19点である。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して繩文時代前期末葉、下島式~晴ヶ峰式期を中心とした時期

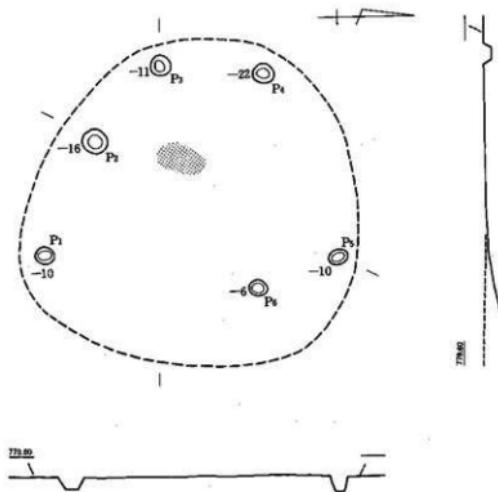
SB10



SB11



SB13



0 2m

第8図 SB10・11・13 実測図

の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB 9に先行する。

SB13（第8図、図版4）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端部のI区、S-25グリッドに位置する。北側にSB10が分布する。

形状 平面形は不整な円形を呈するものと思われる。推定長径410cm、推定短径400cm、推定面積13.37m²を測る。長軸方向はN-21°-Wである。壁の掘り込みは不明である。

覆土 ピット内より黒褐色土層が確認されただけである。

床面 地山の黄褐色土を床面にしていたものと思われる。

柱穴 住居内より6個のピットが検出された。口径20~30cm、深さ6~22cmを測る。主柱穴とするには小形であるが、壁面に沿って配列されており、本址に伴う壁柱穴であった可能性が強い。

炉址 住居中央部西寄りから地床炉が検出された。掘り込みは認められず、火熱でわずかに赤化していた。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や住居の形状などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SB14（第9図、図版4）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-18グリッドに位置する。南東側に近接してST3・SB23が分布する。

形状 平面形は不整な楕円形を呈する。長径610cm、短径550cm、床面積26.82m²を測る。長軸方向はN-87°-Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は34cmを測る。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の炭化物・白色砂粒を含む。）

第2層 暗褐色土層（やや粘性・しまりに欠けるが、比較的堅い。多量の炭化物・白色粒子・黄褐色土ブロックを含む。）

床面 地山の黄褐色土を床面にしており、全体に堅くしまる。西側を除いて周溝が巡っている。幅15~20cm、深さ10cmほどを測る。

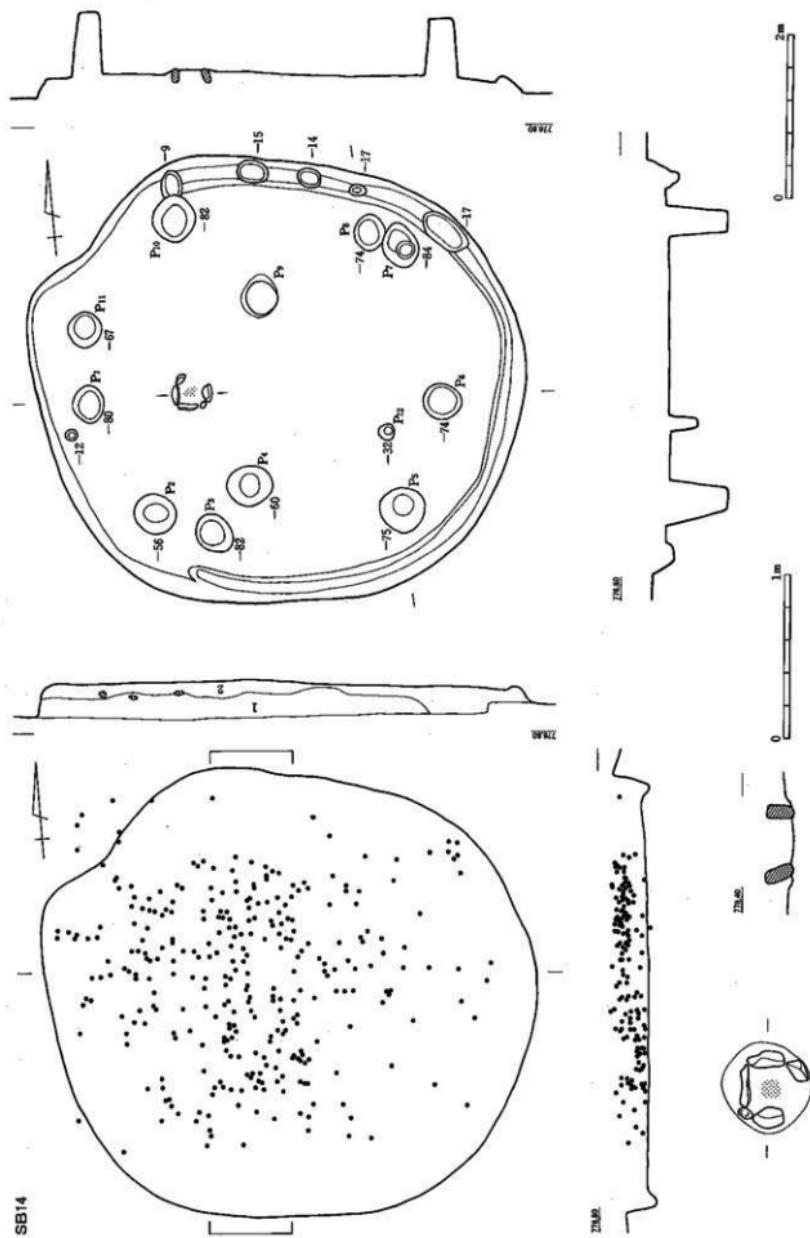
柱穴 住居内より18個のピットが検出された。壁面に沿って配列されたP 1~8・10・11は口径35~55cm、深さ56~84cmを測り、本址に伴う主柱穴と推測される。P 12も小規模ながら床面下32cmと深い。

炉址 長軸線に沿った中央部西寄りから大小5個の礫を用いた石圓炉が検出された。長径48cm、短径44cmの長方形を呈する。断面は皿状に近く、5cmほど掘り込まれている。焼土・炭化物などの堆積は認められなかったが、中央部が火熱によりわずかに赤化していた。

内部施設 炉址の北東側に分布するP 9は76cmと深く、断面が袋状を呈することから、屋内貯蔵穴であった可能性も考えられる。

出土遺物 覆土上層を中心として土器約800点、石器176点のほか、土器混和材と考えられる石塊1点が出土した（第30~32図7~22、第35~37図124~172、第50~55・66~68図）。土器は中期中葉終末例が主体を占め、中期中葉例も含まれる。石器の内訳は打製石斧12点、凹石5点、磨石3点、石皿1点、台石2点、石鏃4点、石錐1点、剥片類148点である。土器をはじめとする遺物の大半は住居西半部に集中しており、その下部には大小の礫が少なからず分布していることから、廃棄された可能性が強い。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、井戸尻Ⅲ式期終末段階からそれに後出



第9図 SB14 実測図

する時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB22（第10図、図版4・5）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、U-18グリッドに位置する。

形状 平面形は長楕円形を呈する。長径450cm、短径320cm、床面積は12.06m²を測る。長軸方向はN-14°-Wを示す。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は9cmを測る。

覆土 5層に分けられる。第4層は周溝内埋土、第5層は炉内埋土、第6～9層はピット埋土にあたる。

第1層 黒褐色土層（粘性をもつが、しまりに欠ける。炭化物・白色砂粒を含む。）

第2層 黒褐色土層（粘性をもち、しまる。炭化物・黄褐色土ブロックを含む。）

第3層 黒褐色土層（黄褐色ブロックを含む。）

第4層 黒褐色土層（ややしまりに欠ける。）

第5層 黒褐色土層

第6層 黒褐色土層（黄褐色土粒を含む。）

第7層 黒褐色土層（黄褐色土ブロックを少量含む。）

第8層 黑褐色土層（黄褐色土粒をやや多く含む。）

第9層 暗褐色土層

床面 地山の黄褐色土を床面にしている。やや起伏をもつが、炉址の周辺では堅くしまる。幅15～20cm、深さ5cmの周溝が周囲に開けられている。

柱穴 住居内より6個のピットが検出された。四隅に配置されたP1～4は口径30～45cm、深さ24～32cmを測り、本址に伴う主柱穴と推測される。ピット内には黒褐色土や暗褐色土が堆積していた。南壁寄りのP5は口径65cm、深さ14cmの皿状を呈する。位置的にみて出入口部施設であった可能性も考えられるが、推測の域を出ない。

炉址 長軸線に沿った中央部や北寄りから石圓炉が検出された。長径42cm、短径38cmを測り、大小6個の礫が方形状に配列されている。深さ15cmほどの掘り方を若干埋め戻して皿状の炉底としている。焼土や炭化物の堆積は認められなかった。

内部施設 南壁際よりP6が検出された。長径100cm、短径70cm、深さ31cmと大形であるが、上部をP5に切られており、性格も不明である。

出土遺物 覆土下層より床面付近にかけて土器19点、石器19点が出土した（第37図173～177、第69図）。土器は中期前葉、新道式を主体としている。石器の内訳は磨石2点、台石1点、石皿1点、剥片15点である。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、新道式期を中心とする時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB23（第10図、図版5）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-19グリッドに位置する。北西側に近接してST3・SB14が分布する。

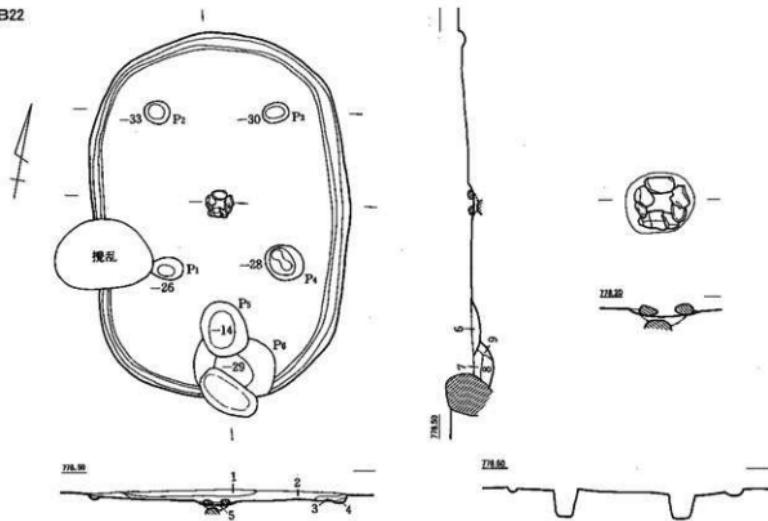
形状 平面形は不整な隅丸方形を呈する。長径390cm、短径390cm、床面積は13.15m²を測る。長軸方向はN-6°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は25cmを測る。

覆土 4層に分けられる。第4層は周溝内堆積土にあたる。

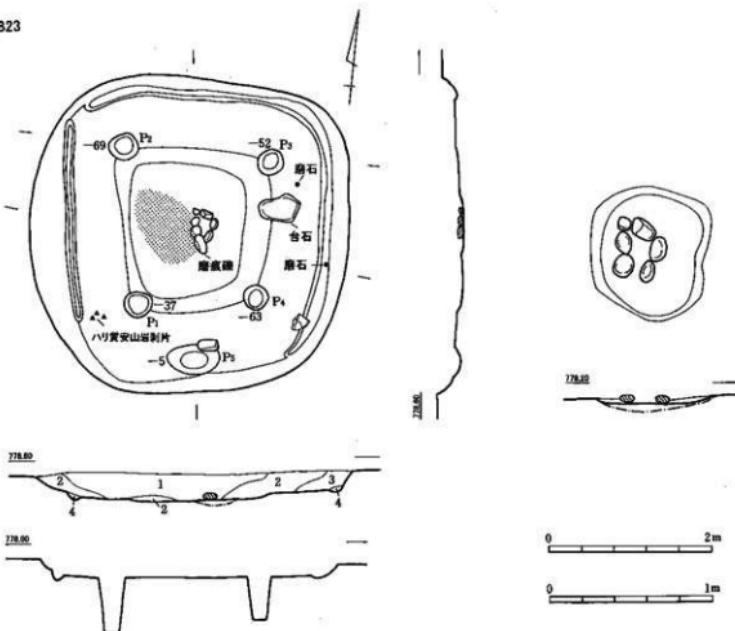
第1層 黒色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物を含む。）

第2層 黑褐色土層（粘性をもち、しまる。多量の赤色土粒・白色砂粒を含む。）

SB22



SB23



第10図 SB22・23 実測図

第3層 黒色土層（粘性をもつが、しまりに欠ける。赤色粒・白色砂粒を含む。）

第4層 黒褐色土層（しまりをもつ。多量の白色砂粒を含む。）

床面 地山の黄褐色土を床面にしている。中央部が方形状にわずかに凹んでいる。南側を除いて周溝が巡る。幅10~15cm、深さ5~10cmを測る。

柱穴 住居内より5個のピットが検出された。主柱穴と考えられるP1~4は口径30~35cm、深さ37~66cmを測り、中央部に広がる方形の凹みの四隅に配置されている。南壁際のP5は口径64cm、深さ5cmを測り、位置的にみて出入口部施設であった可能性も考えられるが、推測の域を出ない。

炉址 長軸線に沿った中央部や東寄りから石囲炉が検出された。長径40cm、短径34cmを測り、大小6個の礫を用いている。深さ15cmほどの掘り方を暗褐色土で埋め戻して皿状に凹む炉底とし、その内部に炉石を置き並べている。焼土や炭化物の堆積は認められなかったが、炉址の西側床面が火熱により赤化していた。炉址の南側に重なるように磨痕跡1点が遺存していた（第11図1）。

内部施設 東壁寄りのP3とP4に挟まれた位置から長径50cm、短径33cmを測る大形の礫が出土した。平坦な上面に磨痕が観察され、何らかの台石として使用された可能性が考えられる（第11図2）。

出土遺物 覆土上層を中心として土器14点、石器22点が出土した（第32図23、第37図178~183、第69図）。土器は中期中葉、藤内式を主体としている。23の浅鉢は床面より出土している。石器の中内訳は磨石3点、台石1点、石錐1点、剥片15点、磨痕跡2点である。P1から南西壁付近にかけての床面には、ハリ賀安山岩の剥片がまとめて遺存していた。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉、藤内式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB25（第12図、図版5）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-22グリッドに位置する。

形状 調査時に上部を削平してしまったため、不明な部分が多いが、平面形は略円形を呈するものと思われる。推定長径660cm、推定短径600cm、確認部の推定床面積32.94m²を測る。

覆土 確認できなかつたが、ピット内には多量の白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。

床面 確認できなかつた。

柱穴 推定住居内より17個のピットが検出された。口径30~80cm、深さ6~42cmとバラエティーに富む。推定壁際に沿って配列される傾向をみせているが、規則性を欠く。

炉址 確認できなかつた。

内部施設 確認できなかつた。

出土遺物 推定住居範囲より土器10点余りが出土した（第38図184~188）。

時期 推定範囲内出土土器や住居の形状などから判断して縄文時代中期中葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

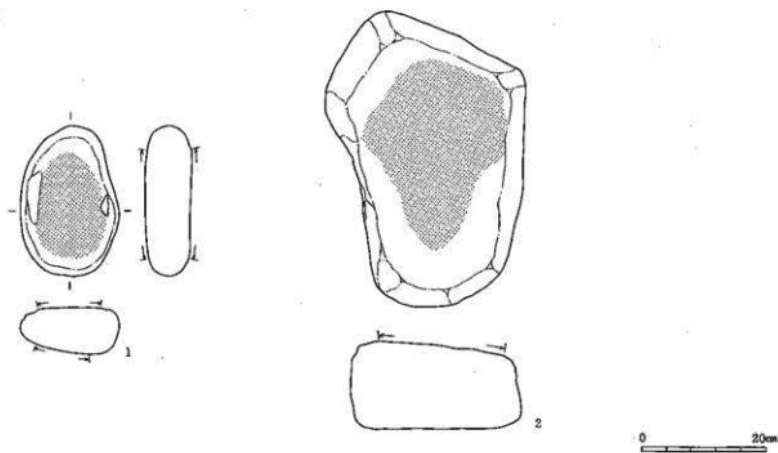
2) 挖立柱建物跡

ST2（第13図、図版5）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-19・20グリッドに位置する。ST3、焼土跡SF4がそれぞれ近接して分布する。

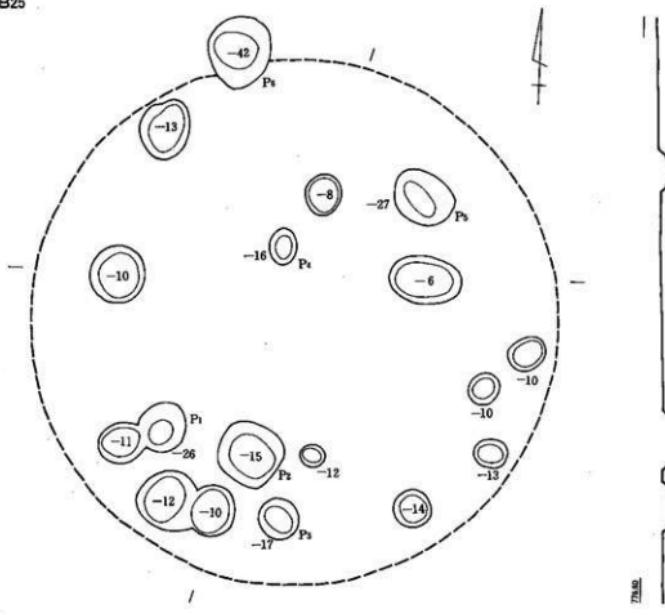
形状 平面形は1間×3間の建物跡と思われる。桁行1030cm、梁行326cm、柱穴間隔は棟側で310~350cm、妻側で280cmを測り、面積は33.6m²である。長軸方向はN-1°-Wである。柱穴の平面形は円形もしくは

SB23



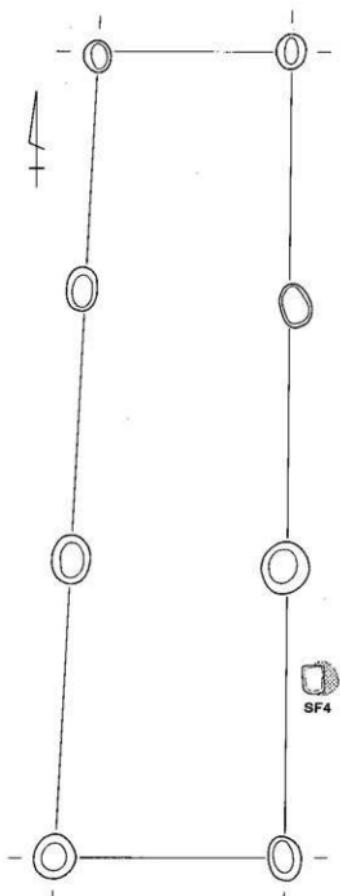
第11図 SB23出土磨痕碟（1）・台石（2）

SB25



第12図 SB25 実測図

ST2



第13図 ST2 実測図

梢円形を呈しており、口径は38~63cm、確認面からの深さは25~58cmを測る。

覆土 黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 ピットの一つから打製石斧1点が出土した(第56図322)。その他、遺構周辺から縄文時代中期中葉~後葉の土器が若干量出土している。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代中期中葉~後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

ST 3 (第14図、図版5)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-19グリッドに位置する。ST 2が近接して分布する。

形状 平面形は1間×1間の建物跡と思われる。桁行315cm、梁行210cm、柱穴間隔は棟側で315cm、妻側で210cmを測り、面積は6.6m²である。長軸方向はN-90°-Eである。柱穴の平面形はいずれも梢円形を呈しており、口径は58~85cm、確認面からの深さは21~41cmを測る。北東隅のピットにはテラス状の張り出しがあり、南西隅のピットも北辺が大きく張り出す。

覆土 黄褐色土ブロックを含んだ黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方やST 2との関連性から判断して、縄文時代中期中葉~後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

ST 4 (第15図、図版5)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-20・21グリッドに位置する。

形状 平面形は六角形を呈しており、1間×1間の棟持柱付き建物跡と思われる。桁行640cm、梁行240cm、柱穴間隔は棟側で370cm、妻側で240cmを測り、面積は8.9m²である。長軸方向はN-2°-Wである。柱穴の平面形

はいずれも梢円形を呈しており、口径 ST3 は50~85cm、確認面からの深さは32~51cmを測る。棟持柱も平面形は梢円形を呈し、口径は45~53cmを測るが、確認面からの深さは8~10cmと浅い。なお、北西隅と南東隅のピットは上部が皿状に広がっており、後続して土坑が造られた可能性も考えられるが、断定できない。前者は長径115cm、短径100cm、深さ16cmを測り、斜めに立った状態の角柱状の礫や石皿に據した可能性が考えられる安山岩円礫と彫刻石皿の破片(安山岩製、逆位遺存)が折重なって出土している。後者は長径115cm、短径85cm、深さ17cmを測り、長さ20cmほどの礫が出土している。

覆土 黒色土が堆積していた。

出土遺物 北西隅のピットから唐草文 ST5 系土器の小片1点が出土した(第38図189)。

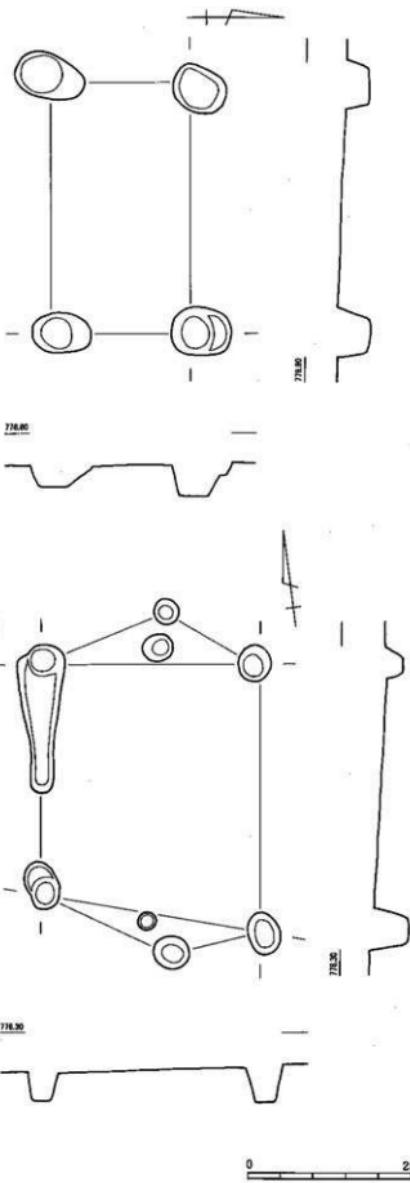
時期 伴出器などから判断して、縄文時代中期後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

ST 5 (第14図、図版 6)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-26・27グリッドに位置する。

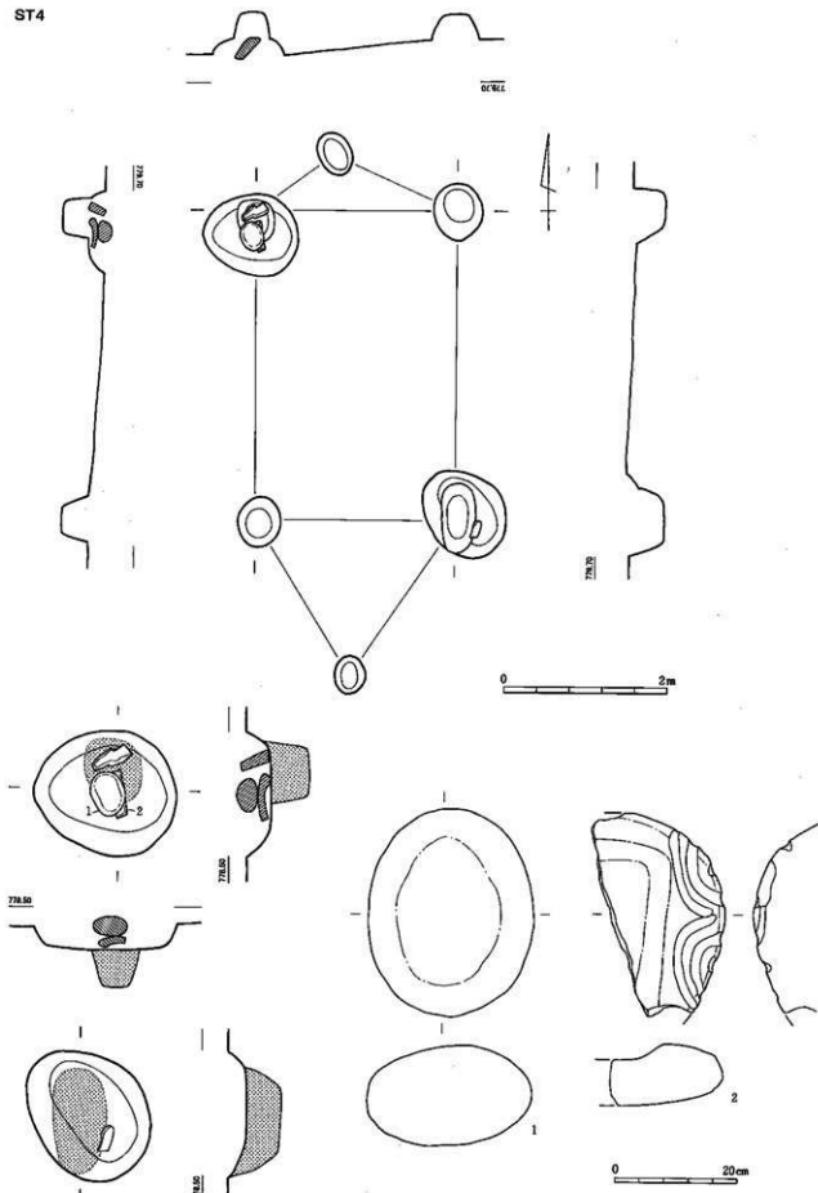
形状 1間×1間の棟持柱付き建物跡と思われ、平面形は六角形を呈する。桁行420cm、梁行265cm、柱穴間隔は棟側で330cm、妻側で265cmを測り、面積は8.7m²である。長軸方向はN-2°~Eである。柱穴の平面形はいずれも円形~梢円形を呈しており、口径は40~60cm、確認面からの深さは18~47cmを測る。棟持柱のピットも同規模である。

南西隅のピットはテラスを有する。なお、北西隅のピットから南北軸線に沿って延びる溝が検出された。幅は最大で55cm、深さは8cmを測る。北西



第14図 ST 3・5 実測図

ST4



第15図 ST 4 実測図・出土遺物

ピットとの位置関係などから、本建物跡の周溝あるいは掘り方の一部と考えられる。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が高い。縄文時代晚期の包含層遺物と分布上の接点を有するが、関連性を含めて詳細な時期は不明である。

3) 土 坑

今回の発掘調査で出土した土坑は、ピット状のものから長径が200cmを越える大型のものまでを含んでおり、規模・形態ともに多様である。本来ならばそれらすべてを網羅して記述すべきであるが、ここでは紙数上の制約などから個別記載および個別説明については特徴的と思われる遺構に限定して行い（第17～23図）、他の大部分については一覧表の記載に譲ることとする（第1表）。

なお、一覧表に含まれる形態標記の分類基準は、古代以降の土坑も含め、以下のとおりである。

〈形態分類〉

- ・平面形
 - I - 円形もしくは略円形を呈するもの。
 - II - 楕円形もしくはそれに近似する形を呈するもの。
 - III - 隅丸方形を呈するもの。
 - IV - 定形を呈しない不整形なもの。
- ・断面形
 - A - 底面がやや丸みを帯び、壁が緩やかに立ち上がるもの。
 - B - 底面が平らで、壁が急傾斜に立ち上がるもの。
 - C - 底面が平らで、壁がほぼ垂直に立ちあがる円筒状のもの。
 - D - 壁の中～下半部が下膨れ状に広がり、いわゆる袋状を呈するもの。
 - E - 規模が比較的小さく、いわゆるピット状を呈するもの。

また、時期別・形態別の分布傾向については、第16図を参照されたい。ちなみに若干の所見を述べておくなり、前期末葉の所産と考えられる土坑が該期の堅穴住居跡に隣接して営まれる点が看取されるとともに、中期中葉～後葉の所産と考えられる土坑群の一部がI区東側において弧状あるいは環状の分布を示す点などが注意される。とりわけ、後者において覆土中に径20cmを越える環1個ないし複数を遺存させていた土坑が、上記の弧状あるいは環状の分布域の内部にほぼ限定的な分布をみせていることは、同様に石皿に擬制して埋納された可能性を示す事例が含まれる点とともに、土坑群の性格を明らかにするうえで興味深い示唆を与えている。I区南東部の南北に分かれて分布する晩期の土坑群も特徴的である。

以下、主要な土坑について個別的な説明を記す。

SK 1 (第17図)

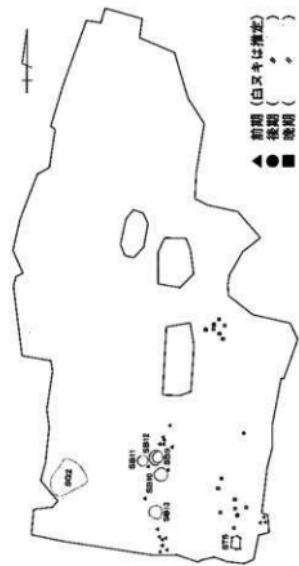
位置 上位段丘面のII区、M-3グリッドに位置する。南側に近接してSK 2が分布する。

形状 調査時点での記録に曖昧さを残すが、平面形は推定長径79cm、短径45cmの長椭円形を呈すると推測される。長軸方向はN-65°-Wである。壁面や坑底は不明瞭であるが、上部に小円窪が群在する。被然痕や焼土の堆積は皆無であり、いわゆる集石遺構との関連など詳細は不明である。

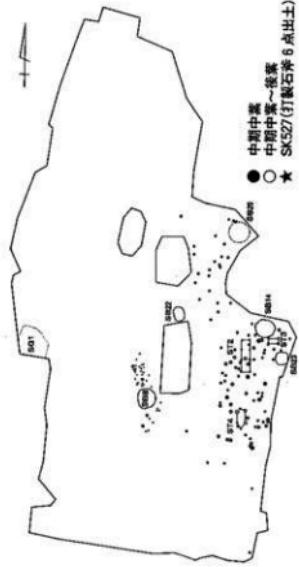
覆土 黒色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

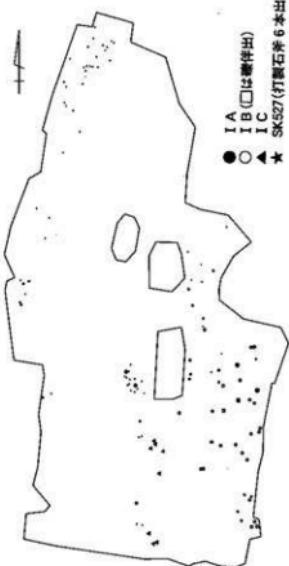
時期 覆土のあり方などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。



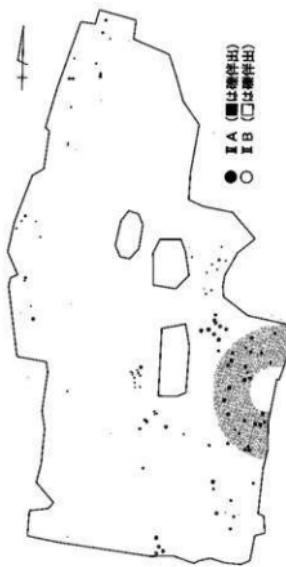
1. 繩文時代前期・後期・晩期の土坑（推定含む）



2. 繁文時代中期の土坑（推定倉む



3. 平面形態 I を呈する土坑



4. 平面形船を呈する土坑

第16図 土坑の時期別・形態別分布図(1:1500)

SK141 (第17図、図版6)

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-23グリッドに位置する。南側に近接してSB9・10・11が分布する。

形状 平面形は長径116cm、短径110cm、深さ78cmの略円形を呈する。長軸方向はN-83°-Eである。断面は筒状に近く、中位でオーバーハングする。坑底はやや傾斜する。

覆土 7層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（しまりをもつ。白色砂粒を多く含む。）

第2層 黒褐色土層（第1層より白色砂粒を多く含み、明るい。）

第3層 暗褐色土層（少量の黄褐色土ブロックを含む。）

第4層 暗褐色土層（黄褐色土ブロックを含む。）

第5層 黄褐色土層（多量の黄褐色土ブロックを含む。）

第6層 黒褐色土層

第7層 暗褐色土層

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK142 (第17図、図版6)

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-23グリッドに位置する。SK141の東側に近接する。

形状 平面形は長径83cm、短径82cm、深さ48cmの略円形を呈する。長軸方向はN-77°-Wである。断面は筒状に近く、坑底は平坦である。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層 第2層 黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK144 (第17図)

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-22グリッドに位置する。北側にSK145が近接する。

形状 平面形は長径103cm、短径93cm、深さ58cmの略円形を呈する。長軸方向はN-7°-Wである。断面は筒状に近く、坑底は起伏をもつ。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層 第2層 黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK145 (第17図)

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-22グリッドに位置する。南側にSK144が近接する。

形状 平面形は長径104cm、短径83cm、深さ59cmの稍円形を呈する。長軸方向はN-89°-Wである。断面

は筒状に近く、坑底はやや傾斜する。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層 第2層 黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK148（第17図、図版6）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-26グリッドに位置する。SK149に東側を切られる。

形状 平面形は長径184cm、短径150cm、深さ32cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-57°-Eである。断面は挿り鉢状に近く、坑底は丸みをもつ。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層 第2層 黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物 覆土中より前期末葉土器2点、磨石1点が出土した（第38図190・191）。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK149に先行する。

SK149（第17図、図版6）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-26グリッドに位置する。西側でSK148を切り、北東側をSK150に切られる。

形状 平面形は長径126cm、短径126cm、深さ34cmの円形を呈する。長軸方向はN-63°-Eである。断面は筒状に近く、坑底は平坦である。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層 第2層 黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物 覆土中より前期末葉土器4点が出土した（第38図192-195）。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK150に先行し、SK148に後続する。

SK150（第17図）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-26グリッドに位置する。南西側でSK149を切る。

形状 平面形は長径78cm、短径61cm、深さ49cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-54°-Eである。断面は筒状に近く、坑底は平坦である。

覆土 2層に分けられる。

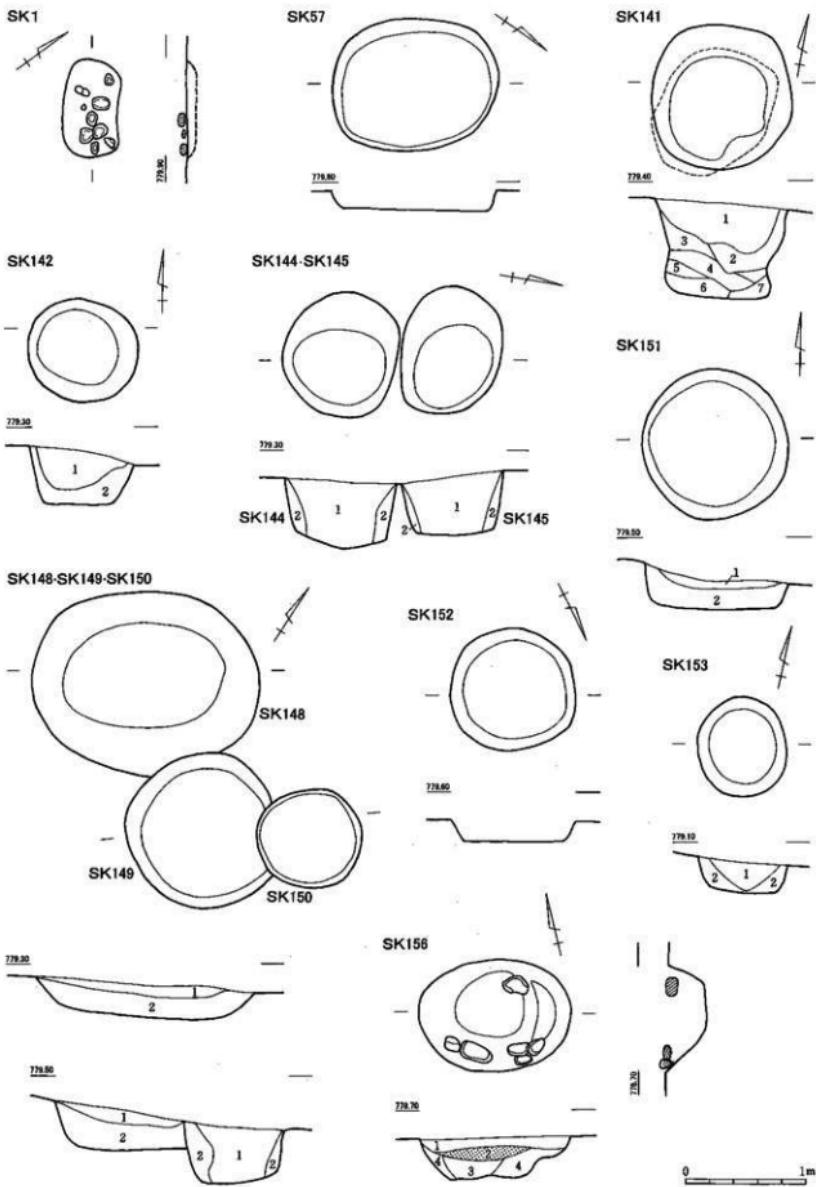
第1層 黒褐色土層 第2層 黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物 覆土中より前期末葉土器2点が出土した（第38図196・197）。

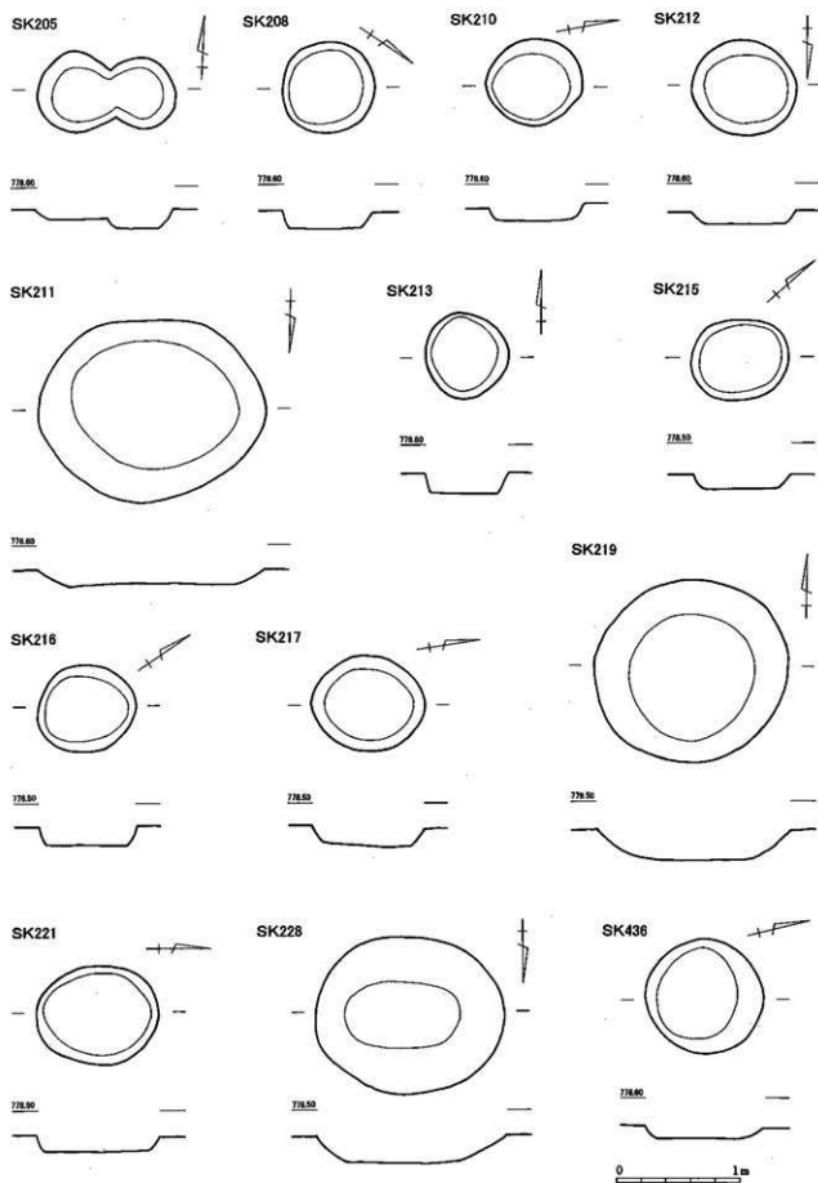
時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK149に後続する。

SK151（第17図、図版6）

位置 中位段丘面の上部平坦面先端のI区、T-26グリッドに位置する。南側にSK148が近接する。



第17図 SK実測図(1)



第18図 SK実測図(2)

形状 平面形は長径120cm、短径120cm、深さ29cmの円形を呈する。断面は筒状に近く、坑底はほぼ平坦である。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層

第2層 黒褐色土層（白色砂粒を多く含み、明るい。）

出土遺物 覆土中より前期末葉土器の小片2点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代前期末葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK156（第17図、図版6）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-22グリッドに位置する。上面に蝶が群集する。

形状 平面形は長径124cm、短径71cm、深さ34cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-84°-Wである。断面は掘り鉢状に近く、一端にテラスを伴う。坑底は起伏をもつ。

覆土 4層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（しまりに欠ける。多量の炭化物・明黄褐色土ブロック、焼土粒を含む。）

第2層 明黄褐色土層（焼土を主体とする。）

第3層 黒褐色土層（しまりに欠ける。多量の炭化物・白色砂粒、焼土粒を含む。）

第4層 暗褐色土層（少量の白色砂粒・赤色粒を含む。）

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK340（第19図、図版6）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-18グリッドに位置する。南側でSK531を切る。

形状 平面形は長径118cm、短径100cm、深さ28cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-27°-Eである。断面は掘り鉢状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（やや柔らかい。少量の黄褐色土ブロックを含む。）

第2層 黒褐色土層（やや堅い。少量の黄褐色土ブロックを含む。）

出土遺物 覆土中より晩期前～中葉の土器22点、打製石斧1点、剥片1点が出土した（第38図200～205、第58・71図335・336）。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代晩期前～中葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK531に後続する。

SK342（第19図、図版6）

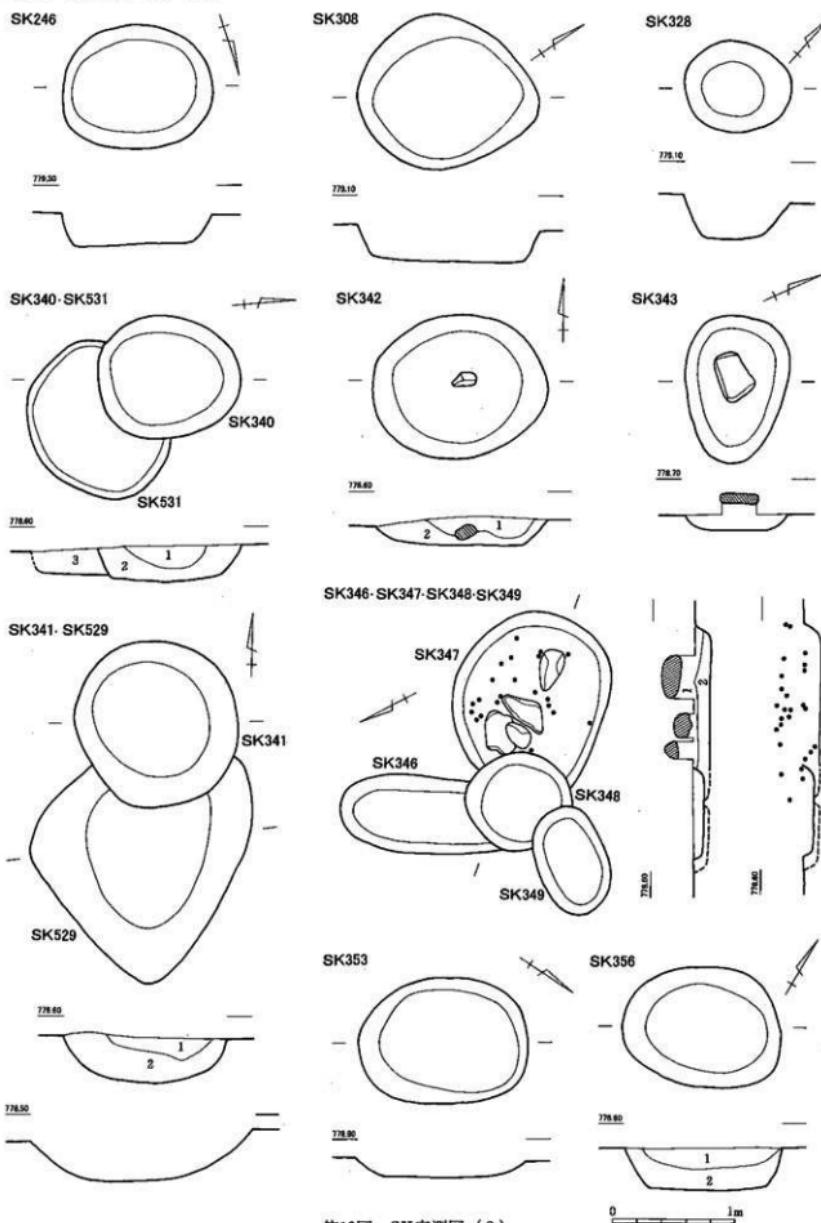
位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、U-18グリッドに位置する。

形状 平面形は長径143cm、短径117cm、深さ20cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-4°-Wである。断面は皿状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（少量の黄褐色土ブロックを含む。）

第2層 黒褐色土層（少量の黄褐色土ブロックを含む。）



第19図 SK実測図 (3)

出土遺物 覆土中より礫1点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代晚期に位置づけられる可能性を考えられるが、正確な時期は不明である。

SK343（第19図、図版6）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-19グリッドに位置する。上面に平石が分布していた。

形状 平面形は長径121cm、短径85cm、深さ20cmの梢円形を呈する。長軸方向はN-70°-Wである。断面は皿状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土 黒褐色土が堆積していた。少量の褐色砂ブロックを含む。

出土遺物 覆土中より前期末葉土器1点、中期土器2点、打製石斧1点などが出土した（第39図209、第70図337・339）。前期末葉の土器は混入した可能性が強い。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して縄文時代中期中葉～後葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SK347（第20図、図版7）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-23グリッドに位置する。西側でSK348に切られる。

形状 平面形は長径146cm、短径125cm、深さ30cmの梢円形を呈する。長軸方向はN-47°-Wである。断面は掘り鉢状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（粘性・しまりに欠ける。白色砂粒を含む。）

第2層 黒褐色土層（しまりをもつ。白色砂粒を含む。）

出土遺物 覆土第1層を中心に中期中葉最末段階の土器18点、剥片1点が出土したほか、礫4個が長軸上に並ぶように遺存していた（第38図206～208）。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代中期中葉でも最も新しい段階の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSK348に後続する。

SK413（第20図）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-21グリッドに位置する。

形状 平面形は長径129cm、短径128cm、深さ13cmの略円形を呈する。長軸方向はN-51°-Eである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土 黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

出土遺物 覆土中より礫1点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK431（第20図）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-21グリッドに位置する。中央部近くをSK171に切られる。

形状 平面形は長径247cm、短径178cm、深さ17cmの長梢円形を呈する。長軸方向はN-26°-Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土 黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

出土遺物 覆土中より、石皿に擬制した可能性が考えられる磨痕碟1点（第23図1）が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK171に先行する。

SK434（第20図、図版7）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-19グリッドに位置する。

形状 平面形は長径104cm、短径64cm、深さ11cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN-83°-Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土 黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

出土遺物 覆土中より碟2点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK454（第20図）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-19グリッドに位置する。南東端近くをSF4に切られる。

形状 平面形は長径240cm、短径132cm、深さ31cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN-53°-Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土 黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

出土遺物 覆土中より大型碟1点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSF4に先行する。

SK465（第20図）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-21グリッドに位置する。北側でSK540を切る。

形状 平面形は長径71cm、短径58cm、深さ13cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-60°-Wである。断面は掘り鉢状に近く、坑底は平坦である。

覆土 黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

出土遺物 覆土中より、敲打による加工痕を有し石皿に擬制して埋納された可能性が考えられる碟1点（第23図2）、目的剥片1点（第56・70図676）が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK540に後続する。

SK473（第21図、図版7）

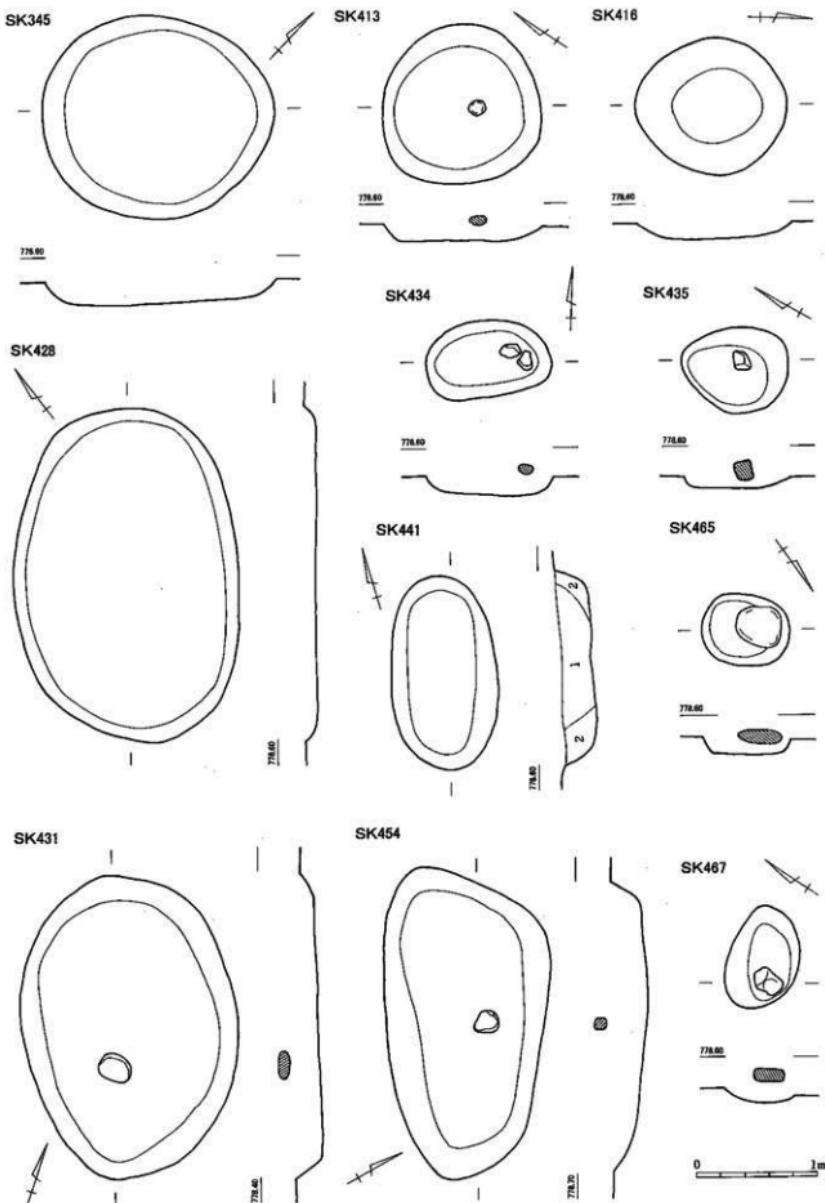
位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-21グリッドに位置する。南西側でSK497を切る。

形状 平面形は長径99cm、短径96cm、深さ23cmの略円形を呈する。長軸方向はN-18°-Wである。断面は掘り鉢状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

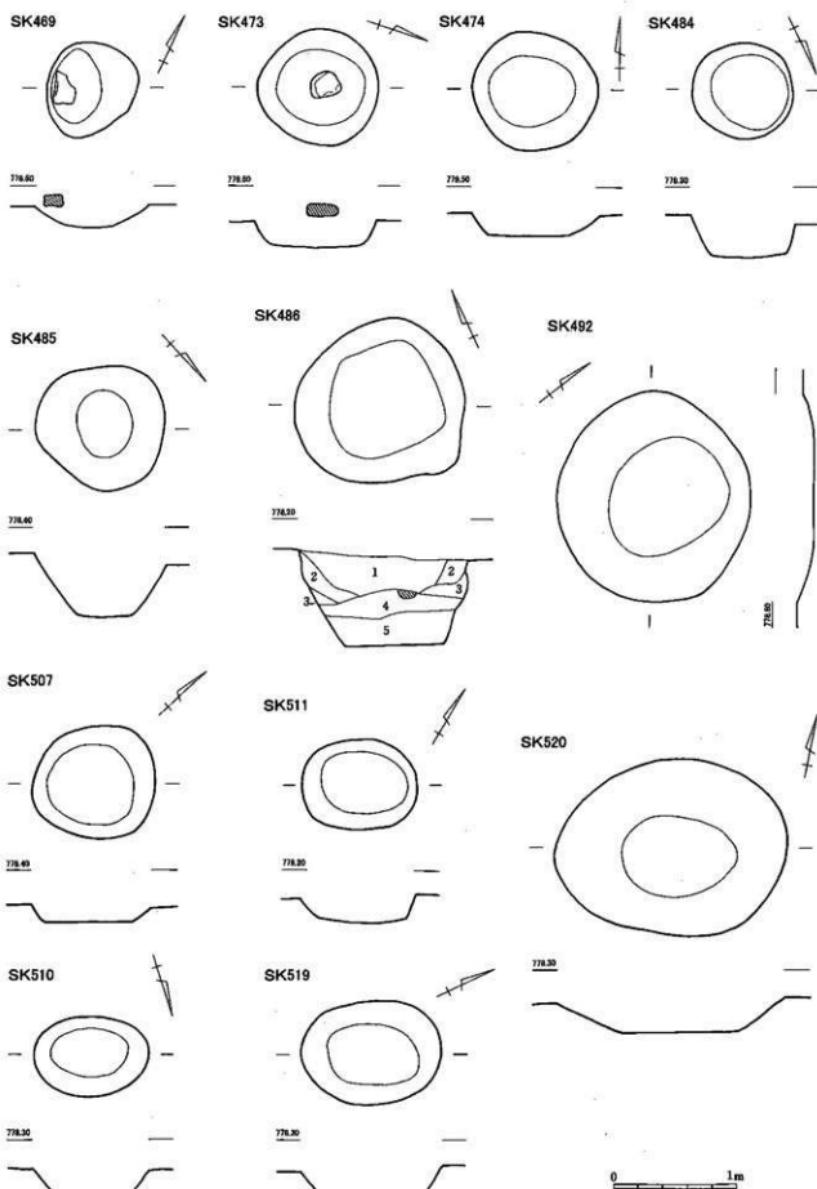
覆土 黒褐色土が堆積していた。褐色砂粒を含む。

出土遺物 覆土中より偏平碟1点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK497に後続する。



第20図 SK実測図(4)



第21図 SK実測図(5)

SK486 (第21図、図版7)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-25グリッドに位置する。SB16に切られる。

形状 平面形は長径139cm、短径133cm、深さ77cmの不整な円形を呈する。長軸方向はN-68°-Wである。

断面 は掘り鉢状に近く、坑底は平坦である。

覆土 5層に分けられる。

第1層 黒褐色砂質土層（しまりに欠ける。多量の白色砂粒、炭化物を含む。）

第2層 黒褐色土層（多量の炭化物を含む。）

第3層 黒褐色土層（多量の炭化物・白色砂粒を含む。）

第4層 黒褐色土層（しまりをもつ。多量の炭化物を含む。）

第5層 暗褐色土層（黄褐色土ブロック・黒褐色砂質ブロックを含む。）

出土遺物 覆土中より前期末葉土器2点、疊多数が出土した（第39図214・215）。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などから判断して、縄文時代前期末葉の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB16に先行する。

SK527 (第22図、口絵2)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-21グリッドに位置する。

形状 平面形は長径85cm、短径80cm、深さ41cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-31°-Wである。断面は掘り鉢状に近く、坑底はやや傾斜をもつ。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色砂質土層（小量の褐色砂ブロックを含む。）

第2層 黒褐色土層（堅くしまる。）

出土遺物 確認面より2点、覆土上層より4点、合計6点の打製石斧が出土した（第56・70図348～353）。いずれも水平の状態で重なり合うような形で検出されており、人為的に埋納された可能性が強い。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK531 (第22図)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-18グリッドに位置する。北側でSK340に切られる。

形状 平面形は長径134cm、短径117cm、深さ10cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-80°-Eである。断面は掘り鉢状に近く、坑底はやや丸みをもつ。

覆土 暗褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

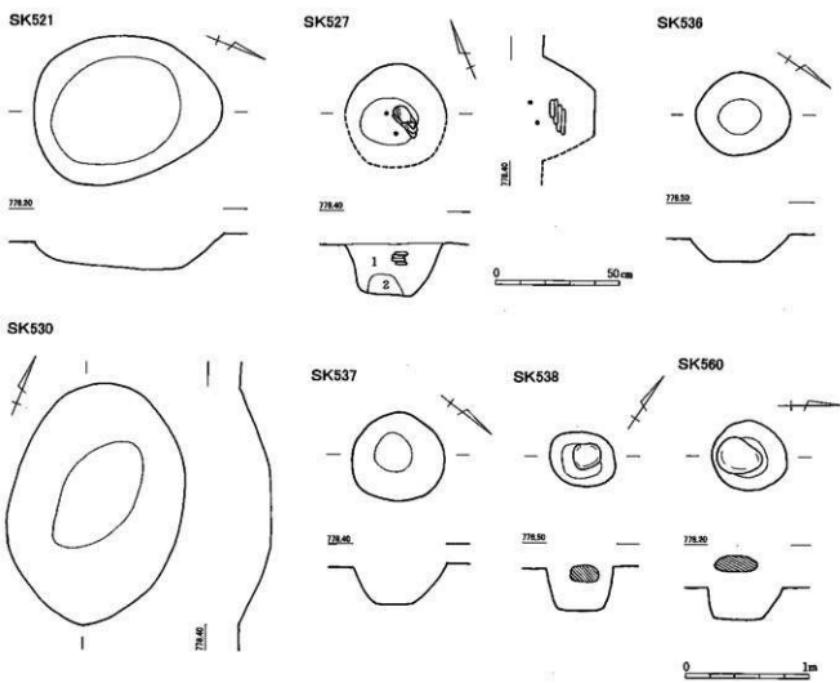
時期 覆土のあり方などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK340に先行する。

SK538 (第22図、図版7)

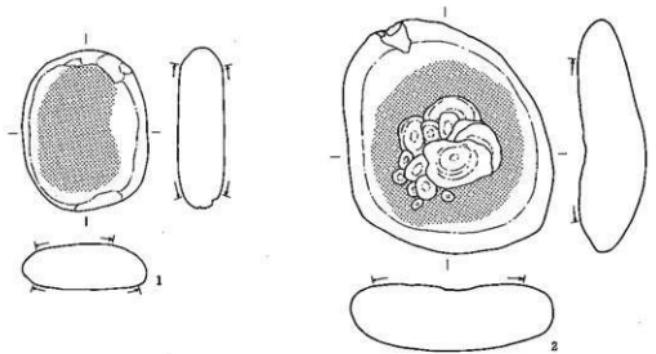
位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-19グリッドに位置する。

形状 平面形は長径53cm、短径46cm、深さ36cmの略円形を呈する。長軸方向はN-54°-Eである。断面は掘り鉢状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土 暗褐色土が堆積していた。褐色砂ブロックを含む。



第22図 SK実測図（6）



第23図 SK出土磨痕碟（1 - SK431、2 - 465）

出土遺物 覆土上面より石皿に擬制した可能性が考えられる砾1点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代中期中葉～後葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK560（第22図）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-25グリッドに位置する。

形状 平面形は長径61cm、短径57cm、深さ25cmの略円形を呈する。長軸方向はN-4°-Eである。断面は掘り鉢状に近く、坑底は比較的平坦である。

覆土 暗褐色土が堆積していた。白色砂粒・赤色土粒を含む。

出土遺物 覆土上面より石皿に擬制した可能性が考えられる砾1点が出土した。

時期 覆土や周辺における土器の出土状況などから判断して、縄文時代晩期に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

第1表 土坑一覧表（平安時代ほか含む）

番 号	地 位 區	時 期	平 面 形	規 模 (cm) 長径×短径 深さ	覆 土	遺 物		切り合 い関係	絶 対 方 位	備 考
						土 器 類	石 器 類			
1	I区	M.3	縄文?	II A 79×45	黒褐色土				N65W	小溝多数
2	II区	M.3	縄文?	I B 99×95	7 黒褐色土				N11E	
4	IV区	B15	平安?	II B 41×33	13 3／3暗褐色土					
5	IV区	B15	平安?	II E 44×33	25 3／3暗褐色土					
6	IV区	B14	平安?	I E 60×46	20 3／3暗褐色土					
14	III区	F10	不明	I A 46×39	13 黒褐色土					
15	III区	F10	不明	I E 119×123	28 黒褐色土				N86E	
17	III区	E11	不明	I E 46×29	22 黒褐色土					
19	III区	E11	不明	I E 47×45	18 黒褐色土					
22	IV区	B14	平安?	I E 42×37	14 2／2黒褐色土					
27	IV区	D14	平安?	II E 44×32	15 2／2黒褐色土					
40	I区	Q.6	不明	I A 57×56	15 黒褐色土					
41	I区	R.6	不明	II B 54×46	28 黒褐色土					
47	I区	Q.7	不明	II E 42×36	18 黒褐色土					
48	I区	Q.7	不明	I A 44×43	11 黒褐色土					
49	I区	R.7	不明	E B 86×67	22 黒褐色土				N87E	
50	I区	R.7	不明	I A 44×34	22 黒褐色土					
51	I区	R.7	不明	I A 53×46	12 黒褐色土					
52	I区	R.7	不明	I A 48×47	12 黒褐色土					
53	I区	R.7	不明	I A 48×38	12 黒褐色土					
55	I区	R.7	不明	I E 42×40	17 黒褐色土					
57	I区	R.7	縄文?	II C 139×108	16 黒褐色土				N42W	
58	I区	R.7	不明	I A 65×56	16 黒褐色土					
59	I区	R.7	不明	I A 58×52	14 黒褐色土					
65	I区	P.8	不明	II B 73×49	13 黒褐色土				N27W	
66	I区	P.8	不明	II B 89×85	13 黒褐色土				N33W	
72	I区	Q.8	不明	I A 55×52	18 黒褐色土					
73	I区	Q.8	不明	I A 48×44	13 黒褐色土					
76	I区	Q.8	不明	I A 54×52	14 黒褐色土					
84	I区	Q.8	不明	II B 87×107	16 黒褐色土			SK85と切合う	N54E	
85	I区	Q.8	不明	I B 73×75	16 黒褐色土			SK84と切合う	N31E	
88	I区	Q.8	不明	I A 52×48	11 黒褐色土					
89	I区	R.8	不明	E E 48×39	17 黒褐色土					
103	I区	P.9	不明	I A 68×62	13 黒褐色土					

第三章 原始時代の遺構と遺物

番号	地区	位	時期	平面形	断面形	規 横 (cm) 長径×短径	厚さ	土 賽	石 賽	道 物	切り合い関係	輪方位	備考	
								土	石					
106	I 区	P 9	不明	II A	49×40	10	黒褐色土							
109	I 区	Q 9	不明	II E	52×45	23	黒褐色土							
112	I 区	Q 9	不明	I A	41×37	11	黒褐色土							
114	I 区	P 10	不明	I E	56×51	25	黒褐色土							
122	I 区	Q 10	不明	I A	46×40	14	黒褐色土							
127	I 区	P 11	不明	I A	40×32	13	黒褐色土							
131	I 区	N 14	不明	II A	49×46	11	黒褐色土							
132	I 区	O 14	不明	II B	53×37	19	黒褐色土							
133	I 区	O 14	不明	II A	81×50	19	黒褐色土							
134	I 区	O 14	不明	II A	51×36	13	黒褐色土							
141	I 区	T 23	前期末?	I D	110×116	78	複層							N83E
142	I 区	T 23	前期末?	I B	82×83	48	複層							N77E
144	I 区	T 22	前期末?	I C	103×93	58	複層							N 7 W
145	I 区	T 22	前期末?	II C	104×83	58	複層							N89W
146	I 区	V 20	平安?	III A	126×209	15	複層			土師漆器片 I				N 9 E 墓の可能性
147	I 区	V 21	平安?	I A	89×87	12	3 / 1 黒褐色土							N16E 墓の可能性
148	I 区	T 26	前期末	II A	184×150	32	複層			前期末 2	磨石 1	SK149に切られる		N57E
149	I 区	T 26	前期末	I C	126×126	34	複層			前期末 4		SK148を切る・150に切られる		N63W
150	I 区	T 26	前期末	I C	78×61	49	複層			前期末 2		SK149を切る		N54E
151	I 区	T 26	前期末?	I C	120×120	29	複層							
152	I 区	S 25	前期末?	I B	103×100	21	2 / 2 黒褐色土			四石 1・磨石 1				N65W
153	I 区	T 24	前期末	I C	84×72	29	複層			前期末 2	石基 1・剥片 5			N20W
154	I 区	S 22	中期中葉	II A	80×64	7	2 / 2 黒褐色土			中期中葉 4				N85W
155	I 区	U 23	平安?	II B	224×149	52	複層					SK199を切る		N82E
156	I 区	W 22	中期後?	II B	126×71	34	複層							N84W 磨土と複層
157	I 区	S 20	中期中葉?	I C	57×54	6	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			打斧 1				N10E
158	I 区	S 20	中期中葉?	II B	56×47	13	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			磨石 1				N14W
159	I 区	X 21	中期後?	II A	60×40	8	複層							N 7 W 磨土
160	I 区	V 20	平安?	II A	94×65	20	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N86W
161	I 区	V 20	平安?	I E	44×42	11	2 / 1 黒色土							
162	I 区	V 20	平安?	II A	60×53	10	2 / 1 黑色土							
163	I 区	V 20	平安?	I B	156×152	26	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N46E
165	I 区	V 20	平安?	II E	42×30	16	2 / 1 黑色土							
166	I 区	W 20	平安?	II B	131×100	10	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N45W
167	I 区	W 20	平安?	II A	98×75	12	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N54W
168	I 区	V 21	平安?	II B	88×67	13	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SK428を切る				N 2 E
170	I 区	V 21	平安?	I A	106×100	17	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SB24を切る				N75E
171	I 区	W 21	平安?	II E	43×34	10	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SK431を切る				
173	I 区	W 21	平安?	II A	302×191	25	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N63W
174	I 区	V 22	平安?	I E	48×45	11	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SB24を切る				
177	I 区	V 22	平安?	I A	85×81	14	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SB24を切る				N90R
184	I 区	W 22	平安?	I A	99×85	10	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N 7 W
185	I 区	V 22	平安?	I A	71×64	15	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N24W
186	I 区	V 22	平安?	I E	42×36	12	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							
187	I 区	V 22	平安?	I A	67×62	12	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N41W
189	I 区	V 22	平安?	II B	97×81	18	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N43E
190	I 区	V 22	平安?	I B	57×55	13	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N 3 W
191	I 区	V 22	平安?	I B	78×68	10	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N 3 W
194	I 区	W 22	平安?	II B	76×56	18	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			灰陶壺器 1				N50W
195	I 区	W 22	平安?	I B	76×72	28	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N30W
197	I 区	U 23	平安?	I E	49×46	12	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							
199	I 区	U 23	平安?	I E	39×40	14	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SK155に切られ、SK196と切合う。				
200	I 区	V 23	平安?	I B	70×64	6	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N37E
203	I 区	V 23	平安?	I A	107×96	26	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SK202と切合う。				N55W
204	I 区	V 23	平安?	I B	68×66	10	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SK205と切合い、SK566を切る				N55W
205	I 区	V 23	平安?	I B	56×54	16	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒			SK204と切合う				N39W
206	I 区	V 24	平安?	II A	218×149	15	3 / 2 黒褐色土・白色砂粒							N 3 W

番号	地 位 区 重	時 期	平 面 形	横 幅 (cm)	長 径×短 径 添さ	土 被 覆 土	遺 物		切り合い関係	輪 方 位	備 考
							土 器 順	石 器 順			
207	I 区 V23	平安?	I A	58×52	11	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
208	I 区 W23	平安?	I B	77×75	15	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N44W	
209	I 区 W23	平安?	I E	54×50	10	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
210	I 区 W23	平安?	I B	78×72	15	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N10E	
211	I 区 V24	平安?	I A	186×148	12	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N90E	
212	I 区 V24	平安?	I B	84×78	9	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N33W	
213	I 区 V24	平安?	I B	70×71	17	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N48W	
214	I 区 W24	平安	I A	62×57	12	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
215	I 区 W24	平安?	I B	79×65	12	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N47E	
216	I 区 W24	平安?	I B	80×71	19	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N31E	
217	I 区 W24	平安?	I B	93×76	16	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N 6 E	
218	I 区 W24	平安?	I B	79×44	26	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
219	I 区 V25	平安?	I A	159×150	26	3／2 黒褐色土・白色砂粒			SK518を切る	N45W	
220	I 区 V25	平安?	I A	54×47	23	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
221	I 区 V25	平安?	I A	102×85	13	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N 3 W	
226	I 区 U26	平安?	I E	65×59	23	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
228	I 区 V26	平安?	I A	155×126	23	3／2 黒褐色土・白色砂粒				N56W	
229	I 区 V26	平安?	I B	59×60	12	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
230	I 区 V26	平安?	I E	37×33	12	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
231	I 区 W26	平安?	I E	55×47	15	3／2 黒褐色土・白色砂粒					
233	I 区 O16	平安?	I A	66×63	17	3／2 黒褐色土			SK234を切る		
234	I 区 O16	绳文?	I B	106×59	13	2／1 黒色土・白色粒10%			SK233に切られる	N 3 W	
235	I 区 O16	平安?	I A	45×39	10	3／2 黒褐色土					
240	I 区 O16	绳文?	I E	43×40	18	2／1 黑色土・白色砂粒 10%					
243	I 区 O17	绳文?	I B	35×32	11	3／1 黑色土・白色砂粒 10%					
246	I 区 O18	绳文?	I B	127×103	28	2／1 黑色土・白色砂粒 10%				N76W	
250	I 区 P20	绳文?	I A	61×43	19	2／1 黑色土・白色砂粒					
251	I 区 O21	绳文?	I B	68×66	33	2／1 黑色土・白色砂粒 10%				N 8 E	
254	I 区 S19	中期平安?	I A	73×50	6	3／2 黒褐色土・白色砂粒多				N 8 W	
255	I 区 S20	中期平安?	I A	76×66	13	3／2 黒褐色土・白色砂粒多				N42E	
273	I 区 S20	中期平安?	I C	45×34	28	3／2 黒褐色土・白色砂粒多			SK274と切合う	N63E	
282	I 区 S20	中期平安?	I A	85×79	28	3／2 黒褐色土・白色砂粒多			SK281と切合う	N56W	
284	I 区 S20	中期平安?	I B	83×51	18	3／2 黒褐色土・白色砂粒多				N19E	
285	I 区 T21	中期平安?	I E	41×33	27	2／2 黒褐色土					
289	I 区 T21	中期平安?	I E	35×26	19	2／2 黒褐色土		磨石1			
301	I 区 T21	前期末?	I B	72×68	23	2／2 黒褐色土				N47W	
302	I 区 S22	中期平安?	I B	66×59	12	2／2 黒褐色土				N14W	
303	I 区 S22	中期平安?	I B	52×42	10	2／2 黒褐色土				N7 W	
305	I 区 S22	中期平安?	I B	79×62	15	2／2 黒褐色土				N72W	
306	I 区 S22	中期平安?	I A	50×44	11	2／2 黒褐色土					
308	I 区 T22	中期平安?	I B	149×127	24	2／2 黒褐色土				N28 E	
309	I 区 S23	中期平安?	I B	75×55	24	2／2 黒褐色土				N63W	
310	I 区 S25	中期平安?	I E	41×35	15	2／2 黒褐色土					
311	I 区 S25	中期平安?	I E	46×40	15	2／2 黒褐色土					
323	I 区 T26	前期末?	I B	84×60	20	2／2 黒褐色土				N80W	
324	I 区 T27	前期末?	I B	88×77	13	2／2 黒褐色土				N 4 E	
326	I 区 T27	前期末?	I B	80×73	19	2／2 黒褐色土				N30 E	
328	I 区 T23	中期平安?	I B	87×74	33	2／2 黒褐色土				N57 E	
330	I 区 U17	中期平安?	I B	46×36	23	2／2 黒褐色土・褐色砂粒 ロック10%					
331	I 区 V17	中期平安?	I A	96×41	19	2／2 黒褐色土・褐色砂粒 ロック10%				N34W	
332	I 区 V17	中期平安?	I E	51×37	34	2／2 黒褐色土・褐色砂粒 ロック10%					
333	I 区 V17	中期平安?	I E	42×34	19	2／2 黒褐色土・褐色砂粒 ロック10%					
334	I 区 W18	中期平安?	I E	37×35	10	2／2 黑褐色土・褐色砂粒 ロック10%					

番号	地 区	位 置	時 期	平 面 形	断 面 形	規 格 (cm) 長径×短径	深さ	覆 土	遺 物		切り合 い周 囲	被 方 位	備 考	
									土 器 類	石 器 類				
335	I 区	V19	中期～後?	II	B	103×71	30	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N68E		
336	I 区	W19	中期～後?	II	A	119×61	19	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%				N45W		
340	I 区	V18	晚期?	II	B	118×100	28	複層			晚期 22	打斧1・調片1	N27E	
341	I 区	V18	晚期?	I	B	137×134	30	複層				SK329を切る	N29E	
342	I 区	U18	晚期?	E	A	143×117	20	複層					N 4 W	
343	I 区	W19	中期～後?	E	A	121×85	20	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			中期 2	打斧1・調片1	N70W 覆土中に石	
344	I 区	V19	中期～後?	I	A	106×98	19	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%					N 4 E	
345	I 区	W19	中期～後?	I	A	188×155	17	不明					N49E	
346	I 区	W23	中期?	II	A	143×62	20	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%				SK348に切られる	N25E	
347	I 区	W23	中期中葉	II	B	146×125	30	複層			中期中葉18	調片1	SK348に切られる	N47W
348	I 区	W23	中期?	I	B	76×80	9	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%				SK348に切る 346・347を切る	N43W	
349	I 区	W23	中期?	II	B	90×58	10	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%				SK348を切る	N86W	
350	I 区	X18	中期～後?	II	A	118×79	8	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%					N78W	
351	I 区	X19	中期～後?	II	E	54×43	15	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%						
352	I 区	X19	中期～後?	II	E	52×32	17	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%						
353	I 区	W19	中期～後?	II	A	138×102	11	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%					N32W	
354	I 区	V17	中期～後?	II	B	42×33	19	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%						
355	I 区	U17	中期中～後	I	B	72×70	17	2／2 黒褐色土・黃褐色ブロック10%						
356	I 区	V18	晚期?	II	B	128×98	30	複層					N62E	
360	I 区	V19	中期～後?	I	A	47×42	13	2／2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%						
361	I 区	U14	中期～後?	II	A	92×68	15	3／2 黒褐色土・白色砂粒多い						
362	I 区	V14	中期～後?	II	A	84×69	9	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
363	I 区	V14	中期～後?	I	A	56×53	7	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
373	I 区	U15	中期～後?	I	A	40×39	10	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
374	I 区	U15	中期～後?	II	A	54×47	8	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
376	I 区	V15	中期～後?	I	E	37×36	17	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
378	I 区	V15	中期～後?	II	A	52×76	8	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
379	I 区	V15	中期～後?	I	A	38×35	10	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
381	I 区	V15	中期～後?	II	A	59×48	20	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
382	I 区	V15	中期～後?	II	E	40×34	28	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
383	I 区	V15	中期～後?	II	B	60×56	46	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
384	I 区	V15	中期～後?	II	A	88×56	10	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
393	I 区	U16	中期～後	I	A	42×39	16	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
394	I 区	U16	中期～後	I	B	56×50	15	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
395	I 区	V16	中期～後	II	E	44×26	18	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
396	I 区	V16	中期～後	I	B	66×62	35	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
397	I 区	V16	中期～後	II	A	63×52	13	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
398	I 区	V16	中期～後	II	A	75×55	20	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
399	I 区	V16	中期～後	I	A	56×51	15	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						
400	I 区	V16	中期～後?	II	A	52×43	12	3／2 黑褐色土・白色砂粒多い						

番号	地 位 置	時 期	平 面 形	断 面 形	規 模 (cm) 長径×短径 深さ	覆 土	遺 物		切り合い面体	輪 方 位	備 考
							土 器 項	石 器 項			
401	I 区 V19	中層中～後?	II B	77×65	20	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N24W	
402	I 区 U19	中層中～後?	II E	34×27	24	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
403	I 区 U19	中層中～後?	I B	57×53	27	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
404	I 区 U20	中層中～後?	I B	59×56	30	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
405	I 区 V20	中層	I B	65×54	16	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%	中期 I			N29W	
406	I 区 V20	中層中～後?	II A	71×41	13	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N26W	
407	I 区 V20	中層中～後?	I E	60×57	19	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
412	I 区 W20	中層中～後?	I E	74×70	22	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
413	I 区 W21	中層中～後?	I A	129×128	13	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N51E	
414	I 区 W20	中層中～後?	I E	50×47	16	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
416	I 区 X20	中層中～後	I A	125×113	12	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%	中期中層 I			N35W	
417	I 区 X20	中層中～後?	I E	60×51	18	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
420	I 区 X21	中層中～後?	I B	63×57	14	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N47W	
424	I 区 X21	中層中～後?	I E	49×45	21	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
426	I 区 W21	中層中～後?	I E	57×53	21	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
428	I 区 V21	中層	II A	273×118	5	2／1 黑色土・白色砂粒 20%含	中期 I	SK168に切られる		N36E	
429	I 区 V21	中層中～後?	I B	65×53	15	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N10E	
431	I 区 W21	中層中～後?	II A	247×178	17	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%	廢灰堆 I	SK171に切られる		N26W	
434	I 区 X19	中層中～後?	II A	104×64	11	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N33W	覆土中に石
435	I 区 W20	中層中～後?	II A	88×72	9	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N29W	覆土中に石
436	I 区 U21	平安	I B	97×95	12	2／3 黄褐色沙質黄褐色土 シロッカ10%	灰陶器 I			N16E	
438	I 区 W18	中層中～後?	I E	43×42	20	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
439	I 区 W18	中層中～後?	II E	62×41	21	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
441	I 区 V18	晚期?	II B	159×87	27	塊體				N16E	
442	I 区 W18	中層中～後?	II B	88×48	11	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N4W	
443	I 区 W18	中層中～後?	II E	64×54	18	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
444	I 区 X19	中層中～後?	I E	39×34	14	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
445	I 区 X19	中層中～後?	E B	62×56	13	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N36E	
446	I 区 X19	中層中～後?	II E	47×34	14	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
447	I 区 W19	中層中～後?	II E	47×36	13	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
448	I 区 V20	中層中～後?	I A	35×37	10	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
449	I 区 V19	中層中～後?	I E	46×40	16	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
450	I 区 V20	中層中～後?	I E	47×42	17	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
451	I 区 U20	中層中～後?	I B	62×57	31	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N60W	
453	I 区 X19	中層中～後?	I B	73×82	24	2／2 黑褐色土・黃褐色 シロッカ10%		SK456と切合う		N75E	
454	I 区 W19	中層中～後?	II A	246×132	31	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%	鐵石皿 I	SF 4に切られる		N53W	覆土中に石
455	I 区 W19	中層中～後?	I E	47×34	15	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
456	I 区 W19	中層	I B	94×102	15	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%	中期 I	SK453と切合う		N75E	

第三章 原始時代の遺構と遺物

番号	地 位 區 位置	時 期	平 面 形	断 面 形	規 模 (cm) 長径×短径 深さ	覆 土	遺 物		切り合 い関係	輪 方 位	備 考
							土 器 類	石 器 類			
458	I 区 W19	中期～後?	I E	38×35	21	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
459	I 区 W19	中期中葉	II A	64×46	10	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%			中期中葉1	N45E	
460	I 区 W22	中期中～後?	I B	76×70	8	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N15W	
462	I 区 W22	中期中～後?	II E	51×35	13	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
463	I 区 X21	中期中～後?	I B	72×72	8	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%				N38W	
464	I 区 X21	中期中～後?	II E	51×41	22	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
465	I 区 X21	中期中～後?	II B	71×58	13	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%			鐵石組1・剥 片1	SK460を切る	N60W
466	I 区 X21	中期中	II B	80×68	20	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%			中期1		N65W 覆土中に石
467	I 区 W22	中期中～後?	II A	82×57	9	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					N54E 覆土中に石
469	I 区 X22	中期中～後?	II A	72×76	19	2／2 黒褐色土・褐色砂ブ ロック10%					N60E 覆土中に石
471	I 区 X22	中期中～後?	II B	91×70	20	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
472	I 区 X22	中期中～後?	I B	67×64	9	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
473	I 区 W21	中期中～後?	I B	99×96	23	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					SK467を切る N18W 覆土中に石
474	I 区 V22	中期中～後?	I B	105×97	22	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%			中期1		N61E
476	I 区 V22	中期中～後?	I B	105×96	19	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					N87E
477	I 区 V22	中期中～後?	II A	105×90	15	複層					N81W
478	I 区 X22	中期中～後?	I B	82×73	13	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					N72W
484	I 区 X25	前期末?	I B	80×80	38	2／1 黑色土					SB16に切られる N63W
485	I 区 X25	前期末?	I B	105×105	40	2／1 黑色土					SB16に切られる N37W
486	I 区 X25	前期末?	I B	139×133	77	複層			前期末2		SB16に切られる N68W
489	I 区 V20	中期中～後?	II E	45×32	16	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
491	I 区 W19	中期中～後?	II B	78×63	13	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%			前期末2	剥片1	N39W
492	I 区 W20	中期中葉	II A	174×157	14	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%			中期中葉6		SK537を切る N57W
493	I 区 W20	中期中～後?	II E	52×23	21	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
494	I 区 W20	中期中～後?	I E	44×42	38	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
495	I 区 W20	中期中～後?	I E	38×35	21	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
497	I 区 V21	中期中～後?	I E	36×35	16	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					SK473に切られる
498	I 区 W21	中期中～後?	I B	92×86	15	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					N32W
499	I 区 X21	中期中～後?	II E	52×33	18	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
500	I 区 X21	中期中～後?	I E	51×48	18	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
501	I 区 X21	中期中～後?	II E	65×57	34	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
506	I 区 X25	縄文	I E	53×52	35	2／2 黑褐色土・黃褐色ブ ロック10%					
507	I 区 W24	縄文	I B	101×94	14	2／2 黑褐色土・黃褐色ブ ロック10%					N37E
508	I 区 W24	縄文	I B	51×44	11	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					N43W
509	I 区 W25	縄文	I B	77×72	15	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					SB16に切られる N80W
510	I 区 W25	晚期?	II B	89×66	22	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					N75W
511	I 区 W26	晚期?	II B	96×76	24	2／2 黑褐色土・黃褐色ブ ロック10%					N58E
514	I 区 W24	縄文	I E	51×35	25	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%					
515	I 区 X24	縄文	II E	43×34	28	2／2 黑褐色土・黃褐色ブ ロック10%					
516	I 区 V24	晚期	I B	63×56	14	2／2 黑褐色土・褐色砂ブ ロック10%			晚期1		N12E

番号	地 位	時 期	平 面 形	直 横 (cm) 長径×短径 深さ	覆 土	遺 物		切り合い関係	整 方 位	備 考
						土 器 順	石 器 順			
517	I 区	V24	晚期?	II B	101×81 17	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			N52W	
518	I 区	W25	晚期?	II B	116×84 27	2/2 黒褐色土・黄褐色ブロック10%		SK219に切られる	N20E	
519	I 区	W24	純文	II E	40×32 24	2/2 黒褐色土・黄褐色ブロック10%				
520	I 区	V24	純文	II A	191×148 28	2/2 黒褐色土・黄褐色ブロック10%			N79E	
521	I 区	V25	晚期?	II B	156×120 27	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			N11W	
522	I 区	W25	晚期?	II A	79×77 19	2/2 黒褐色土・黄褐色ブロック10%			N46W	
523	I 区	W26	純文	II E	38×32 42	2/2 黒褐色土・黄褐色ブロック10%				
524	I 区	W27	中期～後	I E	40×37 37	2/2 黒褐色土・黄褐色ブロック10%				
525	I 区	W22	中期～後?	I E	65×62 22	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%				
527	I 区	V21	中期～後?	I B	43×40 41	複層	打斧6本埋納		N31W	
529	I 区	V18	純文	II A	146×182 36	3/3 塗褐色土		SK341に切られる	N83E	
530	I 区	V18	純文	II A	196×144 29	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			N23W	
531	I 区	V18	純文	II B	134×117 10	3/3 塗褐色土		SK340に切られる	N80E	
532	I 区	V18	晚期?	II A	104×69 31	3/3 塗褐色土			N75W	
533	I 区	V18	中期～後?	I A	57×53 16	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			N46E	
534	I 区	V17	中期～後?	I B	45×41 8	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			N2E	
535	I 区	V17	中期～後?	II A	83×64 9	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			N7E	
536	I 区	W20	純文	II B	79×68 23	3/3 塗褐色土			N35W	
537	I 区	W20	純文	I B	76×74 30	3/3 塗褐色土		SK492に切られる	N31W	
538	I 区	X19	中期～後?	I B	53×46 36	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%			N54E	覆土中に石
539	I 区	V27	純文	B	149×- 80	複層	平面は破壊			
540	I 区	X21	中期～後?	I E	46×40 16	2/2 黒褐色土・褐色砂ブロック10%		SK466に切られる		
541	I 区	W20	中期～後?	I E	45×47 15	2/2 黑褐色土・褐色砂ブロック10%				
542	I 区	W20	中期～後?	E	63×50 16	2/2 黑褐色土・褐色砂ブロック10%				
548	I 区	W22	後期	II B	66×44 14	2/2 黑褐色土・褐色砂ブロック10%	後期 5		N40E	
549	I 区	W22	中期～後?	E	55×42 22	2/2 黑褐色土・褐色砂ブロック10%				
552	I 区	W25	純文	II E	45×32 26	2/2 黑褐色土・黄褐色ブロック10%				
553	I 区	W26	純文	II E	62×31 14	2/2 黑褐色土・黄褐色ブロック10%				
558	I 区	W26	純文	II E	42×25 20	2/2 黑褐色土・黄褐色ブロック10%				
559	I 区	W24	純文	E B	89×75 41	3/3 塗褐色土・白色砂粒・赤色粒				
560	I 区	W25	晚期?	I B	61×57 25	3/3 塗褐色土・白色砂粒・赤色粒			N4E	上部に石
561	I 区	V27	平安	I E	42×37 20	2/1 黑褐色土	土器器皿1			
562	I 区	V27	平安?	I E	52×47 13	2/1 黑褐色土				
565	I 区	V27	純文	I E	42×37 31	2/2 黑褐色土・黄褐色ブロック10%				
566	I 区	W25	純文	I B	35×32 6	2/2 黑褐色土・黄褐色ブロック10%			N3E	上部に石
567	I 区	W25	純文	I E	45×41 13	2/2 黑褐色土・黄褐色ブロック10%				
569	I 区	V23	純文	I E	90×74 28	3/1 黑褐色土・黄褐色土 ブロック10%				

注：縦軸上の番号により、長径と短径の和が70cm以下のSK、切り合い等により掘根・形態が不明確なSKについては、一覧表から削除してある。詳細は、本文ならびに時期別・形態別分布図を参照。

4) 焼土跡

SF 1 (第24図、図版7)

位置 上位段丘面の先端部に近いII区、M-4グリッドに位置する。SF 2・6が近接して分布する。

形状 長径295cm、短径190cmの不整な梢円形の範囲に厚さ20cmにわたって分布する。出土層位は基本土層BのIV層に対比される黒色土中である。2ヶ所の被熱面を中心に焼土が広がっており、掘り込み等は認められなかった。

出土遺物 認められなかった。

時期 確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性を考えられるが、正確な時期は不明である。

SF 2 (第24図)

位置 上位段丘面の先端部に近いII区、M-3グリッドに位置する。SF 1・6が近接して分布する。

形状 長径340cm以上の中空の不整形の範囲にわたって分布する。出土層位は基本土層BのIV層に対比される黒色土中である。3ヶ所の被熱面を中心に焼土が広がっており、調査時の所見によれば西端部付近で検出された被熱面には掘り込みを伴っていたと考えられる。

出土遺物 認められなかった。

時期 確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性を考えられるが、正確な時期は不明である。

SF 3 (第24図)

位置 中位段丘面の上部平坦面のI区、O-18グリッドに位置する。下部より遺物集中区SQ 1が検出されている。

形状 長径105cm、短径70cmの不整な梢円形の範囲に、厚さ10cmにわたって分布する。出土層位は基本土層BのIV層である。調査時の層位記録が曖昧であり、性格およびSQ 1との関係は不明である。

出土遺物 認められなかった。

時期 確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して、縄文時代のなかでも中期中葉以降に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SF 4 (第24図、図版7)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-20グリッドに位置する。掘立柱建物跡ST 2のほぼ軸線上に分布しており、やや位置をずらして下部より土坑SK454が検出されている。

形状 径約35cmの梢円形の範囲にわたって分布する。出土層位は基本土層CのⅢ層である。

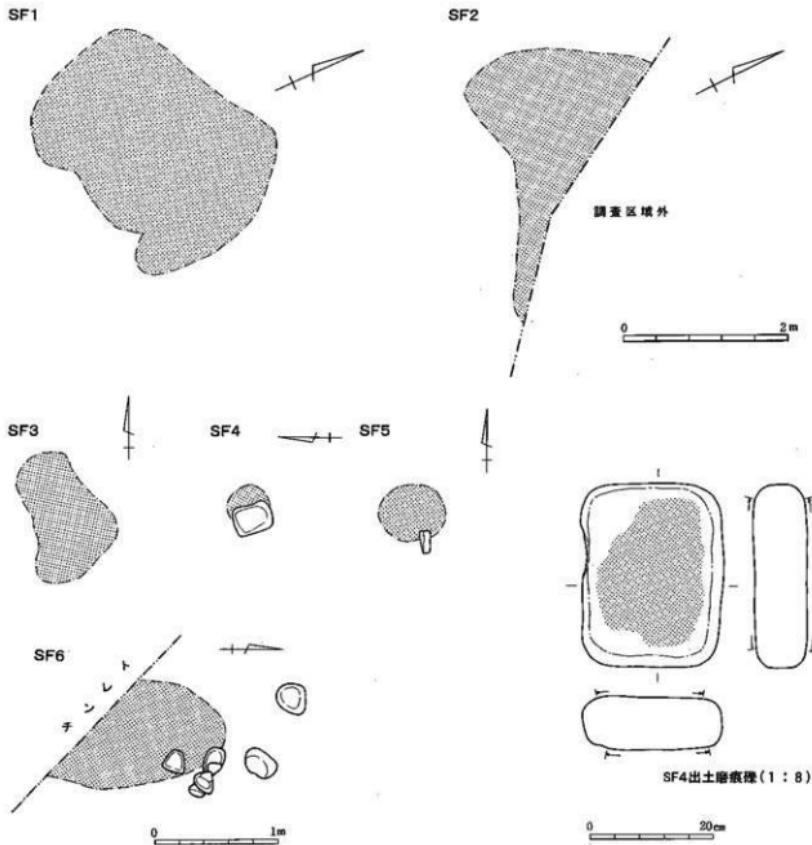
出土遺物 焼土面の直上より長さ32cm、幅23cmの磨耗痕のある砾1点が出土した。

時期 確認面および周辺における土器や土坑群の出土状況などから判断して、縄文時代中期中葉～後葉の時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SF 5 (第24図)

位置 上位段丘面の東側緩斜面のIV区、B-14グリッドに位置する。

形状 長径約55cm、短径48cmの梢円形の範囲に分布する。出土層位は基本土層AのⅢ層である。焼土面に接して砾が直立するように分布する。



第24図 SF実測図、出土磨痕図

出土遺物 上面付近から灰釉陶器の底部片1点（虎渓山1号窯～丸石2号窯式）が出土した。

時期 周辺出土の遺物から平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SF 6 (第24図)

位置 上位段丘面の先端部に近いII区、L-7グリッドに位置する。SF 1・2が近接して分布する。

形状 南側をトレンチにより破壊されているが、長径150cm以上、短径約90cmの楕円形の範囲に厚さ12cmにわたって分布する。出土層位は基本土層BのIV層に対比される黒色土中である。焼土面からわずかに浮いた状態で、径15~25cmほどの砾がまとまって出土した。

出土遺物 認められなかった。

時期 確認面や周辺における土器の出土状況などから判断して縄文時代に位置づけられる可能性が考えら

れるが、正確な時期は不明である。

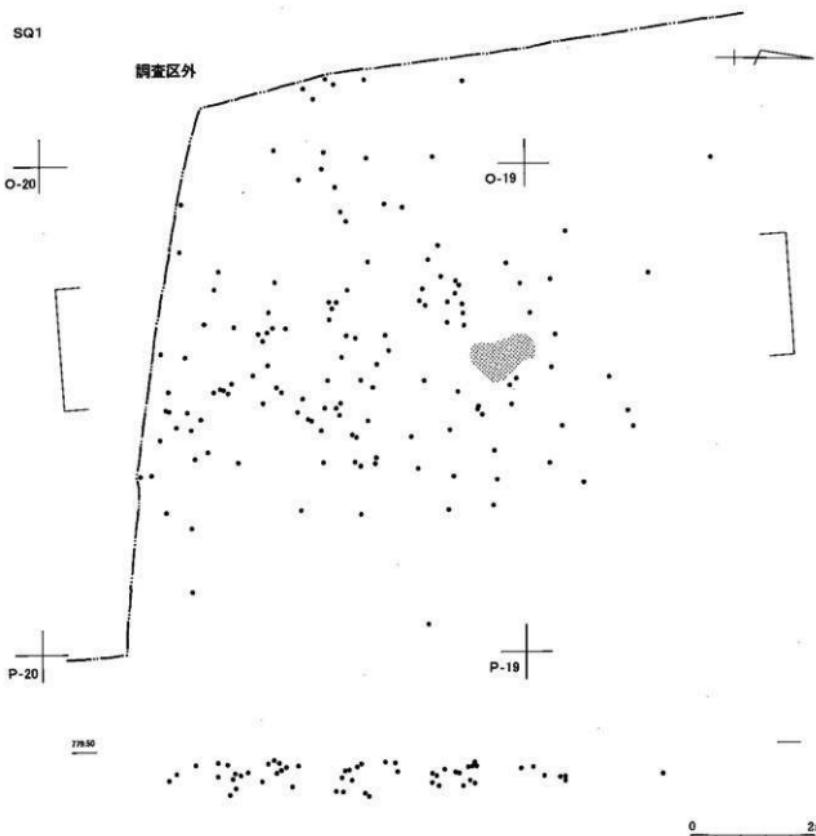
5) 遺物集中区

SQ 1 (第25図)

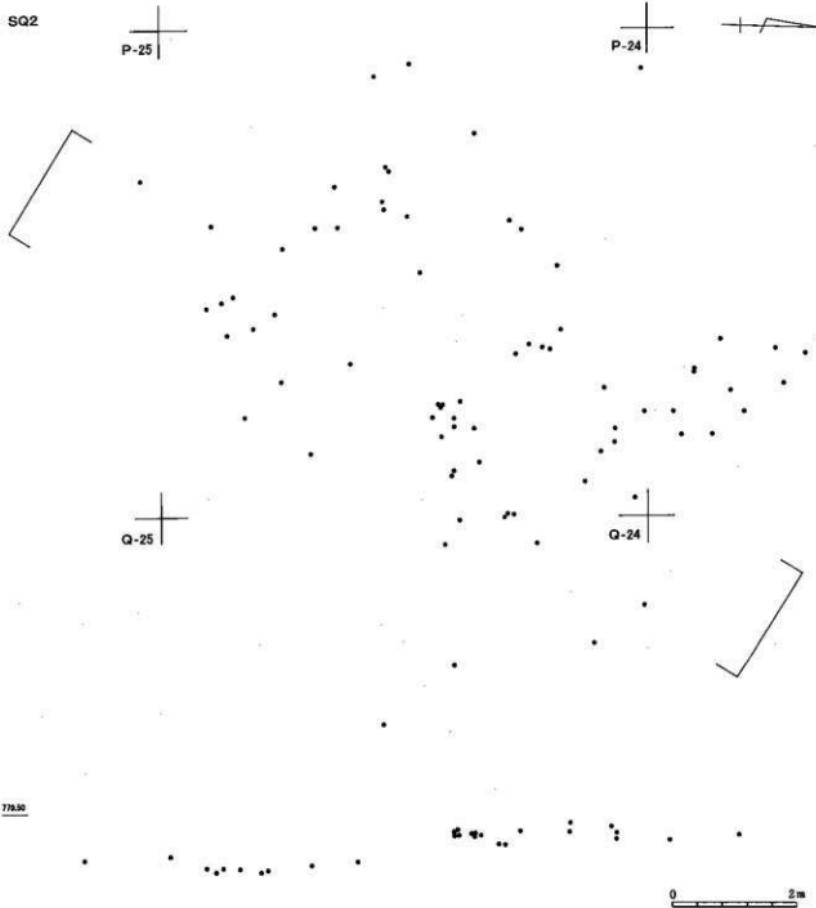
位置 中位段丘面の上部平坦面の山側谷地形部、I 区、O-19グリッドに位置する。中央部上面付近に SF 3 が重複して分布する。

形状 長径550cm、短径400cmほどの不整な梢円形の範囲に、厚さ25cmにわたって311点の遺物がまとった分布をみせる。出土層位は土層BのIV層～V層上部である。集落から離れた西側谷地形部に位置しており、遺物廃棄場所であった可能性が強い。SF 3 との関係については調査記録が曖昧なため不明。

遺物構成 純文時代中期中葉末段階の土器を主体に前期末葉の土器がわずかに含まれる（第39・40図226）



第25図 SQ 1 実測図



第26図 SQ 2 実測図

～246）。大部分が破片での出土であり、完形に近い例はまったくみられない。その他、打製石斧4点、両極石器1点、石錐2点、石鎌1点、石匙1点、刃器などを伴う。

時期 縄文時代中期中葉でも最末段階の所産と考えるのが妥当であるようと思われる。

SQ 2 (第26図)

位置 中位段丘面の上部平坦面山側の谷地形部、I区、P-23グリッドに位置する。

形状 長径570cm、短径550cmほどの不整な方形の範囲に、厚さ30cmにわたって222点の遺物がややまとまつた分布をみせる。出土層位は土層BのIV層であり、湧水が認められる段丘崖下へ向かう南東側に下降する

ように分布する点が注意される。SQ 1に比べると集落に近接した場所に位置するが、地形的にみて同じく遺物廃棄場所であった可能性が強い。また、湧水との関連も考慮される。

遺物構成 土器はいずれも縄文時代前期末葉のものであり、ほぼすべてが小破片で占められている。在地的な土器が主体をなすものの、関西系の鷹島式に比定される土器が含まれており、土器の並行関係や地域間交流を考えるうえで注目される（第32図24、第40-41図247-302）。これら土器に伴って、打製石斧1点、削器1点、刃器3点などが出土している（第63図373・376-380）。

時期 縄文時代前期末葉の時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

6) 性格不明遺構

SX 1-人為的な掘削痕跡（第27・28図、図版7）

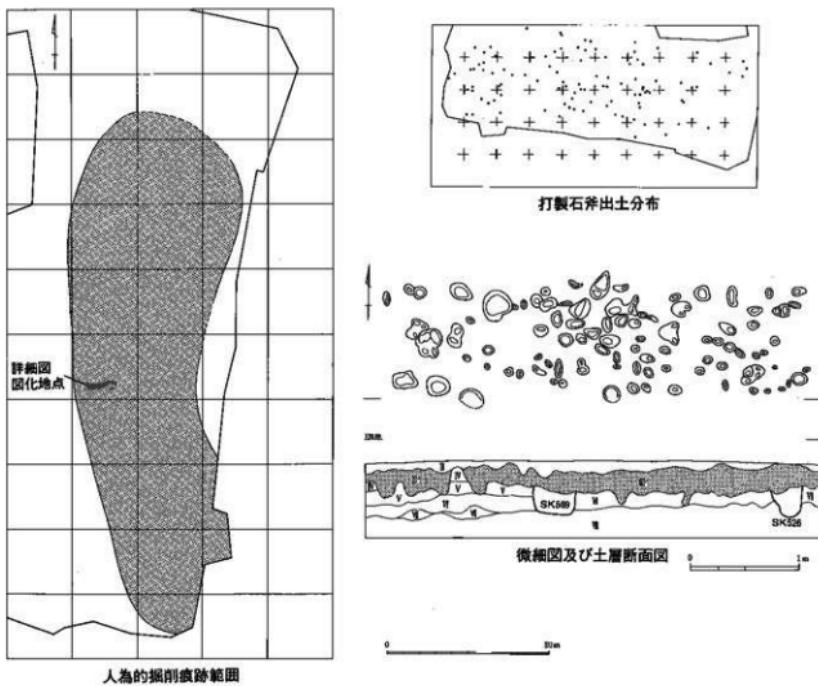
位置 中位段丘の東側、下段平坦面とした地区の西南寄りV-X-19-27グリッドにかけて存在する。

検出 I区南東部に相当する谷状にやや低まった箇所に、南北約65m、東西約20mの弧状に広がる範囲として検出された。同範囲として調査した面積は推定部分も含めて約100m²を測るが、北東および南東の弧状端部は調査区域外へ延びている可能性が高く、実面積はさらにひろがると考えられる。平面的な観察所見によれば、基本層序CのⅢ層に対応する層位の擾乱土の広がりとして認められ、V層上面付近での下部調査では、不規則に連続する不整形な掘り込みが部分的に記録されている。また、土層断面図からは、基本層序CのIV層およびV・VI層の上部を擾乱して掘り込まれた土層=Ⅲ層（10Y R 3/1・黒褐色土。しまり悪く、II層土ブロックおよびVI-VII層土を母材とすると推定される黄褐色土ブロックが混合する。）の堆積が厚さ20-30cmにわたって確認できる。上下層が混交し、部分的にIV層が残存する状況などは、自然的要因による擾乱結果とするよりは、人為的営為によって形成された痕跡である可能性を示している。

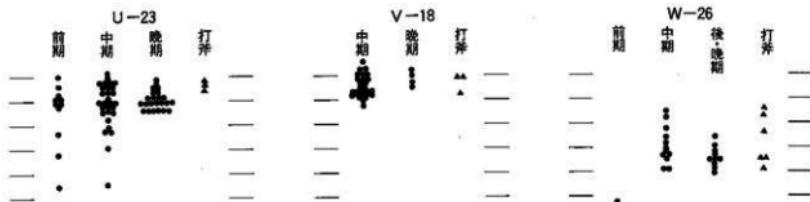
所見 微視的で詳細な調査記録に乏しく断片的な所見が残されているのみであり、断定的な判断を下すには至らないものの、上記した検出状況などからすれば、本址が人為的な掘削行為の結果として残された可能性は高いと思われる。その根拠の一つを提供する在り方として、打製石斧の出土傾向が注目される。図中に示したとおり、打製石斧は本址の確認範囲周辺にはほぼ収斂される集中的な出土分布を示し、同石器の土掘り具としての機能的侧面を合わせて考慮するならば、打製石斧を用いた道具によって掘削された蓋然性がまず考慮される。また、同区域には細片化した土器しか分布せず、石器類の出土も打製石斧の128点に対して石器1点、磨石・凹石7点、石皿小片1点のみと打製石斧が圧倒的な出土比率を占め、単なる包含層とは考え難い選択性と特異性が認められることも、その見方を補強するデータを提供している。

本址の性格については、自然科学等に基づく分析または客観的な記録を欠いており、詳細は不明と言わざるをえないが、集落形成に伴う開墾・整地の痕跡などである可能性が指摘できるとともに、堅穴住居跡など主要な遺構が検出されない居住域の外縁部という「場」、さらに土壤が厚く乾燥度が比較的弱い谷状低位部に重なるように広がっている点に目を向けるならば、食用またはその他有用植物の生産に係る管理・採取、あるいは栽培痕跡である可能性についても排除しないと考えられる。

時期 平安時代の遺物を包含する上部層に覆われていることから縄文時代の所産と判断される。また、縄文時代のなかでも前期末葉の遺物包含層を掘り込んでいることから、消去法的な推測ながらも同期以降、晩期までの範囲に限定することが出来そうである。さらに分布範囲内の遺物垂直分布傾向（第28図）によれば、中期中葉以前の遺物が垂直方向に広く拡散しているのに対して、後・晩期の遺物が中期のものと狭いレンジを共有しつつも水平方向の位置を比較的保っていることが看取でき、この点からも中期中葉～後・晩期に形成された可能性が考えられる。時間幅をさらに限定することには一定の困難が伴うが、中期中葉～後葉と推定された土坑群および後葉の所産と考えられる掘立柱建物群との重複、打製石斧の形態的



第27図 S X 1 分布範囲（推定含む）及び微細図（部分）



第28図 時期別遺物垂直分布図

特徴ならびに分布特性、すなわち I 区北西部に偏在して出土し縄文時代晚期～弥生時代にかけての石器と分析された身厚・幅広の安山岩製撥型打製石斧（第59・71図参照）が本址周辺では出土しておらず、中期の造構に伴出したものと形態と石材を同じくする打製石斧が分布していたことを考慮し、中期後葉以降～後期、隣接して造構が出土した晚期中葉頃までの時間幅を推定しておきたい。

第2節 遺 物

1) 土 器

以下、抽出・図化した個体について、出土遺構および区域別に個別的な説明を記す。

SB8 (第29図1~4、第33図25~34)

1は床面付近から出土した深鉢形土器。口縁部に1単位のカリ首状の中空突起と3単位のヒダ状突起を有し、胴上半は横位の、下半部は縦位構成のモチーフを描く。眼鏡状突起を伴う隆帯文の脇に連続爪形文を多用するほか、玉抱き三叉文や波状沈線文、縦・横位の短沈線充填文などが付される。2は胎土に金雲母をやや多く含み、暗灰褐色を呈する薄手・堅致な作りの深鉢形土器。横位にめぐる圧痕隆帯により区画された口縁下および胴中位にはペン先状工具による連続刺突文が多用され、胴下半には半裁竹管状工具による並行沈線で平出Ⅲ類A系土器に近似したモチーフが描かれる。3・4はともに覆土からの出土であるが、後者は薄手・堅致の器体や文様・モチーフの特徴などからいわゆる下伊那型樹形文土器と考えられる。25~27は1と同種の破片。30は横位区画内に斜行沈線文を充填する個体。山形の波状口縁をなす33と薄手・堅致の作りで胴括れ部に「V」字状と考えられるキザミ目隆帯文が付された34は、4と同様に井戸尻Ⅲ式でも新しい段階の土器であり、他の伴出遺物と時期を大きく異なる。

SB9 (第29図5・6、第33・34図35~93)

5・6はそれぞれ炉1、炉2の炉体として用いられていた土器。両者はやや張り出す底部にキザミ目をめぐらす点で共通するが、胎土・整形・施文などに特徴的な差異も認められる。前者は胎土に石英粗粒を多く含み、明るい茶褐色を呈する。内面に指頭状圧痕が著しく残り、外面には単節斜繩文が比較的硬くなつた器面に浅くやや粗雑に施文される。後者は胎土に白色砂粒などを多く含み、色調は暗くすんだ灰褐色を呈する。前者に比べてナデ調整が進み、外面には比較的軟らかな状態の器面に異なる原体でやや粗雑な羽状繩文が深めに施される。北白川下層Ⅲ式に並行する東海系および関西系土器と考えられる。

35は重弧状の結節浮線文が施された個体。36・37は半裁竹管状工具による条線文を地文としてヘラ切り浮線文などが貼付されるもの。38~47は同様の条線地文を矢羽状などに施し、ボタン状の貼付け文や半裁竹管状工具による平行沈線文が幾何学状に付加される。48~55は半裁竹管状工具による平行半隆起線で重弧状・対弧状のモチーフを描く一群。56にはさらに平行半隆起線に直行するヘラ切り施文が加えられる。57~59は同一個体と推定される土器であり、隆帯により加飾された山形の口縁を有する。鉗状に肥厚した口縁下を三角形印刻文を伴う結節沈線文で埋め、胴部には四線に縁取られた平行半隆起線文が施される。

60~69は羽状あるいは斜状繩文が施文されるもので、胎土・調整などの特徴から6と同種に数えられる。また、やや薄手の作りで斜繩文を主とする78~93は、同様の特徴から5に類する一群に含められる。70・71は繩文を地文として、72は地文を伴わずに結節浮線文が施されるもの。口縁端部に繩文施文が及ぶ73は、口縁下に数条めぐらした粘土紐を偏平に潰すように繩文が施される。1および78~93などと同種の口縁部破片と考えられる。74・77は繩文を地文として、75・76は素文上に粘土紐が数条単位で貼付されるもの。剥落した77は不明であるが、74にはその上部に繩文が施文される。口縁端部にはキザミ目がめぐる74・76・77は、胎土・調整などの特徴から6などと同種の口縁部破片と考えられる。ひとときわ細い粘土紐が用いられた75は、その上部が押圧されて弱いミミズ膚れ状を呈する。

SB10 (第34図94~103)

94は粗い条線文を地文として重疊する曲線的な結節浮線文が施された個体であり、大きく波状の口縁を

なす。95・96は同様の地文のうえに半裁竹管状工具による平行半隆起線文やボタン状の貼付けが行われるもの。97は上部に矢羽状、下部に「X」字状の平行沈線文を地文としたうえに、縦・横位のヘラ切り浮線文とボタン状の貼付け文を加える。98～103は半裁竹管状工具による平行半隆起線で文様が描かれる一群であり、103には横帯する矢羽状モチーフが認められる。

SB11 (第35図104～119)

104～112は半裁竹管状工具による平行半隆起線による施文を特徴とするもの。104は山形の高い波状口縁をなし、波頂部に平行する山形のモチーフなどが描かれる。106～110などは弧状・環状モチーフなどの一部と考えられる。111・112は同一個体。端部を外側に肥厚させた大形波状口縁の土器であり、太めの半裁竹管を用いた平行半隆起線文を深く明瞭に施文するとともに、抉られたような凹線を連弧状などに加えている。

113はやや薄手の作りの土器であり、単節斜縄文が粗く施文される。破片上部が鋭く屈曲し鉢形を呈する可能性もあるが、全体形状は不明である。胎土・焼成などの特徴はSB9～5などに類似する。114は単節羽状縄文の地文上にボタン状の貼付けが付加される。115・116は浅く不明瞭な縄文を地文として、ソーメン状の細い粘土紐を貼り付けるもの。粘土紐の上部は連続する押圧により弱いミズ膚れ状を呈する。117～119は縄文のみ確認できるものであり、斜縄文を丁寧に横帯施文している。胎土・焼成などの特徴から104～112などに伴う縄文施文土器と考えられ、0段多条の施文原体を用いている可能性が高い。

SB12 (第35図120～123)

120は半裁竹管状工具による条線文を地文として、重弧状もしくは双環状をなす結節浮線文が施されるもの。121は半裁竹管状工具による平行半隆起線が空白部を残して施文される。122・123は縄文施文のみ確認できる胸部破片。

SB14 (第30～32図7～22、第35～37図124～172)

7は屈曲してやや膨らみをもつ口縁下に三叉文などを伴う文様帶を有する。無文部を残す胴部には2条単位の隆帯を垂下させる。8・9は波状口縁櫛形文土器に分類される個体であり、櫛形文が付けられた10・11・20はこれらと同種の胴～底部と考えられる。12～15は粘土紐により「U」字状あるいは重弧状のモチーフが描かれる一群であり、キャリバー状に括れる胴中位には櫛形文を伴う。18は口縁下を無文、同部を縄文施文とする深鉢形土器であり、頸部に波状隆帯文を1条めぐらす。胎土に金雲母などを多く含み、唐草文系土器群の初期に特徴的に組成する土器の一つである。21は浅鉢形土器の底部破片であり、内面に赤彩が残る。やや厚くこびり付いた様子から、塗彩されたものではなくパレット的な使用が推定される。22は良く精製された白味を帯びた胎土を有し、丁寧な器面調整が加えられている。口縁端部の文様などを含め、北陸系の鉢形土器と考えられる。

124～129は混入品と考えられる一群であり、本址の時期に先行する。124は波状沈線文や連続刺突文などが用いられ、中期前葉の斜行沈線文土器に対比されよう。125～129はキャタピラ文が多用されるもので、中期中葉藤内I式段階の土器に位置づけられる。130～137は平縁あるいは山形突起を有する口縁部破片などであり、口縁下に横帯する文様帶が施されると考えられる。中期中葉井戸尻III式の特徴を色濃くとどめている。138・139は口縁下に施された刺突文を特徴とするもの。140・141は円筒状の器形を呈すると推定される土器であり、器面を半裁竹管による縦位平行沈線文で埋める。142～150は波状口縁櫛形文土器に含まれると考えられる一群。8・9と同様、波頂部が丸みを帯びる点に特徴をもつ。151～157は口縁下に縦位あるいは梯子状に粘土紐を貼り付けたもので、12～15と同種の土器に比定される。158は突起状の結節部をもつ3本1組の隆帯文を垂下させ、器面を半裁竹管による縦位平行沈線文で埋める土器であり、中期後葉へ継続する要素を備えている。162・163は縄文施文を特徴とする粗製的な土器と考えられる。

164~167は関西系船元式土器との関連が推定される土器。164は肥厚した波状の口縁を有するもので、条線文を地文として細いキザミ目隆帯区画や爪形状の刺突文が施される。165~167は継位に施された細線隆帯文間に、歯数3本ほどの櫛齒状工具による条線文が加えられる。168~171は半裁竹管状工具による断面カマボコ状の半隆起線でモチーフが描かれる。胎土・調整などの特徴が23と共に通し、北陸系の土器と推定される。172は口縁下に渦巻き隆帯文をもち、中期後葉の在地化した加曾利E系土器と思われる。

SB22 (第37図173~177)

173は横帯する三角形区画文と隆帯脇への三角状連続刺突文施文を特徴とする胴部破片。174の隆帯脇にはキヤタピラ文が見られる。175~177は半裁竹管状工具による平行沈線文でモチーフが描かれる。文様および薄手・堅致の作り、胎土の特徴などから平出Ⅲ類A土器に比定される。

SB23 (第32図23、第37図178~183)

23は床面から出土した屈曲部に偏平な押圧隆帯をめぐらす浅鉢形土器。178は緩やかな波状口縁をなし、口縁下に連弧状と思われる隆帯文や小さな円形刺突文などを施す。179は頸部に押圧隆帯をめぐらす繩文施文の土器。182・183は平出Ⅲ類A土器に比定される。

SB25 (第38図184~188)

184~186は同一個体。単節斜繩文を地文として、押圧隆帯などによる区画とそれらに沿う三叉文を伴う沈線でモチーフを構成する。187はパネル状の区画文が施された胴部破片。188は条線施文の土器。中期中葉藤内式土器の一群であろう。

ST 4 (第38図189)

189は突起状にせり上がる腕骨文を伴う3本1組の隆帯文を垂下させ、地文に綾杉状沈線文を施文する土器。中期後葉唐草文系土器に比定される。

SK出土土器 (第38・39図190~225)

190は半裁竹管状工具による平行半隆起線で文様が描かれた波状の口縁部破片。191は単節斜繩文が施された胴部破片。ともに前期末葉の土器と考えられる。

192・193・195は半裁竹管状工具による平行半隆起線で、羽状あるいは弧状・レンズ状などのモチーフが描かれるもの。194は78~93などに類似する繩文施文土器。すべて前期末葉の土器と考えられる。

196・197も半裁竹管状工具による平行半隆起線で帶状あるいは三角状の文様が描かれるものであるが、部分的に空白部を残して施文する点に特徴を有する。ともに前期末葉の土器と考えられる。

198・199は同一個体。後者の頸部には偏平な粘土紐が1条めぐり、上部へ繩文が施文される。前者には輪積み痕が顯著に残り、撲りの太い無節斜繩文が粗く施文される。中期前~中葉の土器であろう。

200は2個1対の小突起をもつ平線の土器であり、弧状および帯状の沈線文間に列点状刺突文が施される。胴部には入組み状の沈線文が施される可能性が考えられるが、小破片のため確認には至らない。胎土に粗い白色砂粒を多く含み、器面はナデ調整にとまる。201は三叉文を取り入れた曲線的な沈線モチーフと磨消し繩文の手法を特徴とする胴部破片。明茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。202~205は深鉢および鉢形土器の無文胴部破片。202には継位の擦痕が残るが、横方向の弱いミガキが加えられた205など外面を中心として丁寧な器面調整が行われる。胎土に石英や雲母など鉱物質に富む砂粒を含み、全体に硬質な作りの土器である。200・201の文様要素などから、これらは晩期前~中葉の土器と考えられる。

206は胴中位にキザミ目隆帯による櫛形文をもつ深鉢形土器。207~208は同種の口縁部破片と推定されるもの。文様・モチーフの特徴などから、中期中葉のなかでもその最末期の土器に比定される。

209は継位沈線文が引かれた胴部破片であり、中期中葉の土器と考えられる。210は無文の胴部破片。胎土・調整などの特徴から、中期中葉の土器と推定される。211は内溝する無文の口縁部破片であり、中期

中葉でも新しい段階の土器と思われる。212は丸く張り出す中空突起であり、SB 8-1とはほぼ同時期の個体と考えられる。213は表面の剥落が著しく詳細は不明であるが、中期の土器の一部と思われる。

214は単節縄文を地文として、結節状の突帯文および棒状工具による押圧突帯文が施されるもの。器厚5mmと薄手の作りであり、内面には横方向の丁寧なナデづぶし調整が行われている。215は半裁竹管状工具による平行半隆起線文を空白部を残して施文するもの。ともに前期末葉の土器である。

216は外反する口縁下を無文とし、頸部にめぐらした数条の沈線間に列点状刺突文を加える。胎土に川砂様の粗砂を含み、色調は明褐色。外面の一部に赤色塗彩の痕跡が残る。施文の特徴から、200と同時期にあたる晩期前～中葉の土器と考えられる。217は78などと同じ前期末葉の土器で、混入であろう。

218は口縁端部に連続爪形文がめぐる土器。219は隆底脇にベン先状工具による楔形の連続刺突文を施す。220の底部破片を含め、中期中葉でもSB 8出土土器の主体をなす部分と同時期のものであろう。

221～225は同一個体。朝顔形に開く器形の深鉢と考えられ、口縁に小突起をもつ。突起下に円形刺突文、口縁下に1条の沈線を施し、底部にはキザミ目隆帯文と沈線文を継位構成に施文する。内面に横方向の丁寧なナデづぶし調整が行われ、比較的堅致な作り。後期前半、堀之内1式に並行する土器であろう。

SQ 1 (第39・40図226～246)

226は半裁竹管状工具による平行半隆起線文を空白部を残して施文する。227は肥厚した口縁下を無文帶とし、以下に横および波状に結節浮線文を施すもの。228は外面を無文とし、外反する口縁内面に3条の結節浮線文をめぐらす。229は単節斜縄文を地文として、3条単位の結節浮線文を垂下させる底部破片。これらは前期末葉に比定される土器群であり、本址においては混入品と考えられる。

230・231は口縁下に横帯する文様を有すると推定される土器。232・233は波状口縁菱形文土器の一部と考えられるもの、234～237は口縁下に細い粘土紐を弧状などに貼付するもので、それぞれSB 8-8・9、同-12などに対比される。続く238・239はこれらの胴部破片であろう。241は外反する無文の口縁部と半裁竹管による継位・横位の梯子状モチーフを特徴とする円筒状の胴部を有する。240・242も同種の土器であろう。243は継位に施文された沈線文の一部に「ハ」の字状などの刺突文を加えるものであり、施文手法や石英などの鉱物質に富む胎土の特徴から、焼町類型に連なる系統の土器と考えられる。244は棒状工具による円形刺突文を満たした器面に、三角形連続刺突文を沿わせた隆底懸垂文が付される。245・246は同一個体の土器と推定され、縄文を地文として列点文および継・横位の沈線文が施される。胎土・焼成の特徴などから美濃地方の土器と考えられ、中期中葉でも最も新しい段階の土器群である。

SQ 2 (第32図24、第40・41図247～302)

24は上げ底をなす底部の5箇所が突出し、各辺が内湾する五角形を呈する深鉢形土器。器面には下端部を除いて0段多条の縄文を幅広の条が継位となるよう密接施文する。さらに底部の突出部から胴上部へ向かって「V」字形に白色粘土を塗布し、その上部に縄文を押捺施文している。外面明茶褐色、内面くすんだ灰褐色を呈し、胎土に粗い植物纖維と粗砂を多く含む。関西系鷹島式に比定される土器であろう。

247・248は肋骨状モチーフが描かれるもので、後者の中軸には2条のキザミ目隆線が垂下する。249は平行沈線を地文として棒状浮文を伴う。250～261は半裁竹管状工具による横～斜位の平行沈線を地文とするもので、250～253にはヘラ切り浮線文が、254には結節浮線文が貼付される。254・256・257にはボタン状貼付け文が付加される。263～266には半裁竹管状工具による条線を地文として、結節浮線文が環状あるいは三角状に施文される。267～282は半裁竹管状工具による平行半隆起線文でモチーフを描く一群。「X」字状あるいは双環状・レンズ状など形成し、279・280など空白部を効果的に配する個体もある。267～269・273は工具の幅が狭く施文が浅い点で他と区別され、文様にも画一性を欠くなど共通する特徴をもつ。

283～286・288～291は文様要素として抉られたような凹線文を多用するもの。283・287には結節状に押

し引かれた半隆起線文を伴う。292~294は太い結節浮線文を特徴とするもの。292は内面の口縁上端部にも1条がめぐり、293は単節繩文を地文とする。294には半裁竹管状工具による平行沈線文が伴うようであるが、小破片のため断定には至らない。295は繩文を地文として微隆起状の隆起線を横位多条にめぐらす個体。明るい褐色を呈し、器厚4~5mmと薄手の作りである。296~302は繩文施文の土器であり、無節の301を除いてはすべて単節繩文を用いる。総じて薄手の作りの個体が多い。

遺構外出土土器（第41~44図303~419）

前期末葉 303~307は半裁竹管状工具による平行沈線を地文とし、303にはヘラ切り隆線、304・305・307にはヘラ切り浮線文、306には結節浮線文とボタン状貼付け文が伴う。308~311はやや浅く粗い平行半隆起線文で、斜行あるいは矢羽状などのモチーフを描く。312は平行半隆起線文間に深い抉り状の凹線を伴う口縁部破片。313は鈸のように張り出した口縁上部に三角形印刻文と結節沈線文を配する土器。314・315にはそれぞれ結節沈線文と押し引き平行沈線文が施される。316・317は繩文を地文として、関西系のいわゆる特殊突帯文に近似する浮線文が弧状などに配されたもの。前者の括れた頭部には刺突文がめぐる。318・319の口縁下には押圧によってミミズ腫れ状となった浮線文が多条にめぐる。320は尖頭状に突出した口縁の波頂部であり、半裁竹管状工具による平行半隆起線文とともにソーメン状・ビーズ状の貼付け文が付加される。

中期初頭 321・322は繩文を地文として、やや膨らみをもつ口縁部に三叉文や重弧状の沈線文を横位に連ねたモチーフを描き、円筒状の胴部に隆帯を垂下させる深鉢形土器。323も同様の土器と考えられるが、口縁下に繩文を地文とせず、重三角状の沈線文と印刻文が隆帯区画内に施される。324は口唇部に1条の沈線をめぐらし、内・外面の口縁下にそれぞれ横位・縦位の押し引き文が施されるもので、次期への過渡的要素をみせる。354・355はやや幅広の平行沈線文とその間に充填される「C」字状の連続爪形文、抉り状の三叉文を特徴とし、東海系の北裏CⅡ式土器に比定されると考えられる。

中期前葉 325~338は角頭状の押引き文を多用する一群。すべて小破片によって占められており全体の文様構成などが窺える個体は少ないが、334・335には横位構成の楕円区画がみられる。337・338は「く」の字状に内傾する口縁部形態を呈し、浅鉢形土器と考えられる。総じてやや幅広の施文具を用いる個体が多く認められるものの、334・335・337・338は細目の工具による施文がなされる。340・341は横帶する隆帯および沈線区画内に斜行沈線文を充填施文するもの。342には同様の区画内に連続突き刺し文列が充填される。344~346は平出Ⅲ類A系土器。繩文を地文とし、多款竹管状工具による平行沈線でモチーフが描かれる。胎土に石英粗粒を多く含むなど特徴的な作りを呈する。

中期中葉 347・348は前出の340・341と同様の文様構成をとりつつも、それらに後出する土器と考えられる。349・350は同一個体。繩文を地文として縦位構成の曲線的なパネル文を描き、要所に三叉状の抉りを配する。胎土に白色砂粒を多く含む。351は胴部を縦位構成の区画文で埋め、区画の内側にクサビ状の刺突を連続施文するもの。352は隆帯脇に連続刺突文が施されたもので、SB8-1と同時期の所産と考えられる。353は連続爪形文が加えられた隆帯および半隆起線で区画された内部に、繩文とクサビ状の刺突文がみられる土器。356は縦位の撲り糸文が密接施文される土器。美濃地方などに主体的分布をもつ土器と考えられ、時期的には中期中葉末から後葉初段階までと時間幅を有する。

中期後葉 357~360は半裁竹管状工具による縦位の半隆起線を地文として、連続押し引き文を伴う3本組隆帯の懸垂文などを施すもの。361~367は綾衫状短沈線を地文とする一群であり、361~363には立体的に隆起した腕骨文が伴う。これらはおおむね茶褐色の色調を呈し、胎土に雲母など鉱物質に富む砂粒を多く含む点に共通した特徴が見出せる。368は唐草文系構形土器の口縁下破片。隆帯により区画された横位文様帯内に、列点状の刺突や「コ」字状の粘土紐貼付がめぐる。369・370は波状をなす口縁部破片であり、

波頂下に隆帯渦巻き文が配されて横位に連続する。在地化した加曾利E系土器であろう。371は口縁部に一部が勾玉形などを呈する丸窓状の区画文をめぐらす土器。沈線文内に刺突文が加えられる372とともに、伊那谷および木曾谷中南部から岐阜県下にかけて分布する土器群と考えられる。373～375はそれぞれ凹線文、条線文、粗く細い矢羽状沈線文を特徴とし、当該期でも新しい段階に位置づけられる。

後～晚期 376～380は帯状の繩文施文がなされる土器。376～378・380は平行する2条の沈線文間に繩文を充填施文し、379は外側を磨り消すことにより繩文帯を作り出している。後期初頭称名寺式もしくはそれに並行する在地の土器と考えられるが、379については中期後葉加曾利E IV式土器に比定される可能性を残す。381～385は後期前半幅之内式土器に比定されるもの。すべて彫形土器の一部と考えられ、384の頸部には「8」の字状の貼付け文が加えられる。386～390はこれらの底部破片と推定されるもので、390を除いて底面に網代痕が残る。

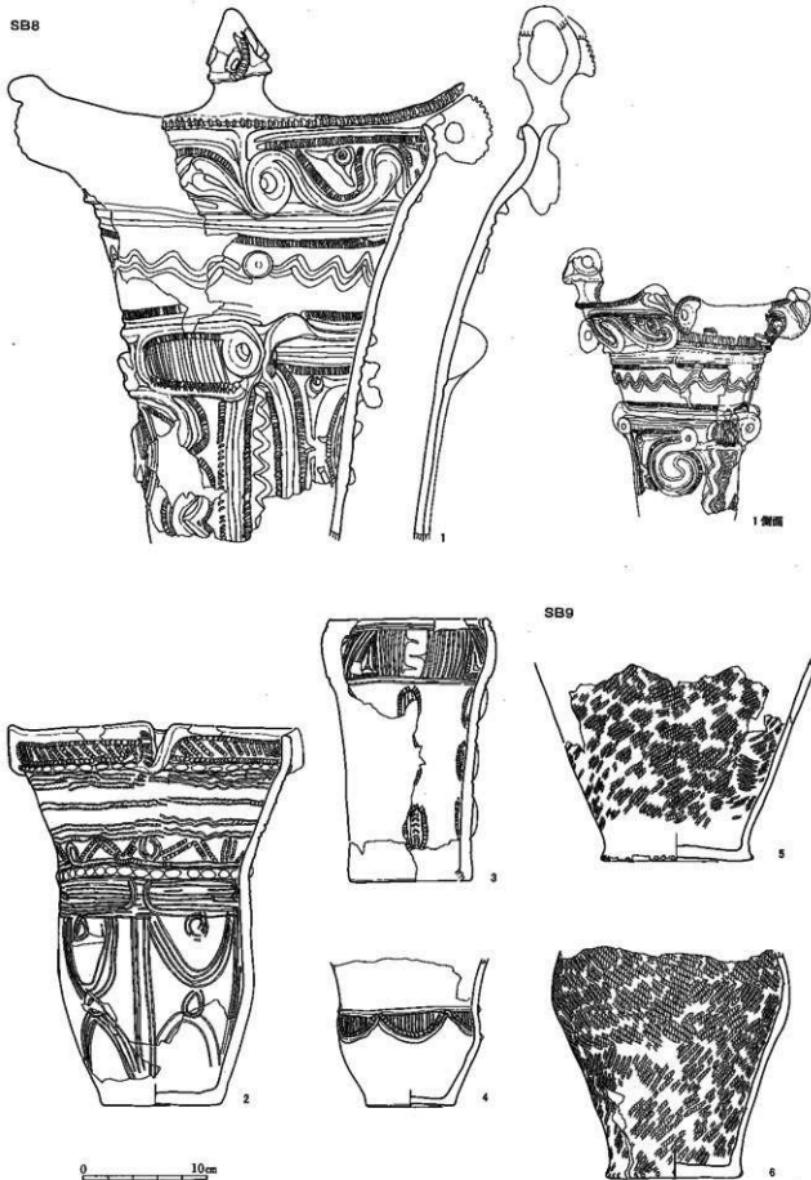
391～399は後期最末期から晚期前半にかけての土器と考えられるもの。同一個体の391・392は小型化した小突起が付く波状口縁の深鉢形土器であり、前者が波頂部、後者が波底部と推定される。口縁下に沈線文とキザミ目が加えられた隆帯文をめぐらし、波頂部と波底部には瘤状突起が付加される。隆帯文下にはいわゆる「稻妻文」と推定される沈線文が認められる。明褐色の色調を呈し、横方向のナデを主とする丁寧な器面調整が行われる。後期最末段階の隆帯文土器群に比定されよう。沈線文が描かれた395～398は同種土器の胴部破片と考えられるが、小破片のうえ出土数も限られており確認には至らない。393・394は鉢形土器と考えられるもので、沈線文を沿わせたキザミ目隆帯文などを口縁下にめぐらす。後者の外面には条痕文が認められる。399は口縁部が「く」の字状に内傾する鉢形土器。屈曲部に凸帯状のキザミ目隆帯文がめぐり、口縁下には横位横円沈線区画文と区画外への細密な繩文施文、細い棒状の貼付け文が施される。横方向を中心とする丁寧な器面調整が行われているが、外面は二次焼成によると推定される器壁の荒れが著しく、内面および外面白口縁下には「おこげ」状の炭化物が厚く付着している。

400～419は晩期末葉の土器。400～402は口縁下に凹線文がめぐるもの。横方向のナデが加えられているが総じて器面調整は粗く、丁寧な作りとは言い難い。403～408は器面に細密な条痕を施すもので、櫛齒状工具などにより横位あるいは縦位に施文される。半裁竹管状工具による「X」字状の施文がなされた408については、後期を含めて時期的に古く位置づけるべき土器かもしれない。409～413は無文の深鉢あるいは鉢形土器と考えられる一群。ナデによる丁寧な器面調整が行われるが、総じて精製とは言い難い。409の外面には斜方向の調整痕が残り、411は胎土に川砂様の粗い砂粒を多く含む。414～418は条痕文系土器であり、斜方向を主とする粗い条痕施文を特徴とする。施文工具を特定できる個体は多くないが、416については貝殻を用いている可能性が高い。胎土に石英粒や白色砂粒を多く含む個体が目立つ。

弥生時代 419はI区の南側調査区外で表採された弥生時代後期の土器。5歯を1単位とする幅約10mmの櫛齒状工具による櫛描き波状文を、緩やかに括れた頸部に重疊してめぐらしている。胎土に粗粒砂をや多く含み、暗茶褐色を呈する。内外面ともに丁寧な器面調整が行われ、焼成は堅致。

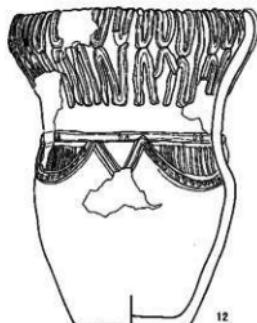
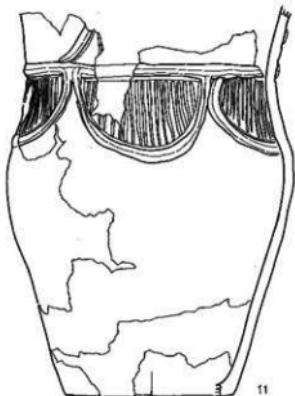
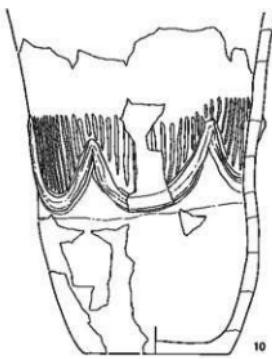
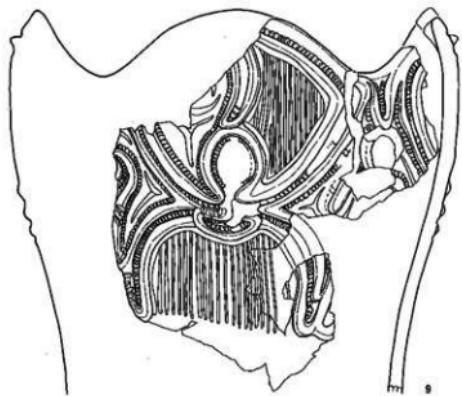
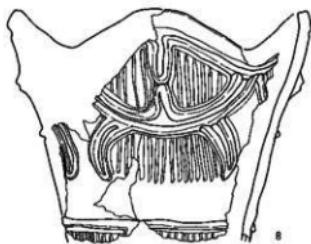
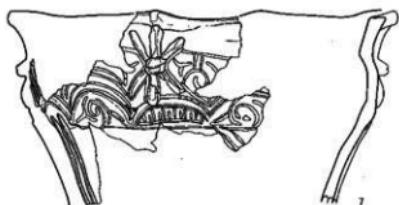
2) 土 製 品

土製円板3点が出土しており、すべてを図示した(第44図1～3)。1～3はともに打ち欠き整形により作出されており、それぞれ最大径5.3cm、4.3cm、5.0cm、を測る。重さは1が62.9g、2が21.5g、3が42.2gである。用いられた破片はすべて中期中葉に帰属する。1はV-18、2はU-21、3はV-19グリッドからとそれぞれ散在して出土した。



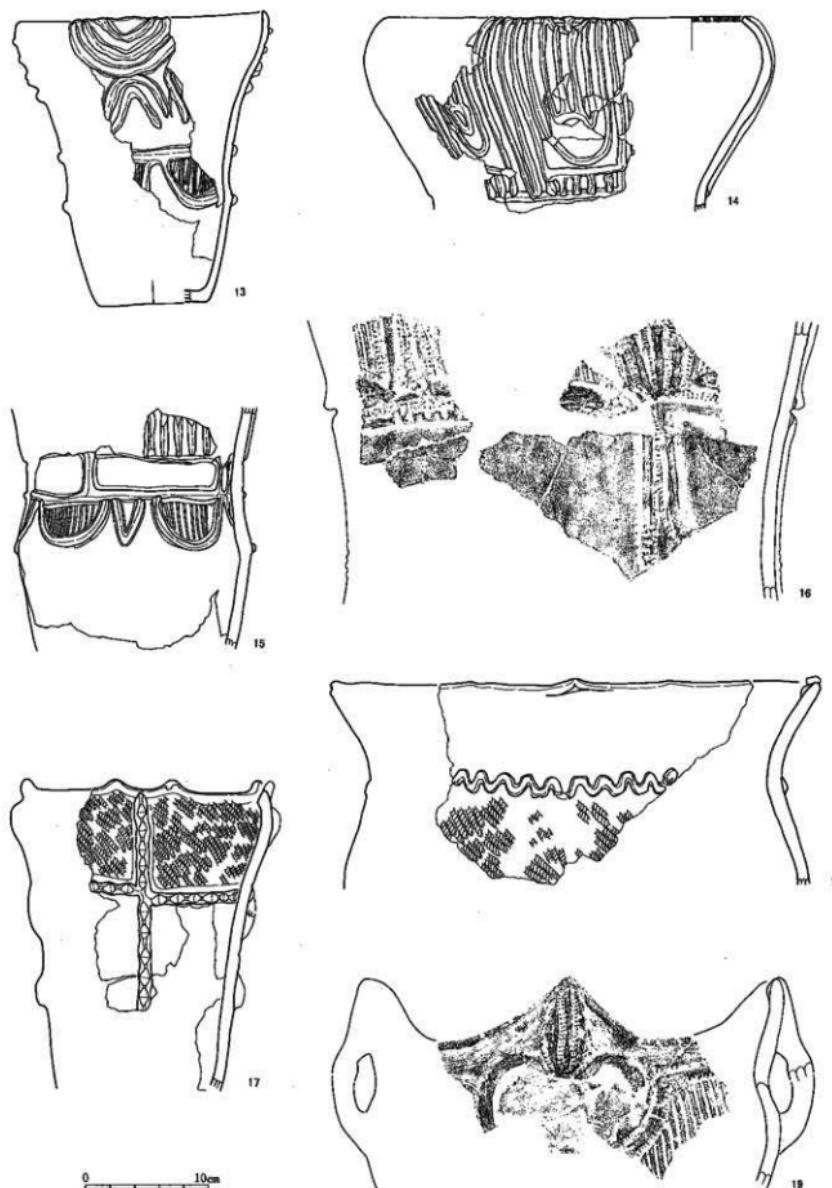
第29図 出土土器（1）

SB14

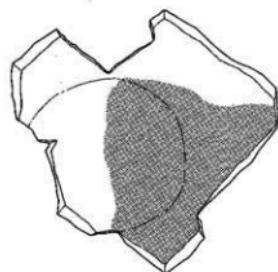
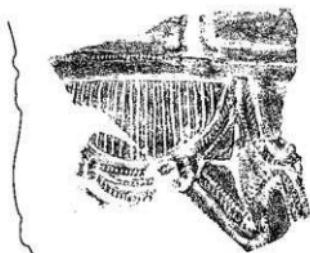


0 10 cm

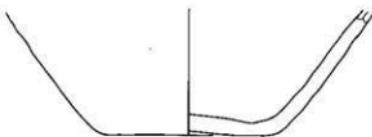
第30図 出土土器 (2)



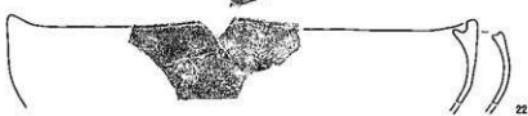
第31図 出土土器（3）



20

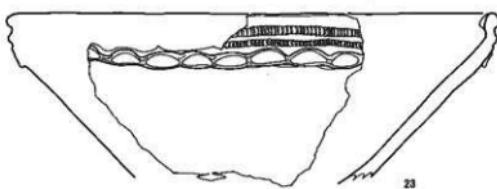


21



22

SQ23



23

SQ2

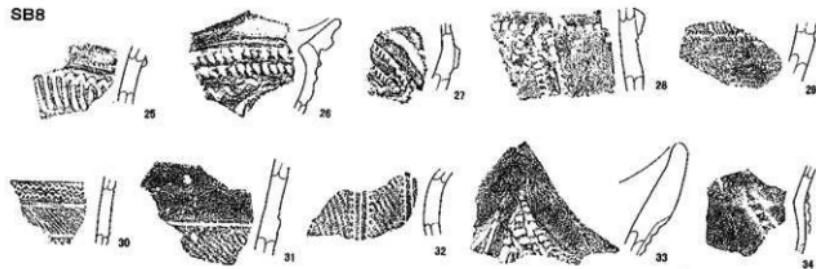


24

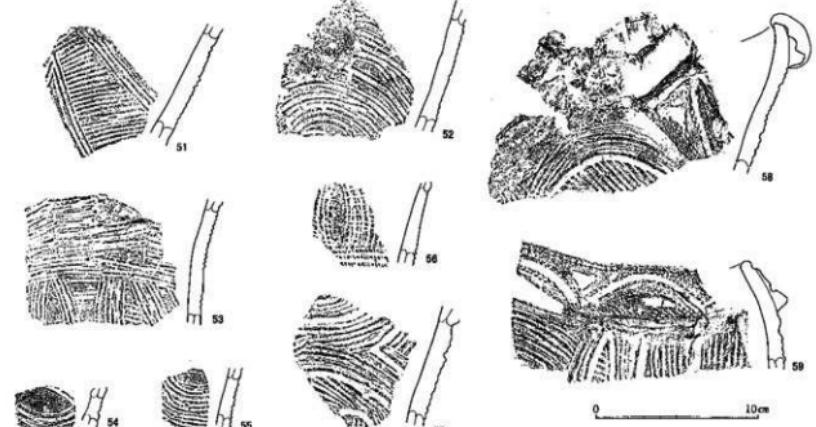
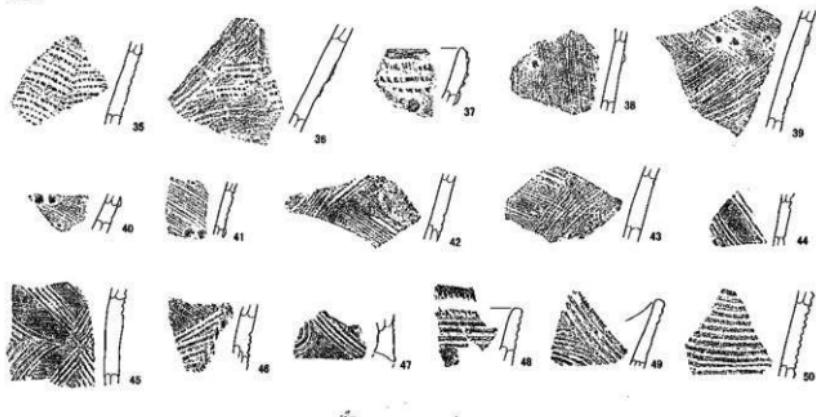
0 10cm

第32圖 出土土器 (4)

SB8

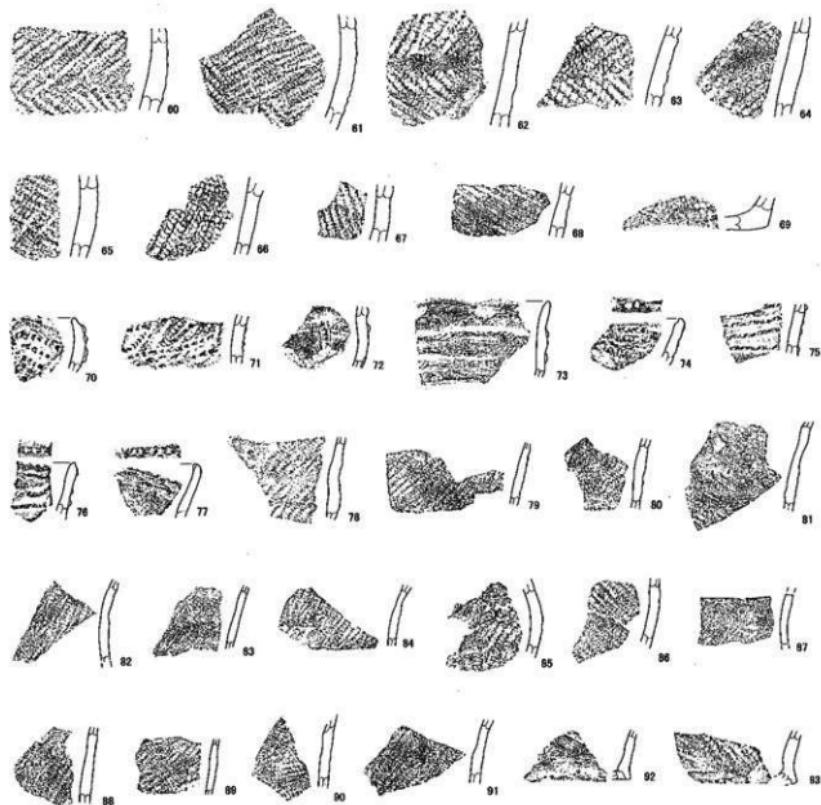


SB9

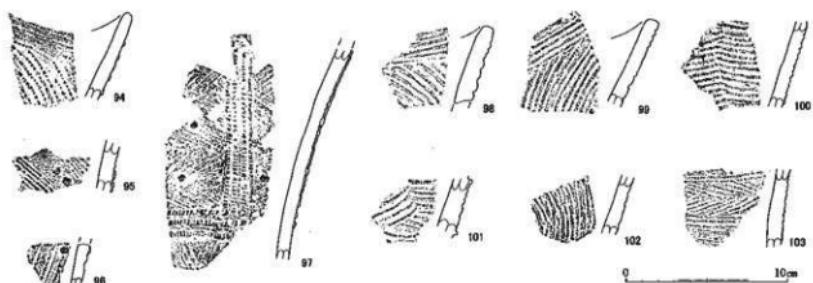


0 10cm

第33図 出土土器（5）

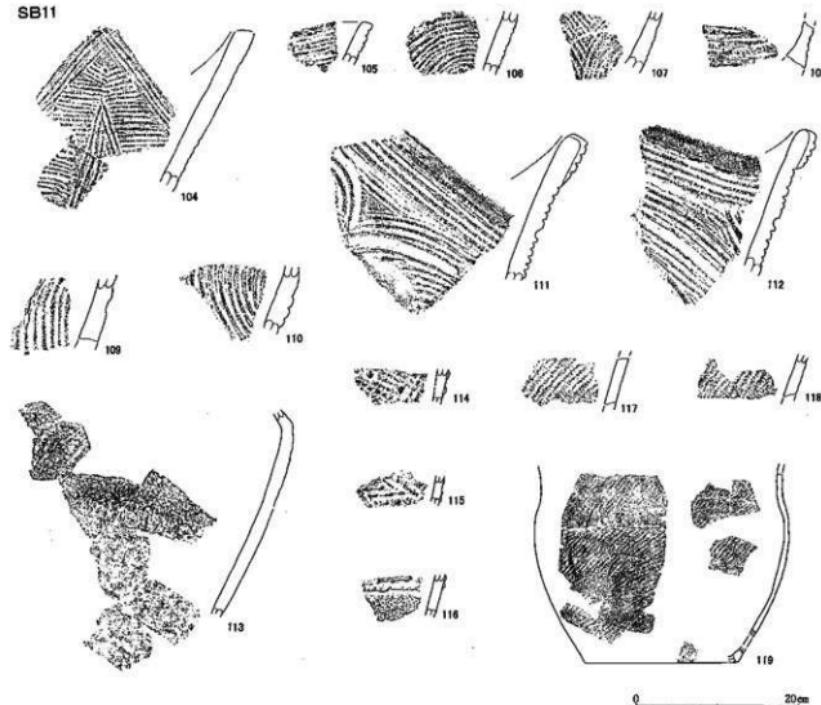


SB10



第34図 出土土器 (6)

SB11



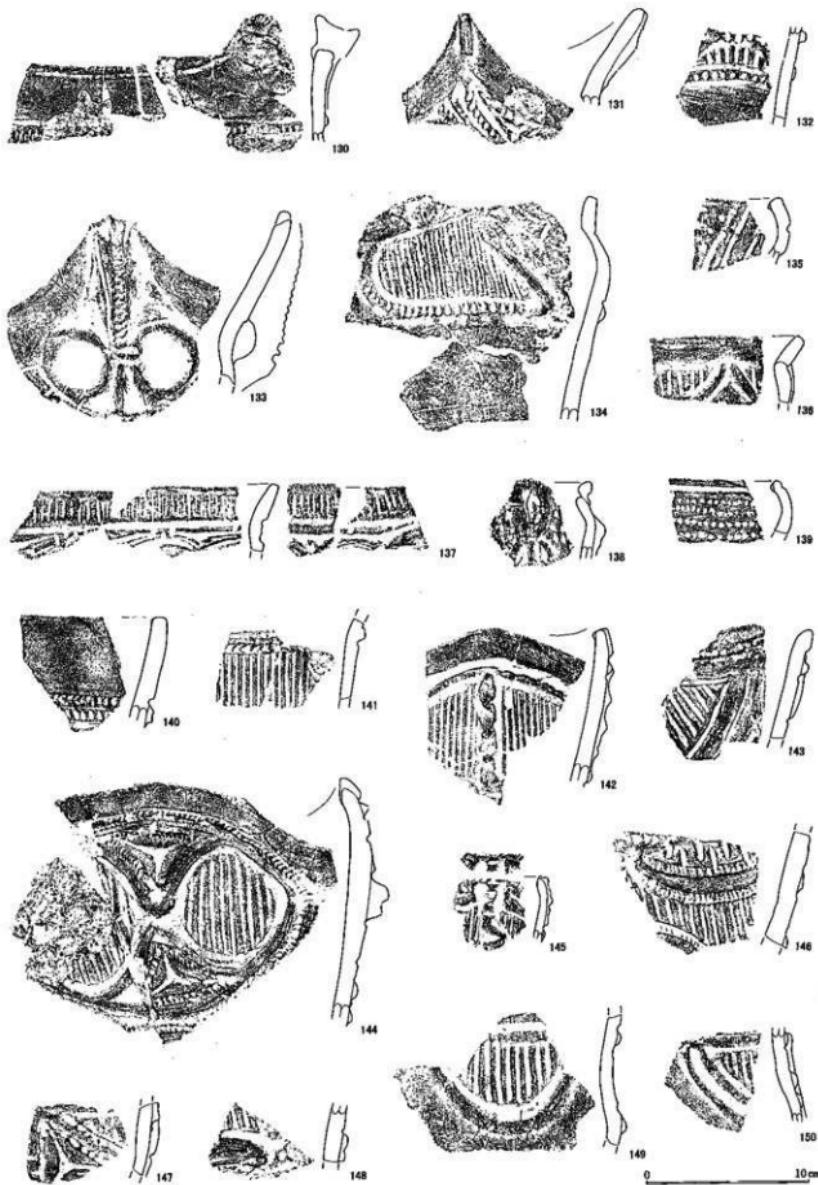
SB12



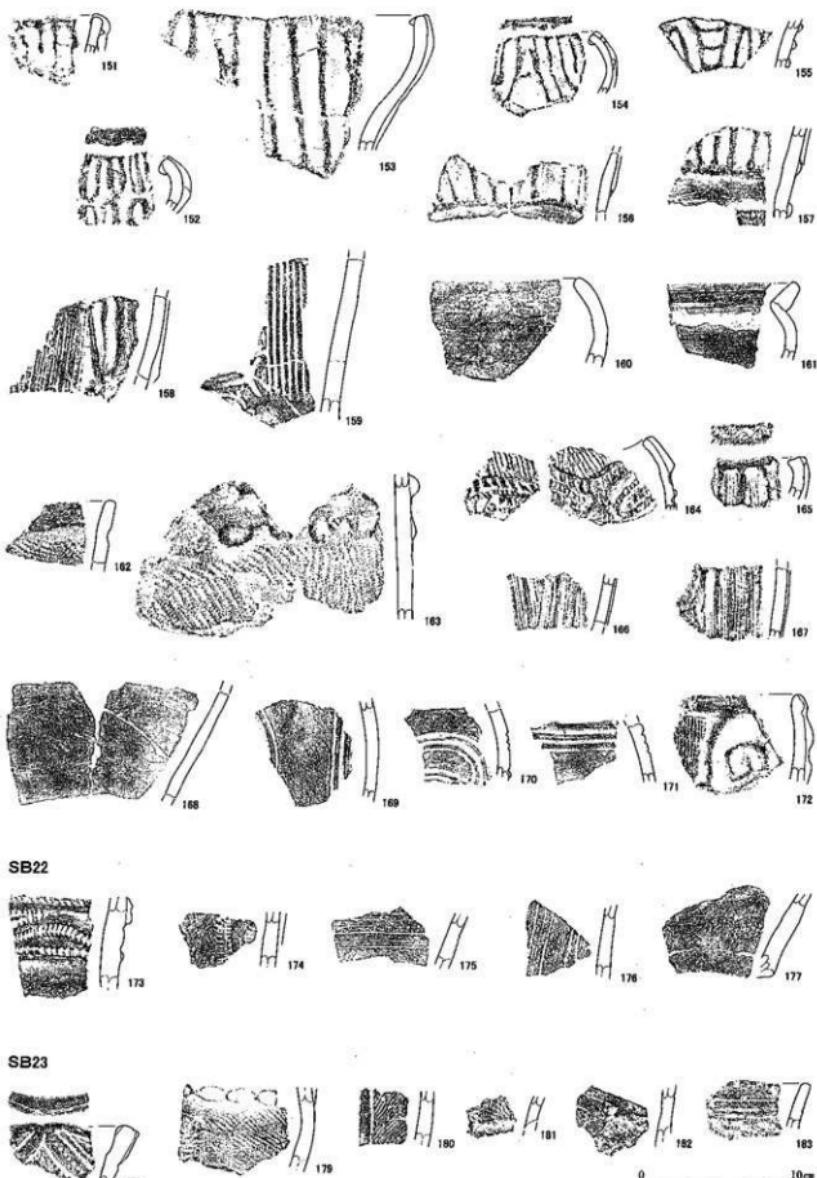
SB14



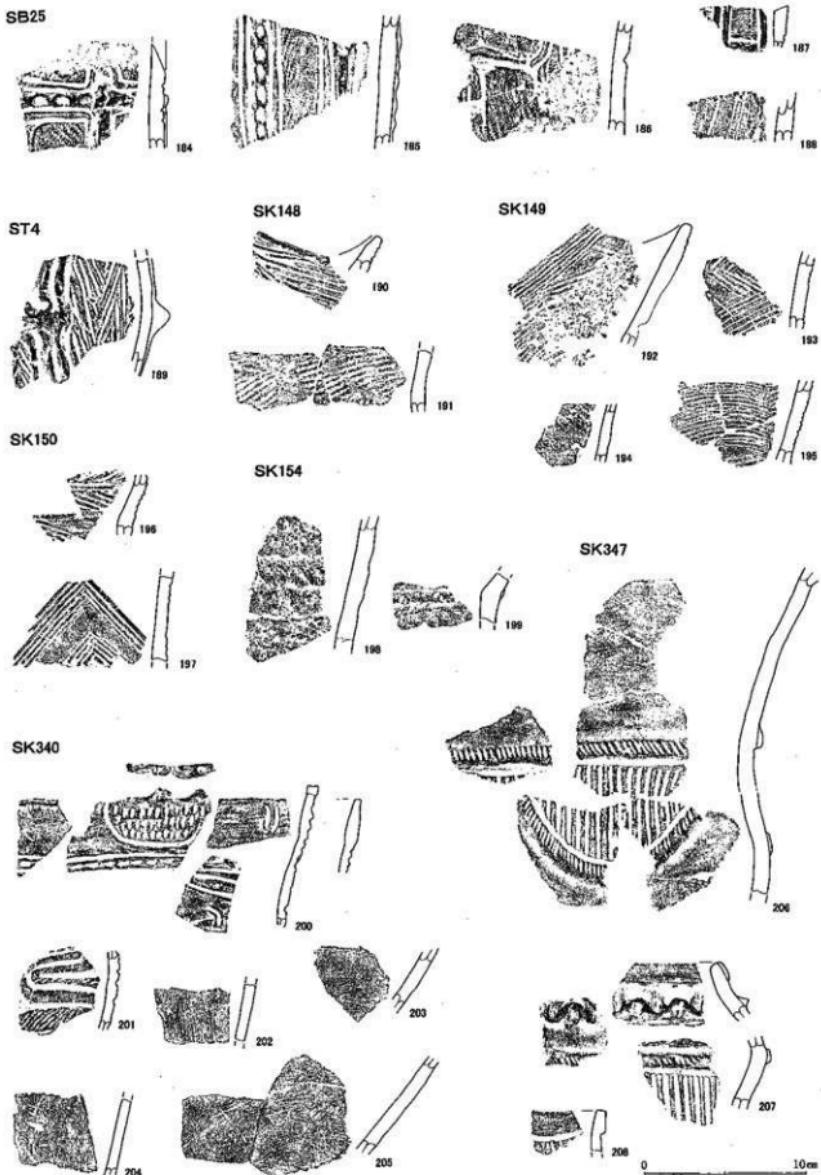
第35図 出土土器（7）



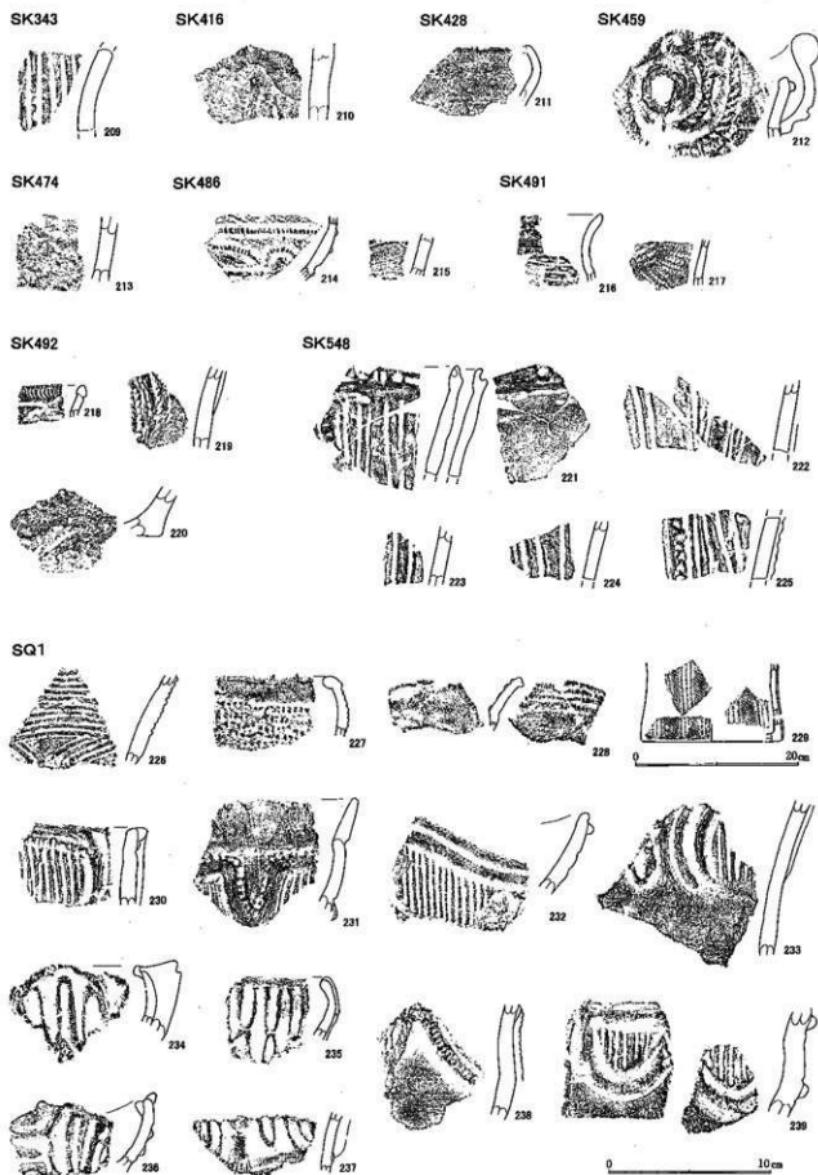
第36圖 出土土器 (8)



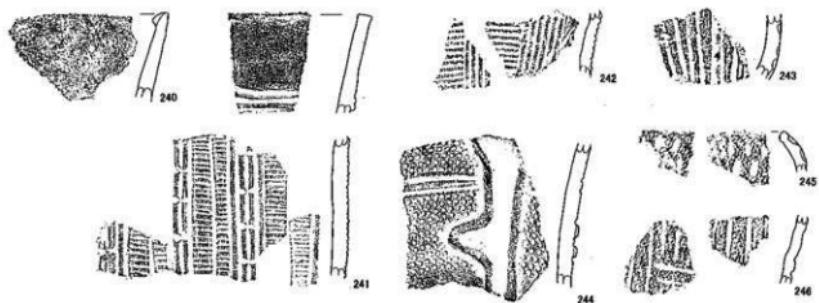
第37図 出土土器 (9)



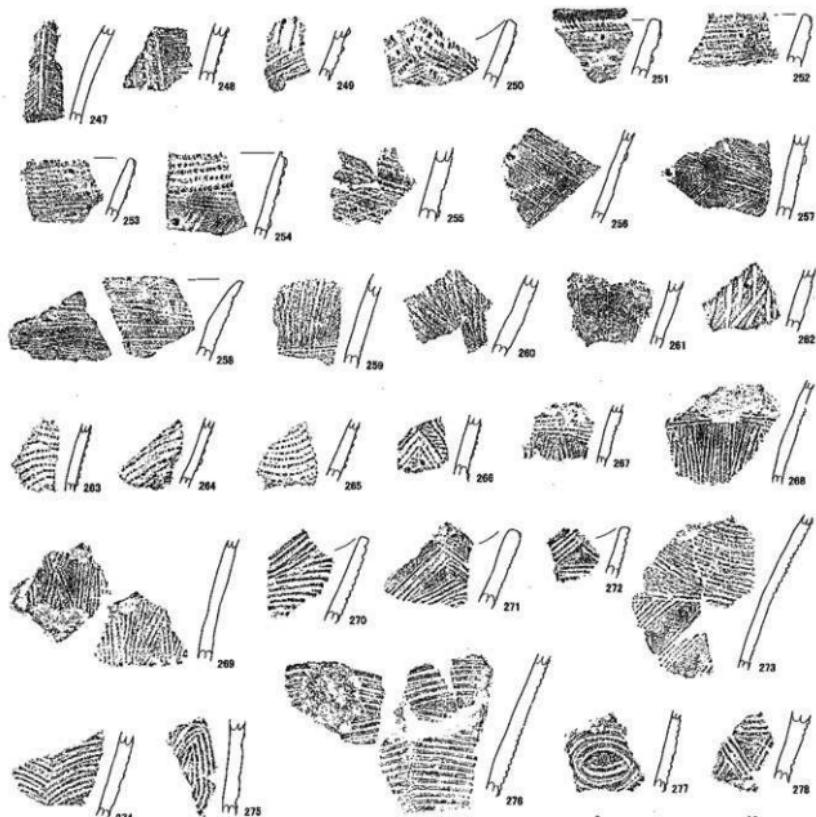
第38図 出土土器 (10)



第39図 出土土器 (11)

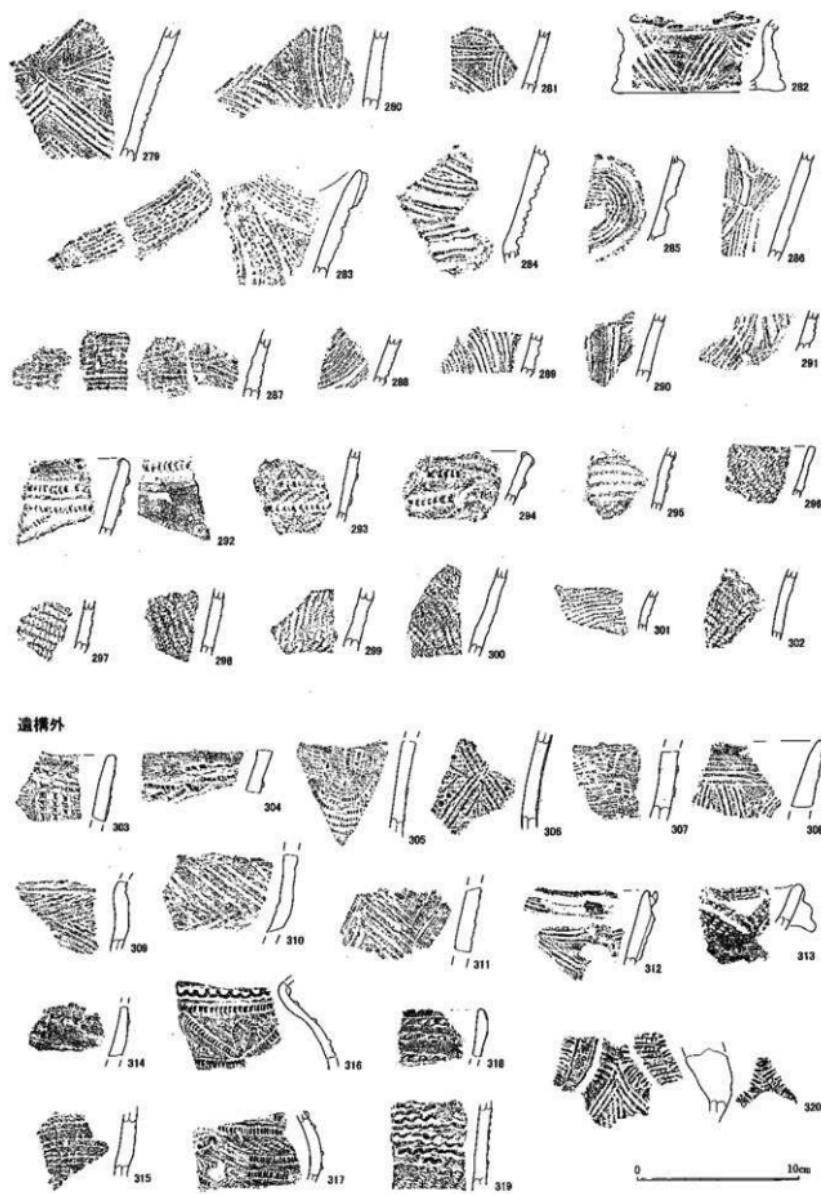


SQ2

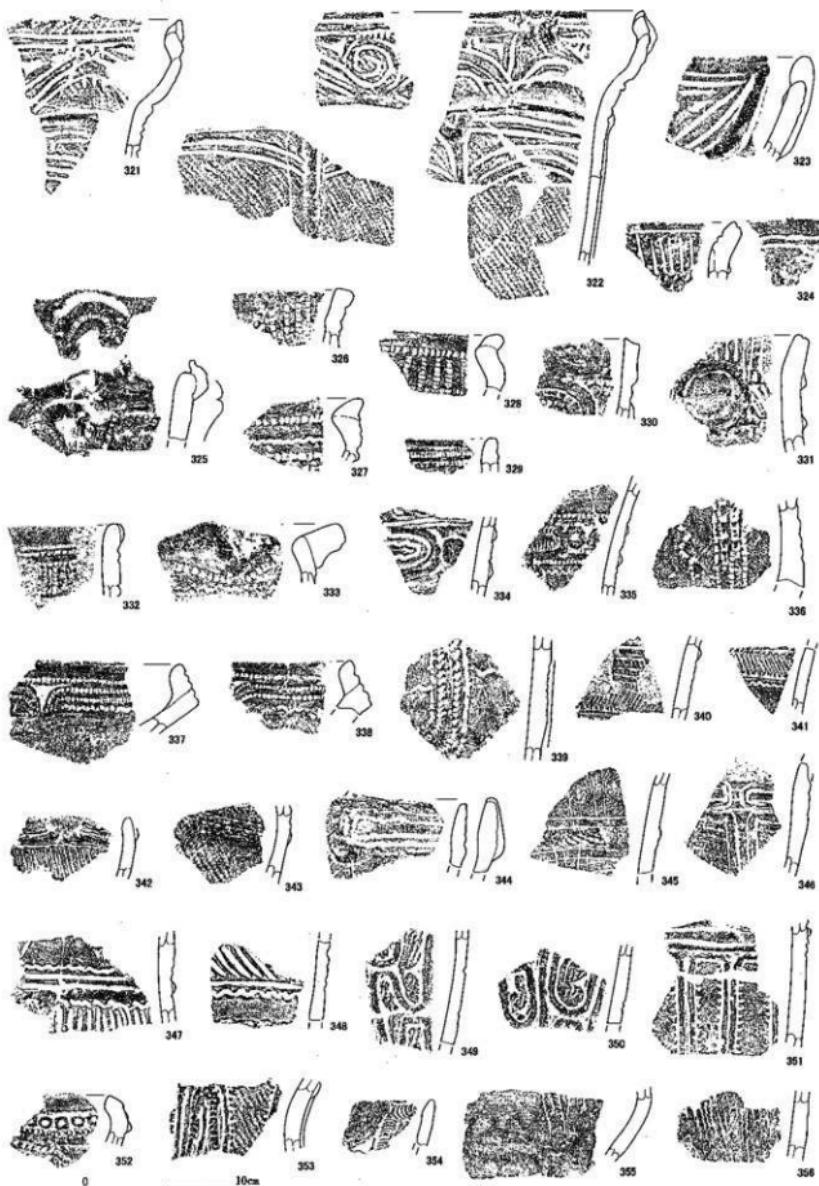


第40図 出土土器 (12)

0 10cm



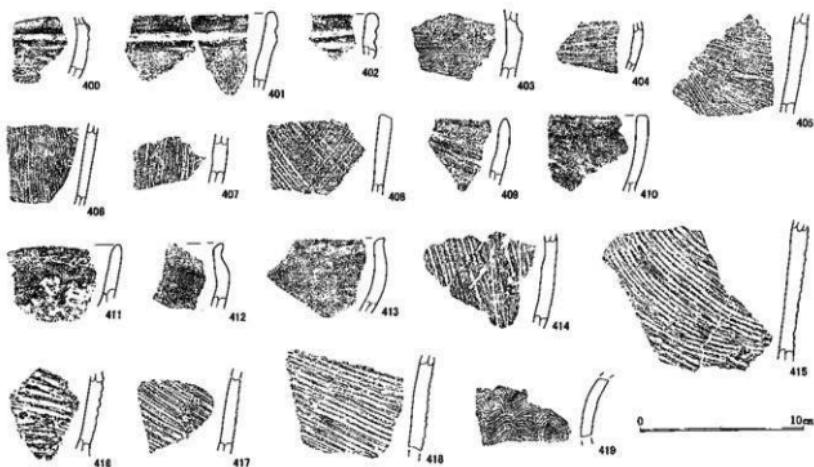
第41図 出土土器 (13)



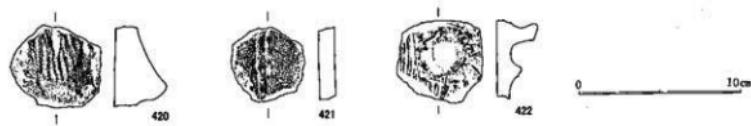
第42図 出土土器 (14)



第43図 出土土器 (15)



土製品



第44図 出土土器 (16)、土製品 (1)

3) 石器

小島遺跡の石器

株式会社 アルカ

1. 整理の方法

(1) 石器の選択

小島遺跡は縄文前期末葉・中期前半・後期～晩期の3時期の遺構・遺物が残されている遺跡である。主な石器は前期と中期のもので、後・晩期は僅かな量しか残されていない。前期と中期の遺物は800点を超える。整理にあたっては、予め遺物登録台帳に通番の付された石器を中心に行なった。石器の通番は、原則として1点につき1番号であり、これらは重量・長さ・幅・厚みと器種・剥離技術などの属性を記述した。しかし、取り上げ番号がない剥片類の一部については、それがまとまった状態でポリ袋一つについて番号がつけてあるので、これらは重量と器種、そして点数のみを記述した。以上の経過で作成したその属性表の個体数は762点となる。

(2) 属性表と図版(写真と実測図)

石器属性表は、石器の記述の基本となる台帳である。この属性表を分析することで、小島遺跡出土石器の石材・器種・加工技術の関係を明らかにできる。

小島遺跡の属性表の特徴は、一部の項目において石器(利器)・石核と剥片では同一項目内で記述内容が異なる。それは素材形態・素材打面・素材技術の項目である。記述された対象が石器(利器)の場合、その「素材形態」は加工された本体もしくは刃部を形成した本体そのものの形態を示す。「素材打面」と「素材技術」も同様で、加工された本体について記述されている。対象が「剥片」の場合は、「素材形態」は剥片そのものの形態(つまり横長剥片・矩形剥片・縱長剥片という種類)が記述される。「素材打面」、そして「素材技術」はその剥片の属性そのものを示す。対象が石核の場合、「素材形態」は石核となる剥片や礫という素材の形態を記述し、その「素材技術」は「素材形態」の獲得技術を示した。読者が石核の記述で特に注意されたい点は、「素材打面」が石核の剥片剥離作業面に対する打面形態を示し、「刃部加工」が作業面から剥がされる剥片剥離技術を記述している点である。以上のように本遺跡の属性表は、石器の種類ごとに記述した項目の内容を変えてある。これは省スペースに対応したからである(第2表)。

石器の図版は、可能な限りの資料掲載を目的として写真を中心に作成した(第45～59図)。また、石器実測図は特に今後に活用される定形石器や特徴のある剥片などを選択し、その必要に応じて作成した(第60～71図)。写真と図の縮尺はすべて1/2である。実測図には一部の石器に記号が付してある。小形の剥片石器で矢印のあるバーの範囲は「刃部」の範囲を示している。また裏面図の剥離軸を矢印で示した図や、必要な辺だけを部分的に図化したものもある。

2. 石器群のまとめ

いくつかの項目に絞って、石器群の様相を記述したい。

(1) 資料体の性格と石材

小島遺跡の石材特徴は、剥片石器の素材が多く、それらは近隣の木曾福島町板敷野遺跡と同じハリ質安山岩が多量に出土し、その他の剥片石器の石材が下呂石・珪岩・黒曜石に限定されたことにある。その内訳は、ハリ質安山岩325点、珪岩73点、黒曜石68点、下呂石29点である(これらの石材は剥片や剥片の一部を重複してカウントしてあるため、実際の点数はこの数値より多くなる)。打製石斧の石材は片岩(98点)と泥岩(44点)が主体を占める。打製石斧は、すべて遺跡外から石器が持ち込まれているため、石材の消費と石器の再生加工が一致しており、これらの石材の剥片類はすべて刃部再生で生じている。

以上の石材は剥片剥離作業と対応しており、剥片剥離作業が行われている「母岩資料」と、製品だけが持ち込まれている「単品資料」で構成される。前出の板敷野遺跡では遺跡内で採取できる安山岩があったが、小島遺跡の石器資料体にはそれはない。従って「大量母岩搬入資料体」・「少量母岩搬入資料体」「製品搬入資料体」という3つの分類がなされる。この分類が小島遺跡を構成する石材獲得及び石核消費（剥片剥離作業）の大分類である。

さて、3つの資料体のカテゴリーは、石材の量・剥片剥離技法の種類・石核消費の程度・製作される剥片石器の種類に概ね対応している。

	石材	量	石核	剥片剥離技術	石核消費の程度	製作される石器
大量母岩搬入資料	ハリ質安山岩	多	小見の頗大から剥片	HD・HvD	非常に高い	刃器を主体に、少量の石錐
少量母岩搬入資料	珪岩・黒曜石・下白石	中～少	鶏卵以下	両極打撃・HD・HvD	非常に高い	主に石錐、少量の削器と石錐
製品搬入資料	片岩・泥岩・安山岩		石核なし	剥離作業無し	石核なし	打製石斧・石皿・磨石・凹石

（2）器種

以下に小島遺跡を特徴づける器種の説明を行う。

刃器：本遺跡を代表する石器で、主にハリ質安山岩の剥片がこの石器に該当する。従来は刃先や形態を二次加工で形成する石器を「削器」とし、刃先はあるが形態形成のない石器を「使用痕剥片」とする慣習があったが、小島遺跡ではこれらの石器の刃部がすべて同じため、「刃器」という名称に統一した。

刃器の形態形成の加工は叩折や直接打撃で、余分な刃を切り取る加工である。この加工では叩き折られた刃にバリが残るので、それは直接打撃によって整形される。また刃部に押圧剥離による整形加工がみられる場合があるが、この加工はうねる刃を真っ直ぐに矯正する場合と刃部再生の初期に用いられる。

二次加工剥片：主にハリ質安山岩の石器で、叩折による成形加工がなされた石器。特徴は刃部が形成されていない点で、刃器の未製品の可能性が高い。

裂片：主に直接打撃によって砕け散った石片。ハンマーの種類と剥離の起源（剥片剥離か二次加工か）が不明な石片である。

以上の他に、石錐・石匙・石錐・打製石斧などの定形石器がある。また、持ち込まれた剥片や加工礫は「石核原材」として記述した。残核はこれ以上剥離作業のできない石核、石核はまだ剥離作業の可能な形態として記述した。

以上に述べた以外は、ごく通常の器種分類を行って石器を記述した。

（3）加工術の種類

小島遺跡の石器の加工技術には、形態形成の技術と刃部形成の技術の2種類の技術がある。

最初に形態形成の二次加工技術をその属性が明らかな758点で分析してみよう。758点中、形態形成の加工がない個体（剥片・石核・使用痕剥片など）は238点であるので、対象となる個体は520点である。この中で単独で用いられる形態形成の二次加工は、ハードハンマー直接打撃（HD）233点、叩折94点、ソフトハンマー押圧剥離（S'P）35点、折取8点、敲打3点（石皿・磨石）が主であり373点となる。これは520点の71%となる。残りの30%弱は、ハードハンマーの直接打撃の変異と、少数の加工技術、及びそれらの複数の技術的組合せである。

ハードハンマーの直接打撃の変異は、垂直打撃（HvD）14点、径の小さなハンマーを用いた直接打撃（nHD）4点、ハードハンマーの強い直接打撃（CHD）1点である。少数の加工技術はハードハンマーの間接打撃（HI）3点、ハードハンマーの押圧剥離の刃潰し（HP／刃潰し）1点、ソフトハンマーの間接

打撃 (S'I) 1点などである。

次に刃部に属性のみられる石器は405点あり、そのうち素材の刃をそのまま刃部にしている石器は132点、ハードハンマーの直接打撃 (HD) の加工が86点、細いハードハンマーの直接打撃 (nHD) 6点、変形度の低いソフトハンマー押圧剥離 (S'P) 50点、変形度の低いソフトハンマー直接打撃 (S'D) 8点が主である。以上は405点のうち282点であり、69.2%である。

以上より小島遺跡の加工技術は、ハードハンマーの直接打撃、叩折、変形度の少ないソフトハンマー押圧剥離が主な加工技術であり、形態成形加工が前2者に偏り、刃部加工は叩折を除いた上記3者が主たる加工技術であることがわかった。

(4) 小島遺跡の石器文化

1) 分析カテゴリーの設定

これまで概観したことと、遺跡を形成した縄文人の行動様式として把握し直すことで、この遺跡のまとめにかえたい。

下記の表は、小島遺跡の縄文人の行動様式から推定した石器の分類表である。

	領域内	領域外
母岩資料	珪岩・ハリ質安山岩・流紋岩安山岩・多孔質安山岩など	黒曜石・下呂石・水晶 (領域に接する地域)
単品搬入資料	片岩・泥岩	蛇紋岩(遠距離地域)
器種	石鏃・石錐・刀器・石錐・磨石・石皿・打製石斧	石鏃・石錐・石匙・磨製石斧

この表にみると、小島遺跡では、石材と剥離作業からみた資料体のカテゴリーとその内容は、遺跡を形成した縄文人の行動様式の一部を反映していると推定できるが、興味深いことに縄文前期末葉から中期中葉末までこの表の内容には変化がない。そこで、これを統計的に分析すると以下のような興味深い事実がでてきた。

まず、石材カテゴリーをA (ハリ質安山岩)・B (珪岩)・C (黒曜石・下呂石)・D (片岩・泥岩など)・E (安山岩・多孔質安山岩など)とする。次に器種をA (石鏃・石錐類)・C (石匙類)・D (刀器・削器・搔器類)・E (打製石斧)・F (原石・石核原材・石核・剥片類)・G (磨石・敲石・石皿)とする。これを石器分類の基本として、各段階と石材カテゴリー及び器種カテゴリーのクロス集計表を作成した。分析に用いた段階はA (前期末葉)・B 1 (中期中葉)・B 2 (中期中葉～中葉末：主に土坑群の資料)・B 3 (中期中葉末)の4段階である。ただし、B 2段階は土坑群の資料であり、その他の段階は住居出土である点で、遺構の性格が大きく異なる。

2) 分析

a 段階と石材

下記の表に χ^2 二乗検定を行い有意性を分析してみた。

その結果、段階(縦軸)と石材(横軸)の χ^2 二乗値は危険率5% (閾値25.00) のとき204.83であり、

表1：段階と石材カテゴリー

	A	B	C	D	E	総計
A	5	29	30	5	5	74
B 1	69	10	10	2	3	94
B 2	3		1	8		12
B 3	139	8	11	14	11	184
総計	216	47	52	29	19	364

よって充分に有意であることがわかる。

また同表を用いて前期末葉（段階A）と中期中葉（段階B1）の検定は、危険率5%（閾値9.49）のとき75.08で有意。また、中期中葉末（段階A）と前期末（段階B3）の検定は危険率5%（閾値9.49）のとき128.89で有意となる。従って、前期末葉と他の段階との差異性は、時期が下るにつれて大きくなる。

一方中期全体（段階B1・B2・B3）では、B1段階とB3段階で危険率5%（閾値9.49）のとき9.49でかろうじて有意であるが、この数値はほとんど差異がないことを示している。

b 段階と器種

表2：段階と器種カテゴリー

	A	C	D	E	F	G	総計
A	22	2	13	5	29	5	76
B1	6	2	45	2	33	3	91
B2	1	1		8	2		12
B3	11	1	76	11	73	11	183
総計	40	6	134	26	137	19	362

この表に χ^2 二乗検定を行うと、危険率5%（閾値25.00）のとき、検定値116.62で有意となる。そこで、石材と同じ分析を行うために、前期末葉（段階A）と中期のB1及びB3を比較した。前期末葉（段階A）と中期中葉（段階B1）では危険率5%（閾値11.07）で検定値27.72となり有意。段階Aと段階B3では危険率5%（閾値11.07）で検定値33.61となり有意。この結果も前期から時代が下るに連れて有意さが大きくなつた。

また、B1・B2・B3という中期のなかで検定を行うと、危険率5%（閾値18.31）で検定値76.26となり有意となつたが、しかしB1とB3では「有意でない」と検定結果がでた。

この場合に中期全体の中で有意性がでたのは、B2の資料の少なさに比較して、打製石斧の数量比率が大きいために有意差となつたと理解できるので、ここでは中期全体に器種組成の偏在は存在しないと結論されよう。

3) 小島遺跡の石器文化

以上の分析結果をみると、石器文化としての小島遺跡は、前期末と中期ではその石材利用と器種に大きな有意性がみられた。この点を石材の獲得と関連させてまとめにしたい。

小島遺跡の石材は、ほぼ遺跡近傍から貰われ、その石材カテゴリーは前期末から中期中葉にかけて一定性を保っている。また、器種カテゴリーも前期末葉から中期中葉にかけて一定である。この現象をみると、小島遺跡の石器文化はほとんど変化していないようにも見られる。しかし分析の結果は、前期末葉と中期ではその統計検定値に有意性がみられる点から、石器文化の内容に変化があったことが示された。

石材の中で注意するべきは、その石質と器種の作り分けである。比較的遙隔地の黒曜石については、原産地分析によると、90%の黒曜石が星ヶ台産であり、この点で段階差の中で変化はみられない。

また黒曜石や下呂石の量は過小であるとともに、これらの石材では主に石鎚が製作される点が注意される。近傍石材の主たる器種は、前期末葉においては石鎚・削器であり、中期になると刃器と打製石斧の比率が飛躍的に増加する。以上の点でいえば、石材と器種のカテゴリーの段階差は、主にハリ賀安山岩製の刃器、及び打製石斧の量の変化に起因すると考えられるのである。また、中期という段階内で打製石斧に意味のある現象は、B2段階として設定した土坑群に顕著であり、B2段階とB1・B3段階には大きな有意性がみられる。それは土坑群と住居という遺構の性格に原因が求められるであろう。この点は、同じ段階内での遺構の性格について、今後の分析指標を与えたことになる。

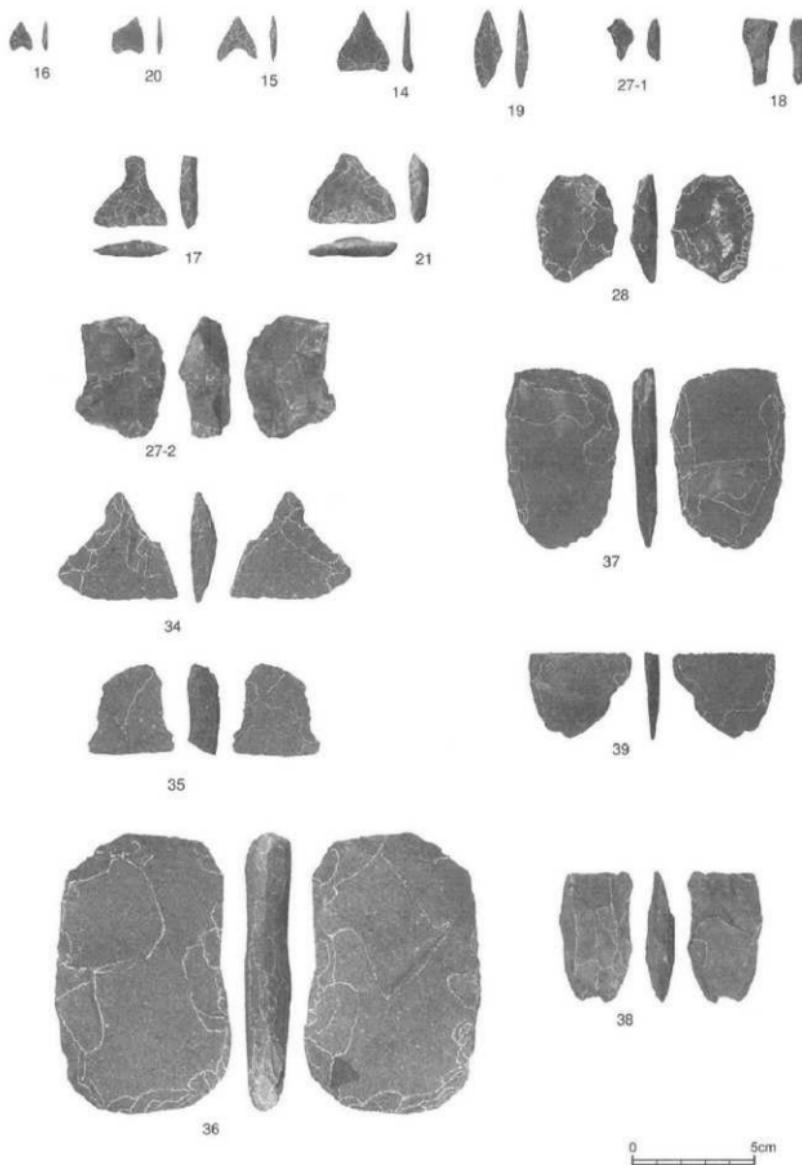
第2表 石器属性表

分類	伝統名	通称	石材	器種	大きさ (cm)	厚さ (mm)	形態加工	刃端性	実技打撃	備考	所見
石器	A. S39.9	1. 圓盤石	石墨	0.2	12.0	14.7	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	2. 圓盤石	石墨	0.6	20.9	14.3	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	3. 圓盤石	石墨水滴型	0.4	14.7	12.4	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	4. 圓盤石	石墨水滴型	0.6	13.9	16.4	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	5. 圓盤石	石墨水滴型	1.2	15.6	17.2	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	6. 圓盤石	石墨	1.8	21.0	25.7	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	7. 圓盤石	石墨	0.5	19.0	26.5	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	8. 圓盤石	石墨	2.4	22.0	16.9	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	9. 圓盤石	石墨水滴型	1.7	21.0	10.4	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	10. 圓盤石	石墨	0.4	25.0	10.3	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	11. 圓盤石	石墨	0.8	11.9	2.9	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	12. 圓盤石	石墨	0.8	11.9	27.7	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	13. 圓盤石	石墨	0.1	21.3	6.4	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	14. 圓盤石	石墨	1.0	26.3	13.4	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	15. 圓盤石	石墨	1.0	25.1	21.7	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	16. 圓盤石	石墨	0.5	18.6	16.2	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	17. 圓盤石	石墨	0.5	18.6	18.3	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	18. 圓盤石	石墨	4.8	29.6	30.2	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	19. 圓盤石	石墨	2.2	27.9	14.3	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	20. 圓盤石	石墨	0.9	32	11.8	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	21. 圓盤石	石墨	0.3	15.4	13.4	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	22. 圓盤石	石墨	7.7	29	35.9	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	23. 圓盤石	石墨	0.1	10.7	2.8	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	24. 圓盤石	石墨	0.1	10.7	2.8	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	25. 圓盤石	石墨	0.1	10.7	2.8	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	26. 圓盤石	石墨	1.5	15.1	16.0	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	27. 圓盤石	石墨	0.6	14.6	14.0	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	28. 圓盤石	石墨	4.7	34.2	24.1	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	29. 圓盤石	石墨	22.0	36.6	36.6	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	30. 圓盤石	石墨	35.1	50.3	37.2	S/P	S/P	不明	不明	
石器	A. S39.9	31. 圓盤石	石墨	0.6	17.6	11.2	S/P	S/P	なし	なし	なし
石器	A. S39.9	32. 圓盤石	石墨	17.9	36.0	36.0	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	33. 圓盤石	石墨	13.1	45.1	33.0	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	34. 圓盤石	石墨	0.3	14.4	10.3	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	35. 圓盤石	石墨	3.0	26.0	24.1	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	36. 圓盤石	石墨	3.8	28.6	7.9	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	37. 圓盤石	石墨	0.3	16.9	10.5	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	38. 圓盤石	石墨	17.4	44.3	49.2	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	39. 圓盤石	石墨	22.5	53.8	50.7	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	40. 圓盤石	石墨	12.0	38.3	42.5	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	41. 圓盤石	石墨	2.3	36.0	41.3	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	42. 圓盤石	石墨	27.5	46.5	33.8	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	43. 圓盤石	石墨	17.3	37.6	35.9	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	44. 圓盤石	石墨	22.8	31.5	72.5	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	45. 圓盤石	石墨	41.6	73.9	46.7	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	46. 圓盤石	石墨	42.0	56.2	33.8	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	47. 圓盤石	石墨	23.8	61.1	10.3	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	48. 圓盤石	石墨	16.7	41.4	36.5	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	49. 圓盤石	石墨	10.0	17.4	16.6	S/P	S/P	不明	不明	なし
石器	A. S39.9	50. 圓盤石	石墨	—	—	—	—	—	—	—	なし

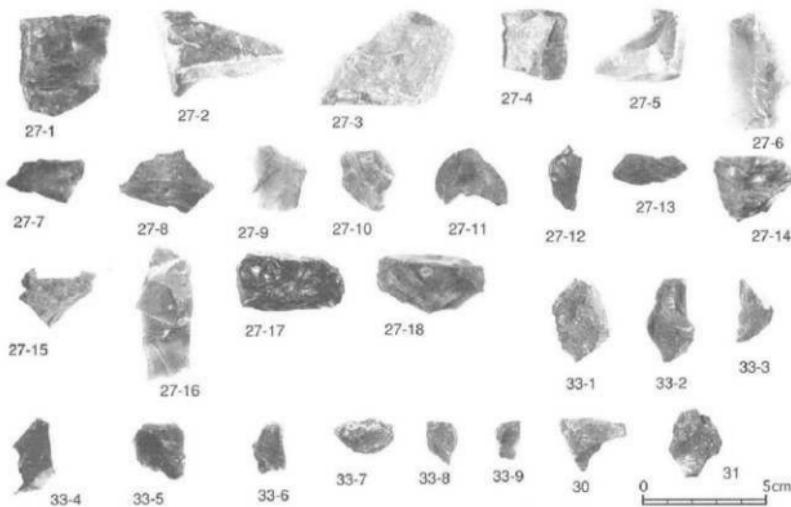
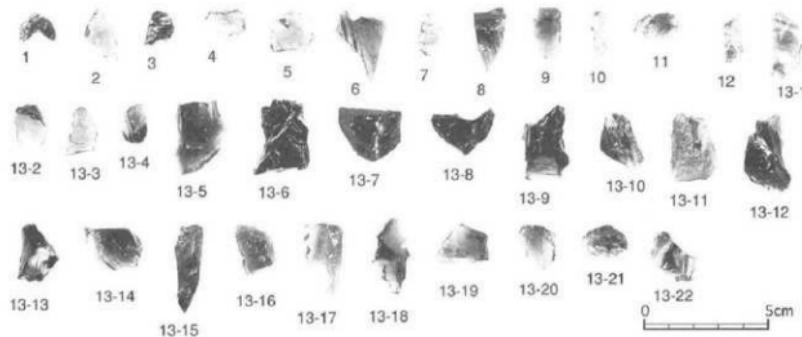
地 點	期 間	遺構 遺物 名	通 路	石 材	形 様	直 径 (mm)	長 さ (mm)	幅 (mm)	厚 さ (mm)	磨 合	施 工	刃 器屬性	實 驗	實 驗技術	實 驗	所 考
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	296	ハリヤ安山岩	圓盤	4.6	36.6	23.1	5.0	磨合外	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	297	ハリヤ安山岩	圓盤	18.7	38.2	52.1	11.2	なし	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	298	ハリヤ安山岩	圓盤片	5.5	16.5	25.8	8.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	299	ハリヤ安山岩	圓盤	5.3	20.4	44.7	9.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	300	ハリヤ安山岩	圓盤片	2.4	16.2	30.5	9.5	なし	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	301	ハリヤ安山岩	圓盤	3.4	42.3	35.1	10.0	なし	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	242	ハリヤ安山岩	圓盤	9.4	50.0	40.5	7.5	なし	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	243	ハリヤ安山岩	圓盤	5.3	35.5	36.3	6.7	なし	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	244	ハリヤ安山岩	圓盤	5.5	42.1	38.2	6.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	245	ハリヤ安山岩	圓盤	4.9	37.3	28.3	4.5	なし	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	246	ハリヤ安山岩	圓盤	79.9	57.1	62	21.0	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	247	ハリヤ安山岩	圓盤	3.1	30.2	19.4	8.0	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	248	ハリヤ安山岩	圓盤	4.0	27.8	38.5	6.0	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	249	ハリヤ安山岩	圓盤	6.3	61.7	47.6	10.5	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	250	ハリヤ安山岩	圓盤	28.4	51.0	44.7	14.1	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	251	ハリヤ安山岩	圓盤	62.5	41.1	54.5	19.1	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	252	ハリヤ安山岩	圓盤	5.5	36.8	47	11.3	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	253	ハリヤ安山岩	圓盤	6.2	35.0	21.2	7.9	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	254	ハリヤ安山岩	圓盤	64.3	37	44.1	18.9	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	255	ハリヤ安山岩	圓盤	62.1	25.9	73.0	5.9	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	256	ハリヤ安山岩	圓盤	78.6	69	69	10.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	257	ハリヤ安山岩	圓盤	61.5	31.1	56.1	10.0	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	258	ハリヤ安山岩	圓盤	61.5	31.1	56.1	10.0	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	259	ハリヤ安山岩	圓盤	23.5	71.9	94	15.0	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	260	ハリヤ安山岩	圓盤	61.5	31.1	56.1	10.0	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	261	ハリヤ安山岩	圓盤	61.5	31.1	56.1	10.0	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	262	ハリヤ安山岩	圓盤	56.6	61.1	56.6	16.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	263	ハリヤ安山岩	圓盤	56.6	61.1	56.6	16.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	264	ハリヤ安山岩	圓盤	62.0	58.2	47.2	19.4	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	265	ハリヤ安山岩	圓盤	24.4	42.0	42.0	12.7	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	266	ハリヤ安山岩	圓盤	20.0	7.8	36.6	6.6	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	267	ハリヤ安山岩	圓盤	20.0	3	47.5	13.0	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	268	ハリヤ安山岩	圓盤	20.0	28.0	47.5	8.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	269	ハリヤ安山岩	圓盤	20.0	28.0	47.5	8.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	270	ハリヤ安山岩	圓盤	27.4	36.0	38.1	44.8	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	271	ハリヤ安山岩	圓盤	56.6	61.1	56.6	16.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	272	ハリヤ安山岩	圓盤	37.4	30.1	47.2	19.9	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	273	ハリヤ安山岩	圓盤	21.0	37.4	47.2	17.4	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	274	ハリヤ安山岩	圓盤	39.2	36.5	57	65.2	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	275	ハリヤ安山岩	圓盤	56.6	50.1	63.9	17.0	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	276	ハリヤ安山岩	圓盤	36.6	52	63.9	15.1	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	277	ハリヤ安山岩	圓盤	14.6	29.8	56.4	12.7	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	278	ハリヤ安山岩	圓盤	36.6	60.2	44.7	18.6	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	279	ハリヤ安山岩	圓盤	71.4	56.4	71.0	15.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	280	ハリヤ安山岩	圓盤	6.6	50.4	27.8	6.1	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	281	ハリヤ安山岩	圓盤	35.5	31.2	60.9	10.3	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	282	ハリヤ安山岩	圓盤	25.6	74	39.3	9.6	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	283	ハリヤ安山岩	圓盤	30.3	7.3	37.9	11.2	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	284	ハリヤ安山岩	圓盤	30.3	37.6	36.2	20.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	285	ハリヤ安山岩	圓盤	18.6	35.1	31.9	9.1	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	286	ハリヤ安山岩	圓盤	5.7	53.3	27.8	8.5	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	287	ハリヤ安山岩	圓盤	9.6	92.5	34.9	10.0	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	288	ハリヤ安山岩	圓盤	28.2	63.5	53.4	14.3	凹削	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	289	ハリヤ安山岩	圓盤	76.2	87.9	51.0	21.2	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	290	ハリヤ安山岩	圓盤	7.3	44.2	26.0	9.8	2	自然面	無	否	否	否	否
中 央 高 原	3 世 紀	33 33344	291	ハリヤ安山岩	圓盤	27.6	36.0	62.8	12.7	凹削	自然面	無	否	否	否	否

地 質 构 造	地 種 名	層	石 材	場	標	高 度	幅 (m)	幅 (m)	厚 度	幅 (m)	厚 度	施 工	耐候性	耐打孔	石材技術	監 督
U24	435 ハリ雲母片岩	断片	断片	31.1 海岸外	断片	384.1	85.1	105.3	21.4	なし	なし	海面外	点状	HD	HD	
U24	436 ハリ雲母片岩	断片	断片	35.6	26.2	41.4	5.4	なし	なし	なし	なし	海面外	点状	HD	HD	
U24	437 ハリ雲母片岩	断片	断片	267.9	87.6	107.5	50.6	なし	なし	なし	なし	海面外	点状	HD	HD	
U24	438 ハリ雲母片岩	断片	断片	26.7	40.9	50.7	13.3	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U24	439 ハリ雲母片岩	断片	断片	115.6	111.5	100.3	18.0	なし	なし	なし	なし	海面外	点状	HD	HD	
U24	440 斧石	断片	断片	47.0	94.0	50.5	9.0	なし	なし	なし	なし	海面外	点状	HD	HD	
U24	441 片岩	断片	断片	15.7	45.0	50.0	7.5	なし	なし	なし	なし	海面外	点状	HD	HD	
U24	442 片岩	断片	断片	36.1	101.0	46.0	9.2	なし	なし	なし	なし	海面外	点状	HD	HD	
U24	443 片岩	断片	断片	56.0	86.5	41.5	15.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U24	444 片岩	断片	断片	76.5	35.0	45.0	15.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U24	445 麻粒岩	断片	断片	71.8	91.0	47.4	34.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	446 ハリ雲母片岩	断片	断片	115.8	67.0	74.2	15.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	447 光滑岩	断片	断片	69.2	73.4	59.3	10.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	448 光滑岩	断片	断片	35.6	75.0	59.0	12.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	449 光滑岩	断片	断片	31.2	7.5	11.0	1.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	450 光滑岩	断片	断片	26.3	75.0	34.0	8.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	451 光滑岩	断片	断片	61.5	85.2	51.5	15.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	452 光滑岩	断片	断片	13.1	62.0	42.0	5.8	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	453 光滑岩	断片	断片	12.1	29.0	10.5	10.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	454 光滑岩	断片	断片	67.0	71.4	65.1	6.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	455 光滑岩	断片	断片	61.0	66.0	60.0	6.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	456 光滑岩	断片	断片	39.3	17.6	12.3	3.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	457 光滑岩	断片	断片	36.0	75.0	50.0	10.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	458 光滑岩	断片	断片	26.9	73.8	53.5	7.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	459 光滑岩	断片	断片	26.7	130.0	72.8	25.7	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	460 光滑岩	断片	断片	22.1	70.0	34.0	10.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	461 光滑岩	断片	断片	25.5	64.3	37.0	7.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	462 光滑岩	断片	断片	0.1	21.3	11.0	3.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	463 光滑岩	断片	断片	8.1	26.4	20.2	12.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	464 光滑岩	断片	断片	2.9	26.0	17.9	6.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	465 光滑岩	断片	断片	11.1	36.6	24.9	15.9	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	466 光滑岩	断片	断片	80.2	66.6	76.4	19.3	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	467 光滑岩	断片	断片	27.7	48.5	45.9	14.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	468 光滑岩	断片	断片	23.2	50.0	37.5	13.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	469 光滑岩	断片	断片	6.0	41.0	25.3	5.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	470 光滑岩	断片	断片	59.5	100.0	43.8	10.8	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	471 光滑岩	断片	断片	51.9	66.0	46.0	14.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	472 光滑岩	断片	断片	15.2	25.4	19.3	6.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	473 光滑岩	断片	断片	36.1	69.3	40.5	14.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	474 ハリ雲母片岩	断片	断片	47.6	77.1	47.5	16.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	475 ハリ雲母片岩	断片	断片	64.3	85.0	77.1	46.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	476 安山岩	断片	断片	81.4	77.1	60.6	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	477 安山岩	断片	断片	106.7	108.2	67.7	26.3	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	478 安山岩	断片	断片	125.5	104.6	60.6	24.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	479 安山岩	断片	断片	94.2	90.0	50.5	20.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	480 岩石	断片	断片	27.6	58.6	39.5	7.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	481 片岩	断片	断片	47.6	56.7	40.5	9.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	482 片岩	断片	断片	49.9	85.0	45.8	9.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	483 片岩	断片	断片	46.5	91.7	35.5	12.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	484 片岩	断片	断片	1.6	25.7	20.4	5.2	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	485 灰岩	断片	断片	0.5	17.3	13.5	0.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	486 灰岩	断片	断片	11.7	43.3	36.5	10.5	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	487 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	488 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	489 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	490 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	491 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	492 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	493 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	494 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	495 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	496 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	497 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	498 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	499 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	500 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	501 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	502 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	503 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	504 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	505 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	506 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	507 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	508 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	509 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	510 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	511 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	512 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	513 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	514 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	515 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	516 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	517 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	518 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	519 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	520 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	521 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	522 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	523 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	524 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	525 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形	点状	HD	HD	
U25	526 安山岩	断片	断片	125.5	93.6	74.1	22.0	なし	なし	なし	なし	半圆形</				

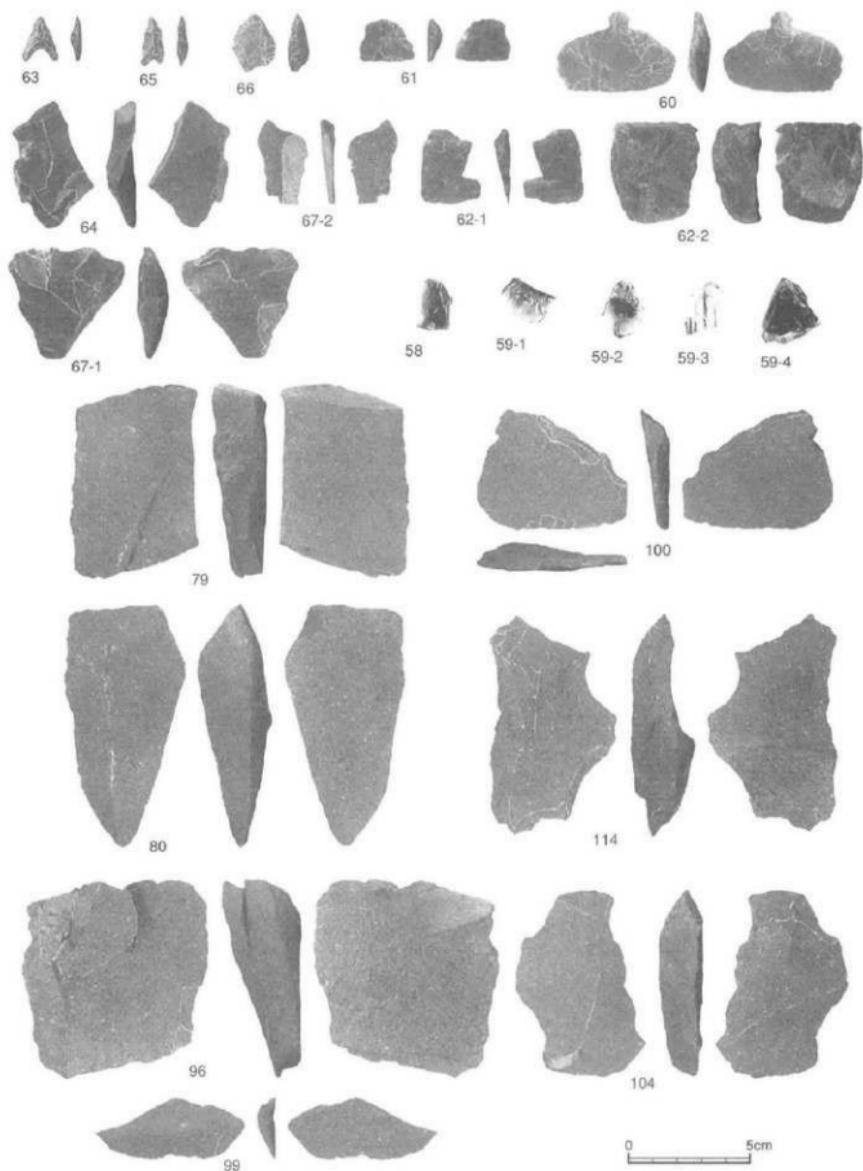
序 号	地質 形	地質 層名	岩 材	岩 種	露 出 (m)	高 度 (m)	幅 (m)	露 出 (m)	地 質 加 工	刀 盤 性	刃 盤 性	素 材 技 術	備 考
V-26	545 ハリヤマ山地	石炭層	板岩	露頭	165.5	92.4	76.5	17.5	なし	HD	HD	HD	不明
V-26	550 ハリヤマ山地	石炭層	板岩	露頭	26.9	40.3	52.8	16.5	なし	HD	HD	HD	不明
V-26	551 ハリヤマ山地	石炭層	板岩	露頭	25.4	57.0	52.8	13.3	円柱	MF	MF	HD	自然風
V-26	552 ハリヤマ山地	二木谷断層	板岩	露頭	45.8	77.2	73.3	13.3	円柱	MF	MF	HD	自然風
V-26	553 ハリヤマ山地	二木谷断層	板岩	露頭	35.4	52.0	59.8	13.3	円柱	MF	MF	HD	自然風
V-26	554 ハリヤマ山地	二木谷断層	板岩	露頭	9.6	39.9	43.6	4.7	遠隔外	HD	HD	HD	自然風
V-26	555 ハリヤマ山地	二木谷断層	板岩	露頭	23.3	45.0	56.1	10.9	なし	HD	HD	HD	自然風
V-26	556 ハリヤマ山地	二木谷断層	板岩	露頭	6.2	33.9	32.0	4.0	遠隔外	HD	HD	HD	自然風
V-26	557 ハリヤマ山地	二木谷断層	板岩	露頭	16.5	32.0	32.0	4.0	遠隔外	HD	HD	HD	自然風
V-26	558 片岩	露頭	板岩	露頭	20.3	53.0	27.0	8.4	斜面	MF	MF	HD	自然風
V-26	559 片岩	露頭	板岩	露頭	38.1	87.4	60.0	9.0	ED	HD	HD	HD	自然風
V-26	560 片岩	露頭	板岩	露頭	56.5	93.6	51.3	9.0	ED	HD	HD	HD	自然風
V-26	561 逆断	露頭	板岩	露頭	96.3	91.0	51.8	13.4	ED	MF	MF	HD	自然風
V-26	562 片岩	露頭	板岩	露頭	87.2	85.0	56.5	45.0	ED	MF	MF	HD	自然風
V-26	563 片岩	露頭	板岩	露頭	132.7	93.3	71.0	11.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	564 片岩	露頭	板岩	露頭	34.0	84.5	43.0	8.2	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	565 片岩	露頭	板岩	露頭	36.7	87.5	47.5	10.5	HD	HD	HD	HD	自然風
V-26	566 片岩	露頭	板岩	露頭	35.9	75.5	45.5	8.2	HD	HD	HD	HD	自然風
V-26	567 片岩	露頭	板岩	露頭	37.7	85.8	55.8	11.7	HD	HD	HD	HD	自然風
V-26	568 片岩	露頭	板岩	露頭	57.0	91.0	9.0	11.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	569 片岩	露頭	板岩	露頭	85.8	91.0	29.2	6.5	HD	HD	HD	HD	自然風
V-26	570 片岩	露頭	板岩	露頭	20.5	85.4	5.2	11.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	571 片岩	露頭	板岩	露頭	25.1	85.4	10.0	11.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	572 片岩	露頭	板岩	露頭	123.3	95.0	54.0	21.2	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	573 片岩	露頭	板岩	露頭	76.3	85.0	10.0	10.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	574 片岩	露頭	板岩	露頭	76.3	90.0	17.5	10.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	575 片岩	露頭	板岩	露頭	75.0	81.0	36.0	8.0	ED	MF	MF	HD	自然風
V-26	576 片岩	露頭	板岩	露頭	14.2	46.2	44.2	4.7	ED	MF	MF	HD	自然風
V-26	577 片岩	露頭	板岩	露頭	10.0	54.3	33.8	5.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	578 片岩	露頭	板岩	露頭	100.0	114.8	10.8	53.2	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	579 片岩	露頭	板岩	露頭	80.0	112.6	54.8	2.1	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	580 片岩	露頭	板岩	露頭	86.0	113.5	32.2	7.3	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	581 片岩	露頭	板岩	露頭	86.0	109.0	41.0	10.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	582 片岩	露頭	板岩	露頭	50.0	94.4	48.0	13.0	ED	MF	MF	HD	自然風
V-26	583 片岩	露頭	板岩	露頭	86.1	93.0	36.0	8.0	ED	MF	MF	HD	自然風
V-26	584 片岩	露頭	板岩	露頭	86.1	93.0	70.3	15.4	HD	HD	HD	HD	自然風
V-26	585 片岩	露頭	板岩	露頭	20.6	52.6	35.7	11.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	586 片岩	露頭	板岩	露頭	17.2	25.6	17.9	16.8	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	587 片岩	露頭	板岩	露頭	37.6	52.8	6.8	14.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	588 片岩	露頭	板岩	露頭	21.3	34.7	51.4	15.8	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	589 片岩	露頭	板岩	露頭	45.9	78.9	36.3	15.3	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	590 片岩	露頭	板岩	露頭	50.0	67.7	47.5	10.5	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	591 片岩	露頭	板岩	露頭	70.3	66.9	16.5	18.7	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	592 ハリヤマ山地	ホンブニュウス	板岩	露頭	4.8	21.1	45.0	4.8	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	593 ハリヤマ山地	ホンブニュウス	板岩	露頭	65.8	76.9	37.6	4.0	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	594 逆断	露頭	板岩	露頭	3.4	25.0	23.3	5.1	MF	MF	MF	HD	自然風
V-26	595 逆断	露頭	板岩	露頭	27.9	58.0	35.1	15.9	MF	MF	MF	HD	自然風



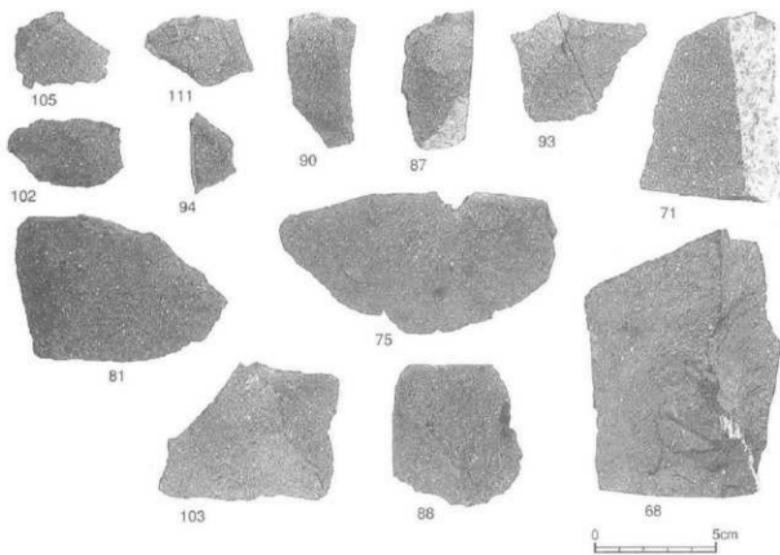
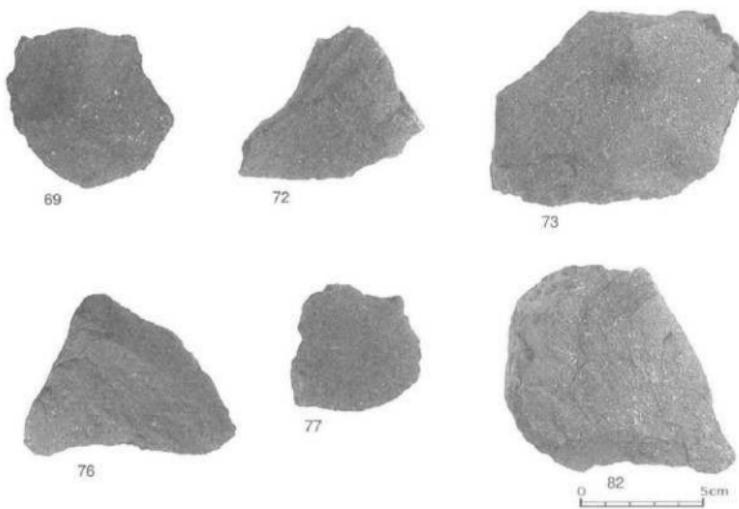
第45図 SB 9(縄文前期末葉) 出土石器



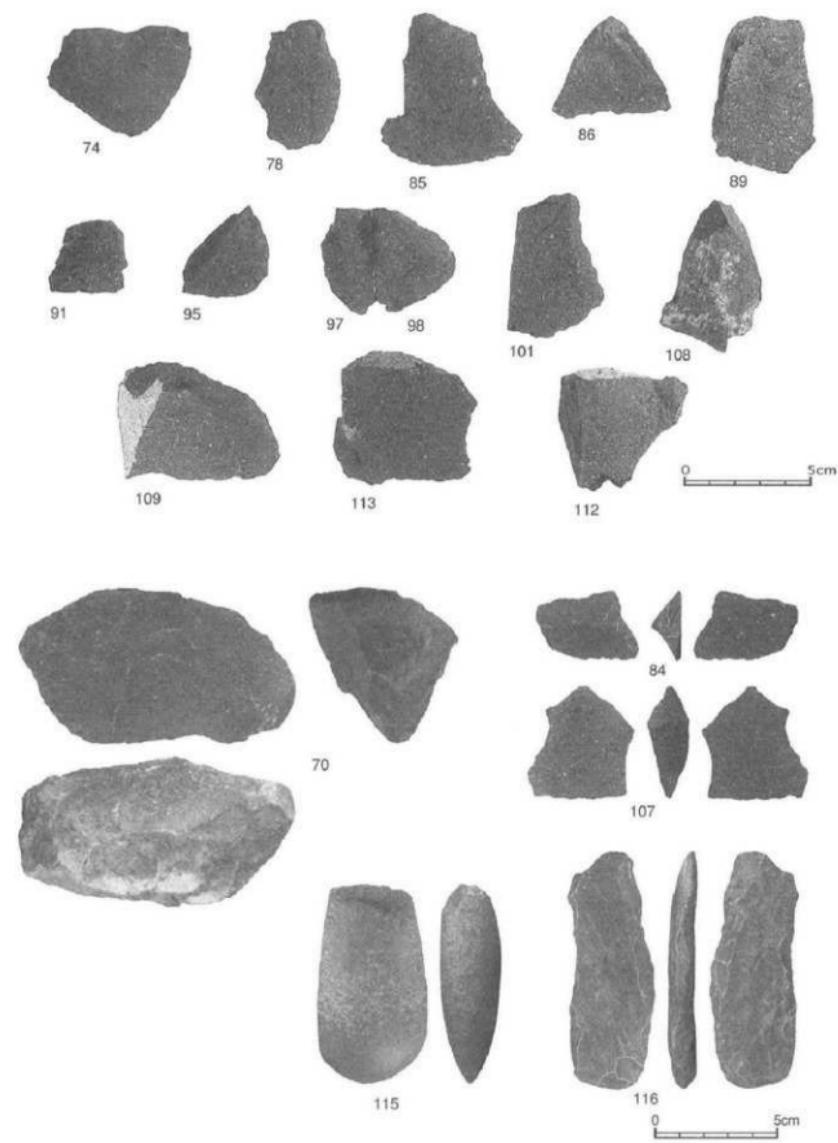
第46図 SB 9(縄文前期末葉) 出土石器



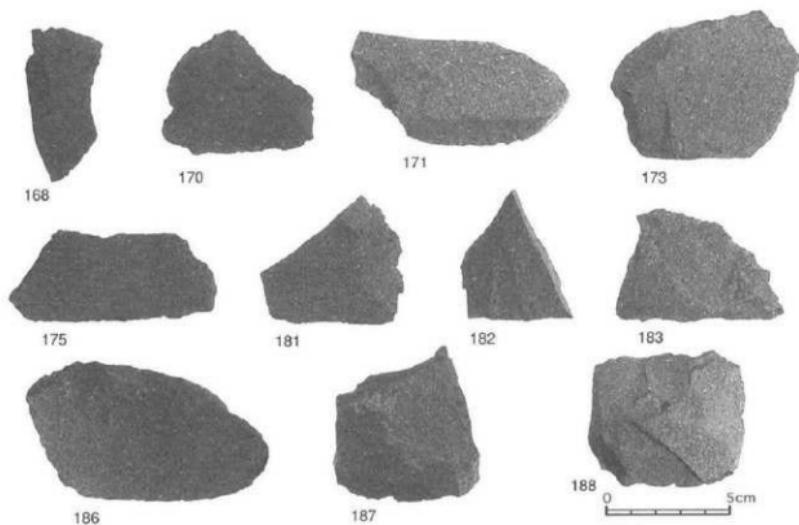
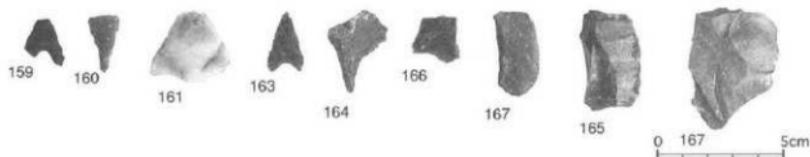
第47図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器



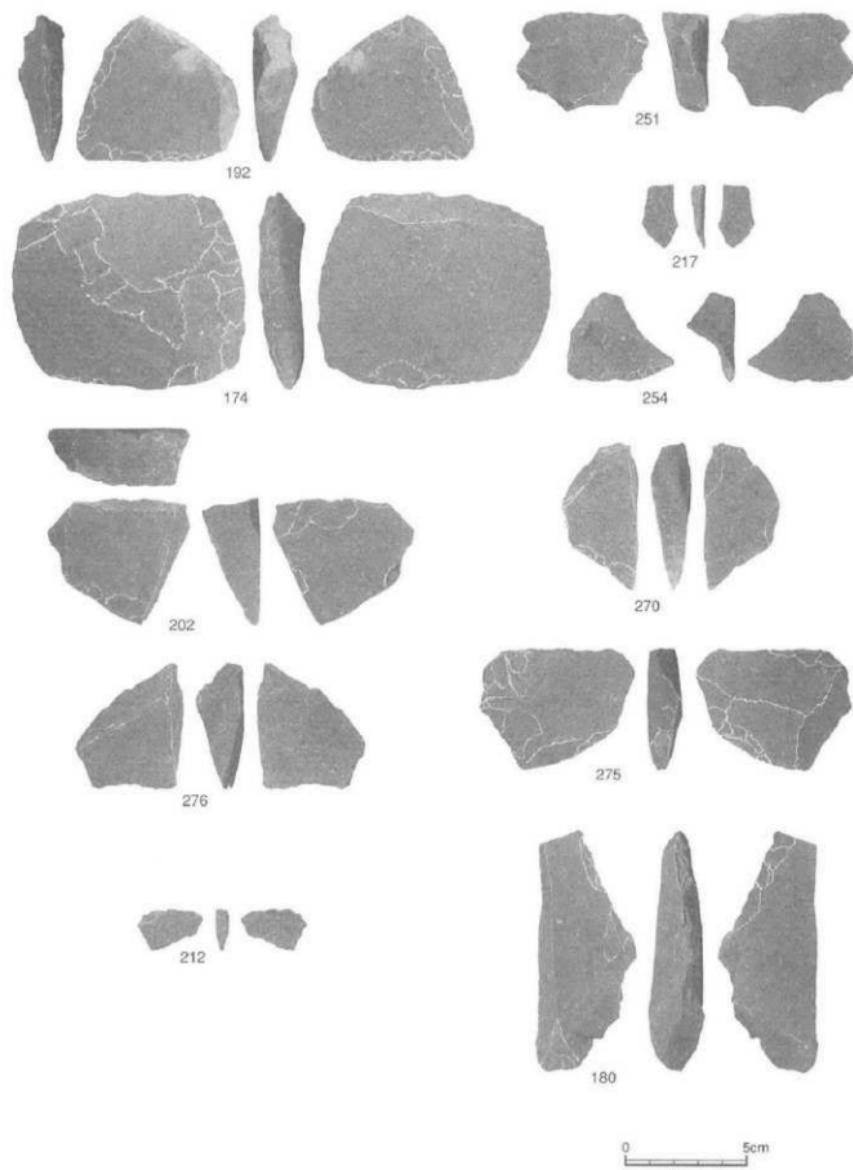
第48図 SB 8(縄文中期中葉) 出土石器



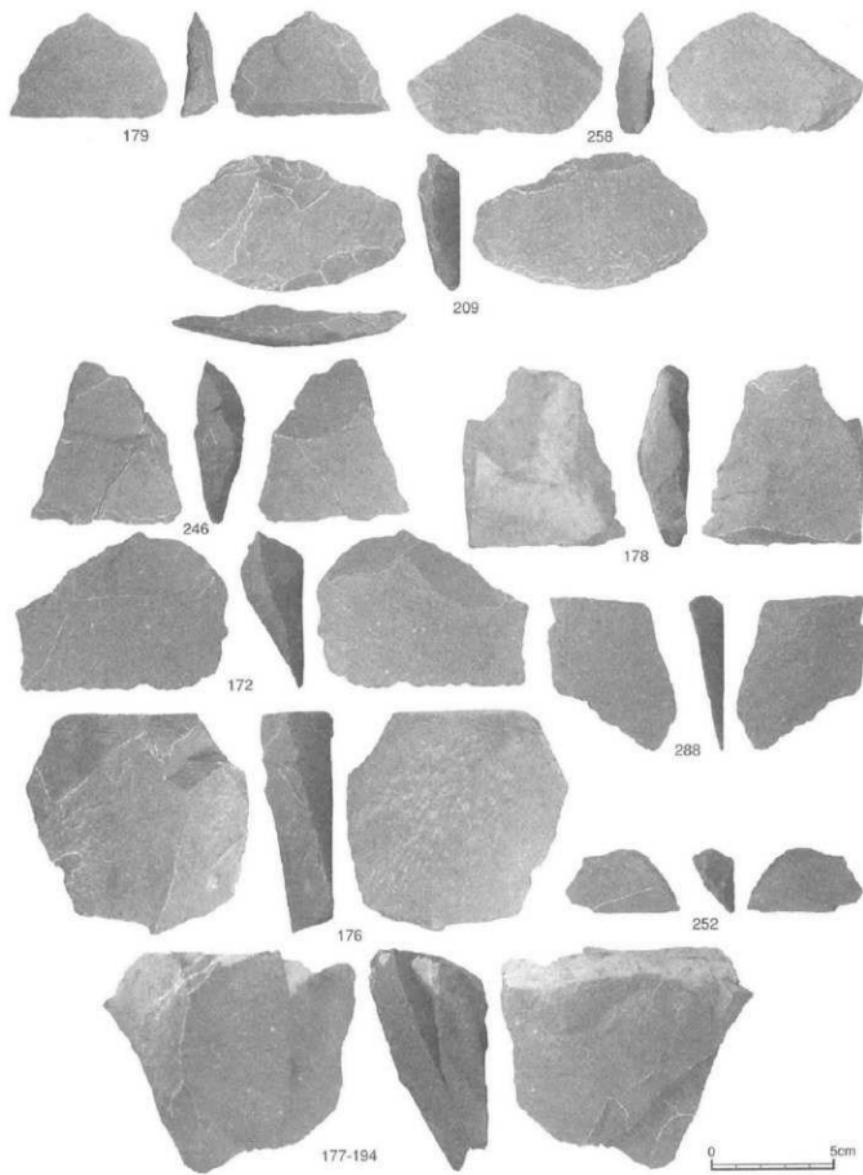
第49図 SB 8(縄文中期中葉) 出土石器



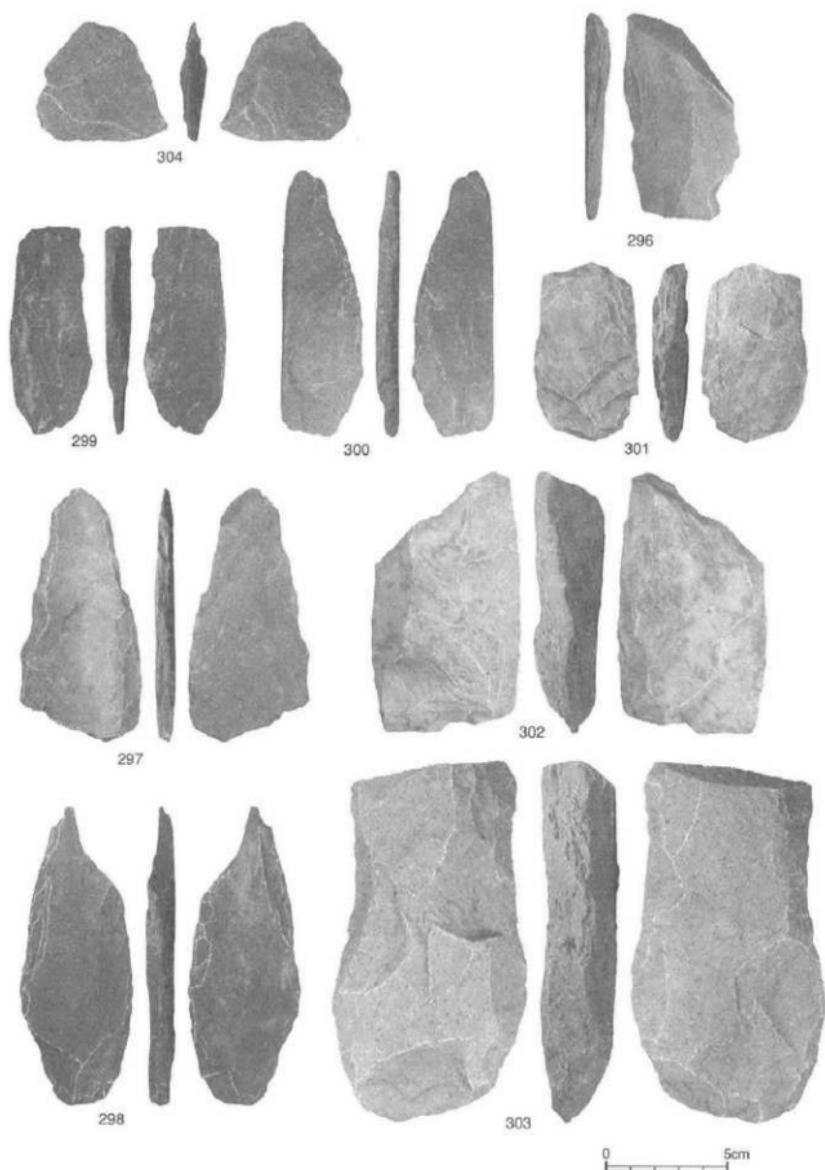
第50図 SB14（縄文中期中葉）出土石器



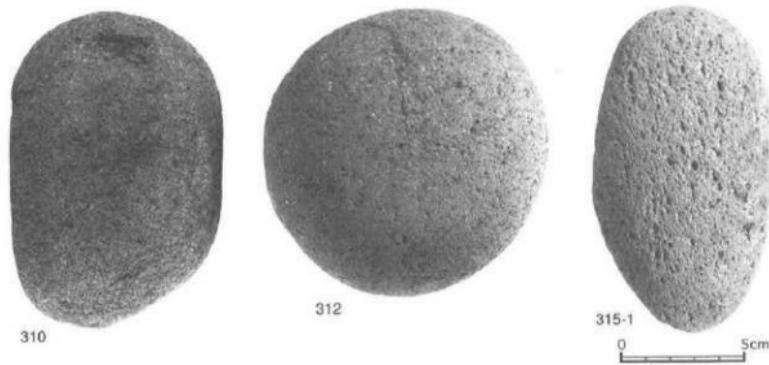
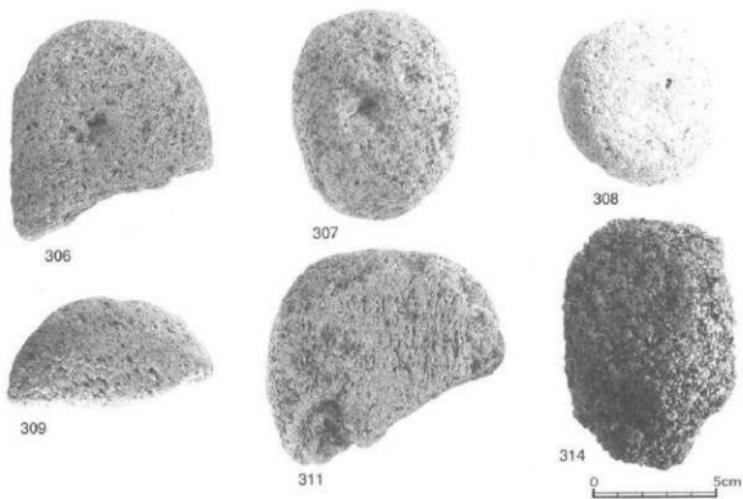
第51図 SB14（縄文中期中葉）出土石器



第52図 SB14（縄文中期中墓）出土石器



第53図 SB14（縄文中期中葉）出土石器

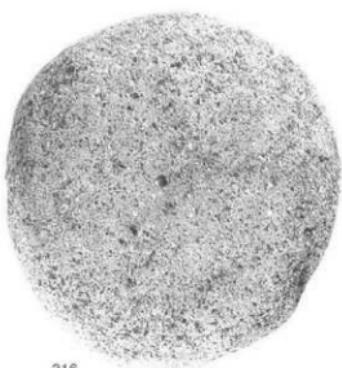


第54図 SB14 (縄文中期中葉) 出土石器



315-2

0 5cm



316

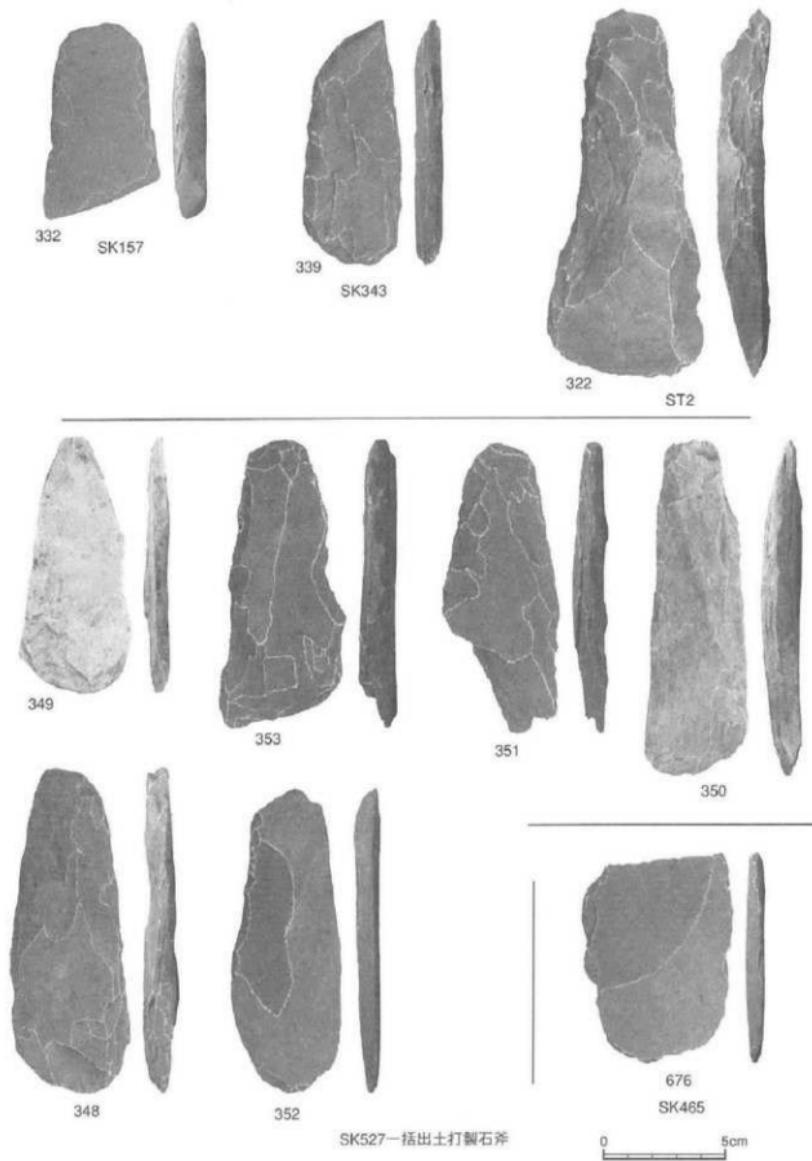
0 5cm



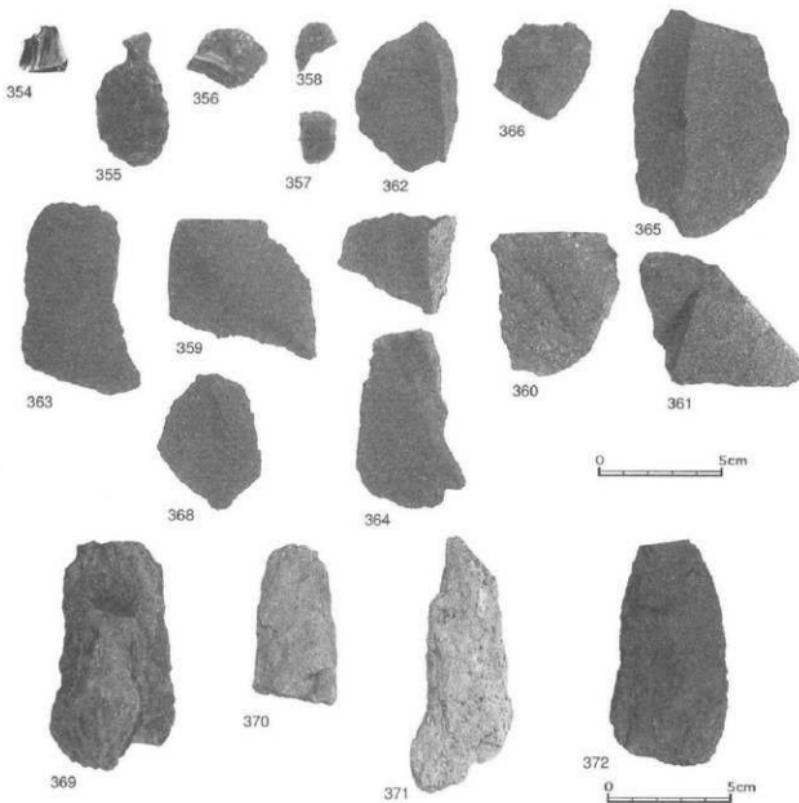
317

0 5cm

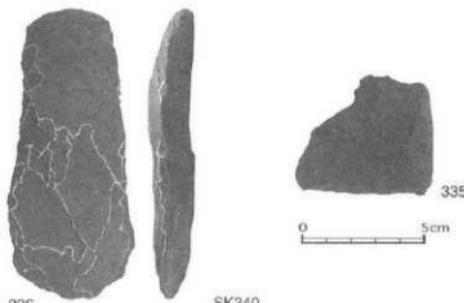
第55図 SB14（縄文中期中葉）出土石器



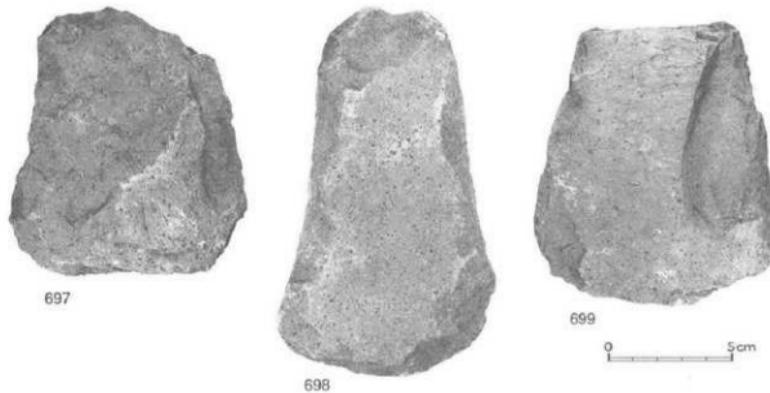
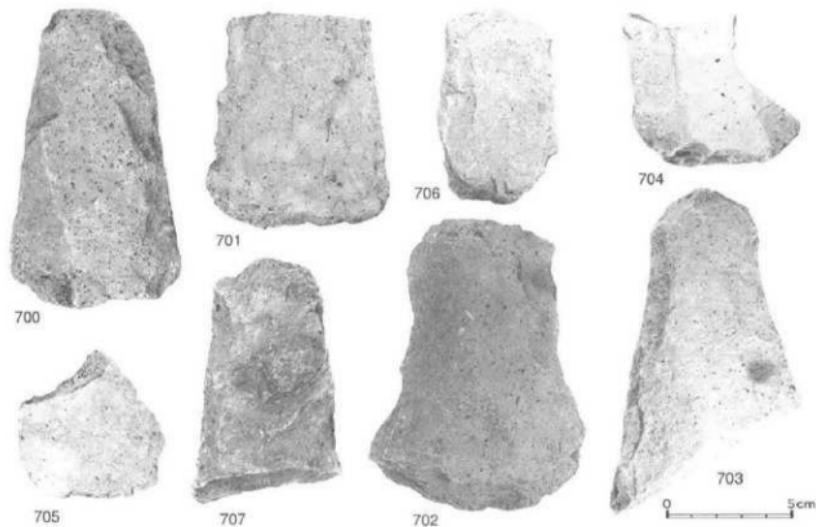
第56図 SK・ST（縄文中期中葉）出土石器



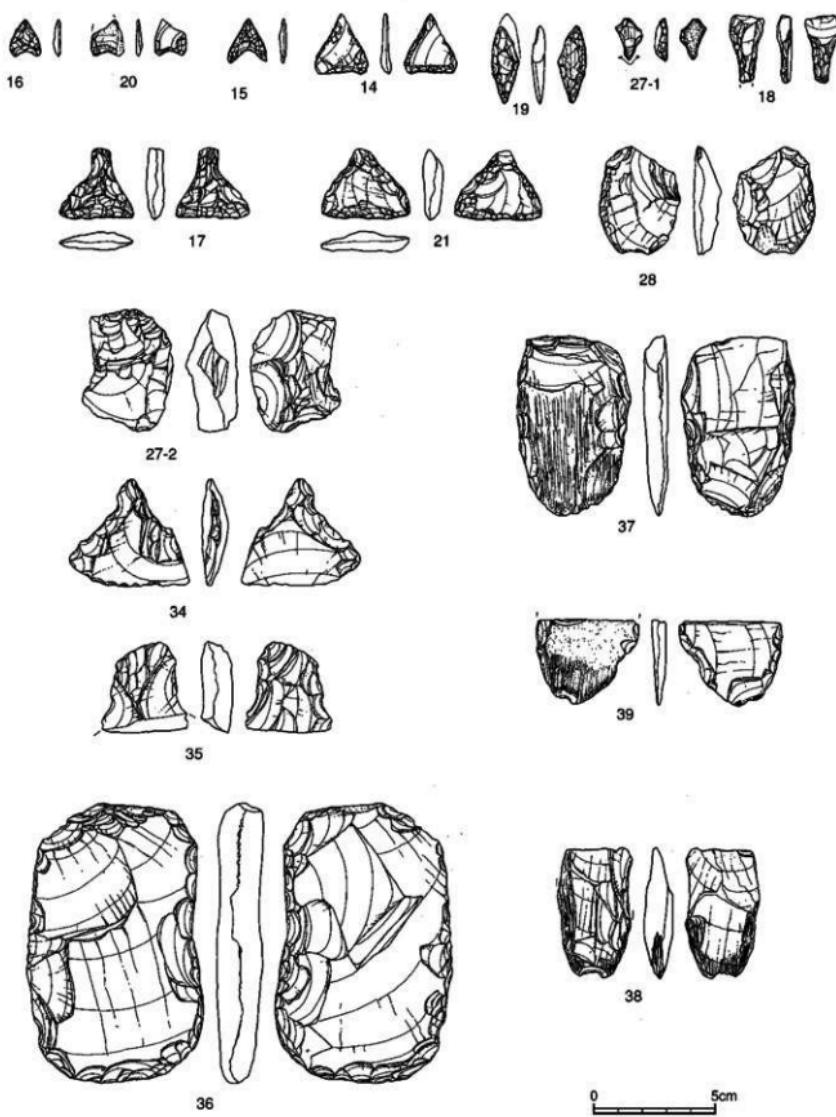
第57図 SQ 1 出土石器（縄文中期中葉）



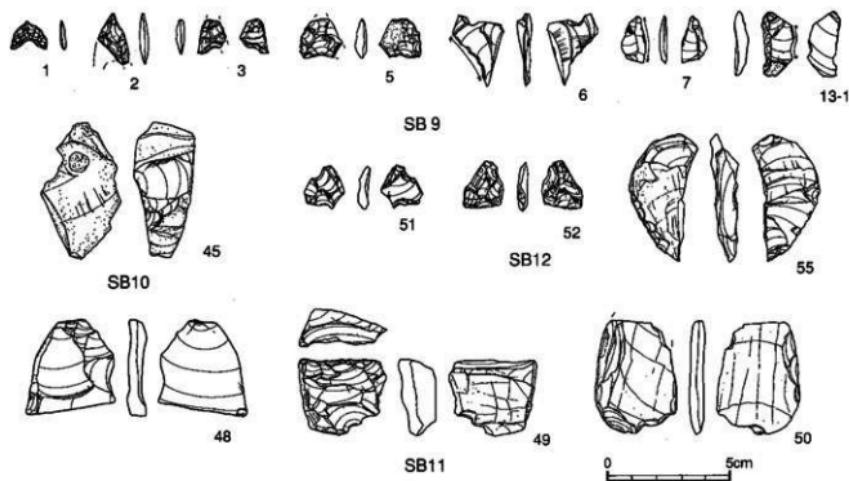
第58図 SK出土石器（縄文後期）



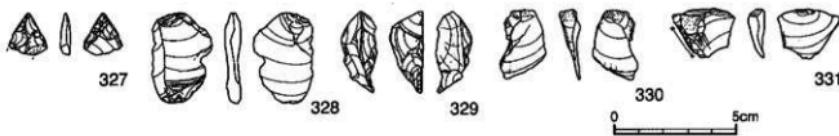
第59図 遺構外出土石器(縄文晩期-弥生)



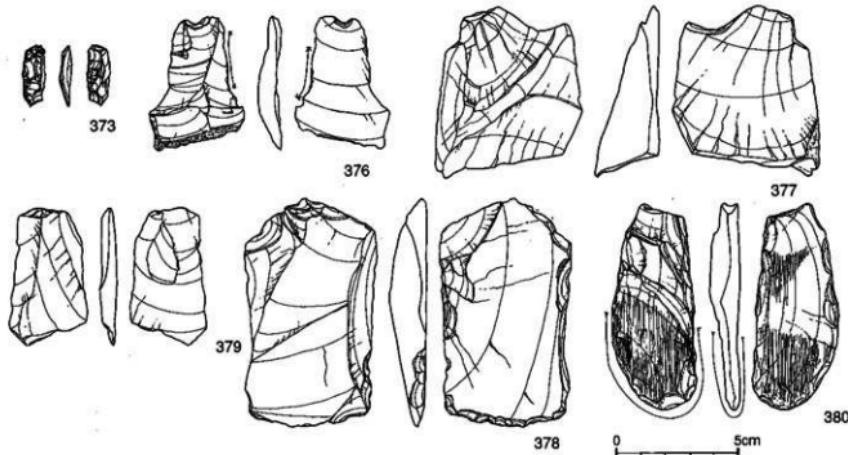
第60図 SB 9 (縄文前期末葉) 出土石器実測図



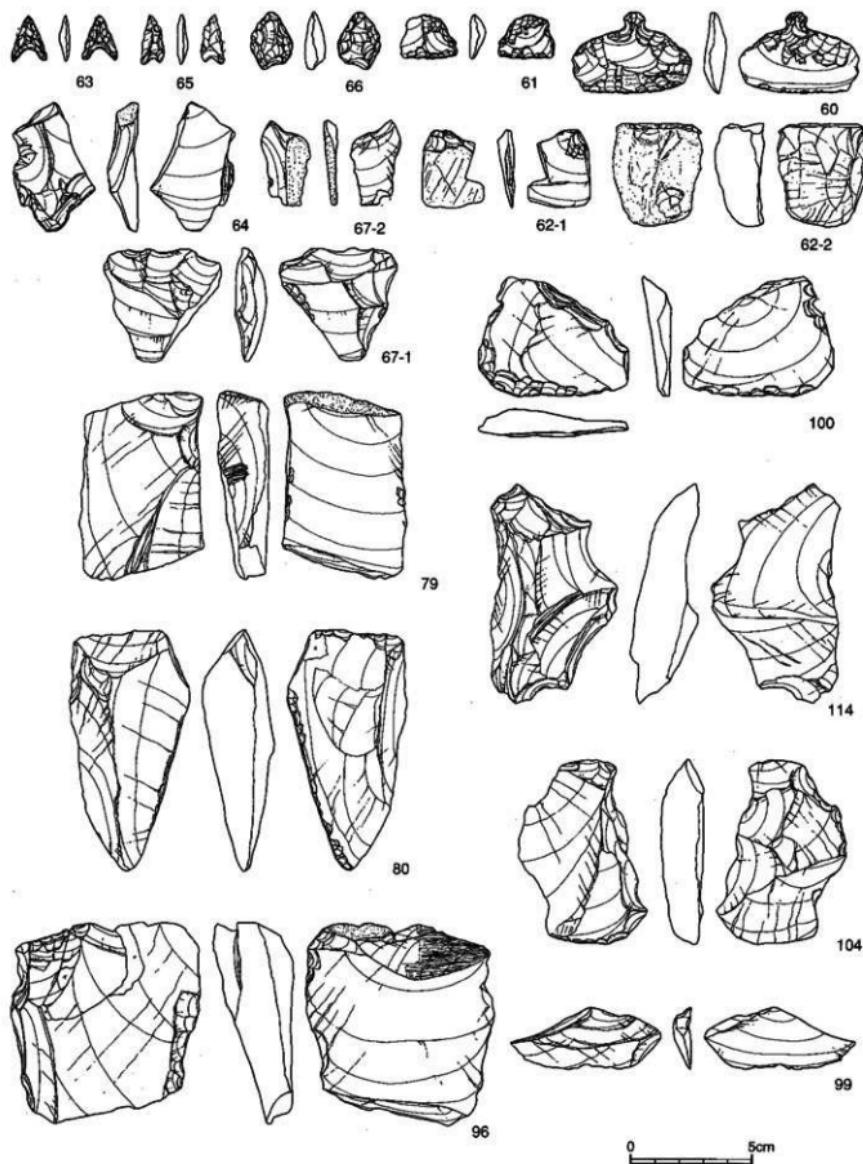
第61図 SB9, 10, 11, 12 (縄文前期末葉) 出土石器実測図



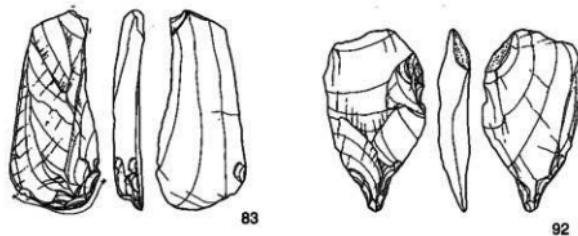
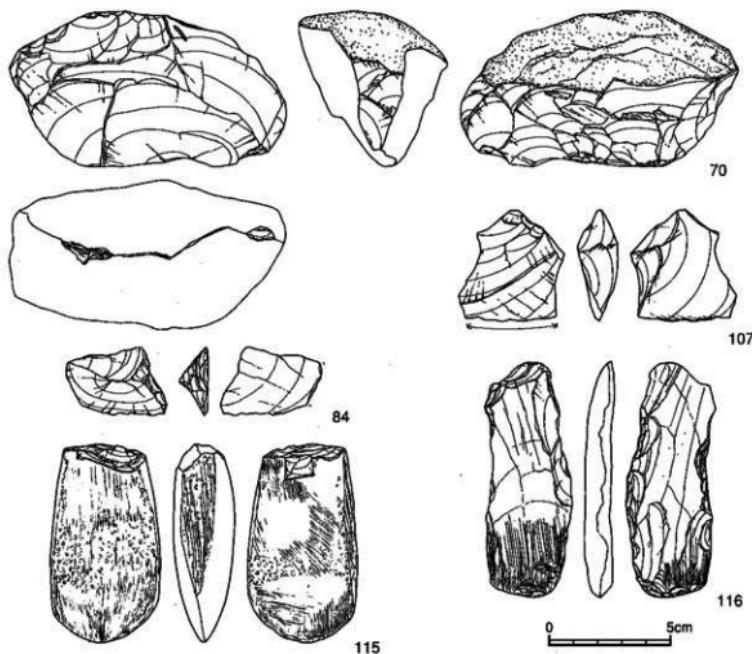
第62図 SK153 (縄文前期末葉) 出土石器実測図



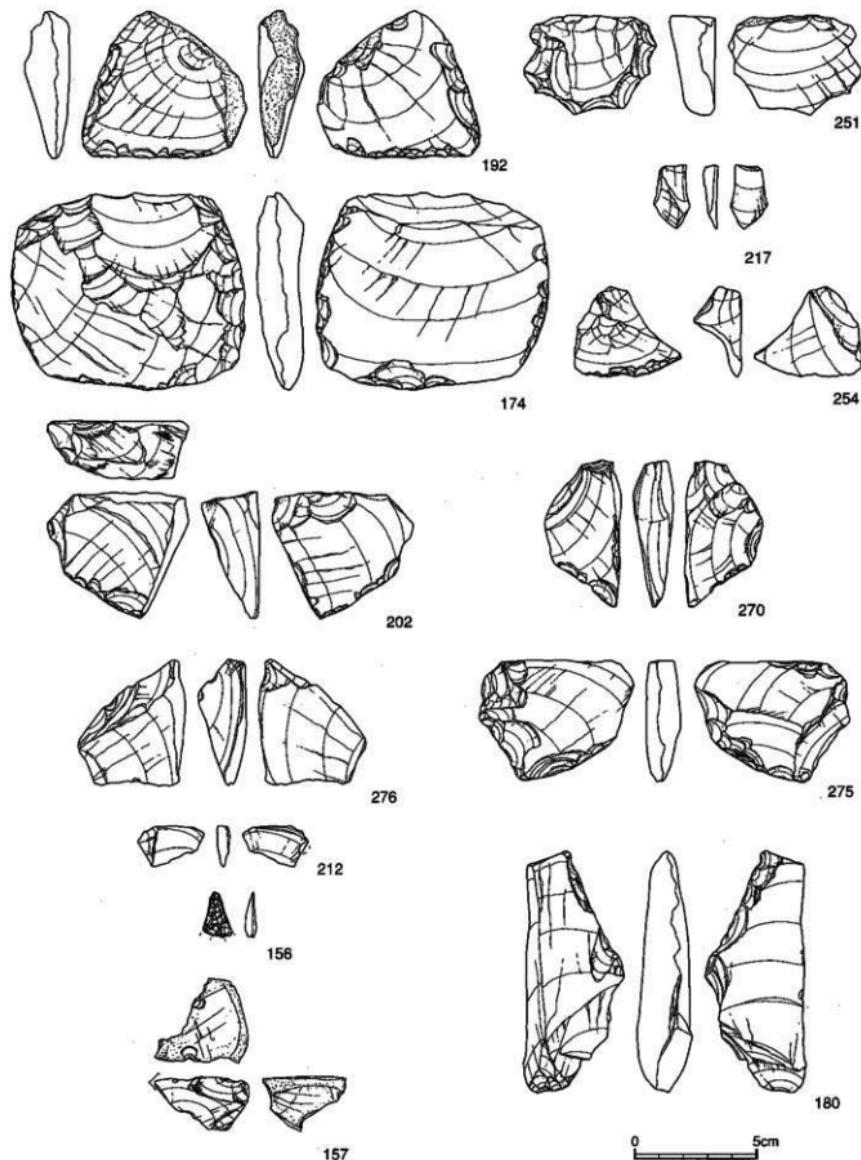
第63図 SQ2 (縄文前期末葉) 出土石器実測図



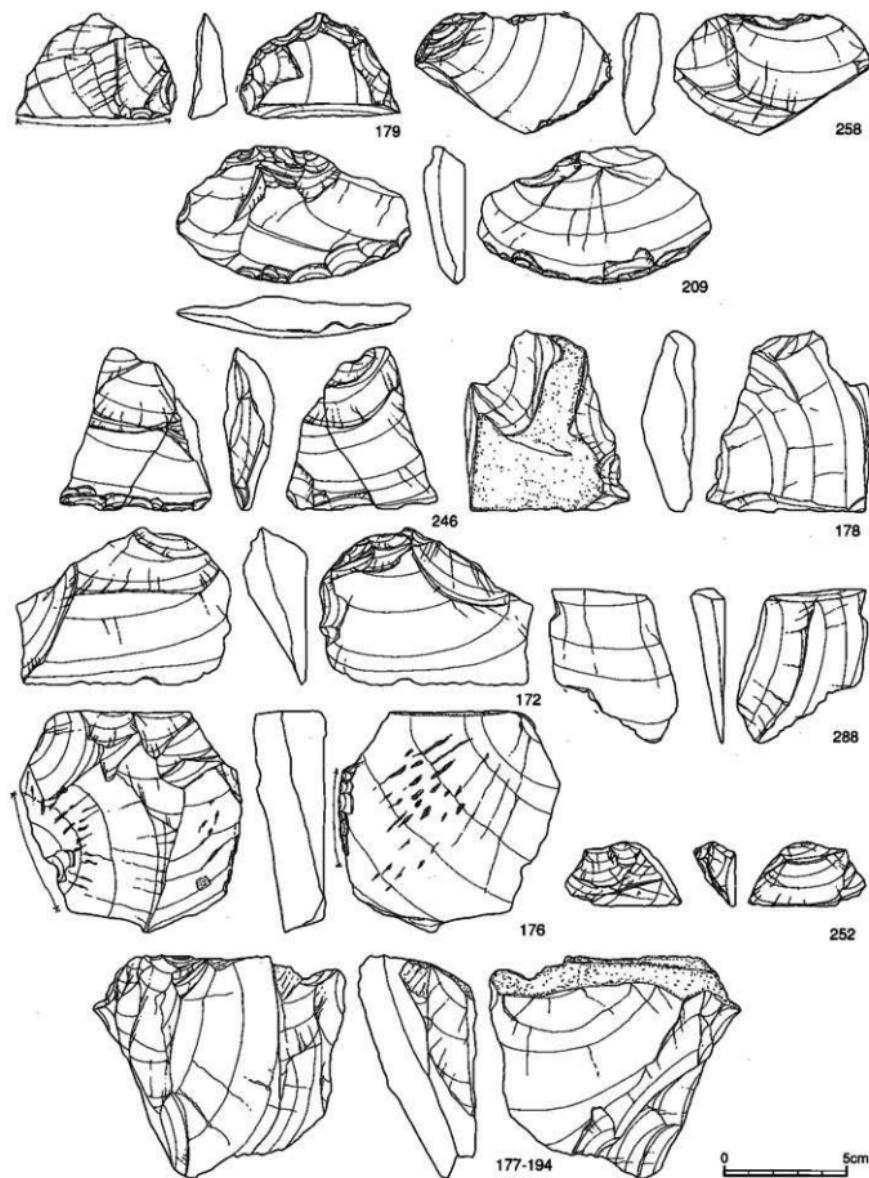
第64図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器実測図



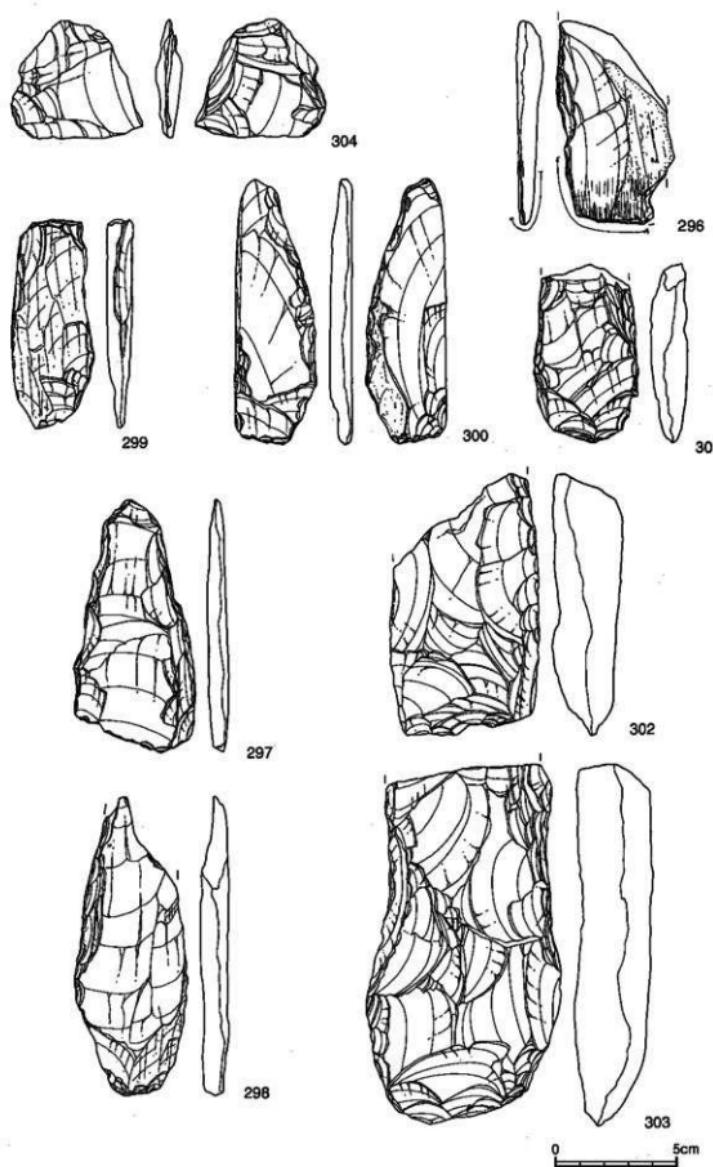
第65図 SB 8 (縄文中期中葉) 出土石器実測図



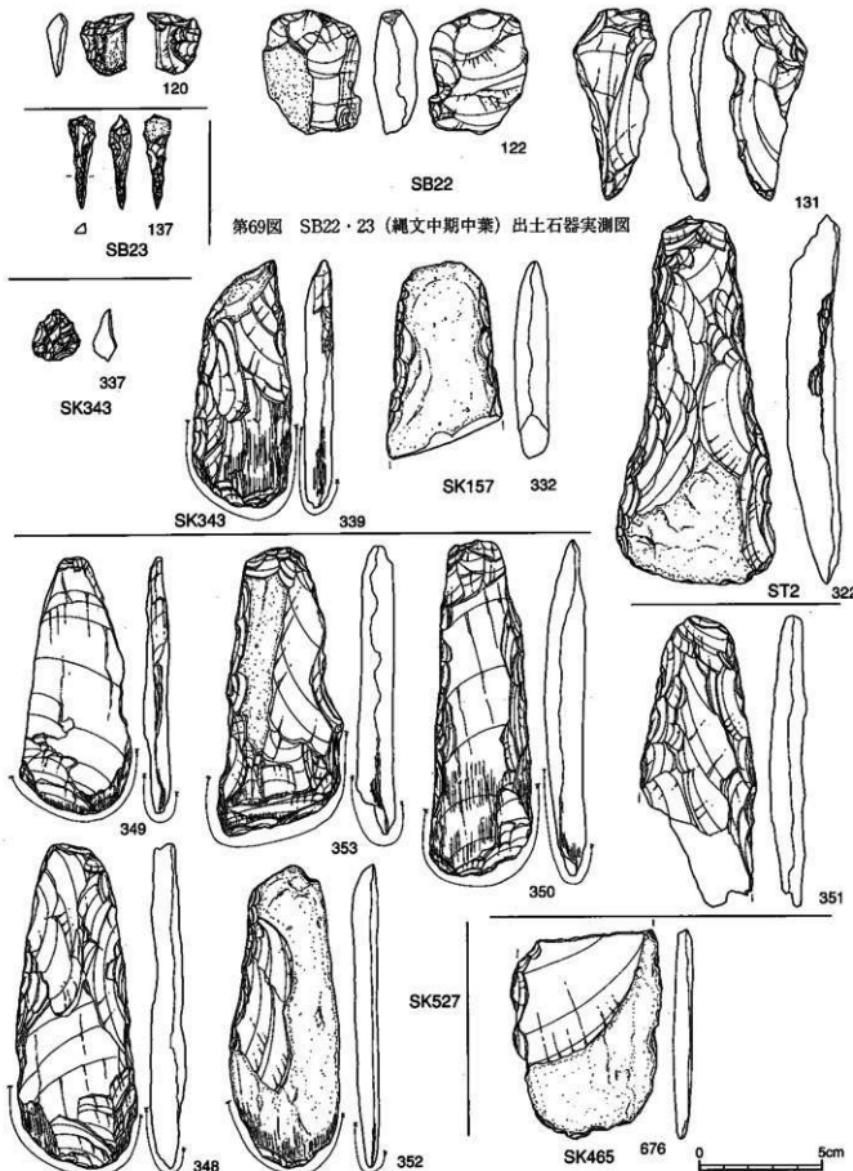
第66図 SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図



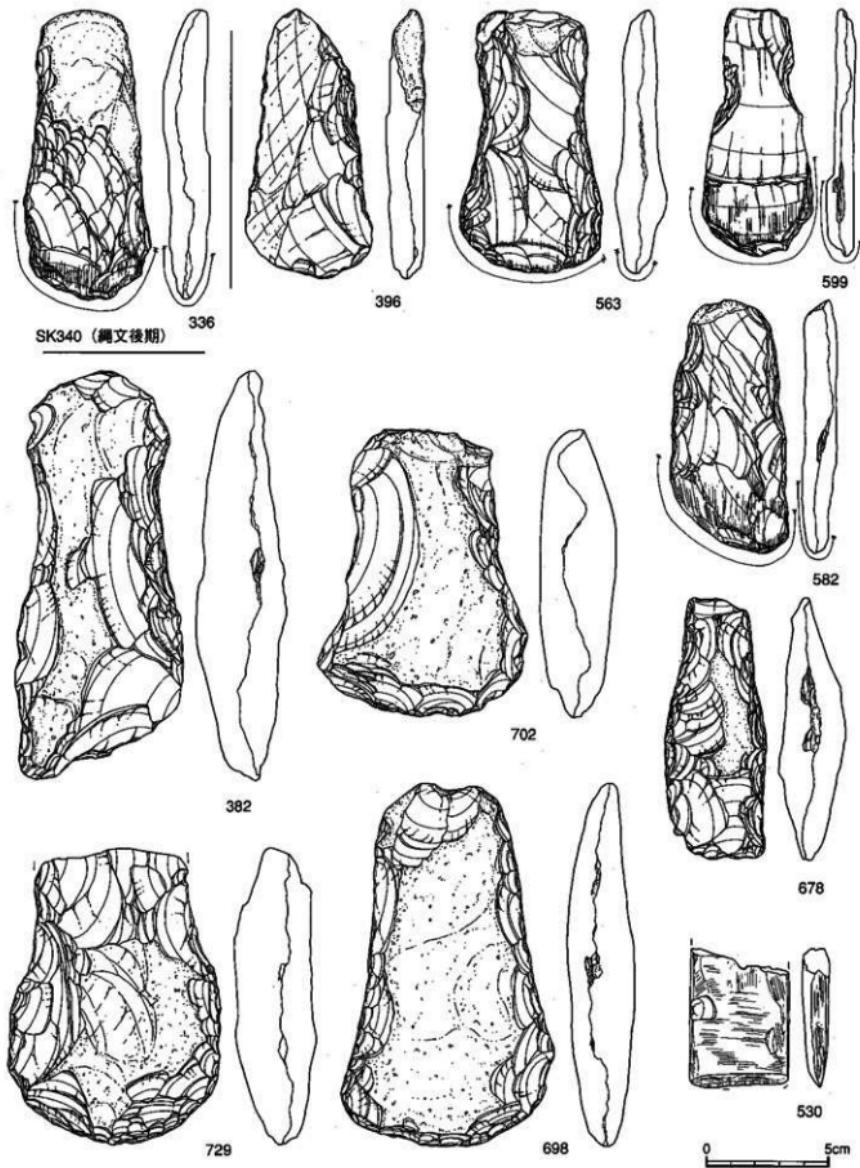
第67圖 SB14（繩文中期中葉）出土石器実測図



第68図 SB14（縄文中期中葉）出土石器実測図



第69図 SB22・23(縄文中期中葉)出土石器実測図



第71図 SK・遺構外出土石器実測図

また次項の使用痕分析によると、珪岩・黒曜石・下呂石は動物資源に対応すると分析されたが、その点からは、前期末葉と中期の石器の内容の差異は、獲得する資源の選択に異変が起きたとも解釈できよう。

今回の分析を通じて、縄文土器の型式変化（段階）が、石器の内容の変化（石材と器種の量の変化）と対応している点が確認された。また、後述する使用痕分析の結果を援用すれば、前期が動物資源に偏り、中期がそれ以外の資源利用という仮説を導き出されたことが、ひとつの成果である。

（角張淳一）

3. 使用痕分析

小島遺跡は縄文文化前期から中期にかけて営まれた集落遺跡であり、木曾谷における縄文集落の一つとして重要な遺跡である。

この小論では、使用痕分析を通して小島遺跡出土剥片石器の機能について考察していきたい。

1) 資料の選択

住居ならびにピット、グリッド出土の30点の石器を分析した。石材はチャート、黒曜石、下呂石である。安山岩は表面風化のため、分析対象から外した。分析した石器器種は、石錐、石匙、刃器、削器であり、両極石器や剥片などは除外した。

2) 観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿子島の分類基準によっている（梶原・阿子島 1981）。微小剥離痕の名称は、阿子島（阿子島 1981）を用いた。

チャートと黒曜石の光沢タイプは御堂島に準じた（御堂島 1986, 88）。

3) 分析結果

分析の結果、10点の石器に使用痕が確認できた。以下、その中から石匙2点について下記に詳述した後、全体の結果をまとめる。

他の石器については、使用痕属性表のデータを参照されたい。属性表の中に、「なし」「不明」の項目がある。「なし」は何も確認できなかったことを指し、「不明」は痕跡が残されているが、不明瞭であるため、光沢タイプなどを決定することができない項目である。

（石匙）

No.60 チャート製の横形石匙である。

[刃部] 刃部は片面加工で直線に近い刃部の形態である。

[表面状態] 良好である。

[光沢] 刃部に、粗いが割と広範囲に広がる光沢がみられる。表面は滑らかな部分もあるが、全体に荒れた様相を呈し、E 2 タイプ光沢と考えられる（第72図：写真1-2）。刃部以外の縁辺には、こうした痕跡はみられなかった（同上：写真3）。

[線状痕] 縁辺に対して、平行方向に走る線状痕がみられた。

[推定される作業] 確認できた光沢や線状痕などから、皮・肉などの切断に利用されたと考えられる。

第3表 使用痕属性表

時 代	段 階	遺構名	通番	石 材	器 種	光 沢	線状痕	摩 耗	図 版
前期末	A	SB 9	6	黒耀石	刃器	なし	平行?	軽微	
前期末	A	SB 9	7	黒耀石	刃器	I	直交	軽微	
前期末	A	SB 9	17	珪岩	石錐	不明	不明	不明	
前期末	A	SB 9	18	珪岩	石錐	なし	なし	軽微	
前期末	A	SB 9	19	珪岩	石錐	F	直交	中程度	
前期末	A	SB 9	21	珪岩	石錐未製品	E2	平行	中程度	
前期末	A	SB 9	27	珪岩	石錐	E2	直交	軽微	
前期末	A	SB 9	28	下呂石	削器	不明	不明	軽微	
前期末	A	SB11	48	珪岩	刃器	E	不明	中程度	
前期末	A	SB12	55	珪岩	石錐	F1?	平行	軽微	
前期末	A	SB12	57	下呂石	刃器	不明	直交?	軽微	
中期中葉	B1	SB 8	60	珪岩	横形石匙	E2	平行	中程度	図1上
中期中葉	B1	SB 8	64	下呂石	援器	なし	なし	軽微	
中期中葉	B1	SB22	120	黒耀石	削器	なし	なし	軽微	
中期中葉	B1	SB22	124	珪岩	刃器	なし	なし	軽微	
中期中葉	B1	SB23	137	黒耀石	石錐	なし	直交?	軽微	
中期中葉末	B3	SB14	160	珪岩	石錐	不明	不明	軽微	
中期中葉末	B3	SB14	164	下呂石	石錐	なし	なし	軽微	
中期中葉末	B3	SB14	165	下呂石	刃器	不明	平行	軽微	
中期中葉末	B3	SB14	166	下呂石	刃器	なし	なし		
中期中葉末	B3	SB14	167	下呂石	刃器	不明	平行?	軽微	
前期末	A	SK153	326	黒耀石	刃器	なし	なし	なし	
前期末	A	SK153	328	珪岩	刃器	F?	不明	軽微	
前期末	A	SK153	329	珪岩	石錐	E?	直交	中程度	
前期末	A	SK153	331	珪岩	刃器	F?	不明	軽微	
中期中葉末	B3	SQ 1	355	珪岩	縱形石匙	不明	不明	中程度	図1下
中期中葉末	B3	SQ 1	357	珪岩	極小石錐	不明	不明	軽微	
前期末	A	SQ 2	373	黒耀石	刃器	なし	なし	なし	
前期末	A	SQ 2	375	珪岩	刃器	なし	なし	なし	
前期末	A	SQ 2	376	珪岩	刃器	なし	なし	なし	

No.355 チャート製の縦形石匙である。

【刃部】両面加工で、割と直線的な刃部である。

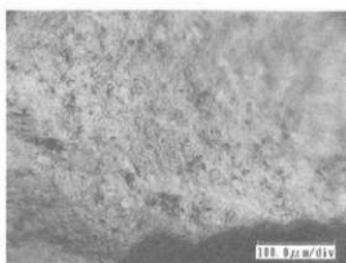
【表面状態】全体に光沢で覆われている（同上：写真2）。

【光沢】、縁辺の稜線上に摩耗と光沢がみられた（同上：写真1）。石器表面にみられる光沢と異なる点は、縁辺の光沢は摩耗をともなうことであり、表面とは様相が異なる。

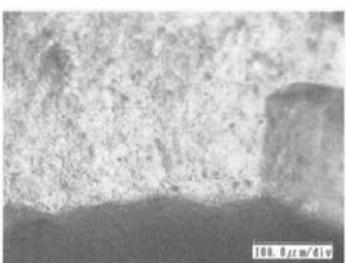
【線状痕】縁辺に対して、平行方向に走る線状痕がみられた。

【推定される作業】光沢タイプは不明であるが、微小剥離痕が発達しないことから、被加工物は皮や肉など柔らかいものが考えられる。

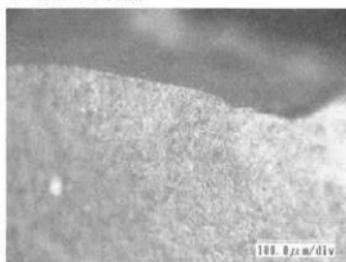
（刃器・削器）



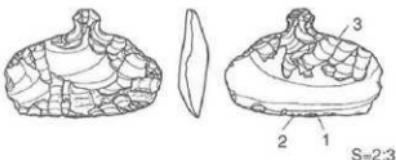
1 E2タイプ光沢



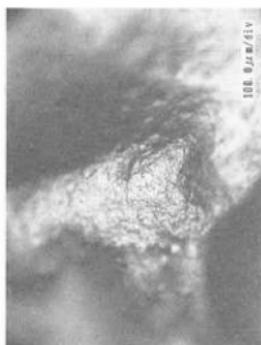
2 E2タイプ光沢



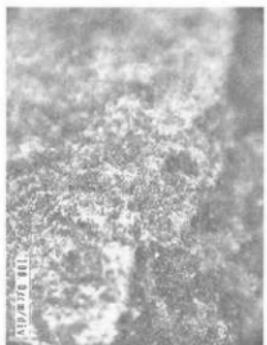
3 刀部以外の縁辺の状況



SB8出土 MOJ-60



1 棱上にみられる光沢と摩耗



2 石器の表面



SQ1出土 MOJ-355

第72図 石器の使用痕写真

刃器・削器は、確認できた光沢はEやFタイプであり、他の光沢タイプはみられなかった。線状痕は平行方向がほとんどであるため、主に被加工物の切断に使用されたと推定される。被加工物は、微小剥離痕の発達が弱いことから比較的柔らかいものが考えられ、さらに光沢タイプから、肉や皮などが想定できる。使用痕の発達は石匙の方が強いことを除けば、刃器・削器にみられた使用痕と石匙とは、非常に近い内容であるといえる。

(石錐)

石錐は、明確な光沢はみられないが、軽微の摩耗がみられた。1点棒状の形態に中程度の摩耗がみられ、他の摘みつき石錐と、摩耗の程度が異なる。

※時期的変遷

小島遺跡は縄文前期、中期中葉と後葉の3時期に大きく分かれる。剥片石器の使用痕分析の結果では、この3時期に大きな相違は認められなかった。

4)まとめ

小島遺跡の使用痕分析の結果、チャートや黒曜石、下呂石製剥片石器は、主に動物資源の処理に利用されていたことが考えられる。この傾向は、縄文前期から中期にかけて、大きく異なることはなく、前期・中期を通して、石器の使用方法は同じであったと考えられる。

最後に木曾谷における使用痕分析の今後の大きな課題をとりあげたい。この遺跡の主要な石器の一つに、安山岩製石器がある。特に中期になると、その出土量は、チャートや黒曜石などの剥片石器を圧倒的にしのいで出土している。安山岩製石器の刃部を観察すると、低角度と急角度があり、また微小剥離痕や摩耗の発達程度に変位がある。それぞれ作業に適した刃部が作出されたと思われる。

小島遺跡の剥離技術分析などを属性分析にかけた結果、前期と中期の間に大きな有意性が確認された。一方で、中期内での有意性はそれほどではない。この差の大きな原因の一つに安山岩製石器の存在があると考えられる。つまり、中期以降、小島遺跡において、安山岩製石器の果たした役割が大きくなり、安山岩製石器が小島遺跡における生業活動に大きくかかわったと考えられる。

木曾谷の縄文遺跡を研究する上で、安山岩製石器の分析は避けて通れない問題である。低倍率分析などによって線状痕や微小剥離痕など分析し、安山岩製石器の機能を追求していくなければならない。

(高橋 哲)

参考文献

阿子島香 1989 「石器の使用痕」考古学ライブラリー 56 ニュー・サイエンス社

鶴原洋・阿子島香 1981 「真岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能鑑定の試み—(東北大使用痕研究チームによる研究報告
その2)」『考古学雑誌』 67-1 pp.1-35

鶴堂島正 1986 「黒曜石製石器の使用痕—ポリッシュに関する実験的研究—」『神奈川考古』 22 pp.51-77

1988 「使用痕と石材、チャート、サスカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ-」『考古学雑誌』 74-2 pp.1-28

第Ⅳ章 古代～中・近世の遺構と遺物

第1節 遺構

今回の発掘調査で出土した当該期に帰属する遺構は、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡1棟、土坑102基以上、柵列状遺構8条を数える。小ピット状のものが主体を占める土坑に不確実な調査所見が多く残されているが、ほぼすべて平安時代の所産と考えられ、数時期にわたる集落遺跡の存在が明らかとなった。調査区外におよそ多くの遺構の存在が予測されることから、遺跡と集落をめぐる全体像の解明については、前章に記した原始時代のそれと同様に、今後の調査に委ねられた重要な課題といえる（第73図）。

以下、調査された遺構の個別的な記録を所見とともに記す。

1) 竪穴住居跡

SB1（第74図、図版8）

位置 上位段丘面のIV区、C-13グリッドに位置する。南西側にSB2が分布する。

形状 平面形は方形を呈すると思われるが、北半分は不明瞭である。推定長径480cm、短径360cm以上、確認部の床面積14.27m²を測る。長軸方向はN-72°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、確認部の最大壁高は50cmを測る。確認面は基本土層AのⅢ層である。

覆土 3層に分けられる。第3層は観察記録を欠いているが、貼床埋土にあたる。

第1層 暗褐色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の焼土・炭化物を含む。）

第2層 暗褐色土層（粘性・しまりに欠ける。）

床面 Ⅲ層中に形成されていた。やや起伏をもち、床面中央部付近には比較的平坦な貼床面が形成されていた。

柱穴 認められなかった。

カマド 南西隅近くに構築されていたものと思われる。上部に粘性のある土が堆積していたほか、焼土面には構造材と思われる平たい礫が敷かれたように遺存していた。上部構造など全容は不明である。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 覆土中より光ヶ丘1～大原2号窯式期の碗1点、灰釉陶器片1点、土師器壺1点、甕1点、土師器片6点、カマド付近より灰釉陶器碗1点（大原2号窯式？）が出土した（第89図1～4）。

時期 伴出器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原2号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

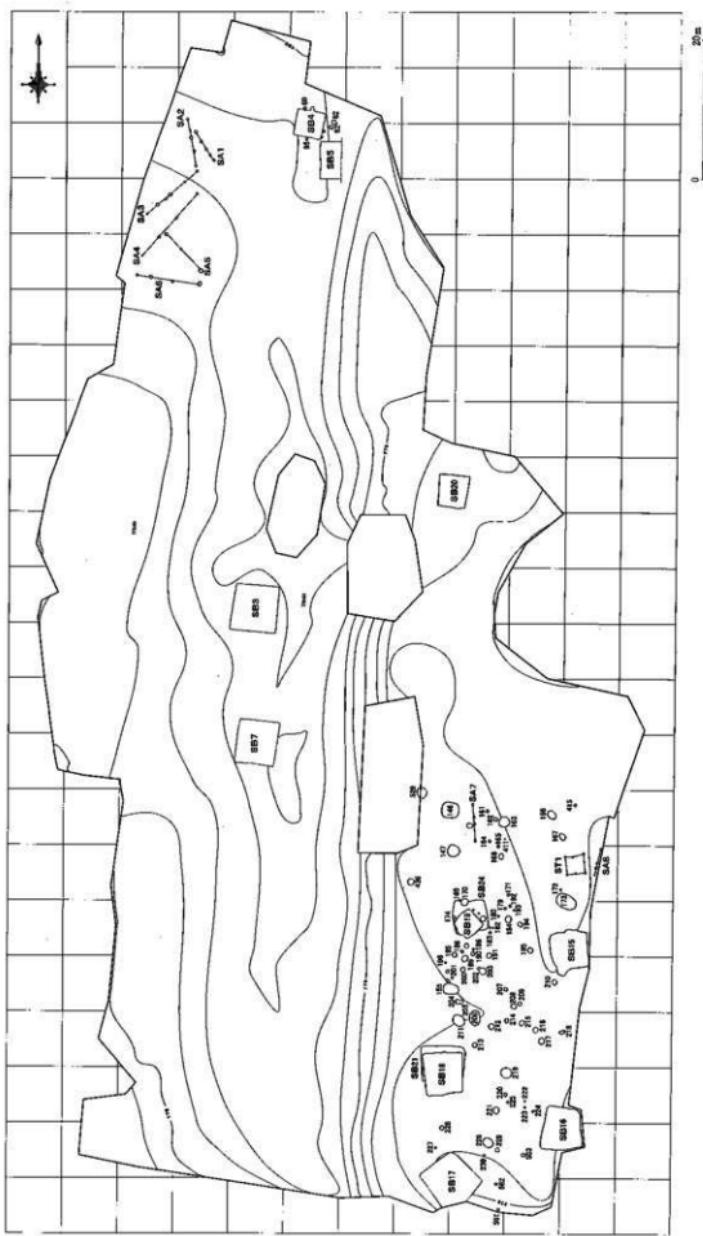
SB2（第75図）

位置 上位段丘面のIV区、B-14グリッドに位置する。北東側にSB1が分布する。

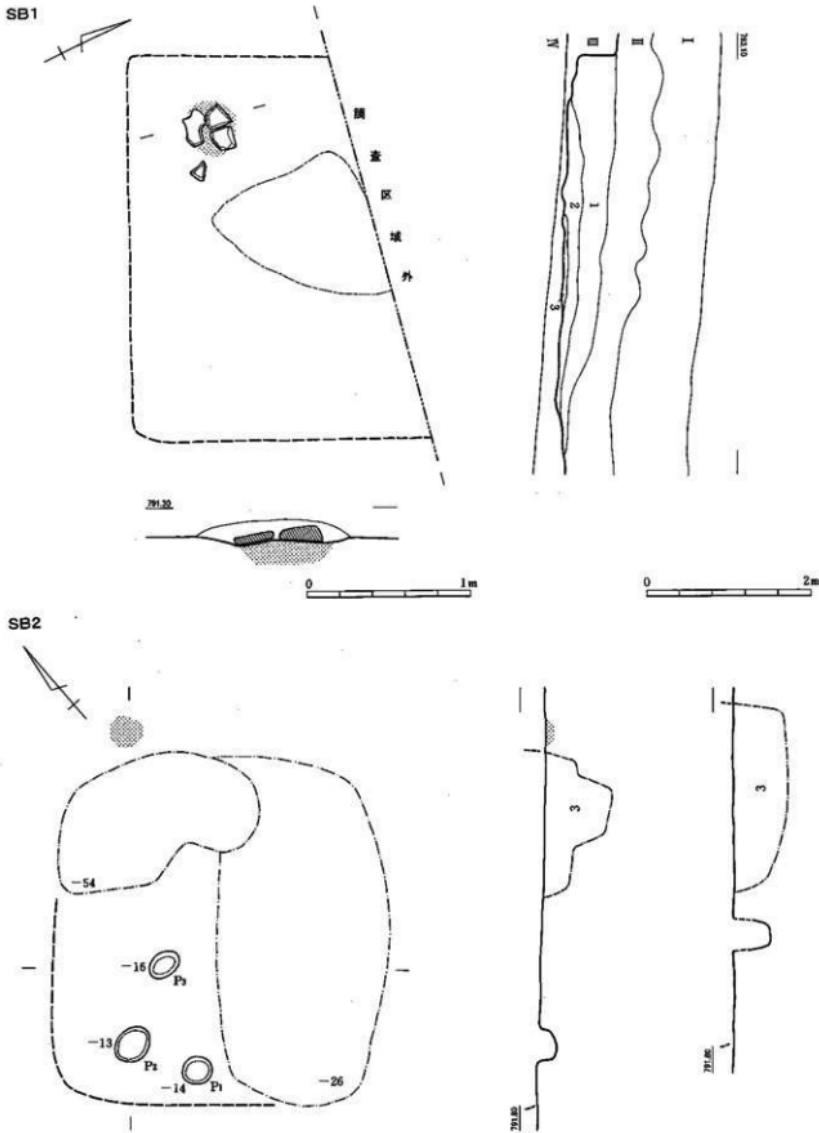
形状 各所に調査時の削平を受けているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径410cm、推定短径400cm、確認部の床面積16.20m²を測る。長軸方向はN-44°-Eを示す。壁は確認できなかった。確認面は基本土層AのⅢ層である。

覆土 3層に分けられる。第3層は掘り方内埋土にあたる。

第1層 暗褐色土層（P2埋土）



第73図 古代・中世の遺構分布図（1：700）



第74図 SB1・2 実測図

第2層 黒褐色土層 (P1・P3埋土)

第3層 暗褐色土層 (掘り方埋土)

床面 Ⅲ層中に形成されているものと思われるが、調査時に掘り抜いてしまったため、全容は不明である。

床面下部に広い範囲にわたって落ち込みが認められた。調査段階では本址に伴う掘り方と考えたが、70～80cmと非常に深く、推測の域を出ない。

柱穴 住居内南西側から3個のピットが検出された。口径35～50cm、深さ15～25cmを測る。本址に伴う柱穴の可能性も考えられるが、配列には規則性がみられず、断定できない。

カマド 北東隅近くに構築されていたものと思われる。焼土面が出土しただけであり、構造等の全容は不明である。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 掘り方内より灰釉陶器碗片1点(虎渓山1号窯式)が出土した(第89図2)。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、虎渓山1号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB3 (第75図、図版8)

位置 中位段丘面のI区、R-16グリッドに位置する。南側にSB7が分布する。

形状 全体に耕作による擾乱を受けているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径670cm、推定短径670cm、確認部の床面積43.77m²を測る。主軸方向はN-83°-Wを示す。中央部から東側にかけて覆土が10cmほど堆積するものの、床面より上部はほとんど削平されており、壁は確認できなかった。

覆土 2層に分けられる。

第1層 黒褐色土層 (粘性・しまりに欠ける。多量の砂粒を含む。)

第2層 黒褐色土層 (粘性・しまりに欠ける。少量の黄褐色土ブロック、多量の砂粒を含む。)

床面 中央部から東側にかけて粘土質の土を用いて貼床面が形成されていた。わずかに起伏をもつ。掘り方は南西部付近で部分的に検出された。範囲は確認できなかったが、深さは10cm以上と推測される。

柱穴 住居内より8個のピットが検出された。P1・8は口径64～70cm、深さ20～24cm、P2～7は口径30～40cm、深さ11～18cmを測る。中央部から東北部にかけて不規則に分布しており、主柱穴として特定できるものはみられない。

カマド 西壁は中央部に位置する。左袖部と焼土面以外は削平されている。袖は粘土で作られており、焼土面は掘り込みを伴う。東壁際より深さ5cmほどの掘り込みを伴う焼土面が認められたが、上部に特別な施設は認められず、カマドとの関係は不明である。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 覆土中よりカマド付近にかけて灰釉陶器片159点のほか、土師器・須恵器の小片、火打ち鉄1点などが出正在している。光ヶ丘1号窯式期の碗1点、皿1点、大原2号窯式期の碗3点、皿7点、時期不明の碗1点、灰釉長頸壺1点、土師器壺1点、須恵器片1点を図示した(第89・94図6～20、115)。

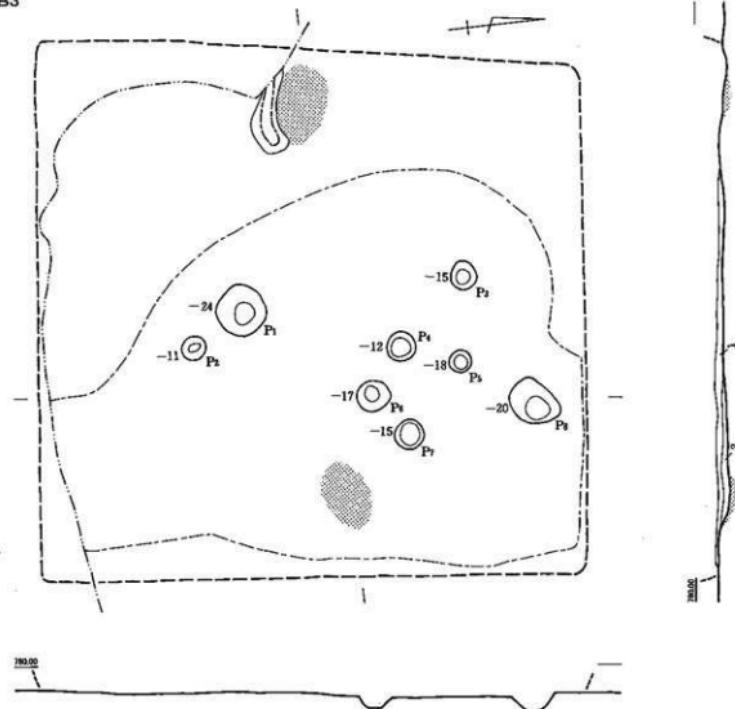
時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原2号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB4 (第76図、図版8)

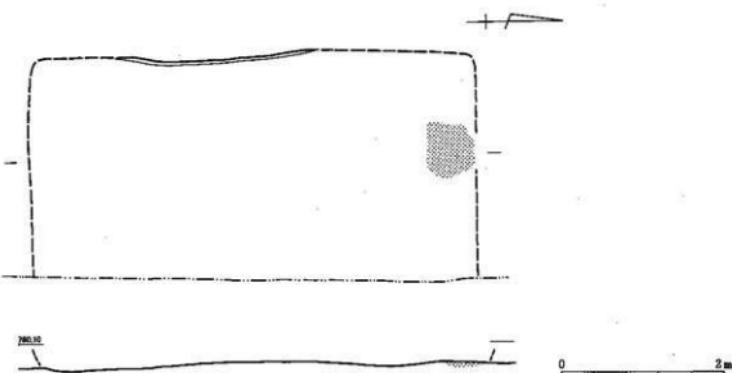
位置 中位段丘面の上部平坦面のI区、S-7グリッドに位置する。南東側にSB5が近接分布する。

形状 全体に耕作による擾乱を受けているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径400cm、推

SB3



SB5



第75図 SB 3・5 実測図

定短径380cm、確認部の床面積15.33m²を測る。長軸方向はN-10°-Eを示す。壁は認められなかった。

覆土 多量の小礫を含む暗褐色土が堆積していた。

床面 耕作により削平されていたが、北東隅付近で掘り方が認められた。

柱穴 住居内より2個のビットが検出された。北西隅近くに位置するP2は口径30cm、深さ11cm、南壁寄りのP3は口径55cm、深さ24cmを測る。P2は位置的にみて本址に伴う柱穴であった可能性が考えられるが、断定できない。この他、住居を囲むように4個のビットが検出された。口径30~40cm、深さ6~19cmを測り、壁柱穴との関連も考えられる。

カマド 北壁中央部に構築されていた。径50cmほどの円形の範囲に焼土面が残されていたのみであり、掘り込みや袖部も認められなかった。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 挖り方内より大原2号窯式期例を含む灰釉陶器4点が出土した（第89図21）。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原2号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB5（第75図、図版9）

位置 中位段丘面の上部平坦面山側のI区、S-8グリッドに位置する。北西側にSB4が分布する。

形状 東半分が耕作により削平されているが、平面形は方形を呈するものと思われる。推定長径540cm、短径270cm以上、残存部の床面積15.07m²を測る。長軸方向はほぼ北を向くものと思われる。壁は西側の一部で確認されただけであり、確認部の最大壁高は10cmを測る。

覆土 挖り方内埋土と思われる暗褐色土が堆積していただけである。

床面 耕作により削平されていた。

柱穴 認められなかった。

カマド 北西隅近くから長径65cm、短径55cmの焼土面が検出され、位置関係などからカマドの痕跡と判断した。掘り込みはほとんどみられなかった。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 南壁付近より灰釉陶器長頸甌1点、灰釉陶器片2点、掘り方内より大原2号～虎渓山1号窯式期の碗1点が出土した（第89図22・23）。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前～後半、大原2号～虎渓山1号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB7（第76図）

位置 中位段丘面の上部平坦面のI区、R-19グリッドに位置する。北側にSB3が分布する。

形状 全体に耕作による搅乱を受けているが、平面形は長方形を呈するものと思われる。推定される規模は長径630cm、短径560cm、推定床面積は36.77m²を測る。長軸方向はN-6°-Eを示す。耕作により壁は削平されていた。

覆土 周溝内埋土と思われる黒褐色土が堆積していた。

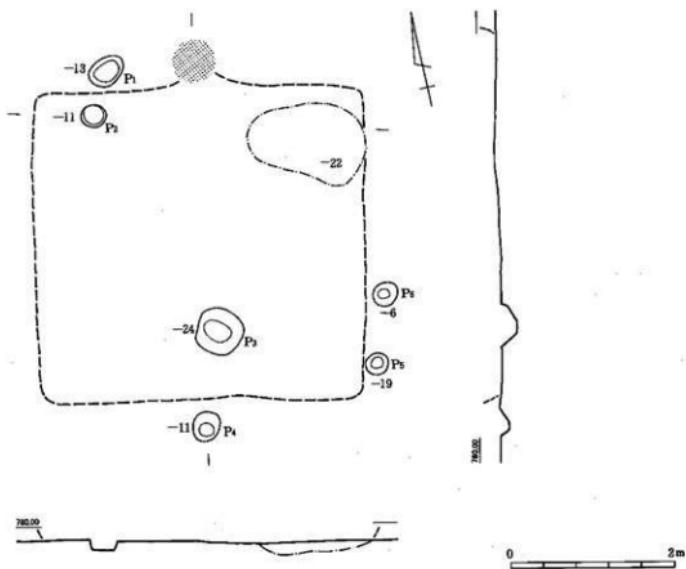
床面 耕作により削平されていた。北西側から幅30cm、深さ10cmの周溝が検出された。

柱穴 認められなかった。

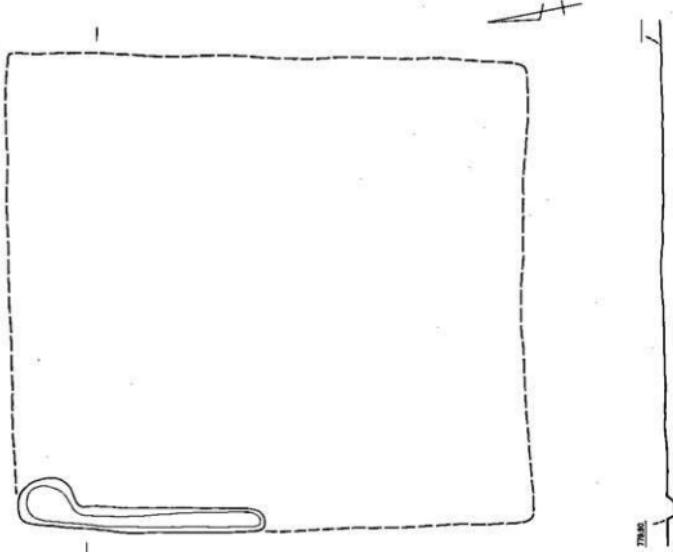
カマド 認められなかった。

内部施設 認められなかった。

SB4



SB7



第76図 SB4・7 実測図

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や住居の形状などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SB15（第77図、図版9）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-23グリッドに位置する。北側にST1が分布する。

形状 東側を削平されているが、平面形は不整な方形を呈するものと思われる。長径550cm、推定短径540cm、確認部の床面積は28.73m²を測る。長軸方向はN-6°-Wを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は24cmを測る。確認面は基本土層CのII層である。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

床面 II層中に形成されていた。比較的平坦である。掘り方は認められなかった。

柱穴 住居内より12個のピットが検出された。口径30~50cm、深さ8~35cmを測り、南側と北側に集中する傾向をみせている。特にP1・2・4とP9・10・11は対応する位置にあり、本址に伴う柱穴と推測される。

カマド 新旧2基のカマドが構築されていた。新カマドは南西隅に大きく張り出しており、石組みカマドと推測される。上部に角礫を集中分布させた暗黄褐色土が厚く堆積し、焼土面には多数の偏平な礫が上部を覆うように遺存していた。旧カマドは北壁中央部に位置し、焼土面のみ残存していた。テラス状の張り出しを伴い、付近には焼土粒を含んだ土が広がっていた。この他、南東隅近くから焼土面が検出された。残存部の長径90cmを測り、深さ10cmほどの掘り込みを伴うが、カマドとの関係は不明である。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 中央部付近を中心として、灰釉陶器片82点、土師器16点、鉄製品として釘2点、砥石1点が出土している。底部に「芳蘭」の墨書が残された灰釉陶器が含まれる（第90・94図24~34、116・117）。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉、9世紀後半、光ヶ丘1号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB16（第78図、図版10）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-26グリッドに位置する。南東側にSB17が分布する。

形状 遺構検出にやや不明な点を残すが、平面形は不整な方形を呈する。長径620cm、短径610cm、床面積は32.54m²を測る。長軸方向はN-9°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は36cmを測る。確認面は基本土層CのII層である。

覆土 4層に分けられる。第2・第3・第4層はカマド内埋土にあたる。

第1層 黒色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物・白色砂粒を含む。）

第2層 黒色土層（粘性・しまりに欠ける。明黄褐色ブロックを含む。）

第3層 黒色土層（粘性・しまりに欠ける。多量の明黄褐色ブロックを含む。）

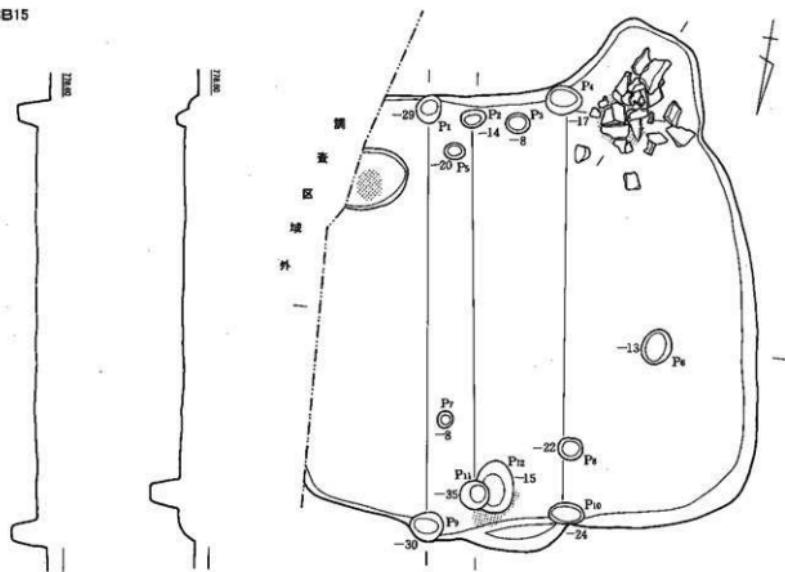
第4層 黑褐色土層（粘性・しまりに欠ける。炭化物・白色砂粒を含む。）

床面 調査時の掘り過ぎのため不明瞭であるが、平坦な貼床面が形成されていたものと思われる。

柱穴 住居内より9個のピットが検出された。カマド両側から検出されたP7・8と規則的な配置をみせるP4・5（6）は、本址に伴う主柱穴と推測される。口径48~68cm、深さ12~16cmを測り、P4・7と同一線上ほぼ中央に位置するP2には、作業用ピットなどの機能が推定される。

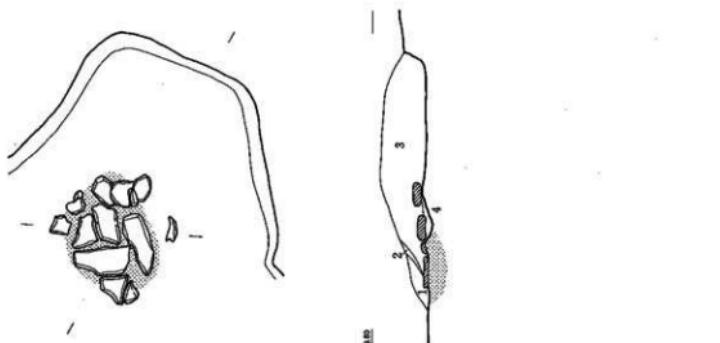
カマド 北壁中央部に石組みカマドが構築されていた。左袖部の袖石と天井石の一部が残存していた。堆

SB15



78.40

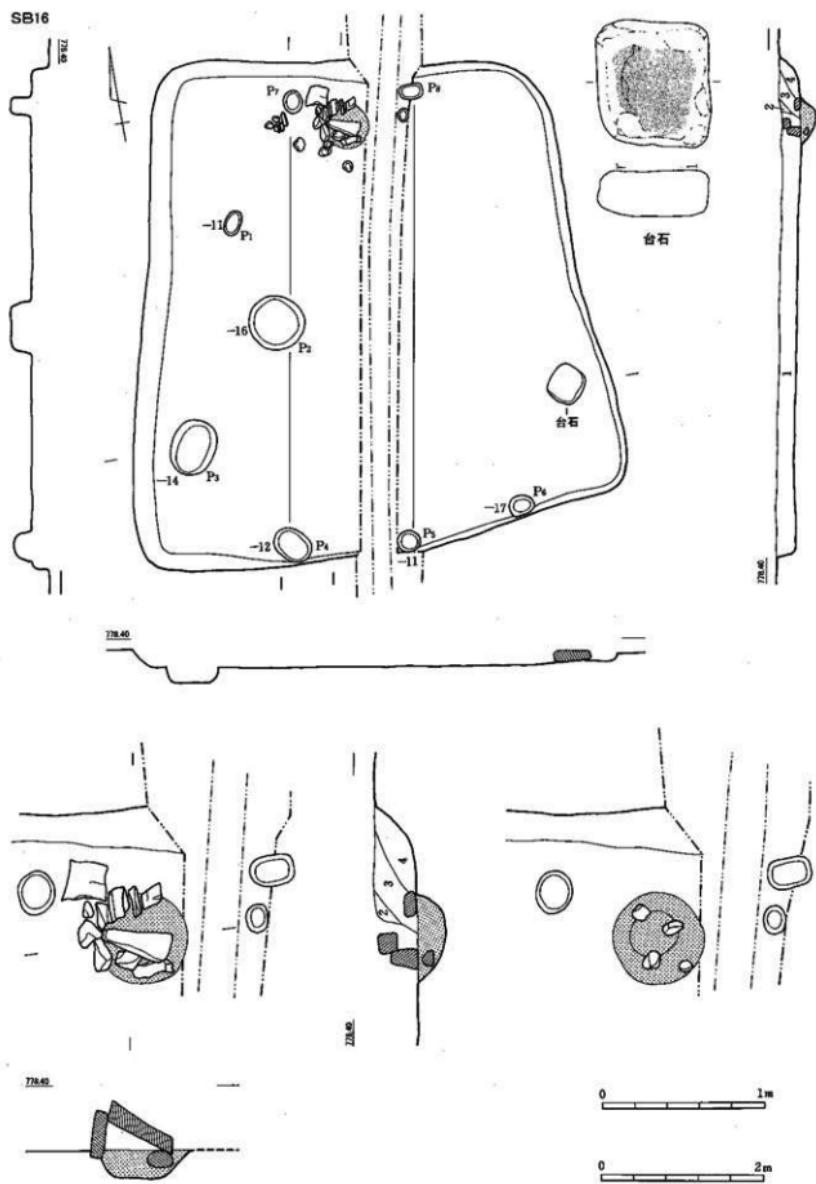
0 2m



78.40

0 1m

第77圖 SB15 實測圖



第78図 SB16 実測図

積した焼土内には小形の礫が4個配置され、支脚的な用途が考えられる。

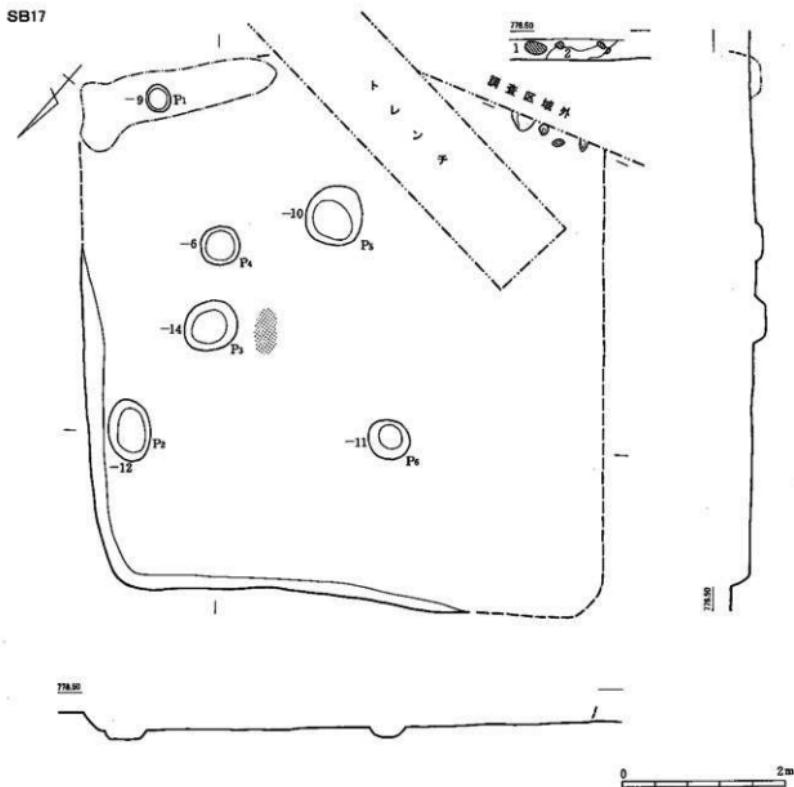
内部施設 南東隅近くの床面から径約40cm四方の平坦な礫が検出された。使用痕が残されており、作業用の台石として使用されていた可能性が考えられる。

出土遺物 カマド内より光ヶ丘1号窯式期の碗底部1点、カマド左側礫集中部より土師器蓋1点、覆土中より大原1号窯式期の皿1点、須恵器長頸壺脣部片1点、土師器甕口縁片1点のほか、灰釉片10点と土師器片19点が出土した（第90図35～39）。また、覆土中より鉄滓1点が出土している。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉、9世紀後半、光ヶ丘1号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB17（第79図、図版10）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-27グリッドに位置する。北東側にSB16が分布する。



第79図 SB17 実測図

形状 南側が調査区域外にかかるが、平面形はほぼ方形を呈するものと思われる。推定長径650cm、推定短径640cm、確認部の床面積43.02m²を測る。長軸方向はS-43°-Eを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、残存部の最大壁高は23cmを測る。確認面は基本土層CのII層である。

覆土 暗褐色土が堆積していた。

床面 明確には確認できなかったが、何層かにわたって薄い硬化面が重なるように分布していた。南東隅より溝状の掘り方が検出された。深さ10cmほどを測り、底面は起伏に富む。

柱穴 住居内より6個のビットが検出された。口径35~85cm、深さ6~14cmを測る。配列には明瞭な規則性は認められない。

カマド 南西隅に構築されていたものと思われる。カマドの構築材と推測される礫の周辺に焼土がわずかに散在していた。

内部施設 中央部よりやや北東寄りの床面に焼土が堆積していた。長径60cm、短径25cmの長楕円形を呈するが、掘り込みは認められず、性格は不明である。

出土遺物 ほとんど覆土中よりの出土である。高台に耕痕が付着した山茶碗小碗、同小皿のほか、青磁片3点・混入品と推測される灰釉陶器片などが出土している（第90図40~44）。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代末葉、11世紀後葉から12世紀前半、尾張3~5型式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB18（第80・81図、図版11）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-25グリッドに位置する。北側でSB21を切る。

形状 平面形は長方形を呈する。長径610cm、短径560cm、床面積32.96m²を測る。長軸方向はN-6°-Wを示す。壁は急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は51cmを測る。確認面は基本土層CのII層である。

覆土 7層に分けられる。第6・7層はビット内埋土にあたる。

第1層 黒褐色土層（粘性をもち、しまる。少量の赤色土粒を含む。）

第2層 黒褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。多量の礫を含む。）

第3層 黒褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。少量の赤色土粒を含む。）

第4層 暗褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。赤色土粒を含む。）

第5層 暗褐色土層（やや粘性・しまりをもつ。多量の赤色土ブロックを含む。）

第6層 黒褐色土層（粘性に欠けるが、しまる。少量の赤色土粒を含む。）

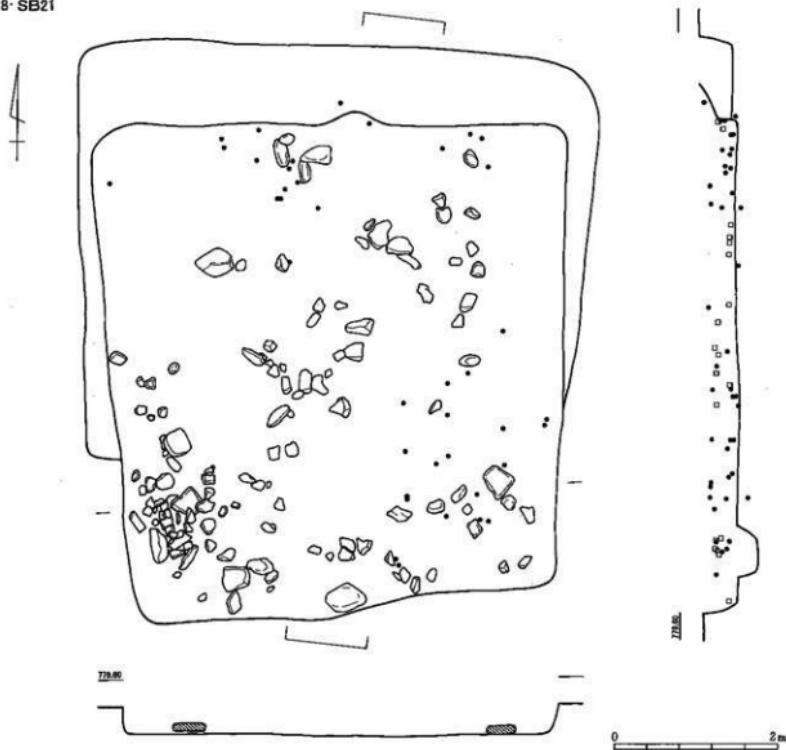
第7層 黒色土層（少量の赤色土粒を含む。）

床面 北カマド付近から中央部にかけて貼床面が形成されていた。掘り方内には黄褐色土ブロックを含んだ土が堆積していたが、調査時に掘り抜いてしまったため、全容は不明である。北東隅から南東隅にかけて幅18cmほどの周溝が検出された。

柱穴 住居内より6個のビットが検出された。配列に明瞭な規則性は認められない。特にP1・2は長径100~150cm、深さ22~26cmを測り、柱穴とは考えにくい。この他、周溝内から6個の小ビットが出土している。南壁際のP6同様、壁柱穴であった可能性も考えられる。

カマド 北壁と西壁の中央部に2基のカマドが構築されていた。北カマドはわずかに張り出している。袖部には袖石の抜き取り痕がみられるが、わずかに礫と粘土ブロックが残されており、石組み粘土カマドであったと考えられる。浅く凹んだ被熱面の上に灰層が薄く堆積しており、その上部にカマドの構築材と思われる粘土ブロック、さらにその上部に焼土が堆積していた。西カマドも石組み粘土カマドであったと考えられ、右袖部には袖石が残されていた。被熱面は赤化が著しく、灰層が3層にわたって堆積していた。

SB18-SB21

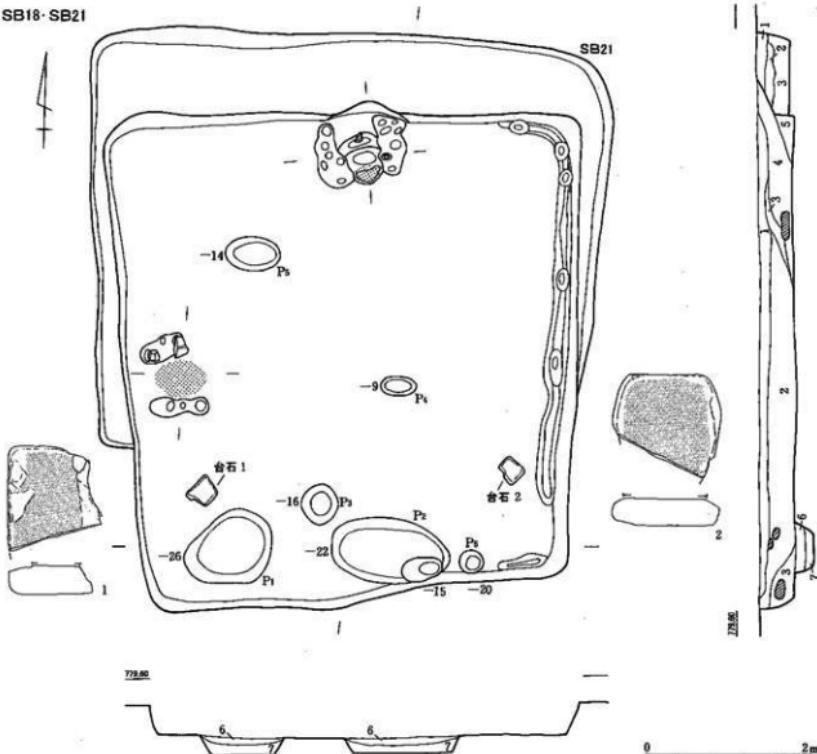


第80図 SB18遺物・礫出土状況

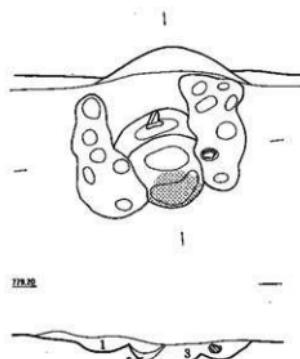
袖石および構築材の残存状況および構築材の残存状況などから、北カマドと西カマドが併存していた可能性も考えられるが、断定できない。カマド内埋土は、以下のとおりである。

- | | | |
|------|-----|-------------------------------|
| 北カマド | 第1層 | 黄褐色土層（粘性あり。カマド構築材。） |
| | 第2層 | 黄褐色土層（粘性あり。上部灰層。） |
| | 第3層 | 褐色土層（黄褐色土・黒色土を含む。） |
| | 第4層 | 白灰褐色土層（下部灰層） |
| | 第5層 | 黒色土層（黄褐色土ブロックを含む。） |
| 西カマド | 第1層 | 黄橙色土層（粘性強い。カマド構築材。） |
| | 第2層 | 黄灰褐色土層（黄橙色土・黒色土ブロックを含む。） |
| | 第3層 | 黄灰褐色土層（黄橙色土・黒色土ブロック、黒色土粒を含む。） |
| | 第4層 | 暗褐色土層（灰を含む。） |
| | 第5層 | 黄褐色土層（粘性あり。上部灰層。） |
| | 第6層 | 褐色土層（粘性あり。下部灰層。） |

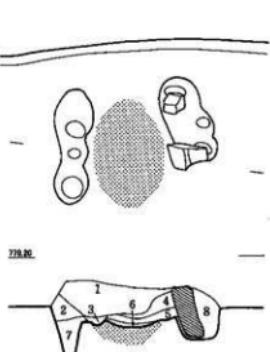
SB18-SB21



北カマド



西カマド



第81図 SB18・21 実測図

第7層 黒褐色土層（黄褐色土ブロックを含む。掘り方埋土。）

第8層 黄褐色土層（粘性あり。掘り方を埋めるカマド構築材。）

内部施設 南東隅と南西隅近くの床面に磨耗痕のある平石2個が遺存していた。同一砾を半割して左右に分けて据え付けるように設置しており、作業用の台石として使用されたと推測される。作業用ピットとも考えられるP1・2との対応関係や関連の有無が注意される。

出土遺物 覆土第2～4層を中心として、光ヶ丘1号窯式に比定されると考えられる個体を主とする灰釉陶器片156点、土師器片88点、土錐1点、砥石4点が出土している（第91・92図45～68）。また、覆土中には被熱した花崗岩角礫を含む大小の砾が、投棄されたかのような状態で多量に遺存していた。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉、9世紀後半、光ヶ丘1号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB21に後続する。

SB19（第82図）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-22グリッドに位置する。北側でSB24を切る。

形状 平面形はほぼ方形を呈する。長径330cm、短径320cm、床面積は10.78m²を測る。長軸方向はN-50°-Wを示す。壁はカマド部を除いて急傾斜に掘り込まれており、最大壁高は34cmを測る。確認面は本土層CのII層であり、SB24よりやや上層で検出された。

覆土 3層に分けられる。第2・3層はカマド埋土に相当する。

第1層 黒褐色土層（黄褐色土粒・白色砂粒を含む。）

第2層 黒褐色土層（黄褐色土粒・赤色粒を含む。）

第3層 黄褐色土層（粘性をもち、しまる。）

床面 ほぼ平坦に整えられていたものと思われるが、全容は不明である。

柱穴 住居内より7個のピットが検出された。このうち南東壁に沿って検出された3個のピットは口径15～30cm、深さ5～10cmを測り、壁柱穴の可能性が考えられる。P3・4などは断面が浅い皿状を呈し、柱穴とは異なる用途が考えられる。

カマド 南西壁中央部に構築されていた。煙道と推測される部分が大きく外に張り出している。焼土面を覆うように粘性のある黄褐色土などが堆積していたほか、直上には火床の構造材と思われる平たい砾が敷かれたように遺存していた。両袖部からは長径30cm、深さ13cmを測るP1・2が検出されており、袖石の抜き取り痕と推測される。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 覆土中より光ヶ丘1号～大原2号窯式期にかけての灰釉陶器片32点、土師器片40点、須恵器壺片2点が出土している（第92図69～74）。

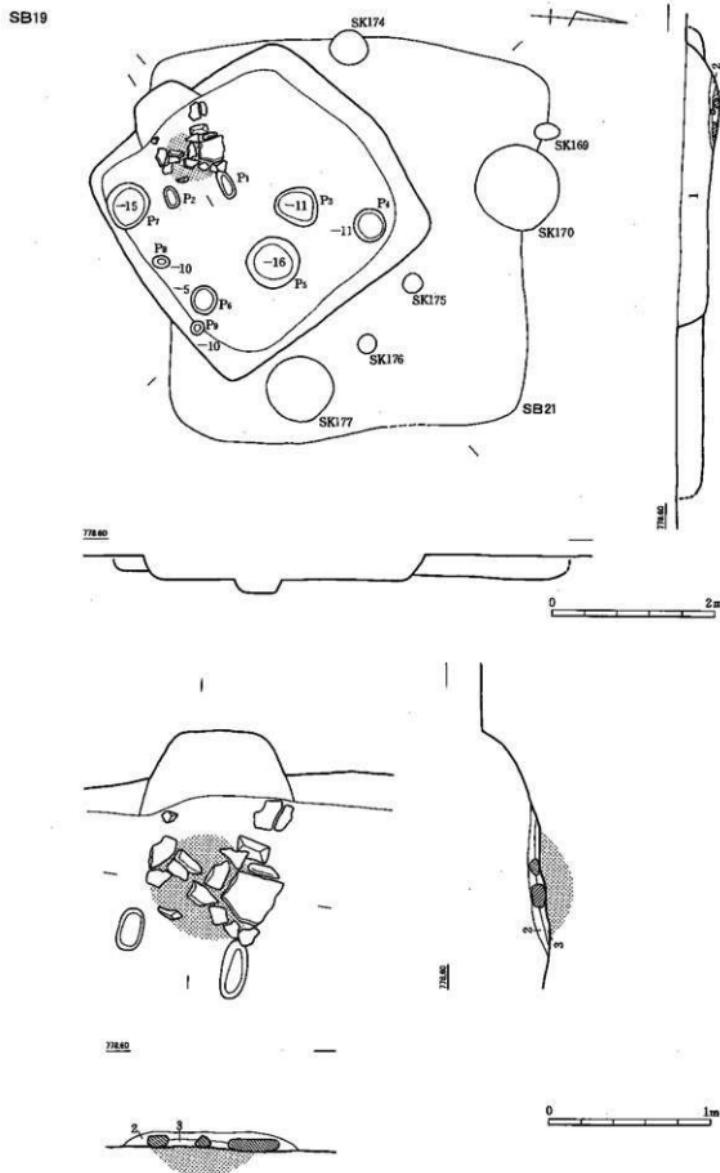
時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉～中葉、9世紀後半～10世紀前半、光ヶ丘1号～大原2号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。切り合い関係をみるとSB24に後続する。

SB20（第83図、図版12）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、U・V-14グリッドに位置する。

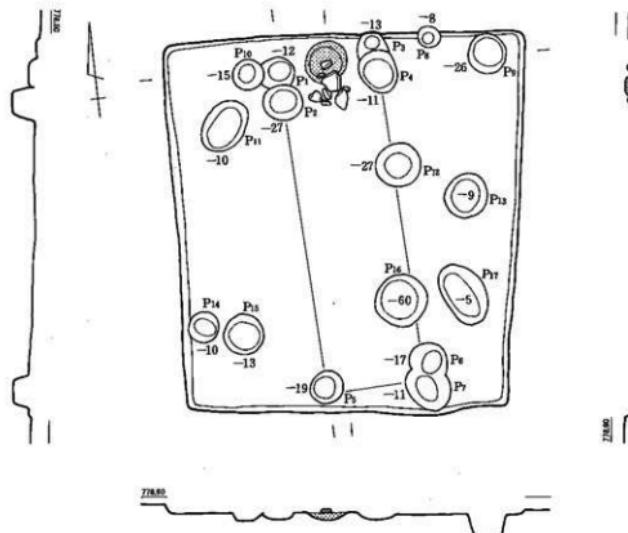
形状 平面形は不整な長方形を呈する。長径470cm、短径440cm、床面積は19.05m²を測る。長軸方向はN-5°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は17cmを測る。

覆土 粘性をもつが、しまりに欠ける黒褐色土が堆積していた。多量の白色砂粒を含む。

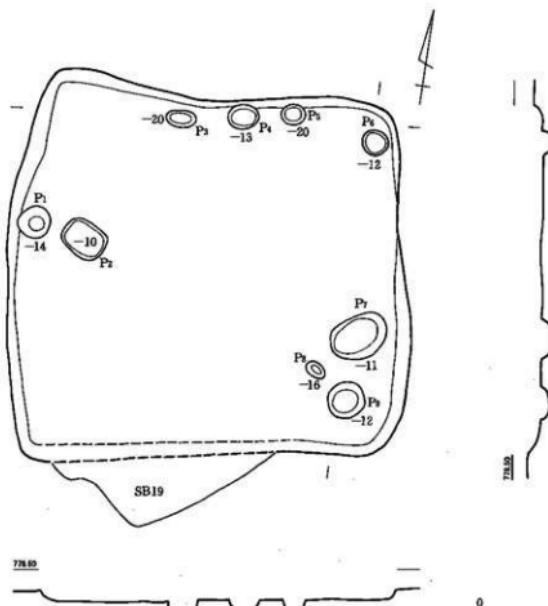


第82図 SB19 実測図

SB20



SB24



第83図 SB20・24 実測図

0 2m

床面 比較的平坦であるが、硬化面は認められなかった。

柱穴 住居内より17個のピットが検出された。竪穴壁と軸方位を異なるものの、長方形を形成する配置状況などから、P1～7が主柱穴であったと推定される。また、長軸線西側のP11・15にも配列に規則性が認められるほか、口径55～65cm、深さ27～60cmの規模を有するP12・16などにも柱穴としての機能が推定される。ピットの多さからみて建て替えが行われた可能性についても考慮される。

カマド 北壁はほぼ中央部に構築されていた。上部構造は不明である。焼土上面付近から構造材と思われる長さ15～20cmほどの平たい礫が複数出土した。焼土は深さ10cmほどの掘り込み内に堆積しており、内部から灰釉陶器が出土した。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 カマド付近を含む床面近くから大原2号窯式期と思われる碗5点、皿6点の他、灰釉陶器片57点、須恵器甕片1点、刀子片1点が出土している（第93・94図75～87、114）。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代中葉、10世紀前半、大原2号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

SB21（第83図、図版11）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-25グリッドに位置する。北側の一部を除きSB18に切られる。

形状 平面形は長方形を呈するものと思われる。長径640cm、短径520cm、推定床面積は31.32m²を測る。長軸方向はN-2°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残存部の最大壁高は39cmを測る。

覆土 3層に分けられる。

第1層 黒褐色土層（粘性に欠けるが、しまる。赤色土粒を含む。）

第2層 黒色土層（比較的柔らかい。少量の赤色土粒を含む。）

第3層 黒色土層（比較的柔らかい。少量の白色砂粒・赤色土粒を含む。）

床面 比較的平坦であるが、硬化面は認められなかった。

柱穴 認められなかった。

カマド 認められなかった。残存状況から推測すると南壁側に存在した可能性が考えられる。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や住居の形状などから判断して平安時代前葉に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSB18に先行する。

SB24（第83図、図版12）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-22グリッドに位置する。南側をSB19に切られる。

形状 平面形は不整な長方形を呈する。長径500cm、短径430cm、推定床面積は21.24m²を測る。長軸方向はN-75°-Eを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は14cmを測る。確認面は基本土層CのII層であるが、本址を切るSB19より下層で検出された。

覆土 粘性をもつが、しまりを欠く黒褐色土が堆積していた。暗褐色土ブロックや少量の白色砂粒を含む。

床面 比較的平坦であるが、調査時に掘り抜いてしまったため、全容は不明である。

柱穴 住居跡内より9個のピットが検出された。壁際に集中する傾向をみせており、壁柱穴の可能性が推測される。口径30～40cm、深さ6～26cmを測る。

カマド 認められなかった。壁の残存状況から推測すると南壁側に存在した可能性が考えられる。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 覆土中より、耳皿片1点を含む灰釉陶器片7点が出土している（第93図88）。大原2号窯式と推測される灰釉陶器1点には「万」の墨書が認められ、「□万」の合わせ文字の可能性が推測される。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して平安時代前葉～中葉、9世紀後半～10世紀前半、光ヶ丘1号～大原2号窯式期を中心とした時期の所産と考えるのが妥当であるようと思われる。切り合い関係をみるとSB19に先行する。

2) 堀立柱建物跡

ST 1 (第84図、図版12)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、X-21グリッドに位置する。縄文時代の所産と考えられる土坑2基が重複して分布する。

形状 平面形は1間×2間の建物跡と思われる。北棟中央の柱穴はやや内側に位置し、柱筋の通りは良好とはいえない。桁行260cm、梁行260cm、柱穴間隔は棟側で120～130cm、妻側で260cmを測り、面積は6.8m²である。長軸方向はN-86°-Eである。柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈しており、口径は24～33cm、確認面からの深さは22～31cmを測る。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

3) 棚列状遺構

SA 1 (第84図)

位置 中位段丘面の上部平坦面、I区北西部に位置する。

形状 長さ530cmの範囲に5個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は90～160cmを測る。主軸方向はN-33°-Wである。柱穴の平面形は略円形を呈しており、口径は34～42cm、確認面からの深さは12～20cmを測る。

覆土 黒色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA 2 (第84図)

位置 中位段丘面の上部平坦面、I区北西部に位置する。

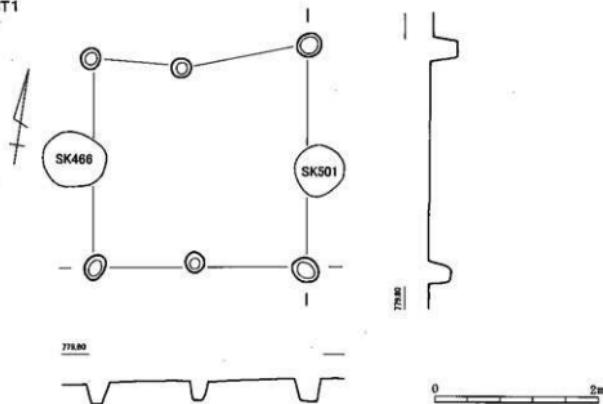
形状 長さ720cmの範囲に5個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は100～210cmを測る。主軸方向はN-11°-Wである。柱穴の平面形は円形～梢円形を呈しており、口径は24～44cm、確認面からの深さは9～14cmを測る。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

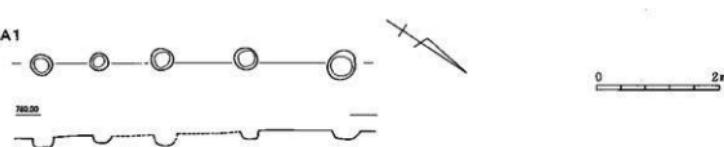
出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

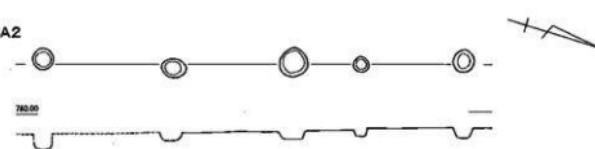
ST1



SA1



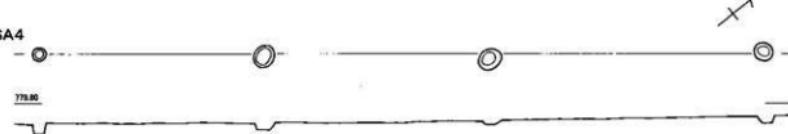
SA2



SA3



SA4



第84図 ST1・SA1～4 実測図

SA 3 (第84図)

位置 中位段丘面の上部平坦面、I区北西部に位置する。

形状 長さ972cmの範囲に6個の小ビットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は80~280cmを測る。主軸方向はN-50°-Eである。柱穴の平面形は円形~梢円形を呈しており、口径は22~50cm、確認面からの深さは8~20cmを測る。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA 4 (第84図)

位置 中位段丘面の上部平坦面、I区北西部に位置する。

形状 長さ1216cmの範囲に4個の小ビットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は370~450cmを測る。主軸方向はN-41°-Eである。柱穴の平面形は円形~梢円形を呈しており、口径は20~40cm、確認面からの深さは7~18cmを測る。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA 5 (第85図)

位置 中位段丘面の上部平坦面、I区北西部に位置する。

形状 長さ780cmの範囲に3個の小ビットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は310~430cmを測る。主軸方向はN-43°-Wである。柱穴の平面形は円形を呈しており、口径は28~60cm、確認面からの深さは9~10cmを測る。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA 6 (第85図)

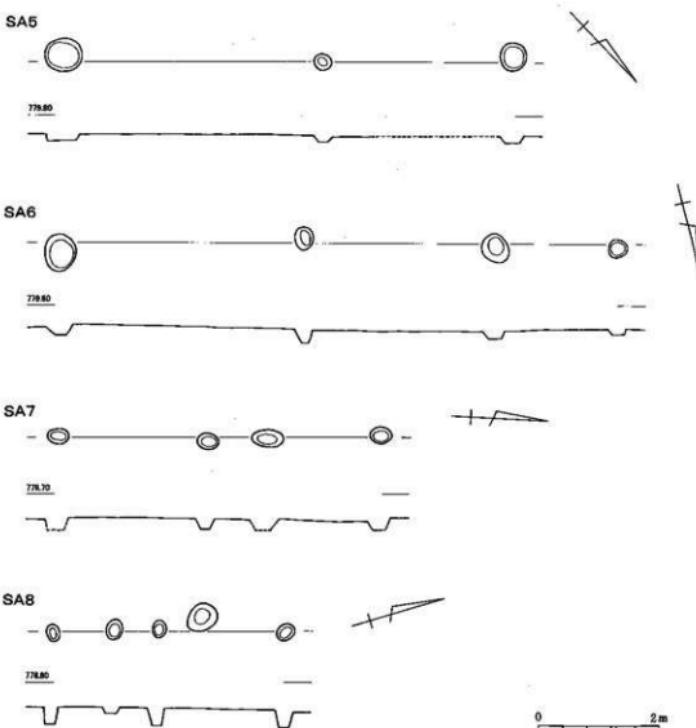
位置 中位段丘面の上部平坦面、I区北西部に位置する。

形状 長さ950cmの範囲に4個の小ビットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は200~400cmを測る。主軸方向はN-83°-Wである。柱穴の平面形は円形~梢円形を呈しており、口径は30~58cm、確認面からの深さは12~23cmを測る。

覆土 黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。



第85図 SA 5～8 実測図

SA 7 (第85図)

位置 中位段丘面の下部平坦面、I区南東部に位置する。

形状 長さ560cmの範囲に4個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は90～240cmを測る。主軸方向はN-4°-Wである。柱穴の平面形は楕円形を呈しており、口径は31～46cm、確認面からの深さは16～23cmを測る。

覆土 黒色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SA 8 (第85図)

位置 中位段丘面の下部平坦面、I区南東部に位置する。掘立柱建物跡ST1が近接して分布する。

形状 長さ406cmの範囲に4個の小ピットが直線的に並ぶ。柱穴間隔は70～210cmを測る。主軸方向はN-

13° - E である。柱穴の平面形は楕円形を呈しており、口径は26~32cm、確認面からの深さは18~29cmを測る。本址は調査区の東端部に接して位置しており、掘立柱建物跡の一部である可能性を残す。

覆土 黒色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

4) 土 坑

当該期の所産と考えられる土坑はII区を除く各調査区から万遍なく出土しているが、堅穴住居跡が発見されたI区およびIV区に集中する傾向が顕著に認められる。とりわけ、主要な集落域であったことが確認されたI区南東部および同北西端部付近に濃密な分布をみせている。I区南東部に位置するSB15・16・18・19付近には長軸が100cmを越えるやや大型の遺構を含む大小の土坑がまとまって分布し、性格等の詳細は不明ながらも居住域との強い相関関係が推定される。一方、I区北西端部付近では時期比定に不確定な点を残すものの、住居群に隣接する構列状遺構として抽出された一群と混在するように分布しており、同遺構群との関連や何らかの構造物の痕跡であった可能性などが考慮される。

以下、比較的規模の大きなものを選択的に抽出・図示したうえで、特徴的な土坑に限定して個別説明を記す。他については、土坑一覧表を参照されたい(第1表)。

SK146(第86図、図版13)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-20グリッドに位置する。上面を覆うように大小の礫が規則的な配置をみせながら群集する。南側に4mほど離れてSK147が隣接する。

形状 平面形は長径124cm、短径109cm、深さ15cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-9°-Eである。断面は皿状に近く、坑底はやや傾斜する。南東隅を挟んで2個の小ピットを作り、上面を覆う中小の礫は一定のレベルを保ちながら規則的な配列状態をみせており、その上部中央付近には径50~60cmにも及ぶ大形の礫3点が遺存する。南東部および北西部を中心として、小規模な焼土堆積とともに炭化物の広範な分布が認められた。

覆土 4層に分けられる。

第1層 黒褐色砂質土層(粘性・しまりに欠ける。炭化物を含む。)

第2層 黒褐色土層(粘性・しまりに欠ける。多量の炭化物を含む。)

第3層 黒褐色土層(粘性・しまりに欠ける。きわめて多量の炭化物を含む。)

第4層 暗褐色土層(多量の焼土粒を含む。)

出土遺物 覆土中より土師器壺の破片1点が出土した。

時期 伴出遺物や覆土のあり方などからは平安時代の所産である可能性が考えられるものの、形態的な特徴を考慮するならば、中世も含めた時間幅を推定しておくのが現在のところ妥当のように思われる。

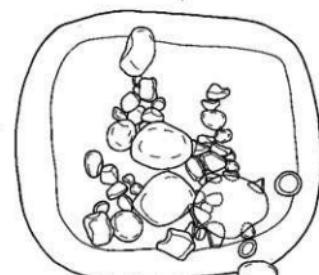
SK147(第87図、図版13)

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-21グリッドに位置する。北側にSK146が隣接する。

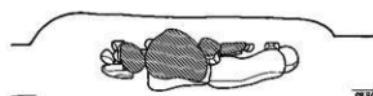
形状 平面形は長径89cm、短径87cm、深さ12cmの不整な円形を呈する。長軸方向はN-16°-Eである。断面は皿状に近く、坑底はやや丸みをもつ。上面を覆うように大小の礫が群集し、礫は一定のレベルを保ちながらやや環状の配置を示すなど、比較的規則的な配列状態をみせている。

SK146

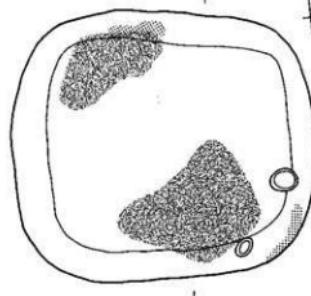
779.80



779.81



779.82



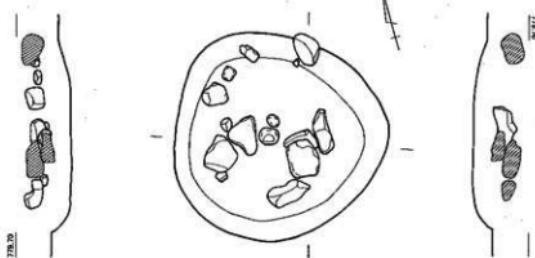
779.83



0 50cm

第86図 SK実測図（1）・SK146

SK147



779.70

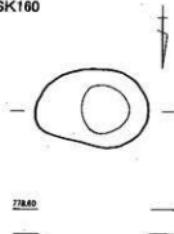


0 50 cm

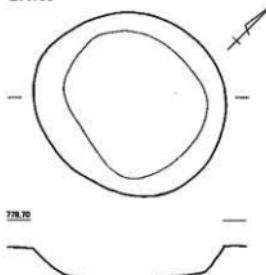
SK155



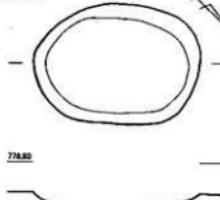
SK160



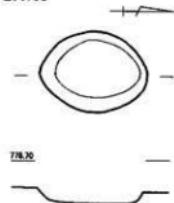
SK163



SK166



SK168



0 1m

第87図 SK実測図（2）

覆土 黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土や形状などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、前出のSK146と同様、中世も含めた時間幅を推定しておくのが現在のところもっとも妥当のように思われる。

SK155（第87図、図版13）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、U-23グリッドに位置する。北側でSK199を切る。

形状 平面形は長径224cm、短径149cm、深さ52cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN-82°-Eである。断面は振り鉢状に近く、坑底はやや傾斜する。

覆土 3層に分けられる。

第1層 黒褐色砂質土層（粘性をもち、しまる。白色砂粒を含む。）

第2層 黒褐色土層（多量の黒色土ブロックを含む。）

第3層 黒色土層（黒褐色土を含む。）

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。切り合い関係をみるとSK199に後続する。

SK173（第88図、図版13）

位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、W-21グリッドに位置する。

形状 平面形は長径302cm、短径191cm、深さ25cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN-63°-Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや傾斜する。

覆土 白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。

SK206（第88図）

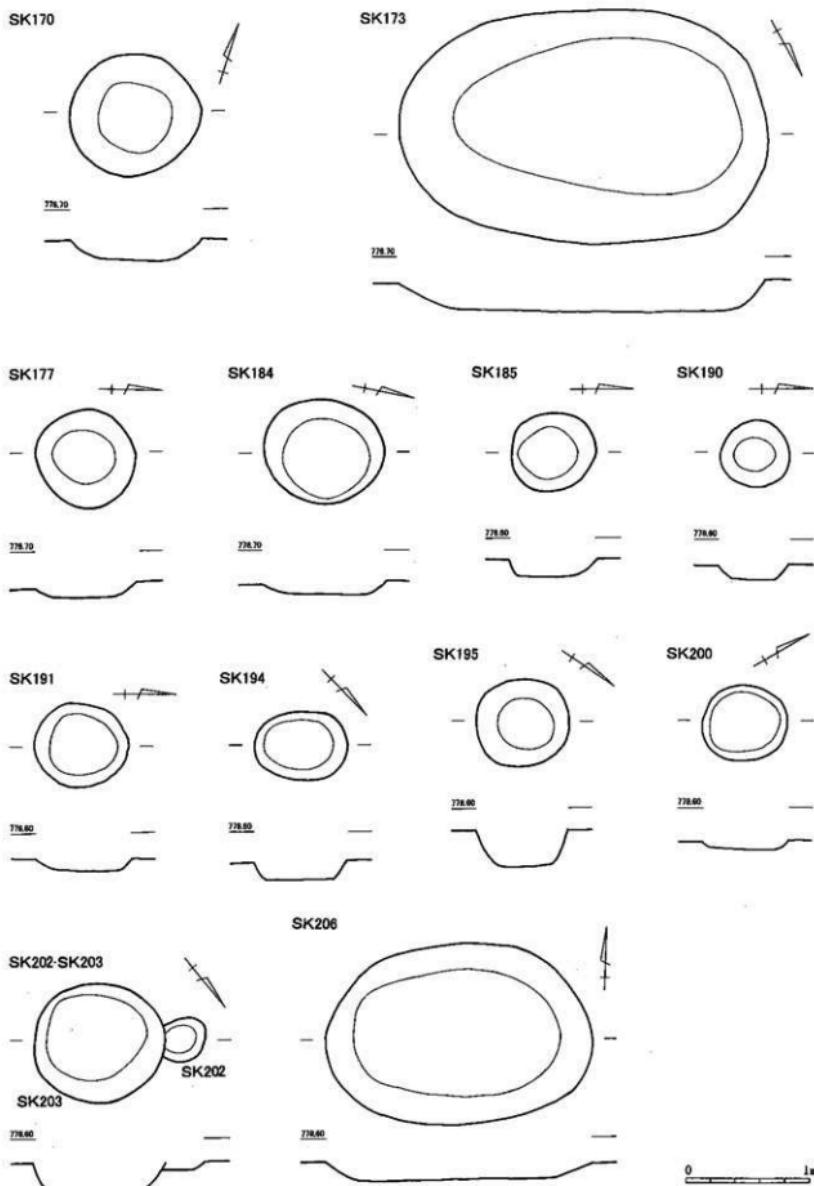
位置 中位段丘面の下部平坦面のI区、V-24グリッドに位置する。

形状 平面形は長径218cm、短径149cm、深さ15cmの長楕円形を呈する。長軸方向はN-3°-Wである。断面は皿状に近く、坑底はやや傾斜する。

覆土 白色砂粒を含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 認められなかった。

時期 覆土のあり方などから判断して平安時代に位置づけられる可能性が考えられるが、正確な時期は不明である。



第88図 SK実測図（3）

第2節 遺 物

1) 遺構内出土遺物

SB1 (第89図1～4)

1・2は灰釉陶器の底部片。1は底面に回転糸切り痕をとどめ、回転ナデ整形される。2は内面全体に施釉され、高台脇に回転ヘラケズリが加えられる。カマド周辺から出土した前者は大原2号窯式、後者は光ヶ丘1号～大原2号窯式に比定されよう。3は口径推定14.8cm、器高5.0cmを測る黒色土器壺。4は器高14.5cmの小型の土師器壺。口縁下を回転ナデとし、胴部には横位のカキ目がめぐる。

SB2 (第89図5)

5は掘り方内から出土した灰釉陶器の底部片。全面を回転ナデ整形とし、底面に回転糸切り痕を残す。虎渓山1号窯式に比定されると思われる。

SB3 (第89図6～20)

6～17は灰釉陶器の碗・皿類であり、刷毛塗りの6・7を除いて他はほぼ浸け掛け施釉される。回転ナデ整形を基本とし、8・12・14の高台脇には回転ヘラケズリが加えられる。底面にケズリが加えられるものが多く、13にはさらにナデ調整が行われる。推定口径は1が12.8cm、8が12.5cm、9が13.6cm、10が14.0cm、16が12.2cmなどを測る。6・7は光ヶ丘1号窯式に、他は大原2号窯式に比定されよう。18は灰釉陶器の長頸壺。19は表裏面にタキ目と青海波文をもつ須恵器片。20は小型の土師器壺。

SB4 (第89図21)

21灰釉陶器の底部片。底面に回転糸切り痕をとどめ、回転ナデ整形される。良好な胎土を用いており、大原2号窯式に比定される。

SB5 (第89図22・23)

22は大原2号窯～虎渓山1号窯式に比定される灰釉陶器碗。高台脇に回転ヘラケズリが加えられており、口径推定18.0cm、器高5.9cmを測る。23は灰釉陶器の長頸壺。現存最大径は17.6cm。外面全面施釉。

SB15 (第90図24～34)

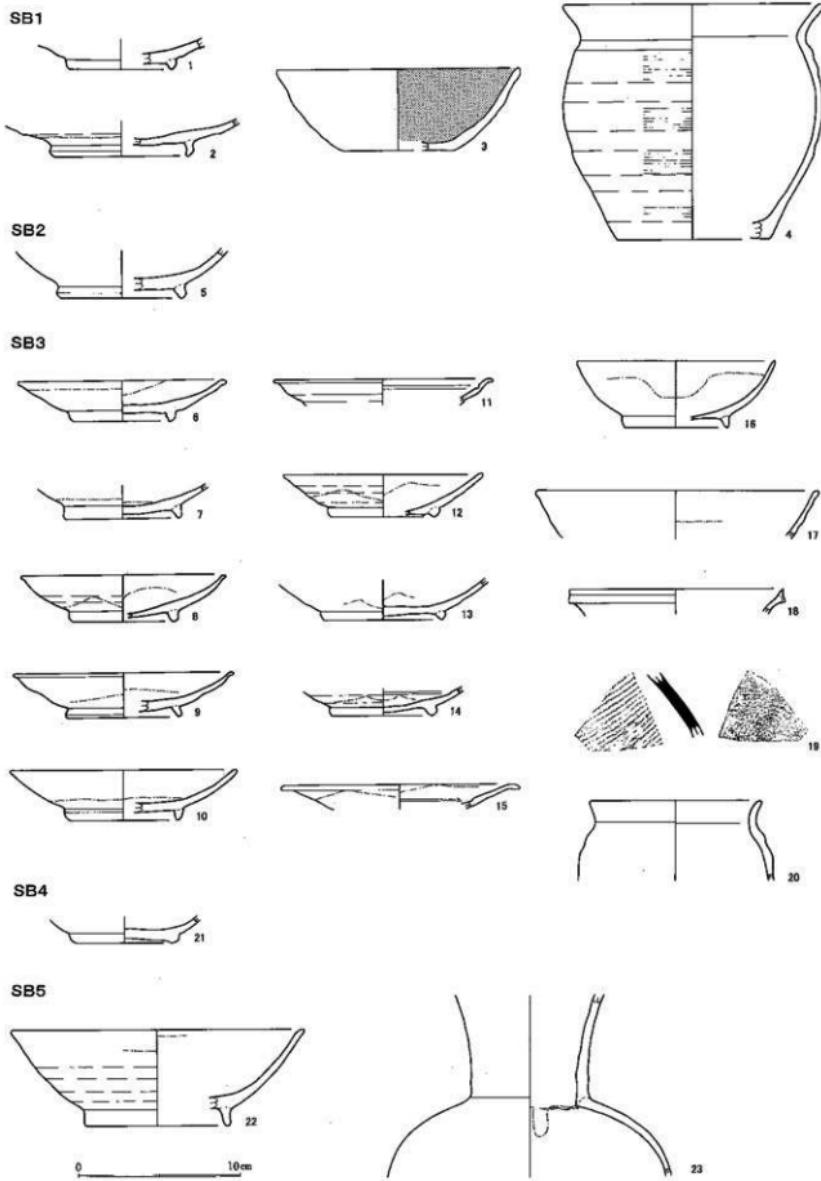
24～30は灰釉陶器の碗・皿類。施釉は刷毛塗りによるもので占められており、24・26・29・30の高台脇には回転ヘラケズリが観察される。30の底面に「芳蘭」と考えられる墨書が認められるほか、26の内面下部には墨の痕跡が残る。法量は24が口径14.8cm・器高2.5cm、27が口径15.0cm・器高3.7cm、29が口径18.6cmなどを測る。若干後出的な27を除き、他は光ヶ丘1号窯式に比定される。31・33は灰釉陶器。壺類の胴下半および注口部であり、後者は多角形に面取りがなされる。32は土師器壺の底部であり、同部外面に横位のカキ目、底面には回転糸切り痕をとどめる。34は砂岩の円礫を用いた砥石。表裏面の長軸方向に4面の砥面が形成され、一部に研磨時の線条痕が観察される。

SB16 (第90図35～39)

35・36は灰釉陶器の碗・皿類。前者が刷毛塗り（内面底部に一刷毛の施釉あり）、後者が浸け掛け施釉であり、ともに高台脇と底面に回転ヘラケズリが加えられている。35が光ヶ丘1号窯式に、口径13.8cm、器高2.5cmを測る36が大原2号窯式に比定される。37は須恵器の長頸壺と考えられる肩部破片であり、胴部最大径25.4cm（推定値）を測る。38・39はそれぞれ口径22.8cmと12.3cmを測る土師器壺。後者の口縁下から胴部にかけては横位のカキ目が顕著にめぐる。

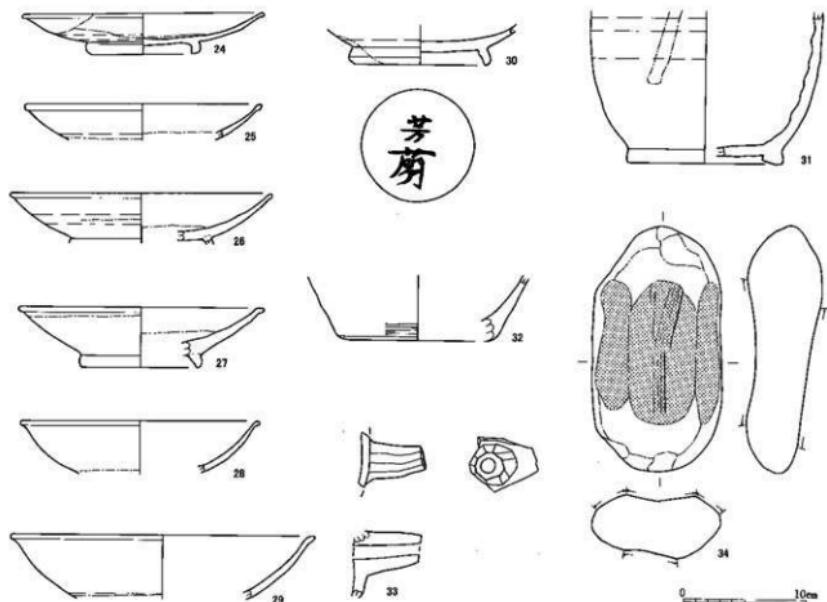
SB17 (第90図40～44)

40・41は灰釉陶器。40は底面に回転ヘラケズリが加えられており、虎渓山1号窯式に比定されると思わ

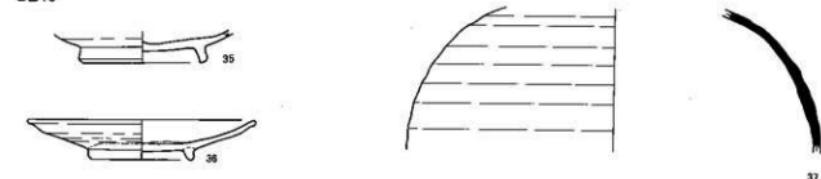


第89図 出土遺物（1）

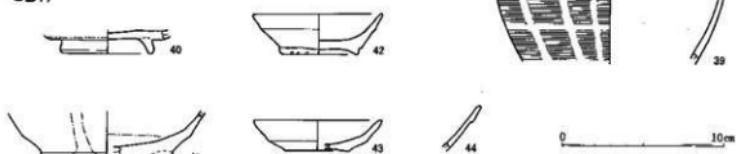
SB15



SB16

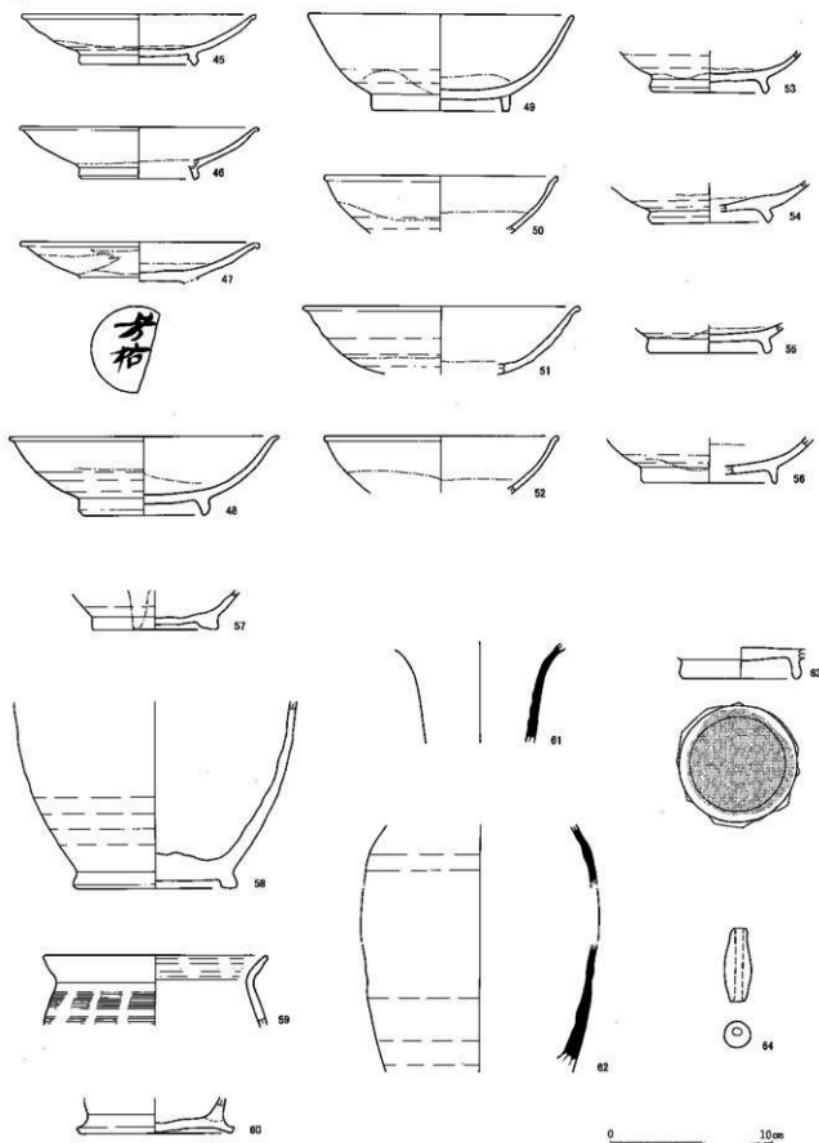


SB17



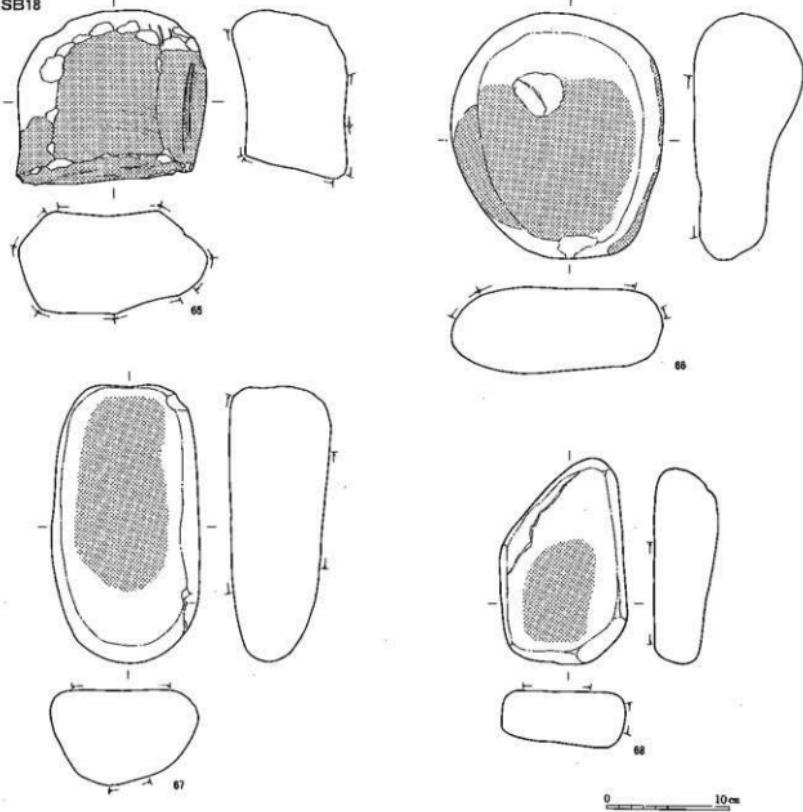
第90図 出土遺物（2）

SB18



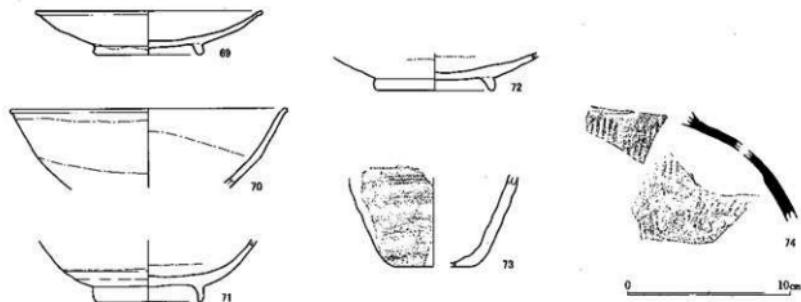
第91図 出土遺物（3）

SB18



0 10cm

SB19



0 10cm

第92図 出土遺物（4）

れる。41は浸け掛け施釉され、底面に回転糸切り痕を残す。高台の形状などから丸石2号窯～明和27号窯式頃の所産と考えられる。42・43は底面に回転糸切り痕や糊般痕を残す山茶碗。それぞれ口径8.0cm・器高2.5cm、口径7.8cm・器高2.4cmを測る。高台部分の形状などから前者は尾張3・4型式に、後者は尾張5型式に比定される。44は淡い黄緑色の釉調を呈する青磁碗の口縁部破片。

SB18 (第91・92図45～68)

45～56は灰釉陶器の碗・皿類。46・47・52を除き、他の高台脇および底面には回転ヘラケズリが加えられる。すべて刷毛塗りによる施釉がなされ、47・49・54・56の内面底部付近には一筆の刷毛施釉が見られる。47の底面には墨書「芳□」(芳蘭?)が記されている。器形全体を知れる個体は少ないものの、45が口径14.2cm・器高3.1cm、48が口径16.4cm・器高4.9cm、49が口径16.1cm・器高5.9cmなどを測る。器形および整形・施釉の特徴などから、すべて光ヶ丘1号窯式に比定されると考えられる。

57・58は長頸壺と考えられる灰釉陶器。59は口径13.6cmを測り、胴部に横位のカキ目がめぐる土師器壺。60は器面全体に指オサエ痕が残る土師器。袋物製品の高台あるいは脚台部分と思われるが、器種・器形ともに詳細は不明である。61・62は須恵器であり、ともに長頸壺の一部と考えられる。63は灰釉陶器の周囲を打ち欠いて高台内を再利用した転用硯であり、底面に朱墨痕が残る。64は土錘。土師質で、長さ4.5cm、最大幅1.7cm、重さ12.2gを測る。

65～68は砥石。65～67が砂岩、68が漫飛流紋岩の自然円砾を用いており、65は使用による著しい摩滅によって多面体に近い砥面を形成している。大きさや重量などから、置砥としての使用が推定される。

SB19 (第92図69～74)

69～73は灰釉陶器の碗・皿類。69・70は刷毛塗り施釉、72は浸け掛け施釉とみられ、69・73の底面には回転ヘラケズリが、71・72の底面にはさらにナデ調整が加えられる。また、69の内面底部には一筆の刷毛施釉がなされる。69が口径13.8cm・器高2.7cm、70が口径16.8cmなどを測り、若干後出的な72を除いて他は光ヶ丘1号窯式に比定される。73は小型の土師器壺であり、同部に顯著なロクロ目が観察される。74はタキ目を有する須恵器壺の肩部破片。

SB20 (第93図75～87)

75～85は灰釉陶器の碗・皿類。施釉はすべて浸け掛けによってなされ、75の高台脇には回転ヘラケズリが加えられる。78・80は底面に回転糸切り痕を残すが、75・77・79・81・82の底面にはケズリ調整が行われる。皿類では口径12cm前後の個体と14cm以上の個体に大別でき、碗類では81が15.2cm、83が17.1cm、84が10.2cmと口径(法量)に変異をもつ。虎渓山1号窯式～丸石2号窯式と推定される85を除いて、他はすべて大原2号窯式に比定されると考えられる。

86は須恵器の大壺の頸部破片。87は内面に墨跡が残る灰釉陶器片であり、硯として転用されたものと推定される。

SB24 (第93図88)

89は灰釉陶器の碗。口径14.4cm、器高4.6cmを測り、底面に文字不明の墨書が記されている。施釉は浸け掛けされ、墨書のある底面には回転ナデ調整が加えられる。大原2号窯式に比定されよう。

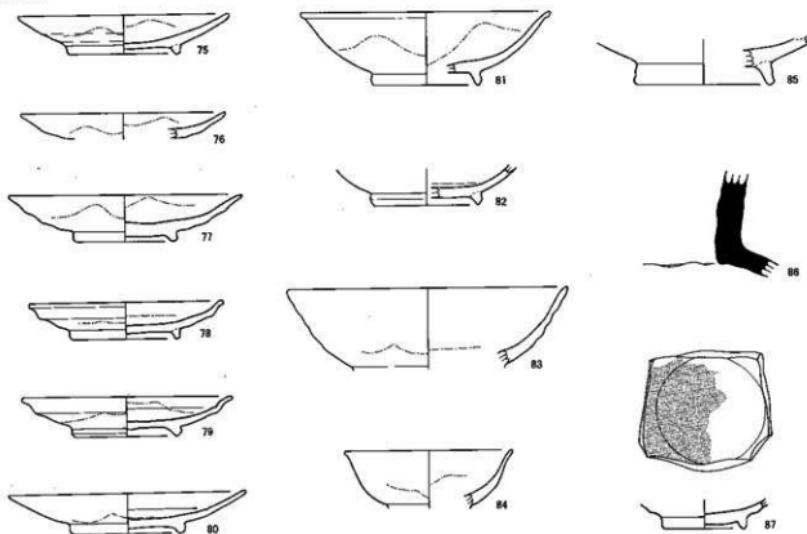
SK436 (第93図89)

89は灰釉陶器の碗または皿。形態的な特徴などから、大原2号窯式に比定される可能性が高い。

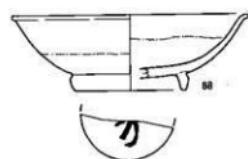
SK501 (第93図90)

90は土師器の碗。底部のみの残存であり、詳細は不明である。

SB20



SB24



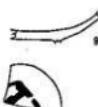
SKA36



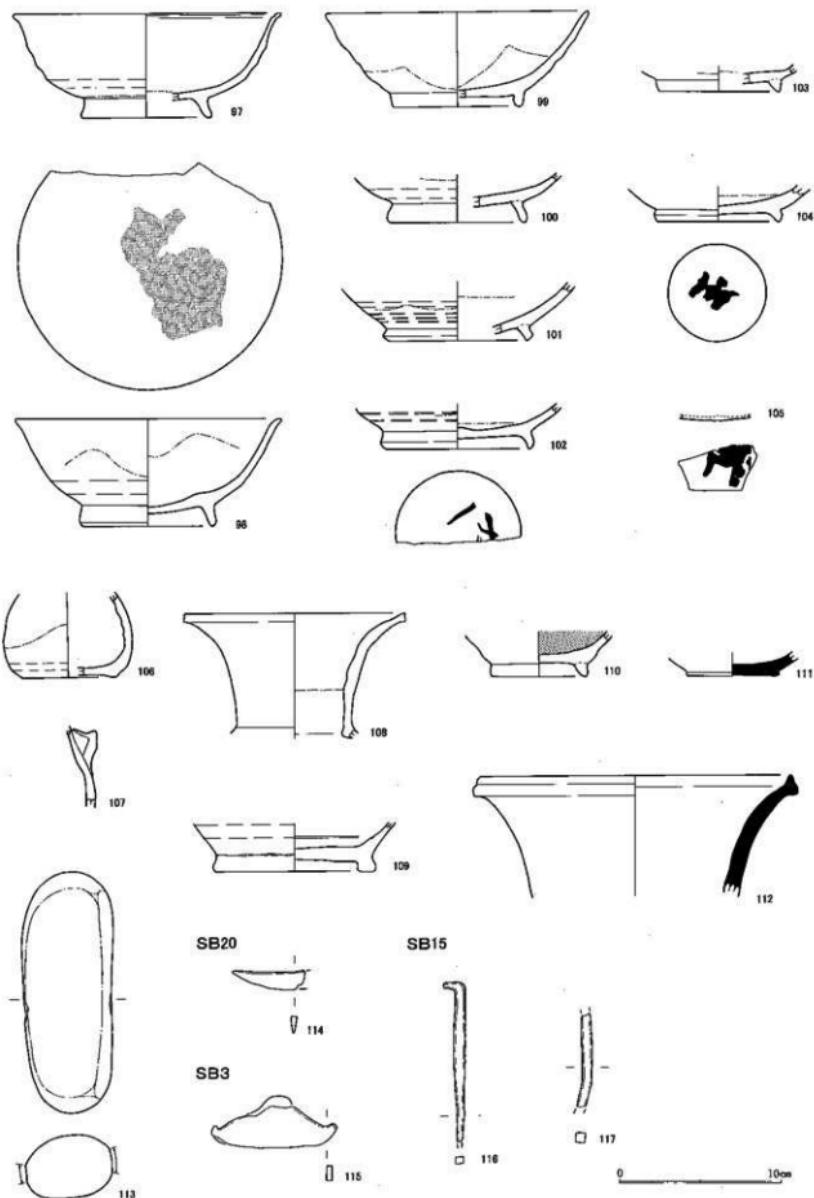
SK501



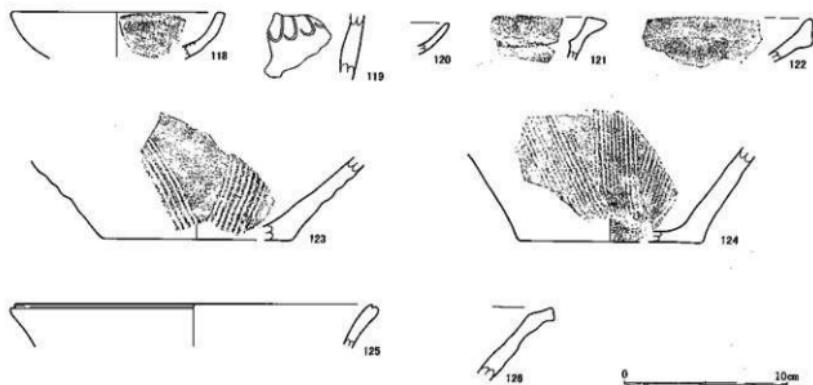
遺憾外



第93図 出土遺物（5）



第94図 出土遺物（6）



第95図 出土遺物（7）



第96図 出土遺物（8）-銭貨

2) 遺構外出土遺物、鉄製品等

古代の陶器類（第93・94図91～112）

91～105は灰釉陶器の碗・皿類。91は口径14.8cm、器高3.0cmを測る皿。SB15出土の30と同様「芳蘭」と記された可能性が考えられる墨書のある93とともに、光ヶ丘1号窯式に比定される。92は大原2号窯式に比定される碗であり、口径16.3cm、器高6.6cmを測る。内面口縁下に沿ってタール状の炭化物が厚く付着しており、灯明具としての使用が推測される。94・95・96は光ヶ丘1号～大原2号窯式にかけての個体であり、内面（95）または底面に墨書が記されている。93・96はI区南東部、94はI区北西部、95はIV区からの出土。97～99は口径15.9～16.3cm、器高6.4～6.8cmを測る深碗。浸け掛けによる施釉が行われ、底面には回転ヘラケズリが加えられる。98の内面にはウルシとみられる褐色・半透明の樹脂状物質が被膜化して付着する。102・104・105の底面には判読不明の墨書がある。それぞれ虎渓山1号～丸石2号窯式にかけての所産と推定される。97・98・103はIV区、他はI区北西部からの出土である。

106～109は灰釉陶器の袋物製品。106は小瓶、107はやや新しい段階の四耳壺片。108・109は長頸壺の口頸部と底部片。110は内面に黒色処理が施された黒色土器。111・112は須恵器の壺と壺の口頸部片。106・107・109～111はI区南東部、108・112は北西部のそれぞれ堅穴住居跡周辺域から出土した。

土製品

小破片のため図示できないが、9世紀後半の集落域に相当するI区南東部、W-24グリッドより繩の羽口片1点が出土している。SB16出土の鐵滓と合わせて、小鍛冶の存在が考慮される。

石製品（第94図113）

113はI区南東部出土の編み物石。細長い円錐の両側縁ほぼ中央部に、紐掛け用と考えられる浅い抉り

が作り出されている。長さ14.9cm、重さ565gを測る安山岩製。確認されたのは図示した1点のみ。

鉄製品（第94図114～117）

114は刀子（SB20）、115は火打ち鉄（SB3）、116・117（SB15）は釘と考えられる。SB16出土の鉄滓1点を除き、図示したものが出土したほぼすべてである。

中・近世の焼物（第95図118～124）

118は古瀬戸前期、13世紀後半代の鉢皿であり、推定口径12.7cmを測る。119は印花文が付された古瀬戸瓶子の胴部小片。120は16世紀代の丸皿。122と121はそれぞれ大窯Ⅱ期16世紀中葉、同Ⅳ期16世紀末葉の製品と考えられるもの。123は16世紀代、124は16世紀後半～17世紀代にかけての搾り鉢。125は白堺系捏鉢（片口鉢）。13世紀前半頃の中津川窯製品と考えられ、推定口径は22.0cm。126は灰釉が総掛けされた古瀬戸後期の折縁深皿。

図示したもののほか、17世紀後半～18世紀前半、さらに18世紀末～19世紀にかけての陶磁器類が若干量出土している。これらは総じてI～IV区の発掘調査区全体に散漫な分布を示していた。

錢貨（第96図1～5）

「寛永通宝」6点があり、すべてⅡ区からの遺構外出土である。図中1が鉄製のほか、他はすべて銅製。1は裏面に波型（11波）があり、径2.8cm。2の裏面上部には「元」の文字があり、径2.3cm。3～5および未図示の1点は裏面に文字・文様なく、いずれも径2.3cmを測る。

それぞれ字体が微妙に異なっているが、摩滅が著しく既知事例との照合ならびに判別は困難である。

第V章 自然科学分析

第1節 土器の胎土分析・X線回折分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小島遺跡は、長野県三岳村に所在し、王滝川右岸の河岸段丘上に位置している。本遺跡の発掘調査では、縄文時代前期末葉～中期中葉・後葉と考えられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、さらに、平安時代の竪穴住居跡などの遺構が検出されている。遺物では、縄文土器や土師器、石器、鉄製品などが出土している。なお、縄文時代の各遺構から一括で出土した土器は、縄文時代前期末葉・中期初頭、中期中葉、中期後葉の4時期に区分され、さらに信州系、関西系、北陸系、岐阜系の4系統に分類されている。

本報告では、これら分類された縄文土器について、材質すなわち胎土の特徴を把握し、上記の型式学的分類との比較対照を行う。また、遺跡の地理的位置から、周辺地質と胎土から読み取れる地質学的背景との比較を行い、その在地性あるいは搬入品の可能性について検証する。

なお、本報告では、赤色物質が土器内面に付着する縄文土器が認められたことから、この物質の由来を明らかにするためX線回折分析を実施する。

I. 胎土分析

1. 試料

試料は、小島遺跡から出土した縄文土器片28点である（No.1～28）。これら試料は、考古学的な型式・系統分類がされており、縄文時代前期末葉の土器片試料8点（No.1～8）、中期初頭の土器片試料4点（No.9～12）、中期中葉の土器片試料2点（No.13、14）、中期中葉末の土器片試料14点（No.15～28）である。

各試料の出土遺構、本文土器図版中No.、時期、系統は、分析結果とともに表1に記す。

2. 分析方法

胎土分析は、現在様々な分析手法が用いられているが、大きく分類すると鉱物組成や岩片組成を求める手法と化学組成を求める手法がある。前者は、胎土中に含まれる重鉱物を対象とした分析や土器を薄片とし顕微鏡観察などを行う方法であり、後者は土器胎土に含まれる素地土である粘土や鉱物を対象に蛍光X線分析を実施する方法である。前者の方法は、縄文土器、弥生土器および土師器のような比較的粗粒の砂粒を含み、比較的低温焼成で鉱物の変質が少ない試料に有効であり、胎土の特徴が捉えやすいこと、土器の材料である粘土や鉱物と背景となる地質との関連性を考えやすいといった利点がある。一方、後者の方法は土器の材質（種類）に拘わらず再現性の高い数値化されたデータが得られるといった利点がある。

今回の分析試料は、比較的低温焼成によって製作された土器であること、また、当地域では同様な分析例が少なく胎土の情報をより多く得る必要があること、さらに、当社では至近の木曾福島町に所在する遺跡である川合遺跡や板敷野遺跡から出土した縄文土器の胎土分析を薄片作製観察により行っていることなどから、本報告では、これらのデータとの比較も考慮し、同様の方法を用いる。処理過程を以下に示す。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断し、0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡を用いて岩石学的手法で観察を行い、土器胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片や岩石片の種類構成を明らかにする。また、孔隙度など素地土に関する特徴の観察も行う。

3. 結果

結果を表1に示す。板敷野遺跡から出土した縄文土器の胎土分析の結果(2003, パリノ・サーヴェイ株式会社)、土器胎土中に含まれる岩石片の産状から、花崗岩片の有無から大きくA類とB類に分類した。本分析の結果を見ても、ほぼこの胎土分類を適用することができる。ただし、花崗岩の有無だけではなく、他の岩石片の産状も試料によっては比較的明瞭な特徴を示すことから、ここでは、板敷野遺跡のA・B類を発展させる形で、以下に示す胎土分類を設定した。また、各試料の胎土分類を表1に示す。

〈分類〉

- A 1類：板敷野遺跡の報告でA類とした分類において、花崗岩片以外に岩石片をほとんど含まないものをA 1類とする。試料によっては微量のチャートまたは流紋岩を伴うことがある。
- A 2類：板敷野遺跡の報告でA類とした分類において、花崗岩片以外に微量のチャート、安山岩および火山ガラスを伴うものをA 2類とする。試料によっては微量の砂岩または流紋岩を伴うことがある。
- A 3類：上述のA 1類の特徴にさらに結晶片岩を伴うものをA 3類とする。これは、板敷野遺跡の報告で'A'類とした分類に相当する。
- B 1類：板敷野遺跡の報告でB類とした分類において、チャートや頁岩および砂岩などの堆積岩類を比較的多く含むものをB 1類とした。ただし、今回の分析では、堆積岩類を比較的多く含むという特徴に重点を置き、微量の花崗岩片を伴うものもB 1類とした。なお、本類は微量の火山ガラスを伴う試料も多い。
- B 2類：B 1類の特徴に加えて、さらに結晶片岩を伴うものをB 2類とした。
- C 類：岩石片の組成において、堆積岩も花崗岩も含まず、少量の軽石と微量の火山ガラスを特徴とする。
- D 類：岩石片の組成において、堆積岩も花崗岩も含まず、少量の安山岩と微量の軽石または火山ガラスを特徴とする。
- E 類：岩石片の組成において、花崗岩を含まず、堆積岩は微量のチャートが含まれるのみのもの。他に微量の火山ガラスを伴う。
- F 類：岩石片がほとんど認められない。ただし、鉱物片の石英や斜長石は、花崗岩に由来すると考えられる粗粒な粒が多い。

〈時期・系統〉

上記の分類結果を土器の時期・系統毎にまとめると以下のようになる。

前期末葉：信州系とした4点の試料は全てB 1類に分類され、関西系とした4点の試料は、No. 5のみ

B 1類で、他の3点はいずれもA 1類に分類される。

中期初頭：信州系および北陸系とした試料(No. 9, 10)はいずれもA 1類、一方、関西系とした2点の試料は、No. 11がA 3類、No. 12がB 1類に分類される。

中期中葉：2点の試料はいずれも信州系とされるが、胎土は、No. 13はA 1類、No. 14はC類である。

中期中葉末：信州系とされた12点のうち、A 2類とB 1類がそれぞれ4点ずつあり、残りの4点はB 2、D、Fの各類に分類される。また、北陸系のNo. 26はE類、岐阜系とされたNo. 27はA 2

類にそれぞれ分類される。

4. 考察

今回設定したA 1類からF 類までの胎土分類と型式学的分類とは、上述のように1対1では相応しないが、対応関係は明らかに認められる。すなわち、小島遺跡から出土した縄文土器は、外見上の特徴が異なるものは、土器の素地土の由来や製作地が異なっていた可能性がある。なお、これら土器の素地土や製作地について、考古学的所見から推定されている関西や北陸地方などに求められるかが課題となる。そのためには、遺跡周辺の地質と胎土から推定される地質との比較を行う必要がある。本遺跡周辺の地質については、片田・磯見（1958）、竹内ほか（1998）および日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会（1988）の記載を参照とする。

A類の特徴である花崗岩類は、本遺跡周辺の木曽川流域で広範に分布が認められる。特に、上松の市街地より下流の木曽川两岸の山地は、上松花崗岩、伊奈川花崗岩、木曾駒花崗岩などの中生代に貫入した角閃石黒雲母花崗岩あるいは角閃石黒雲母花崗閃緑岩により主に構成されている。一方、上松市街地より上流の木曽川流域および王滝川流域の两岸の山地を構成する主な地質は、美濃帯とよばれる中生代の堆積岩類からなる地質である。B類の特徴である堆積岩類であるチャート、頁岩、砂岩は、いずれも美濃帯を構成する主要な岩石となっている。王滝川と木曽川の合流点付近では、美濃帯の中に上松花崗岩の岩体の一部が分布しており、両者混在の地域と見ることができる。また、A類およびB類に微量認められる安山岩および火山ガラスの給源としては、木曾御岳火山の噴出物を第一にあげることができる。

これらの地質背景を胎土の各分類の地域性に当てはめると、ほとんど花崗岩類のみしか認められないA 1類は上松市街地より下流の木曽川流域、花崗岩にチャートや安山岩も混在するA 2類は王滝川と木曽川の合流点付近、堆積岩類の卓越するB 1類は王滝川と木曽川の合流点よりも上流の王滝川流域あるいは木曽川流域というそれぞれの地域性が想定される。

次に、A 3類およびB 2類の特徴である結晶片岩の由来について検討する。川合遺跡（2002、パリノ・サー・ヴェイ株式会社）や板敷野遺跡（前出）の胎土分析結果でも結晶片岩を含む胎土が認められたが、結晶片岩として記載された地質を上述の文献の中で認めることができず、その由来は不明としている。しかし、今回の胎土分析結果でも認められ、結晶片岩を含むこと以外の特徴は、それぞれA類やB類の特徴と変わらないことから、これらが由来する地質は木曽川流域にある可能性が高い。ここで、片田・磯見（1958）の記載の中に、上松付近の木曽川右岸に片状ホルンフェルスと記載された変成岩の分布を認めることができる。これは、日本の地質「中部地方Ⅰ」では、領家帯を構成する雲母片岩という記載になっている。このことから、A 3類およびB 2類に認められた結晶片岩の由来は、この地質に由来する可能性がある。この場合、A 3類およびB 2類の地域としては上松付近に想定される。

C類およびD類の特徴である軽石および安山岩の由来は、上述のように木曾御岳火山の噴出物に求めることができる。花崗岩や堆積岩類がほとんど入ってこないことから、その地域性としては、西野川右岸に広がる御岳火山の東麓地域が想定される。

E類の岩石片の特徴は、微量のチャートと火山ガラスのみであるが、鉱物片では斜長石が比較的多く、カリ長石が認められない。また、他に含まれる鉱物が斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物のみである。これらの鉱物片の種類構成からは、その背景として安山岩質の火山噴出物が主体となっていることが窺える。したがって、E類の地域性もC類、D類と同様に御岳火山東麓に由来する可能性がある。

F類については、岩石片の特徴を捉えられないが、前述のように石英や斜長石は花崗岩に由来すると考えられる。また、黒雲母および角閃石を含むことも花崗岩に由来することを示唆する。したがって、その

地域性としては、A1類と同様に上松より下流の木曾川流域を想定することができる。

以上、小島遺跡から出土した縄文土器は9種類の胎土に分類され、いずれの胎土も、含まれる鉱物片や岩石片の種類は、王滝川流域から木曾福島～上松の木曾川流域および木曾御岳火山東麓地域という範囲に分布する地質の中に認ることができた。このことは、小島遺跡出土の土器が上記した比較的狭い地域内で製作された、あるいは素地土の材料となる粘土や砂が採取・利用されたことを示唆している可能性がある。

一方で、型式学的特徴から推定された関西や北陸といった遠方地域からの搬入については、現時点ではそれを積極的に支持する結果は得られなかつたといえる。関西系とされる6点の土器は、他の信州系とされる試料から特に区別される特徴は見出せず、これら6点は3種類に分類された。また、北陸系とされる2点の土器は、それぞれが異なる特徴を示し、1点は信州系とされた試料と同様の特徴、他の1点は信州系とされる試料中には類似した特徴を認めるることはできないが、周辺の地質と比較して特異な鉱物、あるいは岩石が含まれる試料ではなかった。

ただし、遠方地域からの搬入について検証するためには、それぞれの故地と考えられる地域で出土した同型式・系統の土器を対象とした胎土分析例との比較や、当地域における標準試料の作成、すなわち、素地土の材料となりうる粘土・砂を探取し、これまでに実施した胎土分析結果との相関性を検討することが重要である。現段階では、本分析結果から搬入の可能性を言及することはできないが、今後はこれら分析調査例を蓄積し、あらためて評価したいと考えている。

II. X線回折分析

1. 試料

試料は、縄文土器(MOJ SB14-22)内面に認められた赤褐色付着物である。この付着物について、必要最小限を土器内面から採取し、分析試料とする。

2. 分析方法

試料を105°Cで2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉碎した。この微粉碎試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、X線回折測定試料とした。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した(足立、1980; 日本粘土学会、1987)。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit: 1°
Target: Cu (K α)	Scattering Slit: 1°
Monochromator: Graphite 溝曲	Receiving Slit: 0.3mm
Voltage: 40KV	Scanning Speed: 2° /min
Current: 40mA	Scanning Mode: 連続法
Detector: SC	Sampling Range: 0.02°
Calculation Mode: cps	Scanning Range: 3~45°

3. 結果および考察

X線回折図を図1に示す。一般に遺跡などで検出される代表的な赤色顔料にはベンガラ(赤鉄鉱；hematite[α -Fe₂O₃])のほか、水銀朱(辰砂；cinnabar[HgS])、鉛丹(鉛丹；minium[Pb₃O₄])な

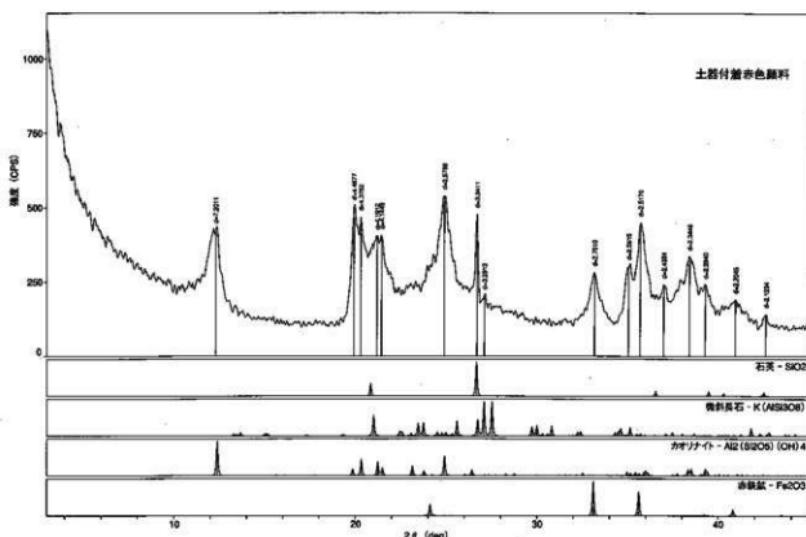


図1 土器付着赤色顔料のX線回折図

どがある。

繩文土器内面の付着物からは、代表鉱物として赤鉄鉱(hematite)の回折線が明瞭に認められた。このことから、付着物は「ベンガラ」に属すると考えられる。なお、赤鉄鉱のほかに、石英(quartz)、微斜長石(microcline)、カオリナイト(kaolinite)などの鉱物も相当量検出されている。これらは、試料採取時に混入した土器胎土に由来する鉱物と推察される。

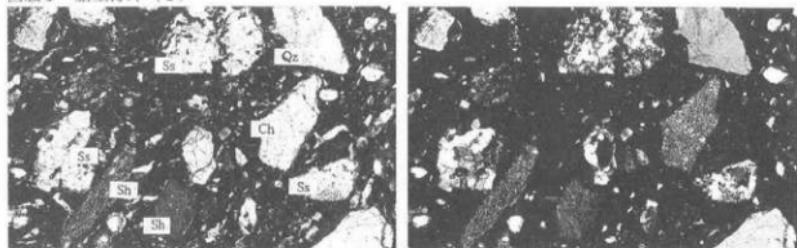
引用文献

- 足立吟也 (1980) 「6章 粉末X線回折法 機器分析のてびき3」, p. 64-76, 化学同人。
- 片田正人・磯見 博 (1958) 上松地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 38p., 地質調査所。
- 日本粘土学会編 (1987) 「粘土ハンブック 第二版」, 1289p., 技報堂出版。
- 日本の地質「中部地方I」編集委員会 (1988) 日本の地質4 中部地方I, 330p., 共立出版。
- 竹内 誠・中野 俊・原山 智・大庭 雄 (1998) 木曾福島地域の地質、地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 94p., 地質調査所。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (2002) 「第V章 胎土分析 分析の結果」「川合遺跡」木曾福島町教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (2003) 「第7章 各種の分析 3 板敷野遺跡出土土器の胎土分析」「板敷野遺跡」木曾福島町教育委員会

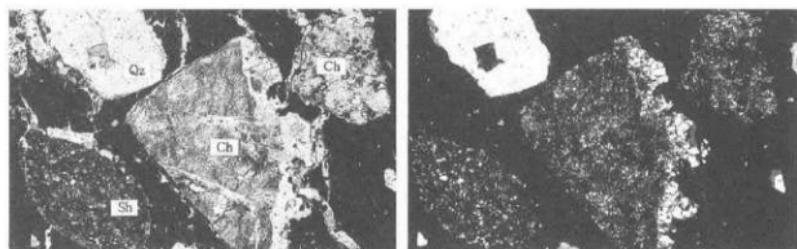
表 1 胎土薄片觀察結果

△：弱い ×：なし ○：少し △：中程度 ○：強め △：強い

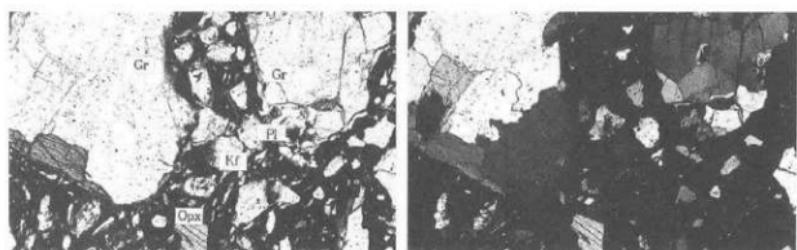
図版1 胎土薄片(1)



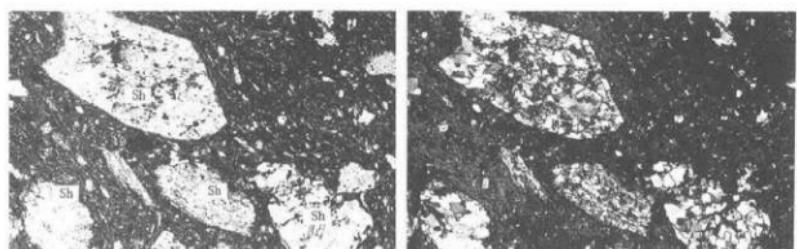
1. №1 SB9 掘戻No39 前期末葉 信州



2. №5 SB9 掘戻No73 前期末葉 関西



3. №9 W26 掘戻No323 中期初頭 信州

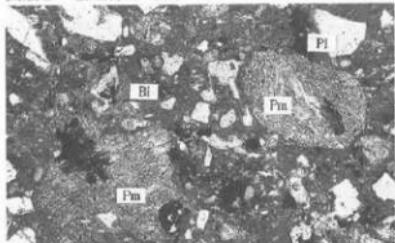


4. №11 SQ2 掘戻No24 中期初頭 関西

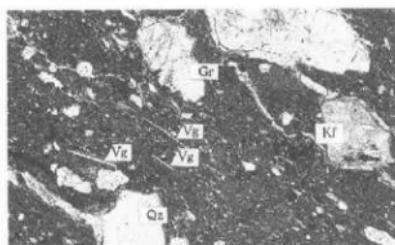
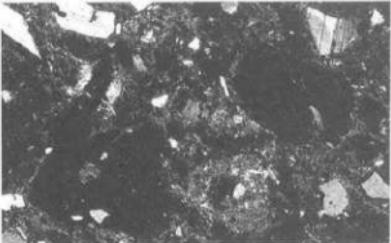
Qz : 石英, Kf : カリ長石, Pl : 斜長石, Opx : 斜方輝石, Ch : チャート, Sh : 結晶片岩.
Ss : 砂岩, Gr : 花崗岩. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

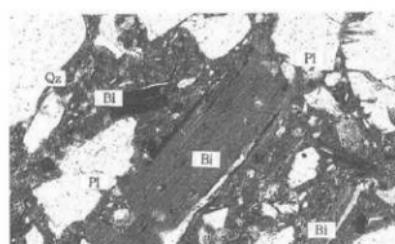
図版2 胎土薄片(2)



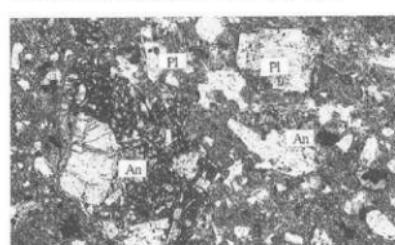
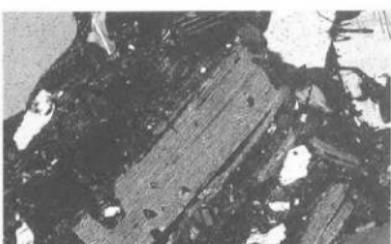
5. No.14 SB8 掲載No.1 中期中葉 信州



6. No.18 SB14 掲載No.14 中期中葉末 信州



7. No.24 SB14 掲載No.10 中期中葉末 信州

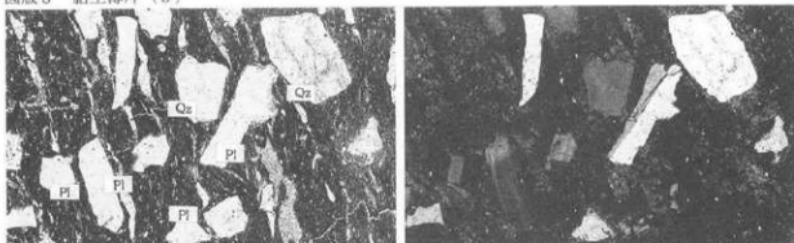


8. No.25 SB14 掲載No.22 中期中葉末 信州

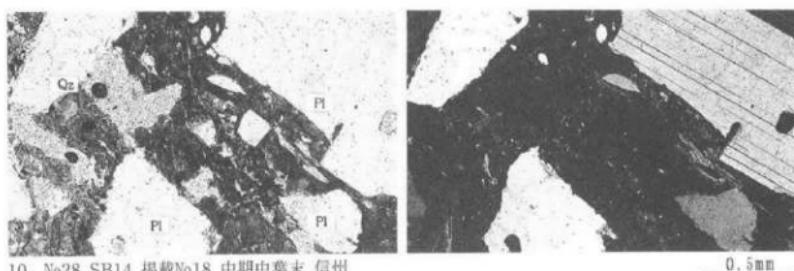


Qz:石英, Kf:カリ長石, PI:斜長石, BI:黒雲母, An:安山岩, Gr:花崗岩,
Vg:火山ガラス, Pm:軽石. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図版3 胎土薄片(3)



9. No26 SB14 掲載No23 中期中葉末 北陸



10. No28 SB14 掲載No18 中期中葉末 信州

Qz:石英、Pl:斜長石。
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第2節 黒曜石の産地同定分析

ここで報告する本遺跡出土黒曜石に対する産地同定分析は、石器の総合的な分析と資料化を委託した㈱アルカを通じ、望月明彦氏（沼津工業高等専門学校）が行った分析の結果である。

以下、本文は同氏から提出された分析レポートの要点を本書編集者が抜粋したものであり、図・表については分析データをそのまま掲載した。

分析法 エネルギー分散蛍光X線分析法(EDX)

分析装置 セイコーインスツルメンツ草上型蛍光X線分析計 SEA-2110L

分析条件 管電圧 50V 管電流 自動設定 測定時間 240sec

雰囲気 真空 照射径 10mm 検出器 Si (Li) 半導体検出器

測定元素 Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、

Fe (鉄)、Rb (リビウム)、Sr (ストロチウム)、Y (イットリウム)、Zr (ジルコニウム)

産地推定法 下記の二つの方法で産地推定を行う。

①判別図法：遺跡出土資料を蛍光X線分析し、指標を計算。指標を図にプロットし、重なった原石産地（試料と2次元的に最も距離が近い）を推定結果とする。

②判別分析：①の距離を数学的にn次元で計算し、試料と最も距離（マハラノビス距離）が近い産地を推定結果とする。この距離から各産地に属する確率を計算する。

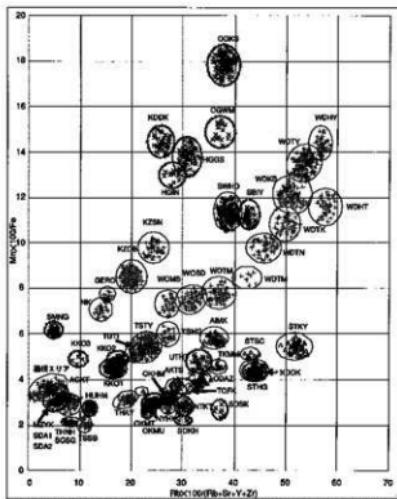
木曾三岳村小島遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果

判別図法・判別分析からの最終推定結果

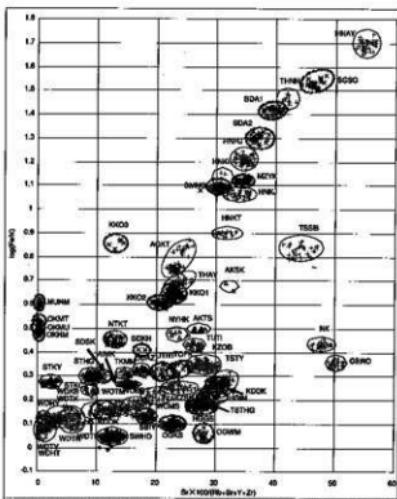
判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

研究室 年間通番	分析番号	遺物番号	推定产地	写真
MKO 2 - 1	MKJ-1	1	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 2	MKJ-2	2	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 3	MKJ-3	3	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 4	MKJ-4	5	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 5	MKJ-5	6	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 6	MKJ-6	7	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 7	MKJ-7	8	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 8	MKJ-8	10	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 9	MKJ-9	12	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 10	MKJ-10	11	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 11	MKJ-11	9	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 12	MKJ-12	4	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 13	MKJ-13	13-1	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 14	MKJ-14	13-2	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 15	MKJ-15	13-3	和田麻山群	
MKO 2 - 16	MKJ-16	13-4	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 17	MKJ-17	13-5	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 18	MKJ-18	13-6	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 19	MKJ-19	13-7	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 20	MKJ-20	13-8	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 21	MKJ-21	13-9	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 22	MKJ-22	13-10	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 23	MKJ-23	13-11	和田麻山群	
MKO 2 - 24	MKJ-24	13-12	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 25	MKJ-25	13-13	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 26	MKJ-26	13-14	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 27	MKJ-27	13-15	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 28	MKJ-28	13-16	和田麻山群	
MKO 2 - 29	MKJ-29	13-17	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 30	MKJ-30	13-18	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 31	MKJ-31	13-19	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 32	MKJ-32	13-20	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 33	MKJ-33	13-21	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 34	MKJ-34	13-22	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 35	MKJ-35	45	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 36	MKJ-36	46	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 37	MKJ-37	51	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 38	MKJ-38	52	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 39	MKJ-39	53-1	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 40	MKJ-40	53-2	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 41	MKJ-41	53-3	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 42	MKJ-42	53-4	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 43	MKJ-43	326	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 44	MKJ-44	373	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 45	MKJ-45	374	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 46	MKJ-46	58	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 47	MKJ-47	59-1	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 48	MKJ-48	59-2	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 49	MKJ-49	59-3	東訪星ヶ台群	
MKO 2 - 50	MKJ-50	59-4	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 51	MKJ-51	120	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 52	MKJ-52	137	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 53	MKJ-53	337	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 54	MKJ-54	156	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 55	MKJ-55	158-1	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 56	MKJ-56	158-2	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 57	MKJ-57	158-3	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 58	MKJ-58	158-4	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 59	MKJ-59	158-5	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 60	MKJ-60	354	調訪星ヶ台群	
MKO 2 - 61	MKJ-61	157	調訪星ヶ台群	

判別区 判別群	判 別 分 析					
	第1候補産地		第2候補産地			
判別群	距離	確率	判別群	距離	確率	
SWHD	SWHD	1.37	1	SBIY	76.74	0
SWHD	SWHD	16.05	1	SBIY	56.21	0
SWHD	SWHD	4.78	1	SBIY	101.5	0
SWHD	SWHD	10.81	1	WDTN	113.6	0
SWHD	SWHD	5.17	1	SBIY	87.69	0
SWHD	SWHD	3.97	1	SBIY	120.5	0
SWHD	SWHD	6.88	1	SBIY	62.78	0
SWHD	SWHD	4.4	1	SBIY	99.93	0
SWHD	SWHD	2.26	1	SBIY	69.33	0
SWHD	SWHD	4.3	1	SBIY	99.54	0
SWHD	SWHD	6.49	1	SBIY	93.62	0
SWHD	SWHD	7.04	1	SBIY	79.43	0
SWHD	SWHD	5.65	1	SBIY	86.85	0
SWHD	SWHD	6.33	1	SBIY	115.3	0
WDTY	WDTY	1.22	1	WDTY	27.75	0
SWHD	SWHD	5.2	1	SBIY	108.9	0
SWHD	SWHD	5.42	1	SBIY	120	0
SWHD	SWHD	6.75	1	SBIY	88.28	0
SWHD	SWHD	8.08	1	SBIY	106.2	0
SWHD	SWHD	3.48	1	WDTN	96.72	0
SWHD	SWHD	9.44	1	SBIY	99.89	0
SWHD	SWHD	7.34	1	SBIY	96.53	0
WDTY	WDTY	2.87	1	WDTY	16.78	3 E-04
SWHD	SWHD	3.55	1	SBIY	61.82	0
SWHD	SWHD	7.34	1	SBIY	75.23	0
SWHD	SWHD	5.19	1	SBIY	112.4	0
SWHD	SWHD	1.34	1	SBIY	82.88	0
WDTY	WDTY	4.53	1	WDKB	26.92	0
SWHD	SWHD	3.21	1	SBIY	112.3	0
SWHD	SWHD	1.83	1	SBIY	67.84	0
SWHD	SWHD	9.61	1	WDTN	103.9	0
SWHD	SWHD	6.25	1	SBIY	122.7	0
SWHD	SWHD	4.14	1	WDTN	111.6	0
SWHD	SWHD	2.31	1	SBIY	94.02	0
SWHD	SWHD	5.55	1	SBIY	64.55	0
SWHD	SWHD	10.79	1	SBIY	130.6	0
SWHD	SWHD	5.39	1	SBIY	71.79	0
SWHD	SWHD	7.43	1	SBIY	88.02	0
SWHD	SWHD	3.57	1	WDTN	109.7	0
SWHD	SWHD	1.17	1	SBIY	95.35	0
SWHD	SWHD	5.46	1	SBIY	86.06	0
SWHD	SWHD	8.7	1	SBIY	124.4	0
SWHD	SWHD	8.09	1	SBIY	71.12	0
SWHD	SWHD	5.12	1	SBIY	104.2	0
SWHD	SWHD	2.99	1	WDTN	81.66	0
SWHD	SWHD	6.17	1	SBIY	119.4	0
SWHD	SWHD	13.15	1	SBIY	98.16	0
SWHD	SWHD	5.88	1	SBIY	97.44	0
SWHD	SWHD	3.52	1	SBIY	76.28	0
SWHD	SWHD	10.9	1	SBIY	99.93	0
SWHD	SWHD	2.05	1	SBIY	104.3	0
SWHD	SWHD	1.34	1	SBIY	79.56	0
SWHD	SWHD	7.5	1	SBIY	88.51	0
SWHD	SWHD	5.66	1	WDTN	72.86	0
SWHD	SWHD	16.38	1	SBIY	141.7	0
SWHD	SWHD	6.04	1	WDTN	92.28	0
SWHD	SWHD	6.91	1	WDTN	90.31	0
SWHD	SWHD	7.6	1	SBIY	129.8	0
SWHD	SWHD	5.75	1	WDTN	121.3	0
SWHD	SWHD	1.79	1	SBIY	66.63	0
SWHD	SWHD	3.2	1	SBIY	68.49	0



中田・篠原の花崗岩・奥富北陸・羅臼の花崗岩・北陸の花崗岩・遠野山土試料・西田院・羽田の花崗岩



中田・篠原の花崗岩・奥富北陸・羅臼の花崗岩・北陸の花崗岩・遠野山土試料・西田院・羽田の花崗岩

産地原石判別群 (SEIKO SEA-2110L 蛍光X線分析装置による)

試験番号	成岩地名	スリーブ番号	材料別群	判別群	記述
1	白崎		八幡山別群	STIG	赤峰山(新潟), 八幡山別群(3), 八幡山別群(4), 羽田
2	八幡山			STIG	内浦(5), 鶴見(4)
3	八幡山			ODA	安達(3), 八幡山(3), 安達(4)
4	雄川		八幡山別群	ARTS	高岡(4), 鳥取(5), 佐渡(5)
5	鳥取			AKSE	鳥取(1)
6	新潟			YFRE	新潟(1)
7	新潟		八幡山別群	SYED	新潟(1)
8	新潟			AIKE	新潟(1), 上越(1)
9	新潟			TUTE	新潟(1)
10	新潟			YUKE	新潟(1)
11	阿賀		八幡山別群	HUUM	八幡山別群(1), 大糸町(3), 関川(40)
12	阿賀			OGES	安達(1), 鳥取(1), 岩手(1)
13	山形			GWIM	高岡(1)
14	山形			HTOM	高岡(1), 鳥取(1), 高岡(1), 鳥取(1), 高岡(1)
15	新潟			HGIN	今市(1), 大糸町(1)
16	新潟			NTCT	新潟(2)
17	新潟			YHAT	新潟(2)
18	新潟山		八幡山別群	THIN	新潟山(1), 新潟(2)
19	新潟山			THIN	新潟山(2), 鳥取(1)
20	新潟山			THIN	新潟山(2), 鳥取(1)
21	雄川	(WTS)		WOTS	雄川(1)
22	雄川		八幡山別群	WOTS	雄川(1), 小出町(54), 高岡(3), 高岡(1), 高岡(1), 佐渡(1), 佐渡(1), 上越(1), 上越(1), 高岡(1), 丁坂(1)
23	雄川			WOTS	雄川(1)
24	雄川			WOTS	雄川(1)
25	雄川			WOTS	雄川(1)
26	雄川			WOTS	雄川(1)
27	雄川		八幡山別群	WORD	雄川(1)
28	雄川			WORD	雄川(1)
29	雄川			WORD	雄川(1)
30	雄川			WORD	雄川(1)
31	雄川			WORD	雄川(1)
32	雄川			WORD	雄川(1)
33	雄川			WORD	雄川(1)
34	雄川			WORD	雄川(1)
35	雄川			WORD	雄川(1)
36	雄川			WORD	雄川(1)
37	雄川			WORD	雄川(1)
38	雄川			WORD	雄川(1)
39	雄川			WORD	雄川(1)
40	雄川			WORD	雄川(1)
41	雄川			WORD	雄川(1)
42	雄川			WORD	雄川(1)
43	雄川			WORD	雄川(1)
44	雄川			WORD	雄川(1)
45	雄川			WORD	雄川(1)
46	雄川			WORD	雄川(1)
47	雄川			WORD	雄川(1)
48	雄川			WORD	雄川(1)
49	雄川			WORD	雄川(1)
50	雄川			WORD	雄川(1)
51	雄川			WORD	雄川(1)
52	雄川			WORD	雄川(1)
53	雄川			WORD	雄川(1)
54	雄川			WORD	雄川(1)
55	雄川			WORD	雄川(1)
56	雄川			WORD	雄川(1)
57	雄川			WORD	雄川(1)
58	雄川			WORD	雄川(1)
59	雄川			WORD	雄川(1)
60	雄川			WORD	雄川(1)
61	雄川			WORD	雄川(1)
62	雄川			WORD	雄川(1)
63	雄川			WORD	雄川(1)
64	雄川			WORD	雄川(1)
65	雄川			WORD	雄川(1)
66	雄川			WORD	雄川(1)
67	雄川			WORD	雄川(1)
68	雄川			WORD	雄川(1)
69	雄川			WORD	雄川(1)
70	雄川			WORD	雄川(1)
71	雄川			WORD	雄川(1)
72	雄川			WORD	雄川(1)
73	雄川			WORD	雄川(1)
74	雄川			WORD	雄川(1)
75	雄川			WORD	雄川(1)
76	雄川			WORD	雄川(1)
77	雄川			WORD	雄川(1)
78	雄川			WORD	雄川(1)
79	雄川			WORD	雄川(1)
80	雄川			WORD	雄川(1)
81	雄川			WORD	雄川(1)
82	雄川			WORD	雄川(1)
83	雄川			WORD	雄川(1)
84	雄川			WORD	雄川(1)
85	雄川			WORD	雄川(1)
86	雄川			WORD	雄川(1)
87	雄川			WORD	雄川(1)
88	雄川			WORD	雄川(1)
89	雄川			WORD	雄川(1)
90	雄川			WORD	雄川(1)
91	雄川			WORD	雄川(1)
92	雄川			WORD	雄川(1)
93	雄川			WORD	雄川(1)
94	雄川			WORD	雄川(1)
95	雄川			WORD	雄川(1)
96	雄川			WORD	雄川(1)
97	雄川			WORD	雄川(1)
98	雄川			WORD	雄川(1)
99	雄川			WORD	雄川(1)
100	雄川			WORD	雄川(1)
101	雄川			WORD	雄川(1)
102	雄川			WORD	雄川(1)
103	雄川			WORD	雄川(1)
104	雄川			WORD	雄川(1)
105	雄川			WORD	雄川(1)
106	雄川			WORD	雄川(1)
107	雄川			WORD	雄川(1)
108	雄川			WORD	雄川(1)
109	雄川			WORD	雄川(1)
110	雄川			WORD	雄川(1)
111	雄川			WORD	雄川(1)
112	雄川			WORD	雄川(1)
113	雄川			WORD	雄川(1)
114	雄川			WORD	雄川(1)
115	雄川			WORD	雄川(1)
116	雄川			WORD	雄川(1)
117	雄川			WORD	雄川(1)
118	雄川			WORD	雄川(1)
119	雄川			WORD	雄川(1)
120	雄川			WORD	雄川(1)
121	雄川			WORD	雄川(1)
122	雄川			WORD	雄川(1)
123	雄川			WORD	雄川(1)
124	雄川			WORD	雄川(1)
125	雄川			WORD	雄川(1)
126	雄川			WORD	雄川(1)
127	雄川			WORD	雄川(1)
128	雄川			WORD	雄川(1)
129	雄川			WORD	雄川(1)
130	雄川			WORD	雄川(1)
131	雄川			WORD	雄川(1)
132	雄川			WORD	雄川(1)
133	雄川			WORD	雄川(1)
134	雄川			WORD	雄川(1)
135	雄川			WORD	雄川(1)
136	雄川			WORD	雄川(1)
137	雄川			WORD	雄川(1)
138	雄川			WORD	雄川(1)
139	雄川			WORD	雄川(1)
140	雄川			WORD	雄川(1)
141	雄川			WORD	雄川(1)
142	雄川			WORD	雄川(1)
143	雄川			WORD	雄川(1)
144	雄川			WORD	雄川(1)
145	雄川			WORD	雄川(1)
146	雄川			WORD	雄川(1)
147	雄川			WORD	雄川(1)
148	雄川			WORD	雄川(1)
149	雄川			WORD	雄川(1)
150	雄川			WORD	雄川(1)
151	雄川			WORD	雄川(1)
152	雄川			WORD	雄川(1)
153	雄川			WORD	雄川(1)
154	雄川			WORD	雄川(1)
155	雄川			WORD	雄川(1)
156	雄川			WORD	雄川(1)
157	雄川			WORD	雄川(1)
158	雄川			WORD	雄川(1)
159	雄川			WORD	雄川(1)
160	雄川			WORD	雄川(1)
161	雄川			WORD	雄川(1)
162	雄川			WORD	雄川(1)
163	雄川			WORD	雄川(1)
164	雄川			WORD	雄川(1)
165	雄川			WORD	雄川(1)
166	雄川			WORD	雄川(1)
167	雄川			WORD	雄川(1)
168	雄川			WORD	雄川(1)
169	雄川			WORD	雄川(1)
170	雄川			WORD	雄川(1)
171	雄川			WORD	雄川(1)
172	雄川			WORD	雄川(1)
173	雄川			WORD	雄川(1)
174	雄川			WORD	雄川(1)
175	雄川			WORD	雄川(1)
176	雄川			WORD	雄川(1)
177	雄川			WORD	雄川(1)
178	雄川			WORD	雄川(1)
179	雄川			WORD	雄川(1)
180	雄川			WORD	雄川(1)
181	雄川			WORD	雄川(1)
182	雄川			WORD	雄川(1)
183	雄川			WORD	雄川(1)
184	雄川			WORD	雄川(1)
185	雄川			WORD	雄川(1)
186	雄川			WORD	雄川(1)
187	雄川			WORD	雄川(1)
188	雄川			WORD	雄川(1)
189	雄川			WORD	雄川(1)
190	雄川			WORD	雄川(1)
191	雄川			WORD	雄川(1)
192	雄川			WORD	雄川(1)
193	雄川			WORD	雄川(1)
194	雄川			WORD	雄川(1)
195	雄川			WORD	雄川(1)
196	雄川			WORD	雄川(1)
197	雄川			WORD	雄川(1)
198	雄川			WORD	雄川(1)
199	雄川			WORD	雄川(1)
200	雄川			WORD	雄川(1)
201	雄川			WORD	雄川(1)
202	雄川			WORD	雄川(1)
203	雄川			WORD	雄川(1)
204	雄川			WORD	雄川(1)
205	雄川			WORD	雄川(1)
206	雄川			WORD	雄川(1)
207	雄川			WORD	雄川(1)
208	雄川			WORD	雄川(1)
209	雄川			WORD	雄川(1)
210	雄川			WORD	雄川(1)
211	雄川			WORD	雄川(1)
212	天城			ACET	天城(1)
213	天城			KSW	天城(1)
214	天城			KME	天城(1)
215	天城			KMT	天城(1)
216	天城			KOT	天城(1)
217	天城			KOT	天城(1)
218	天城			KOT	天城(1)
219	天城			KOT	天城(1)
220	天城			KOT	天城(1)
221	天城			KOT	天城(1)
222	天城			KOT	天城(1)
223	天城			KOT	天城(1)
224	天城			KOT	天城(1)
225	天城			KOT	天城(1)
226	天城			KOT	天城(1)
227	天城			KOT	天城(1)
228	天城			KOT	天城(1)
229	天城			KOT	天城(1)
230	天城			KOT	天城(1)
231	天城			KOT	天城(1)
232	天城			KOT	天城(1)
233	天城			KOT	天城(1)
234	天城			KOT	天城(1)
235	天城			KOT	天城(1)
236	天城			KOT	天城(1)
237	天城			KOT	天城(1)
238	天城			KOT	天城(1)
239	天城			KOT	天城(1)
240	天城			KOT	天城(1)
241	天城			KOT	天城(1)
242	天城			KOT	天城(1)
243	天城			KOT	天城(1)
244	天城			KOT	天城(1)
245	天城			KOT	天城(1)
246	天城			KOT	天城(1)
247	天城			KOT	天城(1)
248	天城			KOT	天城(1)
249	天城			KOT	天城(1)
250	天城			KOT	天城(1)
251	天城			KOT	天城(1)
252	天城			KOT	天城(1)
253	天城			KOT	天城(1)
254	天城			KOT	天城(1)
255	天城			KOT	天城(1)
256	天城			KOT	天城(1)
257	天城			KOT	天城(1)
258	天城			KOT	天城(1)
259	天城			KOT	天城(1)
260	天城			KOT	天城(1)
261	天城			KOT	天城(1)
262	天城			KOT	天城(1)
263	天城			KOT	天城(1)
264	天城			KOT	天城(1)
265	天城			KOT	天城(1)
266	天城			KOT	天城(1)
267	天城			KOT	天城(1)
268	天城			KOT	天城(1)
269	天城			KOT	天城(1)
270	天城			KOT	天城(1)

木曾三岳村小島遺跡出土黒曜石産地組成

エリア	判別群	記号	試料数	%	エリア	判別群	記号	試料数	%
和田(WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0	北上川	折居1群	KKO1	0	0
	牧ヶ沢	WOMS	0	0		折居2群	KKO2	0	0
	高松沢	WOTM	0	0		折居3群	KKO3	0	0
和田(WD)	芙蓉ライト	WDHY	0	0	宮崎	湯ノ倉	MZYK	0	0
	鷹山	WDTY	3	4.92	仙台	秋保1群	SDA1	0	0
	小深沢	WDKB	0	0	仙台	秋保2群	SDA2	0	0
	土屋橋北	WDTK	0	0	色麻	根岸	SMNG	0	0
	土屋橋西	WDTN	0	0	塩竈	塩竈港群	SGSG	0	0
	土屋橋南	WDTM	0	0	小泊	折腰内	KDOK	0	0
	古峠	WDHT	0	0	魚津	草月上野	UTHT	0	0
諏訪	星ヶ台	SWHD	58	95.08	高岡	二上山	TOFK	0	0
蓼科	冷山	TSTY	0	0	佐渡	真光寺	SDSK	0	0
	双子山	TSHG	0	0		金井二ツ坂	SDKH	0	0
	擂鉢山	TSSB	0	0	久見	OKHM	0	0	
天城	柏峠1	AGKT	0	0	隱岐	岬地区	OKMT	0	0
箱根	畠宿	HNHJ	0	0	箕浦	OKMU	0	0	
	鍛冶屋	HNKJ	0	0	白滝	8号沢	STHG	0	0
	黒岩橋	HNKI	0	0	白滝	黒曜の沢	STKY	0	0
	上多賀	HNKT	0	0	赤石山頂	STSC	0	0	
	芦ノ湯	HNAY	0	0	赤井川	曲川	AIMK	0	0
神津島	恩馳島	KZOB	0	0	豊浦	豊泉	TUTI	0	0
	砂糠崎	KZSN	0	0	置戸	安住	ODAZ	0	0
高原山	甘湯沢	THAY	0	0	十勝	三股	TKMM	0	0
	七尋沢	THNH	0	0	名寄	布川	NYHA	0	0
新津	金津	NTKT	0	0	旭川	高砂台	AKTS	0	0
新発田	板山	SBIY	0	0		春光台	AKSK	0	0
深浦	八森山	HUHM	0	0	不明產地1	NK	NK	0	0
木造	出来島	KDDK	0	0	下呂石		GERO	0	0
男鹿	金ヶ崎	OGKS	0	0	合 計			61	100
	脇本	OGWM	0	0	不 可 な ど			0	
羽黒	月山	HGGS	0	0	総 計			61	
	今野川	HGIN	0	0					

第VI章 成果と課題

i 小島遺跡は県営中山間総合整備事業—優良農地の確保と保全を目的としたいわゆる圃場整備事業の対象地に指定されたことを契機に発見され、記録保存のための緊急発掘調査が行われた遺跡である。そうした意味で、埋蔵文化財保護事業をめぐる開発行為の功罪を団らざるも浮き彫りにすることになった本遺跡では、今回の発掘調査によって縄文時代から平安時代、さらに中・近世にまで及ぶ人間活動の一端が明らかになるなど、学術的に大きな成果をあげることができた。もちろん、未調査区域の問題を含めて全体像の解明に関しては今後の調査に多くの委ねざるをえないが、以下、現時点で判明した遺跡の輪郭を抽出し、将来の解明作業に向けた基礎資料を提供しておきたい。

ii 小島遺跡で確認できる現段階で最も古い人間活動の痕跡は、平安時代の竪穴住居跡（SB18）の覆土中に混在して出土した特殊磨石によって知ることができる。伴出遺物を欠き時期の特定は困難であるが、既知の出土事例に照らしてみると、縄文時代早期の遺物であった可能性が高い。

本遺跡に一定程度の定着的な集落が形成されはじめたのは縄文時代前期末葉以降のことと考えられる。今回の調査ではSB9をはじめとする当該期の竪穴住居跡5軒と土坑群などが検出されている。遺構はI区中央南寄り、中位段丘内に形成された上下2段の平坦面のうち、上段から下段へと移る縁辺部に沿って営まれており、南へと続く調査区外を含めて南北に連なる帯状の集落景観が想定される。また、同下段東側縁辺部近くに検出された複数の土坑のあり方からすれば、東側調査区外にも段丘縁に沿った居住空間が上記に平行して帯状に展開していた可能性も考慮される。

こうした当該期の集落構成で注目されるのは、各住居跡に付属するように出土した土坑（群）のあり方であり、調査所見によれば円筒状あるいは袋状の断面形態などから貯蔵穴としての機能が推定されている。住居に付属する貯蔵穴については、本遺跡から南へ20km余り木曾川を下った大桑村万場遺跡の当該期集落に特徴的に認められた屋内貯蔵穴を有する竪穴住居跡との対比が可能である。貯蔵の対象となった物が何であったのか、また両遺跡で対象物に相異はあるのかといった生業基盤にかかる問題については不明な点が多いが、当地方の縄文時代前期末葉段階（万場遺跡では前期前～末葉）に、屋内と屋外という差異はあるにせよ、おそらくは食料資源を各住居単位で個別に貯蔵・管理する社会システムが取り入れられていた可能性が想定されることには、きわめて重要な意味をもつものと考える。

さらに、石器群の分析から導かれた動物資源の獲得と処理に偏る生業形態のあり方は、植物質など動物質以外の資源利用に高い比重が置かれていた可能性が示唆された中期との対比、ならびに上述した食料資源の管理システムとの相互関係において、当該地域および当遺跡の生業基盤に係る実相の一端を指し示していると考えられる。

出土遺物に関しては、土器の組成比率において一定度が東海および関西系土器等の特徴を示す一方で、胎土分析の結果からは、それらが文様等に見られる在地的・非在地的属性に係りなく遺跡周辺の比較的狭い地域内で製作された可能性が示された。また、石器においても黒曜石の産地推定分析の結果から、同石材が前期～中期を通して瀬訪星ヶ台群の原産地からほぼ限定的に供給されていた事実が明らかとなつた。これは近年、木曾郡下において積極的に進められてきた同種分析の成果を改めて追認するデータといえ、先述の土器とともに、当地域における物資の需要と供給、製作あるいは受容と消費のプロセスやネット

ワークといったものを解き明かすための基礎資料を積み上げることとなった。

iii 中期初頭～前葉段階では、遺物包含層を形成していたと考えられる遺構外から同時期の若干量の遺物が出土しただけにとどまり、今回の調査地点で見る限りにおいて、本遺跡に対する人間の働き掛けは弱かったものと思われる。しかし、続く中期中葉～後葉段階では、断続的ながらも集落の形成が確認されるなど、中位段丘東半部を中心とする区域に活発な人間活動の痕跡を見出すことができる。SB 8・14・22など中期中葉新道式～藤内式期および井戸尻Ⅲ式最末期の竪穴住居跡が散在的な分布を示す一方、時期の特定に困難な点を残すものの、東に向いた半円状あるいは環状の分布をみせる土坑群のあり方が特に注意される。これらは円形や梢円形の平面形態を呈し、上部に磨擦繊や石皿に擬制して埋納された可能性をもつ偏平円碟を伴うものを含むなど、墓塚群としての性格が強く考慮される。

しかし、本文中の記述に詳しい通り、複数の礫と多数の土器片を遺存させていたSK347や打製石斧6点が折重なるように出土したSK527など、祭祀的な様相を垣間見せる土坑はなお少数派にとどまっていたことも事実である。したがって、集落内における土坑群の性格や成立要因に関してはより今後に多くの検討課題を残していることは否定できないが、その上で注目しておきたい点は、以上の土坑群が集落内で一定の“場”を占拠しつつ、特定の形態を維持・展開していたことであり、ここには今回の調査区域を越えた広がりが推定される当該期の集落の形態や構造を考えるための多くの示唆が与えられていたということができる。さらに中期後葉の所産と推定される掘立柱建物跡群が、東西あるいは南北に主軸を描いて規則的な分布をみせていたことも、集落構成上の大きな特徴点としてあげることができる。

また、時間的に不確定な要素を残すとはいえ、居住域に隣接して検出された性格不明遺構SX1が有用植物の管理あるいは栽培痕跡であるとの推測も示されている。動物資源とは異なる、植物資源の利用に高い比重を置いた生業活動が当該期の本遺跡において活発に行われていたという石器群の分析に基づく仮説との関連においても、非常に興味深い事例であることは間違いない。

iv 後・晩期については、掘立柱建物跡の存在が1棟のみ推定できるほか散在的な土坑と遺物の分布が確認されただけであるが、急激な遺跡数の減少が知られる当該期にあっては、遺跡の立地を含めて貴重なデータを加えることができた意義は小さくない。とりわけ出土土器に関して、既出資料が少なく類例に乏しい資料を少数とはいえ資料化できたことは、当地方における社会変化を他地域との関わりのなかで把握しうる契機をもたらすものといえる。

また、表面採集という単発的な出土資料とはいえ、1点のみ確認された弥生時代後期の土器についても、今後の研究作業に際して同様の意義を見出される可能性があろう。

v 平安時代も9世紀後半になると、それまでの無住状態を打ち破るように集落が形成される。中位段丘面に相当するI区のなかでも南東寄りに出土したSB15・16・18などの竪穴住居跡や掘立柱建物跡(ST1)、土坑群ならびに横列状遺構がそれであり、上記3軒の住居跡は主軸をほぼ同じくして併存していた可能性が高い。また、SB19を含めて住居跡の重複や新旧カマドの存在などから、複時的な住居変遷があったことが窺える。この段階での突如とした集落形成は木曾地域全体に認められる現象であり、当該期における政治的あるいは経済的な社会情勢を反映した結果であったと思われる。

遺物では、未確定資料を含めて3例が出土した墨書「芳蘭」の文字が象徴的である。現代において「芳」は“かんばしく、すぐれて美しい様子。あるいは、そうした事物に対する美称”とされ、「蘭」もまた美しく香りの良い花の象徴的存在である。古代“小島集落”において、如何なる“表象”をこの文字が

担っていたのか非常に興味深い事例の一つであるが、その解釈をめぐっては周辺地域を含めた資料の蓄積と詳細な検討に委ねたい。

10世紀前半～後半になると、集落域をI区北側へ移す（SB3～5・20など）とともに上位段丘上のIV区へと広がりをみせる（SB1・2など）。この集落域の遷移ならびに拡張が如何なる要因に基づいて起ったのかは定かでないが、水稻栽培が困難であったと推定される当地域の生業基盤などにもかかわる、すぐれて社会的な出来事であったことだけは確かであろう。

11世紀代については少量の遺物が出土した点を除いて資料を提示できないが、集落規模が著しく縮小したであろうことは想像に難くない。12世紀代においてもI区南端部付近で竪穴住居跡1軒（SB17）が検出されたとはいえ、土坑その他や遺構外遺物の出土が皆無に等しい状況などからは、継続的に安定した集落が営まれ続けた景観を推定するのは困難である。

vi 中世、とりわけその後～末期においては、第II章第2節で触れた通り、木曾義仲の後裔と目される木曾家19代義昌（1540～1595）の家臣であった「小島氏」が当遺跡に居館を構えていたとされる。また、地区内には該期の所産と推定される形態を示す五輪塔2基が現存する。今回の発掘調査では、ほぼ同時期の陶器類がわずかに出土したのみであり、居館跡を含めて同氏にかかる資料を得ることは出来なかった。しかし、考古学と文献史学などとの交錯によっては、新たな地域史の構築を可能とする史料が“発掘”されることも予想されるところであり、今後に続く作業に期待したい。

vii ところで、小島遺跡における今回の発掘調査は、すでに詳しく述べられているように、長野県木曾地方事務所を原因者とし、三岳村教育委員会が事業主体となって行われた。その過程で広域的な調査指導を受け持つ木曾広域連合が地元教育委員会の委託を受けて参画し、さらに長野県教育委員会の指導の下に（財）長野県埋蔵文化財センター職員が技術指導業務担当者という名目で実質的な調査担当者に就任するなど、いわば共同作業的な体制で進められることになった。

今回の報告書作成にあたっても、その前半段階については（財）長野県埋蔵文化財センター職員が引き続き技術指導担当者の役にあたり、その指導の下に遺構図面および写真類の整理、遺構台帳の作成、遺物の水洗い・注記・接合・復元等々の基礎的な整理作業が行われた。しかし、その後半段階については、諸般の事情から技術指導機関および業務担当者を変更した上で、遺構・遺物にかかる本文原稿や図版類の作成、考察のとりまとめ等々の作業が進められることになった。

以上の経緯にかんがみ、後任として技術支援業務に当たることになった担当者としては、こうした変則事態に伴う無用の混乱を避けるためにも、極力、作業の一貫性・継続性に留意し、前任者による現地発掘調査段階における記録や観察を忠実に復元しようと努めたが、遺構図面や台帳などには記述渋れや記述ミス等々が少なからず存在しており、遺構の性格・内容にかかる所見にも明らかに事実誤認と思われるものが散見された。このため、明らかに誤りと思われる記録や記述については可能な限り修正を試みたが、記述渋れが甚だしく、修正・復元のまったく困難なものについては、やむをえず不完全な形で報告せざるをえなかつたことをご了解いただきたい。

引用・参考文献

青沼博之他 1988 「三岳村誌」下巻 三岳村誌編さん委員会

百瀬忠幸他 2001 「第6章 万場遺跡」「中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 大桑村教育委員会

写 真 図 版



図版 1



遺跡遠景



遺跡遠景



調査区近景



SB 6



SB 8

図版 3



左：SB 8 炉址
右：SB 8 遺物
出土状態



SB 9・12



左：SB 9 炉址
右：同断面



SB11



左上：SB14炉址
左下：SB14遺物
出土状態
右：SB22



図版 5



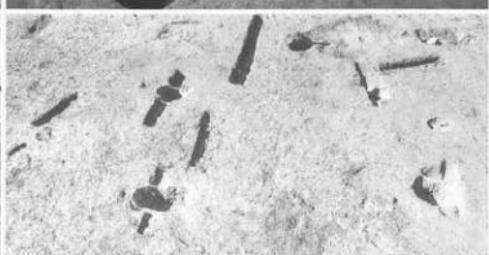
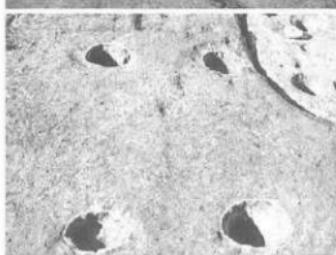
左上：SB22炉址
左下：SB23炉址
右：SB23



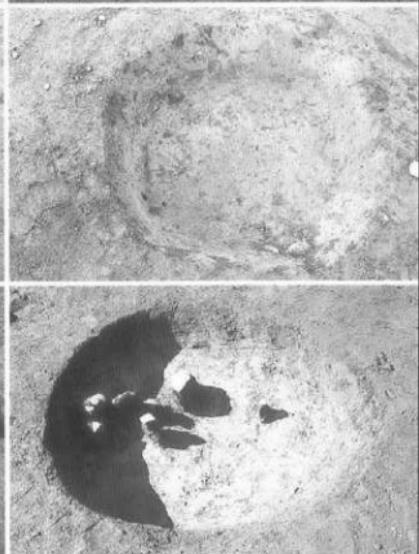
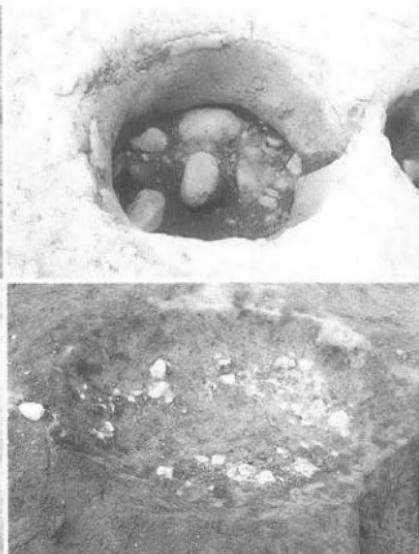
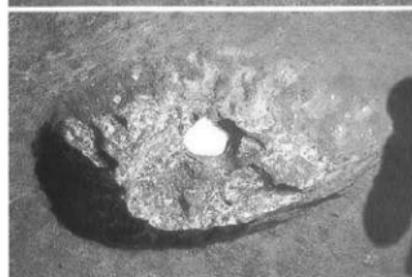
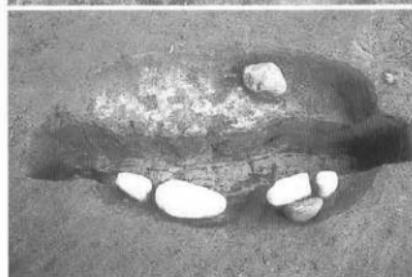
SB25



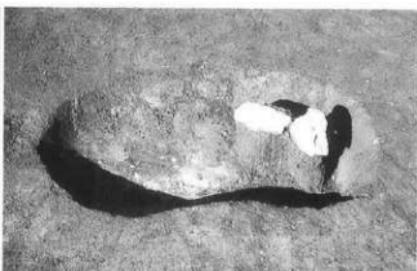
左：ST 2
右：ST 2遺物
出土状態



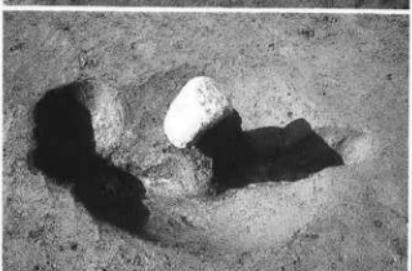
左：ST 3
右：ST 4



図版7



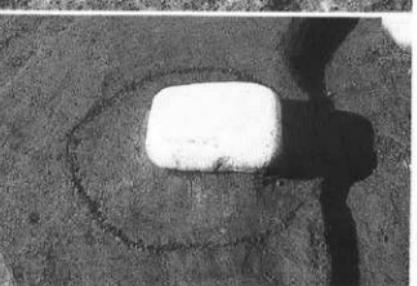
左：SK347
右：SK434



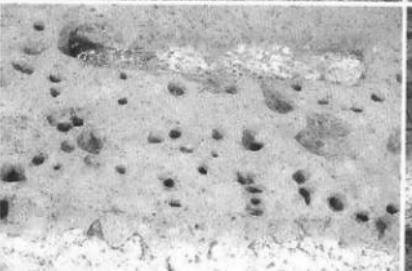
左：SK473
右：SK486



左：SK527
右：SK538



左：SF1
右：SF4



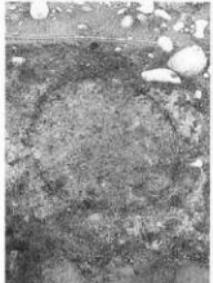
性格不明造構



SB 1



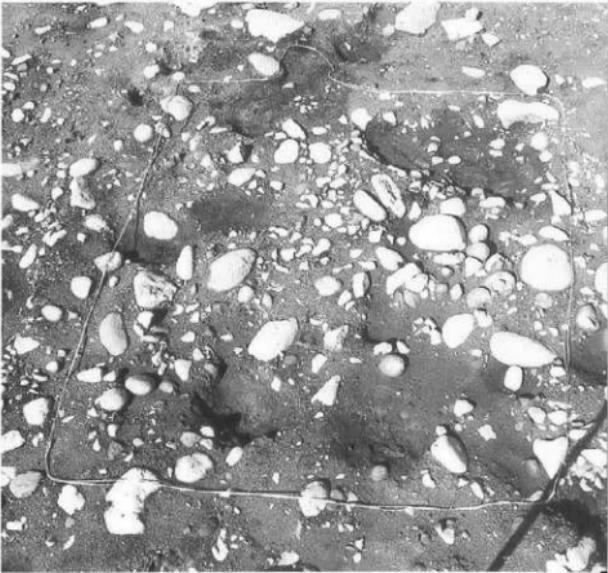
SB 3

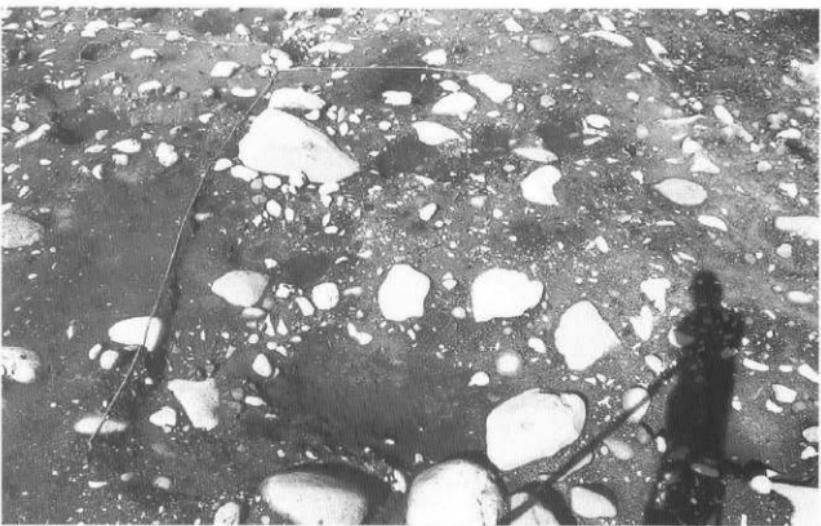


左上: SB 3 カマド

左下: SB 4 カマド

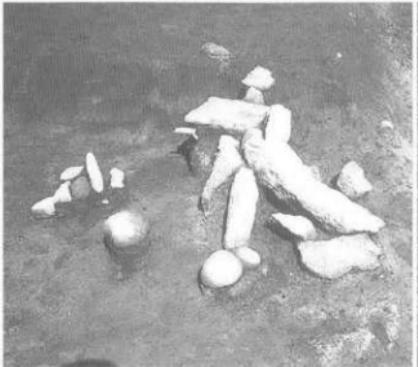
右: SB 4







SB16



左: SB16カマド

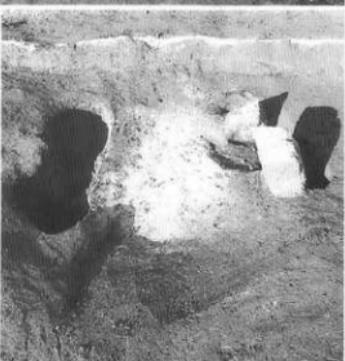
右: 同下部



SB17



SB18

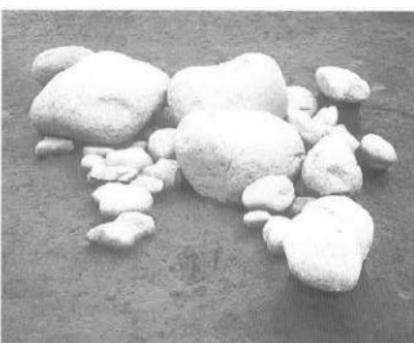
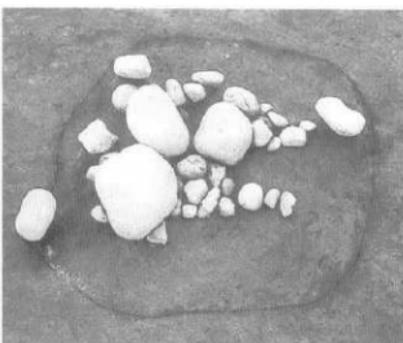


左:SB18北カマド
右:SB18西カマド



SB19

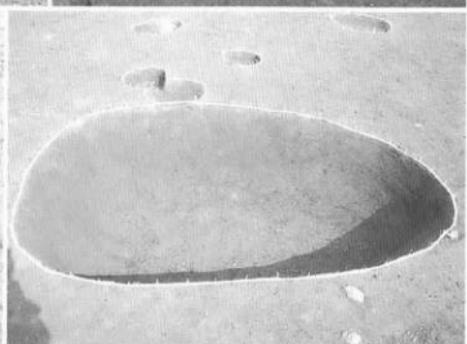




左：SK146炭化物

出土状態

右：SK147



左：SK147

右：SK155



左：SK173

右：五輪塔



1・2: SB8出土

5・6: SB9出土

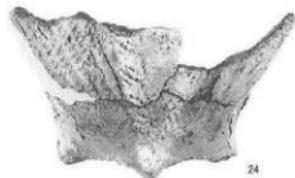
12・15: SB14出土



10



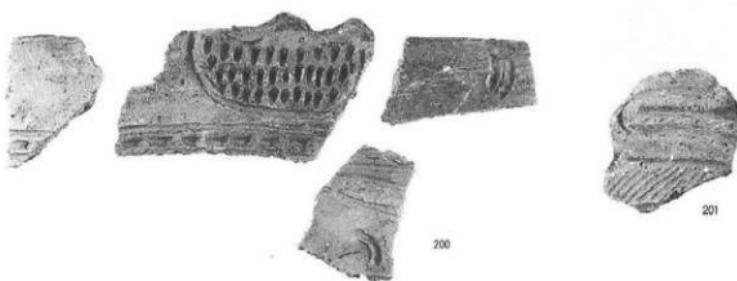
11



24



399



200



201



391



392



393

10・11: SB14出土
24: SO 2出土
200・201: SK340
出土
391～393・399
: 通構外出土

あとがき

三ヶ年度にわたった小島遺跡の埋蔵文化財調査も、多くの学術的成果を積み上げることとなった本書の刊行をもって、一応の終りを告げようとしている。まずもって、地元関係者の方々のご理解と関係各機関のご努力に対し、心からの謝意を表させていただきたい。筆者は、行政上の学術担当者の立場から当初よりその経過に係り続けてきた者として、幾ばくかの安堵感を覚える。と同時に、一連の経過のなかで図らずも露呈することとなった埋蔵文化財保護行政に係るもう一つの“負の成果”についても、余白を借りて書き留めておかねばならない責務を負っている。

では、もう一つの“成果”を読み出すこととなった背景とは何であったのか。それは最終章にも記された技術指導体制に起因しており、「記録保存」を最大の目的として行われたはずの今回の発掘調査によって残された記録類が、その“成果”なるものの実態を余すことなく物語っている。調査所見および個別台帳等、報告書執筆に際して大きなウエートを占めるこれらの記録類は、発掘調査現場を見ることの無かった第三者にとってきわめて重要な情報源となるはずのものである。にもかかわらず本報告に限っていえば、発掘調査に際して技術指導業務を担った調査機関、同技術指導担当者ならびに業務管理責任者によって作成され、委託者に成果物として納品されたその記録にこそ、軽視しない問題点が孕まれていたと言わざるを得ない。

現場調査段階における構造確認と構造確定作業の曖昧さ、床面やカマドの構造に対する無理解等々がもたらすことになった混乱の幾つかについては本文でも簡単に触れられているが、同様の問題点は覆土および標準土層説明の混乱、長軸方向と主軸方向の混同ならびに計測方法の混乱等々をめぐっても指摘されるのであり、発掘調査から整理作業の段階に至るまで、そこでは遺跡の記録・資料化と解釈がきわめて恣意的かつ場当たり的に行われていたことが容易に推測される。このため、報告書の作成にあたっては、調査記録と所見の検証に立ち返って作業を開始しなければならない事態に陥ってしまったのであるが、本来、発掘調査段階から整理作業初期において整備されているべき台帳類に著しい不備が認められたこと、視覚的な検査作業に必須な写真記録がきわめて不充分であつたこと、整理段階で書き加えられたと思われる根拠不明な表記など原図類と所見記録との間に少なからぬ齟齬が認められたこと等々が、さらに問題を複雑化させ、報告書作成作業をおこなう層困難にしたことを付け加えなければならぬ。

報告書そのものは指導業務担当者を変更する形でようやく刊行にまでこぎつけることができたが、本報告書に記載された調査記録に一定の限界と制約が内在している実態を明らかにせねばならないことは甚だ残念であり、その責任の一半は充分な監理義務を果たし得なかった筆者の側にあることは否めない。この点、最大の当事者の一人であった自らの不明を重く受け止め、率直に遺憾の意を表明する次第であるが、今日、激動期にあるといわれる埋蔵文化財行政にとって、今回の調査事例が投げかけることになった問題点もきわめて大きかったと言える。

「埋蔵文化財を取り巻く社会情勢」が激しく変化する中、文化庁在籍者を含む全国の埋蔵文化財行政の実状に精通した多数の実務経験者によって執筆され、「幅広い国民の視点に立った新たな埋蔵文化財保護理念の構築」を提言することになったニュー・サイエンス社刊行の『激動の埋蔵文化財行政』は、「自らの矛盾に十分な対策を講ずることなく、考古学ブームに少々浮かれ過ぎて」きた埋蔵文化財行政に激しく批判を加えるとともに、「サラリーマン発掘に流されていることが多い行政内研究者」の現状に強い警鐘を鳴らしている。期せずして今回の調査が顕在化させた埋蔵文化財行政をめぐる今日的課題に対して、自己改革の余地は皆無なのか。このような状況下にあっては、県と地方、公と民の別を問わず、どの機関・どの団体が行う埋蔵文化財調査においても第三者による相互指導、相互管理支援システムの確立が、組織ならびに担当者個々の責任ある自覚と持続的な問題意識とともに不可欠であり、そうした真に互助的な共同体制の構築こそが、公益的な埋蔵文化財保護にとって有意な方向性を生み出す一つの契機と成りうるのではないだろうか。同じく公的機関に身をおき、埋蔵文化財行政の一端に携わる者の一人として、今回の調査の反省点を踏まえ、自省・自戒の念を深く込めつつ、以上の考えを提起するものである。

(文責：百瀬忠幸)

報告書抄録

ふりがな	おじまいせき							
書名	小島遺跡							
副書名	中山間総合整備事業<木曾中部地区>に伴う発掘調査報告書							
著者名	畠中赤寿之 三原良文 今井千恵 百瀬忠幸							
編集機関	三岳村教育委員会							
所在地	〒397-0101 長野県木曾郡三岳村6311							
発行年月日	2003年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
小島遺跡	長野県木曾郡三岳村小島	市町村 204285	遺跡番号 27	35度 49分 57秒	137度 38分 00秒	2002.6.11 2002.12.6	13,335m ²	土地改良事業 に伴う緊急事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	発見された遺構	発見された遺物	特記事項			
小島遺跡 I~IV区	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代 中・近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 櫛列状遺構 焼土址 遺物集中区 性格不明遺構	25軒 5棟 453基 8条 6基 2箇所 1箇所	繩文土器（前～晩 期） 弥生土器（後期） 灰釉陶器 土師器類 須恵器 陶磁器類 縄文時代の石器類 平安時代の砥石 鉄製品 銭貨など	縄文時代前期末葉および中期 中葉～後葉にかけての集落跡。 縄文時代中期中葉未段階土器 の住居一括資料。 縄文時代後期～晩期の土坑群。 平安時代の集落跡。特徴的な カマド形態と3時期にわたる 集落変遷。配石を伴う土坑。		

小島遺跡

—中山間総合整備事業〈木曾中部地区〉に伴う発掘調査報告書—

発行日 2003年9月30日

編集 三岳村教育委員会
〒397-0101 長野県木曾郡三岳村6311

発行 三岳村教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
TEL (026) 244-0235㈹

